明治三十三年十二月廿五日第三種郵便物認可
明治四十三年十一月十日印刷納本（毎月一回廿六日印刷納本）

十一月十五日増刊發行

女學世界

日常生活の教訓

第十卷
第十五號



博文館

和洋式の金盃と銀盃！

御目出度ときには是非欠くべからざる金盃と銀盃、紀念品として最も流行せる金銀の盃、日本風、西洋式の如何を問はず、極めて体裁よく極めて廉價に御調進可申上候間御用命のほど奉願上候。



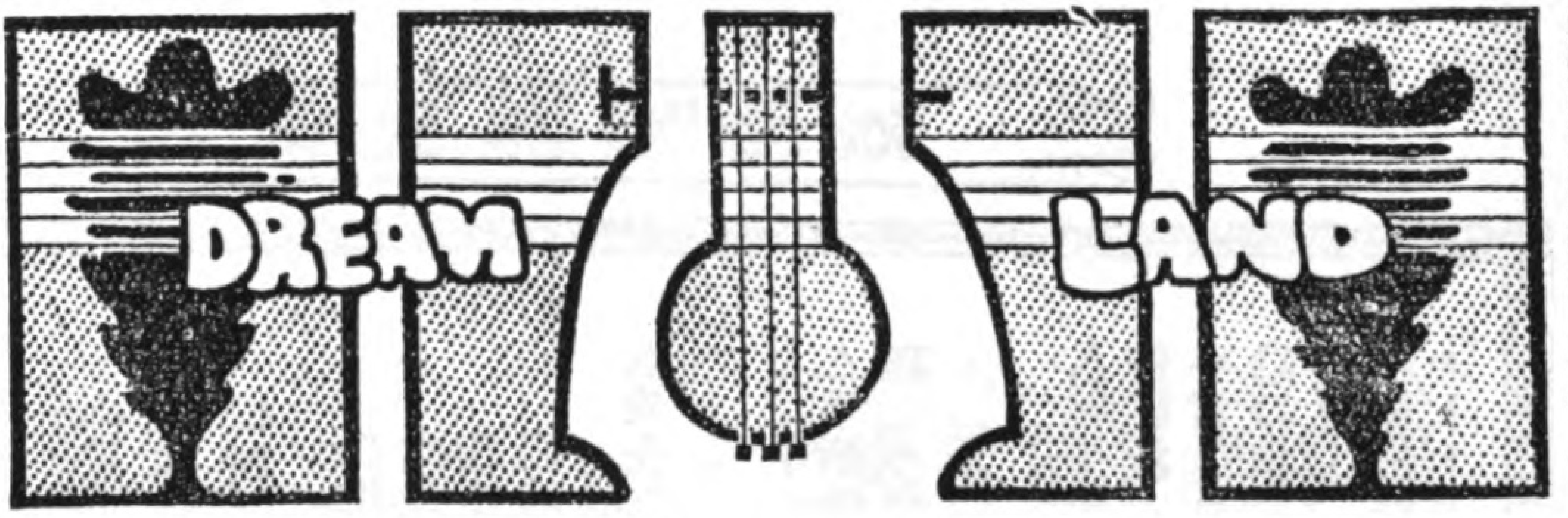


御一報次第早速御見積り申し上ぐべく候

東京駿河町

三越呉服店

拾五號 日常生活の教訓 目次



冬物新柄大賣出し

十一月一日より

懸賞玩具、文房具るゐ

貴金屬寶石裝身具るゐ

流行帽子、化粧品るゐ

寄ぎれ見切反物るゐ

御高評の餘興は

今回一大改良を加へ引續き御觀覽に供し居候

東京日本橋

白木屋呉服店

洋服コート地新着

客室



田中製版所三色版

女（いの一）

最近の本紙

毎日電報

▲毎日電報は世界的新聞として歐洲、北米、淸國、西伯利亞を首じめ內外各地に特設の通信員を置くその上に

▲海外特派員を派遣して日々の出來事および所見所聞を電報に電話に巨費を投じて特報せしめつゝかれは世界の大勢、坐ながら視るが如くまた他面には

▲市民の新聞として今や『東京鐵道未成線問題』を市の利益の方面に解釋せんとして鋭鋒を磨きつゝあり

▲娛樂の公園を以て目せらるゝ日曜附錄は時に四角四面の大議論をなすことあれども要するに淸新多面の趣味を以て勝り

▲通俗講話は諸博士名家の新說新話にして趣味に出入し實益を兼ねて家庭男女の讀物として最も恰適

▲英文欄は文章に謬見に世にありふれた夫れとは全く趣きを異にし斯學者の考として好箇の指針也

▲小說『第一人』は文壇の驍將田口掬汀氏の新作にして天上天下の唯一人、心も體も我物と愛した意中の人が何時しか我が手裡を脫する微妙の活消息を傳ふる近來の傑作

▲小說『匕首藝者』はお馴染渡邊默禪氏の大作にしてその面白さは玆に喋々する迄もなく皆樣先刻御承知〱

▲大日本代表的『美男子』の懸賞募集寫眞は既に連日の紙上に光彩を放ちつゝあり其趣向の奇拔は主張の堂々たるに相對して讀み且見ざるべからず

▲『文壇その日〱』『申上候』『亂調子』などまたとりどりに特色を發揮して興味紙幅に漲れり

女(いの二)

◀郵送料とも三ヶ月前金一圓▶

發行所 東京丸の內 振貯五八四二番 毎日電報社

また得難き運勢獨り判断

四條家藏版

石版五度刷 美麗箱入

定價貳拾五錢 郵送料貳錢

吉凶判断 懐中おみくじ

運勢を知りて事を成すは成功の基なり此のおみくじは法華經の精神により成りたる神異奇妙の神籤にして心を清め之に向へば鏡に物の映る如く運勢現はれ煩悶を除き前途の解決を乞ふ

東京神田美土代町二の二振替二〇四一六 博文書院

ニキビにて苦悶そばかす者は藥學界の泰斗藥學士藤本理先生が半生の心血を注ぎて漸く發見せられたる特種の奇藥クヴルーを使用して速に苦腦を脱せよ但し本劑希望者は本劑購求前又は同時に本劑の説明書を要求せられ其特効たるを確信の上使用を乞ふ

㊀藥價輕症用五拾錢送料市内四錢地方八錢（台朝臺灣）

冊[redacted]錢

東京本郷區切通坂町長田彌平

三十四番地

振替口座東京七六二九番

電話下谷二一五七番



博文館

奥村繁次郎君著

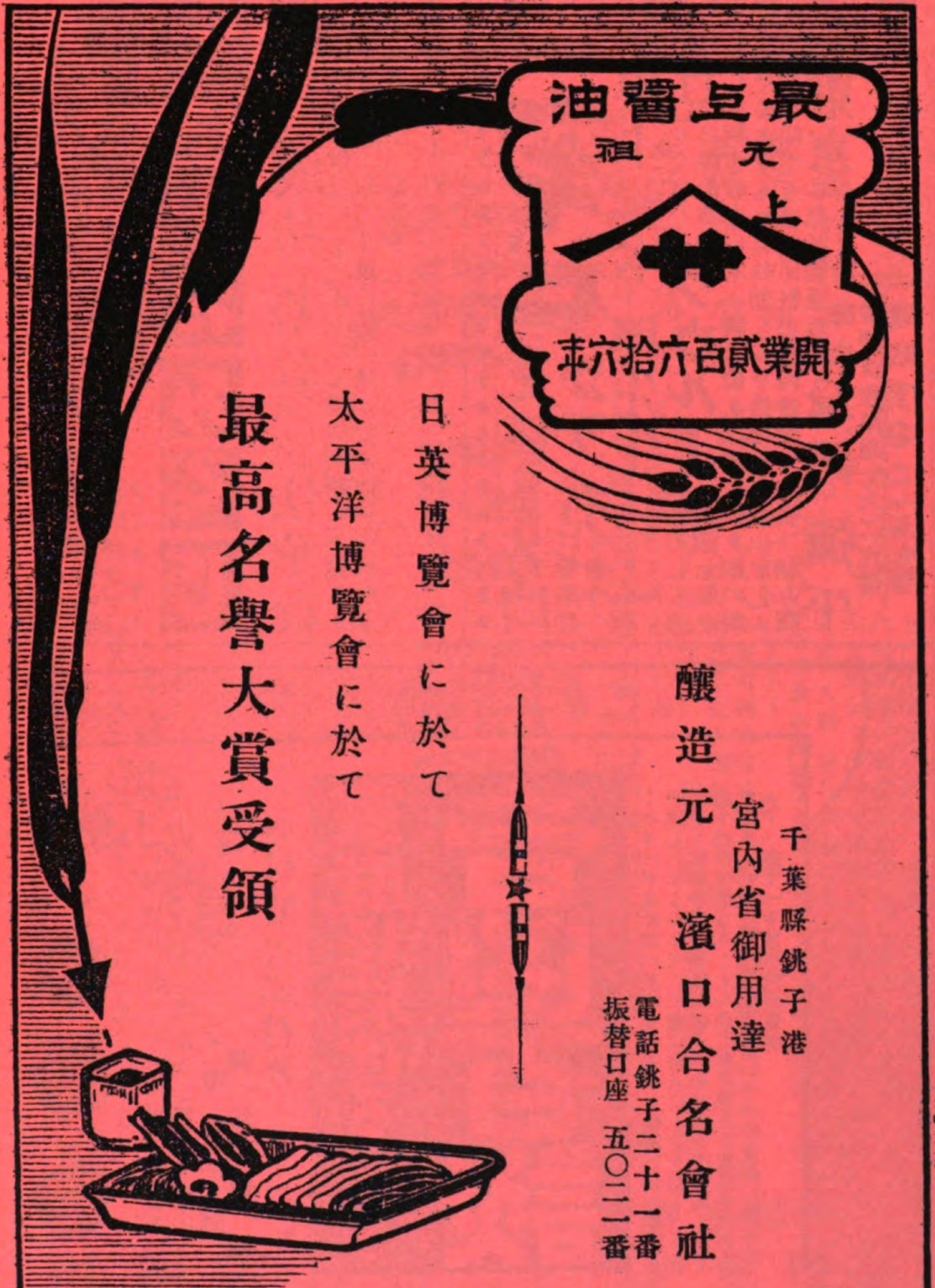
家庭に於ける吉凶百談

全一冊洋裝四六判 紙數三百八十頁

正價四十錢 郵税四錢

この書は平素家庭に於けるあらゆる禍福吉凶の原因を詳述したるものにて、文意は何人にも分り易く、一目にして半信半疑の妄説を破り、如何なる迷信家と雖も忽ち迷信の愚なることを感じ教育學及び風俗研究の参考書ともなり、教育家は固よりいづれの家庭に論なく、必ず一讀すべき實用的要書也

女（いの三）


最上醤油
元祖
開業貳百六拾六年
千葉縣銚子港
宮内省御用達
釀造元 濱口合名會社
電話銚子二十一番
振替口座 五〇二一番
日英博覽會に於て
太平洋博覽會に於て
最高名譽大賞受領



男女方必ず御讀下さい

金五千圓を左の方法に依り差出すことゝせり御用済の瓶に貼る商標を剝ぎ取り慈善事業へ御寄附あれば一枚五厘宛で本舗にて何枚にても引換ます



宮内省御買上の光榮を賜はりたる純良髪油は日本國中唯みやけ油あるのみみやけ油を常に用ゆれば髪の抜ることなし、産後病後髪を長くし、のぼせをしづめフケはなくなる、頭の病にかゝることゝなし、外に墨拔洗粉。スキ油ビンツケ冬しらず等好評嘖々近頃類似**椿**と稱へ色々混合物ある品澤山あり・みやけ油御望の方に對し粗惡品を賣り付る奸商四方にあれば必ず東京人形町の**みやけ油と御名指**の上御求めなさい販賣所全國信用ある店にあり

理想的最新製劑

ちゞれ毛くせ直し ベント

本品を一度使用せば如何なるチヾレ毛クセ毛にても立處に直伸す永く使用せば根本的にチヾレ毛クセ毛の有る處を忘るべし

定價 大金九十錢 中金四十七錢 小金廿五錢
送料 市内四錢 市外八錢

最新輸入高等染髪料

しらが赤毛そめ ヘーヤダイ

大壜金貳圓五十錢 中壜金壹圓 小壜金五十錢
送料 市内四錢、市外八錢

此の二大有効製劑の説明は左の書に詳記せり

最新衛生化粧美髪法

本書の内容

◎しらが、赤毛染の話
◎ちゞれ毛くせ毛直しの話
◎抜毛どめ、ふけとりの話
◎毛のなき所に毛の生へる話
◎毛髪の洗ひやうの話
◎毛髪營養の話

其他毛髪化粧に關する秘訣

本書御入用の方は郵券二錢封入御申込あれば無代進呈す

●發行所 東京本所區外手町八十七番地 深澤國華堂

女(ろのこ)

通信販賣

博通社特賣品

最新流行 首冠卷 角卷 マフラー 長卷 スカーフ

ショール時代は過ぎ去り、是に換る目下流行品は首冠卷で長卷と角卷とが盛んに歡迎せられつゝあり

▲ウツラ織長卷 市價三、二〇〇 特價二圓八十錢

▲アラスカ織長卷 市價二、五〇〇 特價二圓三十錢

▲梨子地羽二重角卷 市價二、二〇〇 特價一圓八十錢

▲羽二重角卷 市價一、八〇〇 特價一圓五十錢

●色合、薄鼠、紺、藍色、薄藤、紫、オリーブ、其他

▲注意 御注文の節は男女共必ず年齢御記入を乞ふ

▲送料 市内無料、内地八錢、臺樺廿錢、清朝卅錢

◉品質精良、破天荒の廉價にて提供！！

十八金 最新流行 指環

(1)



葡萄彫刻

(2)



菊花彫刻

(3)



水仙彫刻

(4)



梅花彫刻

弊社獨特の撰擇と技術の優秀と相俟つて責任ある貴重品を廉價且つ均一法に依り提供致しましたから品切にならない中に一刻も早く御求めなされ

サック入

特價 四圓均一

〔御注文書には厚紙にて指廻り寸法を計り記入を乞ふ〕

▲書留小包送料 市内無料、内地拾貳錢、臺樺、清朝各卅錢

手提金庫

漆塗金蒔繪の極めて優美高尚且つ輕便堅牢の構造にて平素家庭に於て貨幣の出納及び大切の品物を秘藏するには最も適當の良器で有ります

鋼鐵製

（空錠附及特別堅牢桐中箱入）

大形 長一尺二寸横八寸深四寸三分 特六圓八拾錢

中形 長一尺横一寸三分深三寸九分 特五圓五拾錢

小形 長八寸横七寸分深七寸分 特四圓五拾錢

送料

	大形	中形	小形
(市内)	無料		
(内地)	五十錢	四十錢	卅四錢
(海外)	七拾錢		

ロモール製

空錠及中箱附

大形 長一尺一寸横八寸一分深五寸三分 特四圓五拾錢

中形 長八寸八分横六寸五分深三寸九分 特三圓

小形 長六寸横四寸深三寸 特二圓

送料

	大形	中形	小形
(市内)	無料		
(内地)	卅八錢	廿六錢	廿二錢
(海外)	六拾錢		

女（ろの二）

大橋メール.オーダー.ビジネス

東京日本橋區本町一丁目 博通社 振替口座東京五十番 電話本局六百四十番



日高嶋助筆

▲都新聞は議論公正にして平易穩健に、報導は機敏にして簡潔周到なり。

▲都新聞の政治上、經濟上の記事は公平にして何等外間の制肘を受けず。

▲都新聞の相場欄は觀察奇警にして且機敏に、少しも他人に役せられず。

▲都新聞の工藝、美術に關する記事は報導評論共に妥當にして且親切也。

▲都新聞の雜報は演藝欄、花柳界の消息と共に出色なりとの公評あり。

都新聞

▲都新聞の讀者と記者及相談の相談は讀者の相談對手にして又好讀物也。

▲都新聞は小說。講談は其挿繪と共に當代名家の手に成り最大好評あり。

▲都新聞の紙質精良にして印刷鮮明なり見て心地よく讀んで眞に面白し。

▲都新聞は都鄙の各種の階級を通じて最も多く且十年以上の愛讀者多し。

▲都新聞の廣告は以上の理由に依り種類の如何を問はず其効力最も大也。

發行所

東京市麴町區内幸町

都新聞社

電話
社長室新橋　二〇八一番
事務用新橋　一七五番　四〇六六番
編輯用新橋　一六一番　三〇一八番

（振替貯金口座七五二七番）

梅どく りん病 ぢ疾 わき症が 生殖器諸病 神經衰弱症 婦人科

東京淺草瓦町廿八淺草橋通瓦町電車停留場横●朝八時より夜九時迄

中央醫院

子宮諸病 子なき人 月やくとまりたる病 ヒステリー 血の道

梅どく諸病 りん病消渇 わきが ぢ にきび た蟲等

生殖器病 神經衰弱 記憶力減衰 萎縮 遺精 早漏 夢精 發育不充分症等

▲病状を記し郵券六錢を送れば其病を速治する専門醫中央醫院々長處方の特効新藥説明書を送る

東京淺草區瓦町廿八番地 淺草橋通り瓦町電車停留場横

中央藥院

藥價 十錢、五十錢 廿錢、一圓

●●全國各地藥店に有り●●



たんせき、ぜんそく、[illegible]かぜ

一等丹

心配(しんぱい)＝御無用(むよう)

かぜの患(わずら)ひ たんの苦(くる)しみ せきの惱(なや)み を治すに

天下一品の 一等丹(いつとうたん)あり のむとスグきく

ゼム本舗 東京馬喰町二 大阪平の町一

山崎榮三郎

西村醉夢君著

和歌ト俳句

袖珍洋裝美本 紙數三百五十頁 正價四拾五錢 郵稅六錢

本書は和歌及び俳句に關する解說、歷史、批評、並びに修辭法を記載し、卷頭には『詩學梗概』と題し、それに就ての解說をしたもので一般家庭に讀まれる目的で編んだものであるから、極めて平易な、通俗なことのみを選び、修辭學、詩學の梗概が窺へ、また和歌と俳句との文學的價値をも分かるやうにしたものである

《內容》

【第一篇】詩學梗概＝●詩とは何ぞや●詩の內容●詩の律格●詩の種類●詩の用語●空想と寫生●詩の生命【第二篇】和歌＝●和歌とは何ぞや●和歌の種類●古歌の風格●現下の歌壇●和歌の書式【第三篇】俳句＝●俳句とは何ぞや●句の制約●俳句の特色●俳句の沿革●最近の俳壇【第四篇】修辭法＝●譬喩●對照●雜種の修辭

東京本町 振替口座東京二四〇

博文館

女(はの三)

枯木寒鴉



跡見花蹊女史

木曾の秋色



毛利公爵母堂、岩倉公爵夫人、鍋島侯爵夫人
大隈伯爵夫人各序、牧野伸顯男書簡
鳩山春子夫人著

（クロース製全一册）

婦人の修養

定價 金壹圓貳拾錢

郵税 金拾錢

本書は鳩山春子夫人が内外の務め繁き中に深き素養と、廣き見聞と、富める經驗とを以てものし敢て新奇に走らず舊きを套はず能く其中庸を得たる眞に好著と謂ふべし之を讀たらんには母たる人は育兒の敎へを聞くべく、社交の婦人は交際の術を學ぶべく、一般夫人は常識修養の指鍼とすべし各女學校は最好の參考書として如何に偉大なる感化を受くべきか

東京 博文館 本町

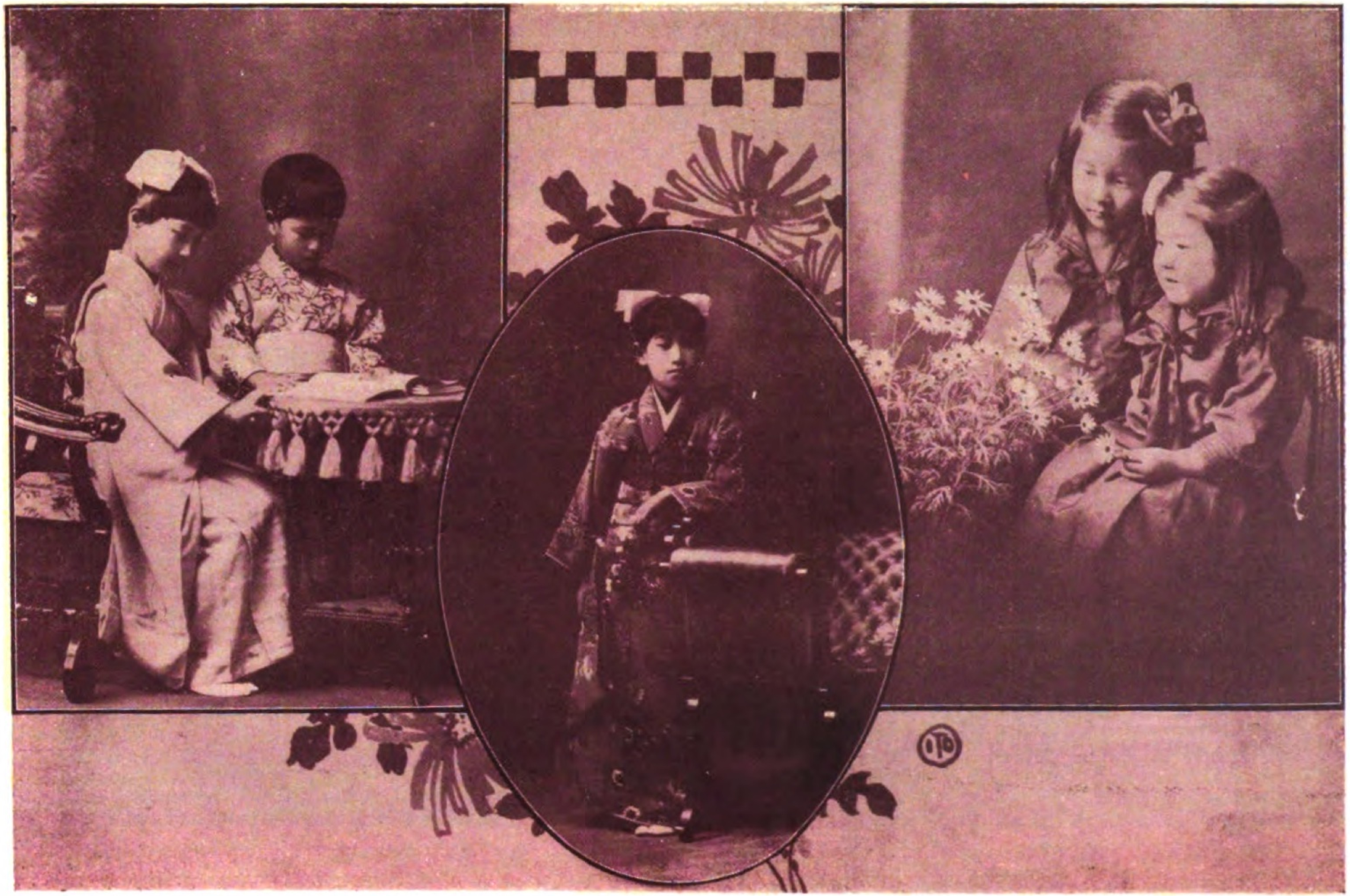
女（にの一）

女(にの三)

獨逸皇太子妃殿下と二皇孫殿下



洋装と和服



右、紳商原六郎氏二令孃　美與子、多津子、
中、醫學博士三輪信太郎氏　令孃　闌子、
左、男爵神田乃武氏二令孃　孝子、文子、

文章世界 第五卷第拾四號

既成發行

和漢文學の新研究

全一冊洋裝菊判
紙數二百四十頁
口繪寫眞版豐富
正價廿錢
郵税二錢

本誌は日本文學と漢文學との重なるものに就いて、現代知名の文學者諸氏の爲せる前人未發の新見解、新解釋を收め、以て、古典の價値を新たに天下の讀者諸君に語らんとす。書目凡そ三十 執筆者は、島崎藤村、岩野泡鳴、相馬御風、窪田空穗、楠山正雄、水野葉舟、吉江孤雁、會津八一、正宗白鳥、西村渚山、內藤鳴雪、笹川臨風、久保天隨、田山花袋、其の他諸氏。

右の研究記事の外掲載要目左の如し。

誌友の應募小品十數篇。

諸家の小品、長詩。

數十頁に涉る新書簡文話。

文壇の現勢を說ける長論文。



東京日本橋本町三丁目 **博文館** 振替口座東京二四〇番

洋裝菊判紙數二百四十頁
正價金貳拾錢
郵稅金貳錢

第五卷第拾四號

農業世界

十一月十日發行



女(ほの二)

東京本町 博文館

◀拾一月號要目▶

▲論說▼個人主義の世界的波動と農村問題澁澤男爵●農村發達の四大要件古在農學博士●帝國農會と大日本農會石坂農學士●不動產抵當銀行問題鹿野直司▲農界人物▼東北秋蠶の開祖者中山山雨●角田喜右作翁新井生▲農業▼紫雲英及其他の硬實試驗稻垣農學博士●醱酵乳と其効能野田農學士●新式魯桑仕立法小野賞桑改良者●秋植球根植物の栽培酒井伯爵●優良な種卵に就ての話松川潔●貯藏穀類の害蟲驅除町田良一▲林業▼護謨の話小谷農學士●本邦林業進步の經過村田林學博士▲水產▼陸奥灣の帆立貝(無盡藏で海外輸出有望)門田稻葉●鑵詰内容の統一を促す會田水產學得業士▲副業▼中野町の蕎麥粉山北清孝●高知本場乾柿製造法井谷喜太郎●有利なる澱粉製造法門田勝衛▲農政經濟▼農業敎育の現狀と効績針塚文部視學官●蠶絲業上の時事問題林農學士▲家庭▼齒の衞生小山齒科醫●家庭の衞生松尾清香●農家衞生問答松本醫士▲海外▼北米のヲクラハマ州の棉作概況小堀三洋●淸國視察所感永井渡淸實業團員●海外渡航案內島貫日本力行會長▲雜錄▼九十九里の濱横山天涯●諸國怪奇百話葉山繁樹●東奥農村視察の一節荒川生●古今農界逸話松村生●秋保溫泉の奇風波生●輕便な小鳥獵法エムチー生●農家法律問答羽田辯護士▲趣味▼地震河岡潮風●一字千金桃川燕玉●懸賞俳句(春秋庵準一宗匠撰)▲修養と靑年會▼地方靑年に向て特に歷史傳記の研究を勸む牧野男爵●靑年補習敎育と靑年團體澤村農學博士●模範的靑年會高橋生●福島縣雙葉郡聯合靑年會鈴木長松●土江靑年會狀況梶碧溟●實業理想團記事▲質問應答▼▲寄書▼小麥共同販賣手續磯貝生●天與の富源農家の好副業梶山寅吉●朝鮮の甜瓜栽培法諸橘虎次郎●時無大根に就て田中熊太郎●蘭草の靑蟲根本的驅除報德園主人▲農界時報▼

口繪◎ヘレボラス草花(三色刷)◎櫻桃八種(石版色刷)◎名和昆蟲研究所◎岩手縣立水產學校◎滑名蠶業學校實習◎樺太の植物◎臺灣の牛種◎小野式魯桑仕立法

女（ほの三）

女（ほの四

名家の令嬢

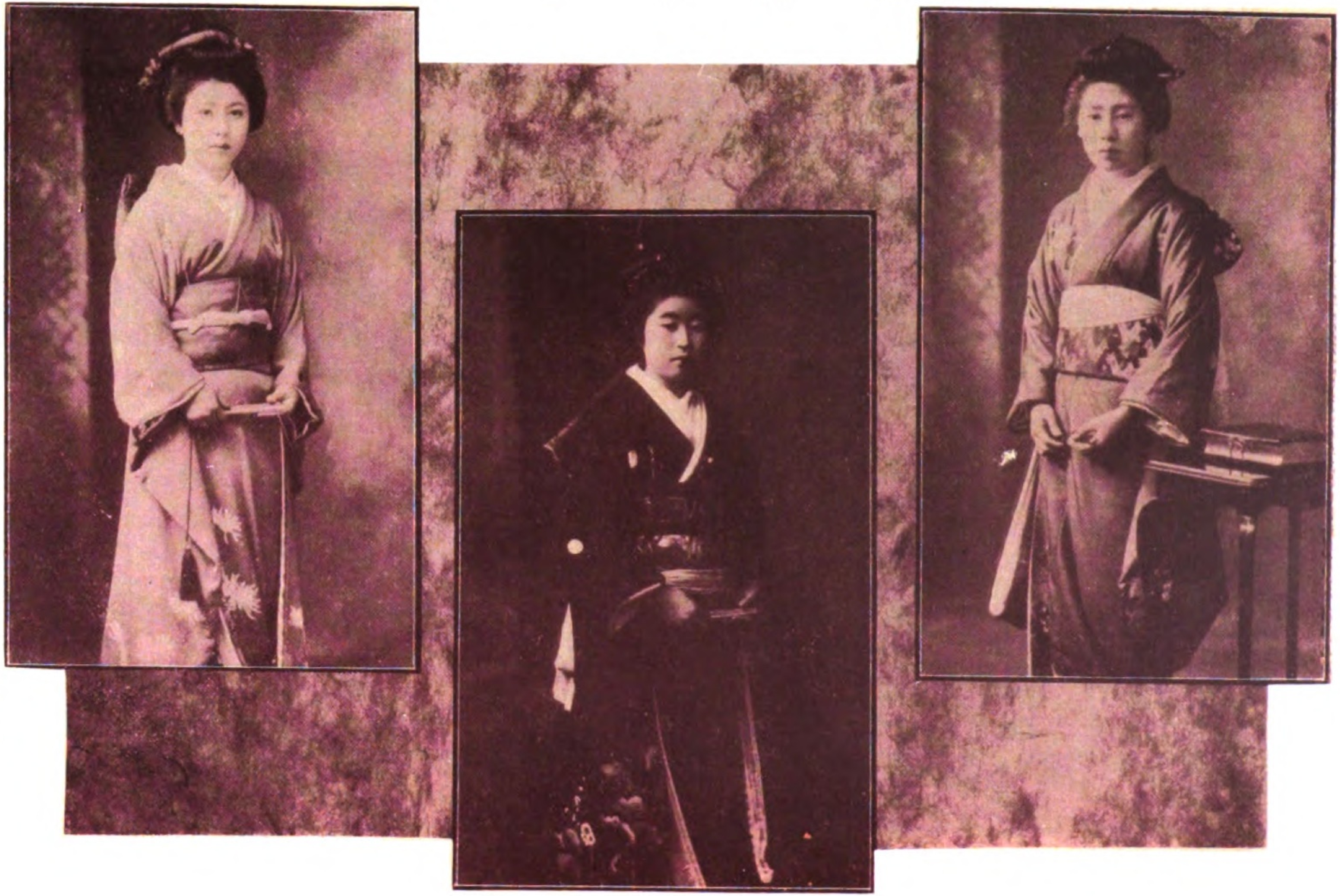






右、男爵楠本正敏氏 令妹 勝子
中、海軍中將男爵宮原二郎氏 令孃 藤枝子
左、內苑頭子爵福羽逸人氏 令孃 國世子

花嫁すがた



本圖三婦人はいづれも日本橋邊知名の紳商の令孃にして東京下町風の花嫁すがたの粋を凝らしたるものなり

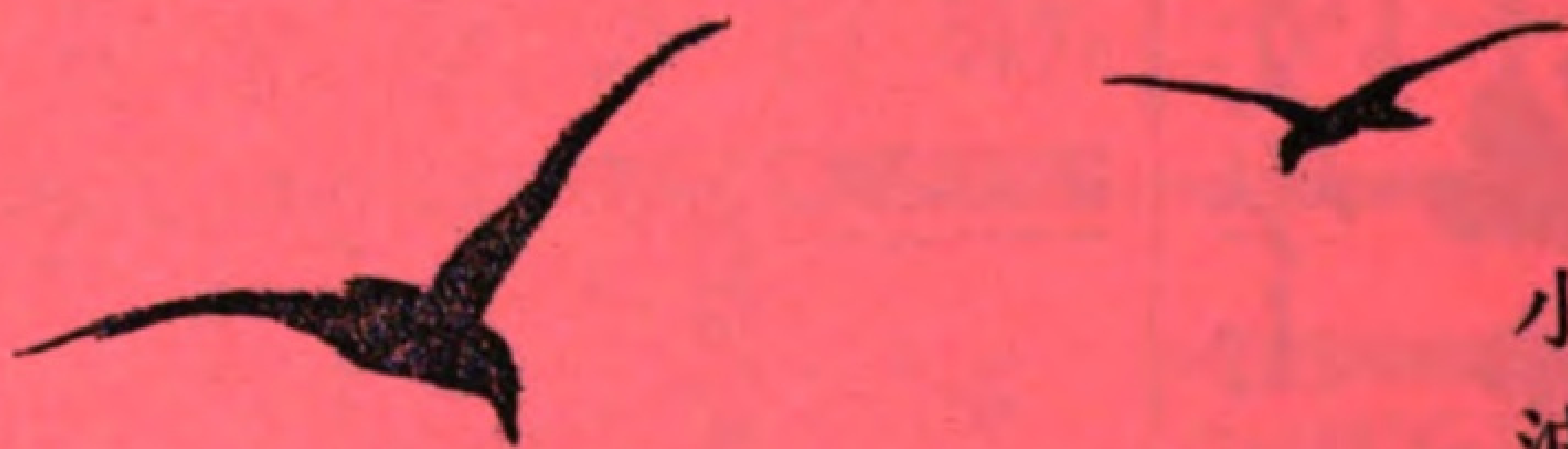
幼年畫報 第五卷第十五號 增刊 十一月十五日發行

カア〳〵烏

小波作 春汀畫

正價拾錢 郵稅五厘

極彩色石版十六頁
二色刷活版十六頁
寫眞版四頁







カア〳〵烏カア烏。クロ〳〵烏クロ烏。お宮の森でもカア〳〵烏。お寺の屋根でもカア〳〵烏。日の出ぬ内からカア〳〵烏。日暮の頃までカア〳〵烏。アレ〳〵カア〳〵烏がなくよ。さア〳〵起きよと烏がなくよ。坊ちやま起きませ烏が鳴くに。今朝來た畫報のカア〳〵烏。ほんとに樂しいカア〳〵烏。

東京 博文館 發行



女(への二)

明治四十四年度の新學期入學者は今より準備に著手するの必要あり

★ 東京に遊學せんとする者は本書に就き愼重なる調査を要す

最近調査

女子東京遊學案內

文學博士醫學博士 森鷗外君序文
坪谷水哉君序文
巖谷小波君序文
今井翠巖君著

(附錄) 最新東京實測明細地圖

洋裝四六判美本
紙數七百頁
正價五拾八錢
郵税拾錢

((萬朝報評))

(口繪)……各學校寫眞版十五頁挿入 曩に好評を博せる『男子東京遊學案內』の姉妹書にして、またこれ好評を博すべきものたらずんばあらず、苟くも都下の學校養成所講習所私塾と稱するものはその何種たるを問はず網羅して痒き所に手の屆きたる心地す……

森鷗外君　巖谷小波君　大町桂月君序
今井翠巖君著

最新増訂 男子東京遊學案內

(附錄)……最新東京實測明細地圖
四六判美本紙數七五〇頁　正價七拾錢郵税拾錢

本書は四十二年三月を以て初版を出し東京遊學者の便に資せしが多大の好評にて一時に數萬部を賣り盡し久し、讀者の望み・缺きたりしが今茲に本書に訂正を加へ最近に於ける各學校の興廢盛衰を明かにし且つ著者がゃに得たる〃識に依案內記・增補し以て四十四年度新學期に就學せんとする者の好指針たらしむべく改竄せり

東京 博文館 本町

佐佐木信綱君著

歌學論叢

全一册

洋装四六判總布製
美本紙數五八〇頁
正價金壹圓
郵税八錢

歌學論叢は、佐々木氏が、數年前より帝國大學文科大學に於て、和歌の歴史を講せらる、其研究の餘材として成れるものなり。或は燃犀なる眼孔を以て『和歌と時勢』『和歌の將來』『歌學の根本』『上世の和歌』『歌格の研究』等に就て論究し、或は卓拔なる見識を以て『人麿と赤人』『貫之』『西行』『實朝』『景樹』等を論評し、或は『仙覺以前の萬葉研究』『戸田茂睡』等精細なる考證あり。或は『萬葉集の女歌人』『建禮門院右京太夫』等趣味津々汲めども盡きざるものあり。又、『六人部是香』『大隈言道』『野村望東尼』等未だ世に知られざりし歌人歌學者を紹介したるが如き、國文學史上に一新事實を提供せるもの。其他、『萬葉集私見』『近世歌人雜話』『家集のいろ〳〵』等すべて廿篇、五百八十頁にわたり、該博なる學識と清新なる文藻と相俟ちて、我國の歌學界に新生命を與へたる書と云ふべく、又上代より新世にいたる側面の日本歌學史と云ふを得べし。苟くも和歌に志あり。國文に興味を有する人々にとりて必讀の好著なり。

文（への四）

ショペンハウエル大作

意志と現識としての世界

▼上巻……既刊

正價壹圓八拾錢
小包料拾貳錢

全三册菊判
總クロース特製
上巻 紙數七百五十頁 挿書數葉

文學博士 姉崎正治君譯

▽中、下二巻……近刊

斷片的思想に飽きたるものは本書を讀め、十九世紀の大哲學組織は此に備はれり、哲學書の難解に苦む人はこの書に就け、大哲の名文を流暢の口語に譯したる者なれば、上巻一册はこの哲學の本文にして、認識と科學、天然と人生、觀念と美術、道德と解脫の四大項を具備せり

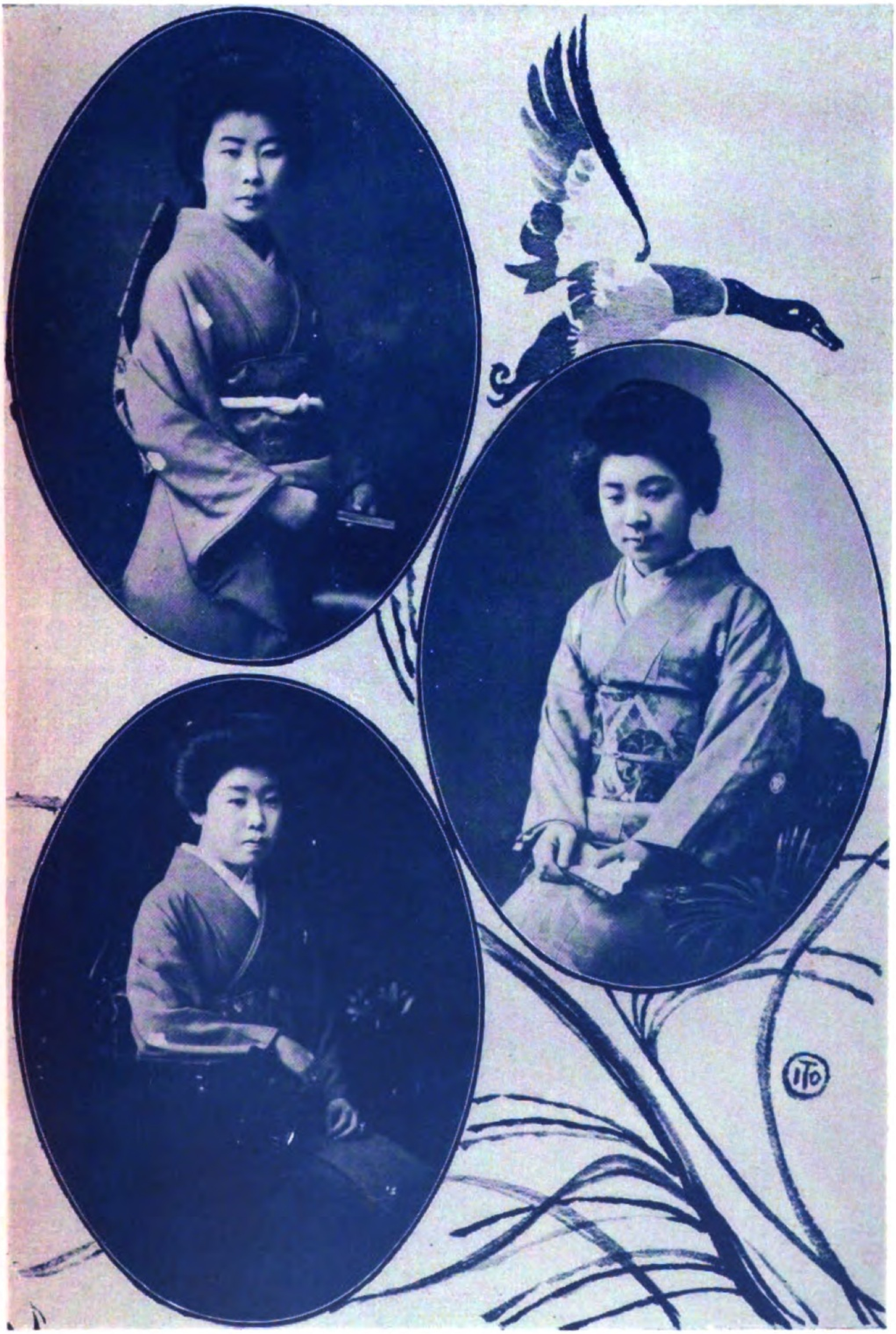
▷東京 博文館 本町◁

クラスメート





令嬢かゞみ



上圖 芝 川路ゆう子　中圖、芝 山中千代子　下圖、穩田 山本秀子

中學世界 第拾參卷 第拾五號 增刊 十一月廿日發行

文藝號

中學世界、本年最終の定期增刊にして、若々しき文藝の華麗と清鮮と、內容の充實とを以て全卷を蔽へり。恰も天地清明、讀書思想に宜しき節に於て、これを諸君の机邊に供すべし。排列は懸賞推薦の方式を用ひたる新進作家の錦繡の如き作品の公表を主とし、これを擁護するに、當代諸文星が苦心の創作、(小說、小品)飜譯小說、其他文章叢話、英作文講話、泰西文章逸話等を以てし、口繪水繪の色彩、また卷頭を飾れり。

□洋裝菊判紙數二百四十頁
口繪石版 寫眞版豐富

正價二十錢 郵稅二錢

內容種目

△懸賞當選作數十篇
小說、論文、敍事抒情文、長詩、短歌、俳句、書簡文、
小品文 英作文、スケッチ、表紙圖案等

△執筆諸作家
田山花袋、前田林外、與謝野寬、中村星湖
水野葉舟、前田晁、眞山青果、野上臼川
小山內薰、河井醉茗、西村渚山

△文章叢話、英作文講話……(數篇)

△誌友——寫眞帖……(數葉)

(その一)

東京本町 博文館

上圖　石坂夫人かをる子（故星亭氏令孃）

下圖　故神鞭知常氏令孃靜子





巴里人形抽籤會の記念



本圖は曩に赤坂表町スコット夫人邸に催されたる巴里人形抽籤會の記念寫眞にして、前列右より宮原菊枝子、ミセス、スコットチーラン、金子清子、宮原藤枝子、後列右より高柳メイ子、長崎佐惠子、西村伸子、高柳ヘレン子、――尙中央の人形は伊太利より取寄せ、衣服は佛國大使母堂の敎授の下に德川公、桂侯金子子等の令孃の裁縫になり、抽籤の結果米人ミスリ子の得たるものなり。

朝日新聞記者同編（第二回世界一周紀程）

歐米遊覧記

本篇は天四、北江、告天子等の筆に成り曩に朝日紙上に掲載せしを更に**増訂**を加へ且つ新に各地概説と題する説明を各篇の末に**増補**して地理沿革等の遺を補ひ附錄には如是閑の日英博覧會記事及び北江の白耳義博覧會並に滿洲紀行を附載す**總頁數約六百五十頁**の大冊にして讀者臥遊の伴侶たるのみならず歐米遊覧者の東道たるに足るべし挿む所の地圖は銅版、肖像六十四人、風景三十九葉は**精巧コロタイプ三十五枚**に合印しクロース色刷の製本亦大に意を用ひたり

全一冊洋裝菊判總クロース金文字入美本函付

正價金壹圓五拾錢

郵税十六錢
樺太臺灣三十五錢
清國朝鮮四十錢

女（ちの二）

東京朝日新聞社發行

六版

世界一周畫報

正價金壹圓・・・小包料八錢

全一冊洋裝菊判
總クロース美本
本文紙數三百廿頁
毎頁風景人物寫眞版
數百箇挿入

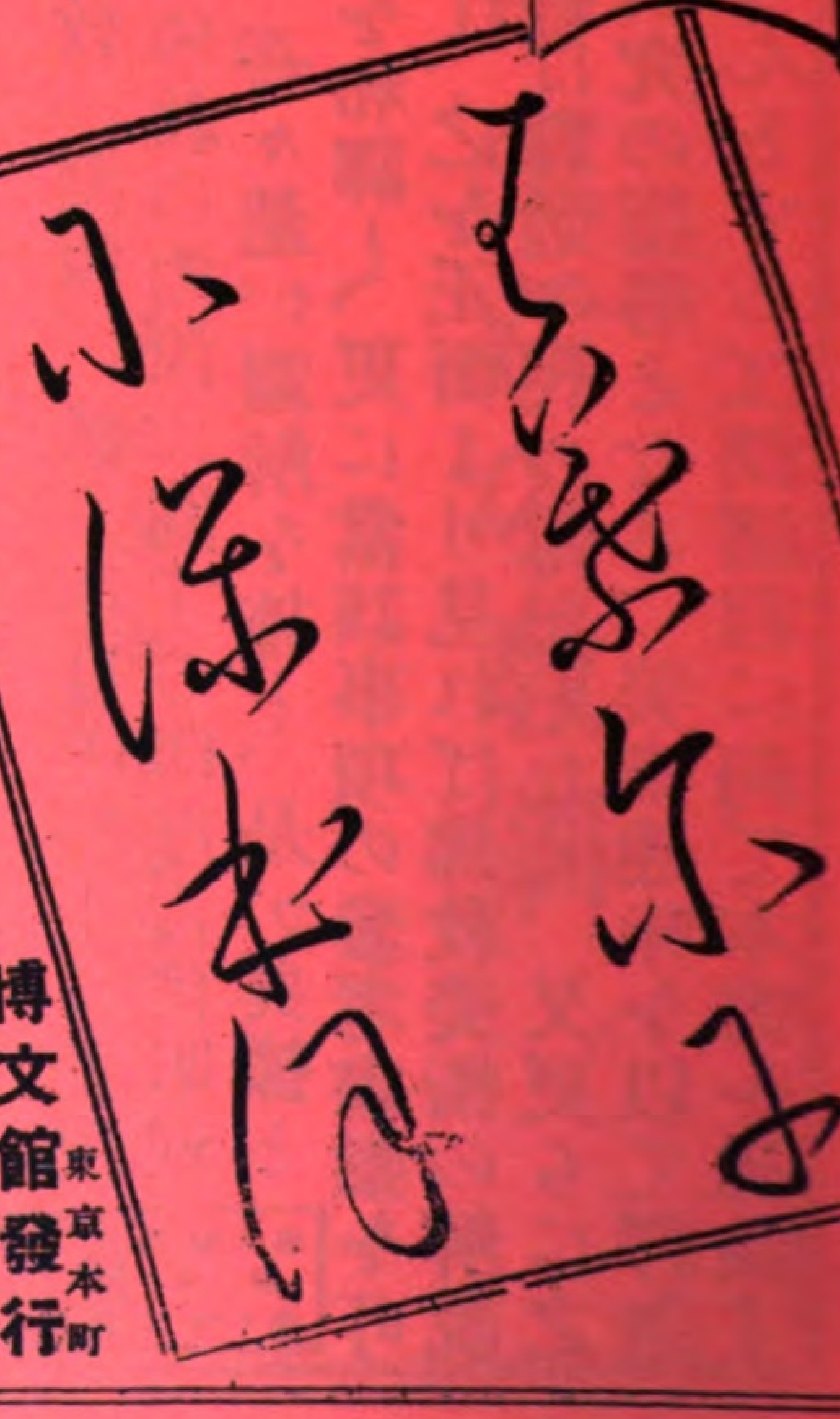
發賣元　東京本町　博文館

故新岡久頼君筆

いろは三體帖

半紙判折本　正價四拾錢　郵稅四錢

本書の書體は下の如し
當今婦人の手簡詠歌の
認め方には斯くの如き
書體尤も歡迎せらる。



博文館發行　東京本町

今井柏浦君選
榊原蕉園女史口繪

古今女流俳句集

女流の俳句は、男子の俳句に較べて放膽豪宕の氣に乏しいが、纖細、優婉、溫情自然に溢る、天眞流露の趣は、到底男子の遠く及ばぬ處がある、畢竟女子は男子に比べて、思想の緻密なると共に、感情の溫柔なる處が多いから、俳句なり歌なり、女性的と男性的とは、歷然した區劃があつて、其觀察點も抒情の徑路も違つてゐる、即ち女性的俳句の特色は、男性的よりも多く同情に富める點にある。この書に蒐めた俳句は、古今を通じて女流の佳吟名什約三千其秀逸なるものに至つては優に男子を凌駕するものがある、俳句を學ばんとする婦女諸君は固より女性の俳句を究めんとする人は是非一本を備へねばならぬ。

全壹册
菊半截美本
貳百五十頁
正價卅五錢
郵稅四錢

東京本町　博文館　振替口座東京二四〇番

女(ちの三)

佛教研究の新光明

東京帝國大學文科大學講師
文學士マスター、オブ、アーツ
堀謙徳君編著

美術上の釋迦

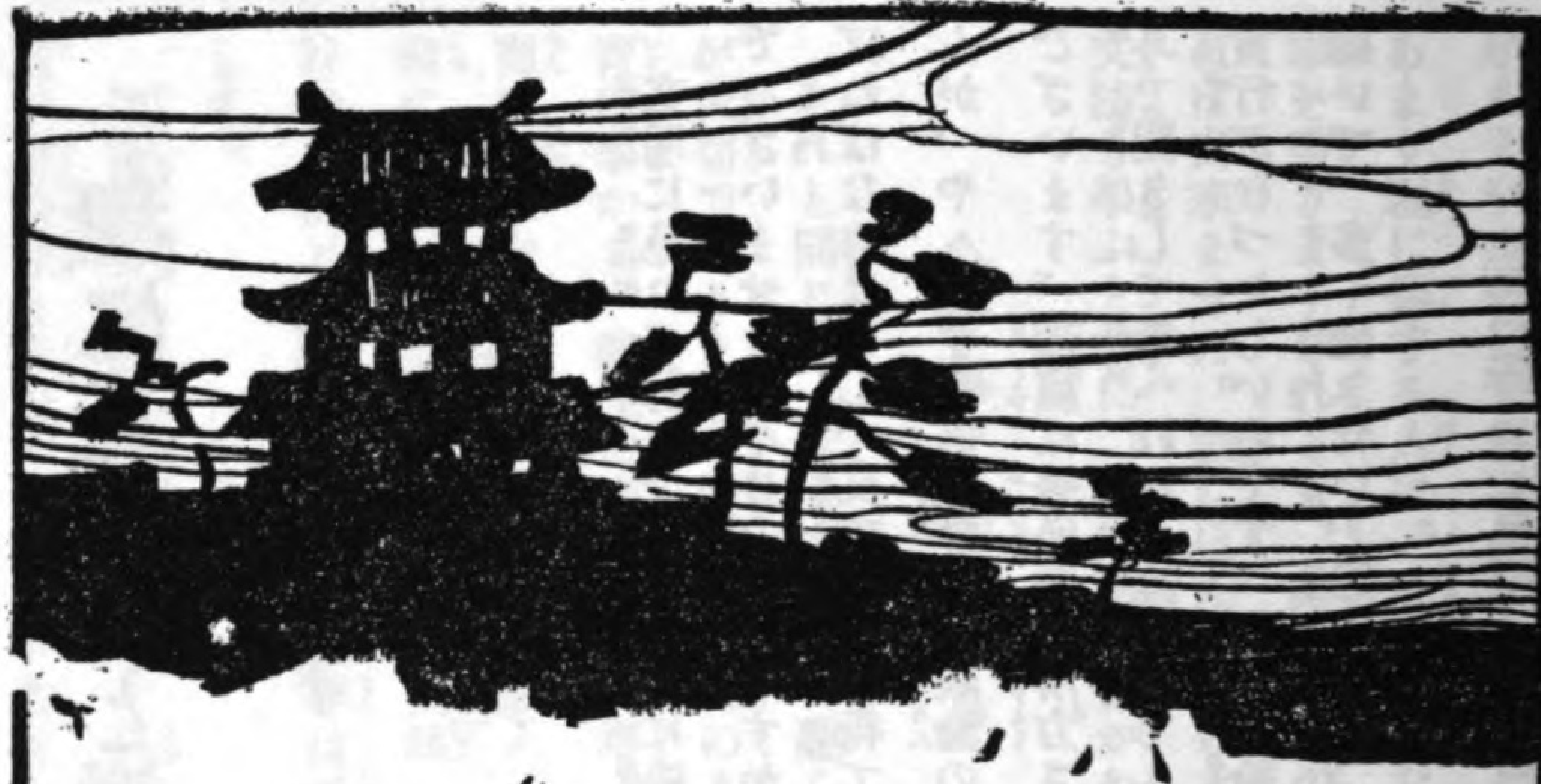
菊判洋布上製
紙數三百卅餘頁
定價
壹圓貳拾錢
郵稅拾貳錢

附錄
釋迦傳教地圖
佛書解題
新發見史蹟

口繪
アートタイプ一枚
外密古代挿圖七拾餘面

釋迦一代の事蹟、南北佛教の淵源、悉く印度美術上に表現す、本書は釋迦の事蹟、佛教の淵源に關する印度古代彫刻の寫眞七十有餘を複寫し、一々是が圖解を施し、是が典據となるべき梵漢佛典の本文を和譯し、更に當該事項の參考書類を叮嚀に明示したるものにして、之を正面より見れば佛教美術の解説となり、之を背面より見れば釋迦一代の傳記となり、又更らに之を側面より見れば、佛典研究の指導となる、美術趣味を以て釋迦の人格、佛教の淵源を知らんとする江湖諸君に向て本書を提供す

東京日本橋本町三丁目
博文館
振替口座東京二四〇番



日常生活の教訓

女學世界　第拾巻第拾五號

日常生活より得來れる百般の事項を趣味深く味ひ、人事人情の委曲を詳かに觀察して處世の要道を知り、兼れて常識を養ひ、品性を陶冶し、かくして無趣味不健全に流れんとする現代の生活をして、尤も價値あるもの、光輝あるもの、品位あるものたらしめんとする吾人の希望を充すものは即ちこの教訓なり。

理に走る人と働く人

實踐女學校長 下田歌子

△文明に免れぬ弊

文明に免れぬ弊は、男女ともに餘りに理に走ることでございませう。今日の時勢ですから、勿論道理は學ばねばならないし、又理窟も心得て居らねばなりませんが、やゝもすると机の上の議論のみが多くなるのでございます。理窟は普通の理解力さへあれば、目で見、耳で聞きして考へれば、誰れにでも分りますが、其の實行がむづかしいのです。故に理論は成るべく少なく聽いて、多く働きたいと思ひます。

△何時でも行ひ得る準備

ところが今の人は、理論を多く聽いて、働く方を少くして居ります。道理を聽いて解釋すれば何でも出來るものと思つて居ります。これが多くの人を躓かせます。今理論の分からぬ人とわかる人とを較ぶれば、勿論わかる人の方がよいけれども、分かる人と分らぬ人とを較ぶれば、わかつて且つ行ふ人でなければよいとは申されません。故にお互に分つた事を何時でも行ひ得るやうにして置きたいものでございます。物は識つて居て口は如何程達者でも、それを行ふことが出來なければ、一向役に立ちません。

△文法學者の文章の例

又理論にあまり凝ると、行ひが出來なくなります。文學の方で例を申せば、文章などは、無暗に書くと上手になります。新聞や雜誌を書く人々が、文章の理窟の方は一向構はないで居りながら、その文章のよく出

來るといふのは、皆其の爲でございませう。ところがあまり理に偏する人は、成程文法などは間違はない文章を書きますけれども、其の一つの文に長時間をかけねば出來ません。故にほんとうに文章家となるには、文法も學ぶと共に、又無暗に書かねばなりません。

△仕事は遅れがち

それと同じに、女子も理窟に捉らずに自ら行ふことが大切であります。例へば家庭の人ならば、兒女の教育の事から、衞生の事、衣服の事、其他なか〳〵多方面の働きをしなければなりませんが、それをあまり理窟にこると、恰度文法學者が文法に囚はれて文章が書けぬと同じ結果に陷つて、仕事は兎角遅れがちになります。

理論を學ぶのは結構ですが、只今はそれを聽いたり其の參考書を見たりするのがあまり多すぎるかと思ひます。學んだ理を實地に應用して其れより自己の天分を發揮することの出來ない人が多いやうでございます。

△新に負ひたる責任

今や我國は朝鮮を併せてまことに大きな國になりました。それと共に新しき國民に對する我々の感化力も非常に大きいのですが、其の新しき人々が理窟に偏して實行が伴はないやうな風になつては困りますから、先づ我々からいたして理論を知ると同時に其れを應用して實地の役に立つ人とならねばなりません。此の樣にして新らしく出來た國民を指導し、共に手を携へて進むといふのが、從來の我々國民の責任であらうと思ひます。

婦人の精神的生活

日本女子大學校長　成瀨仁藏

今日婦人の有樣を見ると、其の精神狀態は多くヒステリー的になつてゐる樣に思はれます。即ち精神の不健全な病的の人が多くて、其れが爲に一方ならず生活の幸福を破られてをります。又その考へてゐることや行つて居ることを見ますと、多くは過去に捉はれ、現在の時勢と共に推移することが出來ず、將來に伸びて往くと云ふ希望が甚だ薄弱であるやうに見受けます。其の原因に就て少しく述べて見ますと、第一は智識の不足から來て居るものであります。即ち婦人は一般に利己的主觀的に傾いて非常に天地を狹められて居る爲に、家庭と世間との關係もよく見えねば、社會と宇宙との關係即ち眞理もよく分らず、從つて何事に就ても諦らめるといふことができません。又苦痛などの原因が十分解せられないから、自然に氣が我儘になつて、何事に就ても怒り易く、夫に對しては不平を言ひ、依賴心は强くなり、其の樂みなども衣服髮飾り等の自分の身邊の物に限られてゐるといふ極めて病的の狀態を呈してゐるのです。

次には婦人の健康狀態が病的精神の原因を爲して居るものです。すべて婦人は母として子供を育て、又一家の健康を司るべき者なれば、衛生に關する智識經驗等は最も大切ですが、多くの婦人は之れがありません。設令敎育を受けた者でも、たゞ書物の上で分かる位で、それを十分に消化して、實際に應用する力がありません。又敎育の方法も智識を活用させるといふことが兎角十分でないので、イザ實地となると、書物で習つたことは何の役にも立たない。矢張舊來の習慣や迷信に惑はされて、健康狀態を改善することが出來ない、從つて精神も健全に育つことが出來ないのです。

又一つは婦人が社會的の暗示を受けやすいこと、即ち社會的の催眠術にかゝり易いことが原因を爲してゐるものもあります。例へば非常に心配をする、又非常

に臆病になる。遂には自分なる者をも認めず、自覺もなくなる、或は自分はつまらない者である、不幸な者だ、生き甲斐がないなど〻悲觀するが、それが皆な社會の人の顏色を見て變化するのです。一方に婦人に對する社會の酷遇虐待があるからでもあるが、婦人は特にそれに勝ち得ないで、小さくなつて悲觀して了ふ。これも甚だしく婦人を病的にして居ります。

今一つは遺傳に因るもので、この弊害も少くありません。

要するに婦人の生活狀態は甚だ不健全になつて居ります。之を矯正するには、經濟狀態を善くして料理裁縫などを敎へるといふ外部的の敎育も無論必要ですが、それはかりでは眞實に救ふことは出來ません。尙は精神修養を十分にして内部的の生活を改めることが大切です。然るに今日の敎育はたゞ智識其他外部的の敎育一方に偏して、精神敎育が缺けて居ります。でどうしても茲に宗敎とか武士道とかいふ精神敎育が要りますが、然らば今日迄生命を保つて來てゐる舊宗敎舊道德等を元の儘で遵奉することが出來るかどうかといふに、人智も進み、凡ゆる事物の變遷したる今日の生活に適しないことは明かです。たゞ幸ひに凡ての宗敎、凡ての道德を通じてその根柢となるべき普遍的一大潮流が流れてゐるから、その潮流に乘り、そこに信仰の大本を立て、自分の立場を確かにし、自分の理想を養ふて、自分から廣く社會家庭等の關係を明かにして、偏狹なる壓迫や、不健全なる暗示に打勝ち、迷信や遺傳の束縛を免かれ、自分の生活の方針を立て〻、自分の身體感情を自分で支配して、凡ゆる境遇に應用して誤らないといふ確信を持つ、これが出來たなれば、今日の病的狀態を脫して、精神的生活を發展することが出來ると思ひます。



高尙なる趣味の生活

山脇女學校長　山脇房子

△挿した一輪の白薔薇

人は必ず趣味をもつて居ります。例へば自分の事業に趣味をもつとか、或は音樂に趣味をもつとか、乃至は文學に趣味をもつとか、人々各々何かに趣味をもつて居ります。或はさういふきまつた趣味がないにしましても、日常の事々物々に其れが現はれて參ります。例へばこゝに一輪ざしの花瓶があるとしますと、これに餘りどつさり花をさしては面白くないから、白薔薇位を一輪ちよいと挿して置くといふのは、つまり人の趣味が現はれたのでございます。又西洋室ならば恰度勸工場を見るやうに色々の品をどつさり竝べてあつても見られるけれども、日本室ではそれでは面白くないから、置く品數を少くして成る丈あつさりと飾りつけるといふのもやはり同じでございます。其他衣服の上にも、髪飾りの上にも、研究する學科の上にも、家事を執る上にも、交際の上にも何にでも趣味は現はれますが、玆に望むところは、其の趣味が高尙でゆかしくあつて欲しいことでございます。

△生活する周圍の空氣

之を高尙にするには色々の方法がありませう。ちよつと考へて見ましても、趣味といふものは全く其の人の品性の働きですから、之を高めるのが先づ何より肝要です。これは修養に依らねばなりません。又自分の生活する周圍の空氣の淸潔高尙といふことも大切であります。目に見るもの、耳に聞くもの、交はる所の人人などがすべて上品で高雅でなければなりません。山河の景勝に富み、風光明媚な國の人民は、其の自然に同化して、概して思想が美しく、又淸潔を好み、趣味も從つて上品でございます。家庭生活に就て申して見ましても、衛生もよく行き屆き、家族全體が淸廉潔白で、すべてが溫かい家庭に居る人は、其の性行趣味な

どが自然上品で優美になります。故に一家の主婦たる人は十分此の邊に注意が要ります。

△襦袢の袖で鼻を拭ふ人

けれど多數の人に就て申せば、清潔の心掛などは餘程缺けて居るやうに見受けます。身體の仕末を見ましても、入浴は度々するのでせうけれども、微細な所に注意が足りない爲に、顏面丈けは可なり光澤はありますが、耳は薄黑く垢がたまり、白く輝くべき齒は黃色くて光なく、爪は長く伸びて其の先には黑いものがたまり、耳より首の邊へかけて墨繪のぼかしのやうに汚れて居るなど要所〳〵が實に見苦しうございます。中には黑く輝くべき頭髮も少しも手入をしない爲に、光澤は勿論なく、おまけに厭ふべき臭ひをさへさせて居る人がありますが、これでは趣味も何もあつたものではありません。又被服に就て申しますと、袖口の破れは其の儘に放つてありますし、襟は垢で黑く光り、胸、膝なども汚染をつけた儘で一向平氣で居る人があります。甚だしいのになりますと、襦袢の袖で鼻・口などを拭ふ人さへございます。

△床の花瓶に塵芥泛ぶ

次に住家に就て申しますと、客間などは一寸綺麗にしてあるやうですが、床の間の掛物は二三週間も掛放してあるために、反りくりかへつて軸は塵で白くなつて居り、花瓶の水はへつて仕舞つて其處へ塵が浮き、花瓶の下や棚の上や室の隅々にも塵があり〳〵見ゆるやうな有樣で、掛物と置物の釣合を考へるなどいふことは思ひもよりません。それでは衞生の本たる臺所はどうか申しますと、戸棚の中には腐敗したもの、黴の生えたものなどをどつさり詰め込み、又流元、井戸端、下水などには、飯粒や何かゞ停滯して見るから心地惡しくなるやうな家がよくあります。かういふ家に住む人は、自然品性は宜しくなくなり、趣味も下り、言行も次第に粗野になつて了ひます。まして其處に成長する子女の性情趣味などの賤しくなるのは當然でござい

とです。

△注意力の集中

高尚なる趣味を養ふに就て尙ほ一つ大切なことは、注意力を集中することです。例へば髮容を見ますと、前髮を思ひきり突き出して、それへくど〳〵しいリボンなどを挿して得意で居る人がありますが、これはつまり注意力が足りないのです。今少し注意して自分の風のいやしいことに氣がついたら、決してあんな風は出來まいと思ひます。お庭に花を培養するに就ても、娛樂を求めるに就ても、或は室內を裝飾するに就ても、乃至は服裝を擇ぶに就ても、それ〴〵其のものに注意を凝らし、他の人々の爲すところと比較もし、研究もして、成るべく上品なところへ向いて行くやうにしなければなりません。今日學校にては此の方面の事にはあまり手が屆いて居ませんから、これは各々が日常心掛くべきことでございます。

△外人を驚かした黃菊一株

趣味とか風流とかいふことは、悠々閑々と日を送つて居る閑人のいふことで、生存競爭の烈しい今日の世に處する者にはそんな悠長なことは言つて居られぬといふ人があるかも知れませんが、趣味の高下は其の人の品性に關します。高尚なる品性が趣味を高尚にすると共に、高尚なる趣味も其の人の品性を高尚にしますから、これは餘程重大なことゝ存じます。又趣味を養ふには、何も時や金を費さずともよいのですから、多忙な人であらうが、なからうが、それは一向構ひません。極く忙はしい中に花園に下り立つて花を眺めるといふのも亦一つの趣味でございます。此頃來遊されて居るベーナルスとかいふ佛國の新聞記者は、一日鮫ヶ橋の貧民窟を見舞ふて、露路の側に一株の黃菊が今を盛りと咲いて居るのを見て、こんな貧民の間にも花を愛する者があるかと言つて驚いて居られたさうですが、人は多忙なる中にも、貧苦の中にも高潔なる趣味に生きることが出來るのでございます。

△溺れざる程度の趣味

けれども、白河樂翁公が『風流は刺身のツマに添ふる山葵のやうなもので、なくては物足らぬが、多くては却て不可ない』と申された通り、あれも趣味これも風流とあまりそれに凝りすぎては勿論よくはありません。たゞ例へば多忙の中にも寛る〳〵とした氣風を養ひ、勞るゝ精神を慰めて更に精力を養ふやうな爲めの趣味ならば結構でございます。一寸刺身をつけるにも、魚肉をあまり澤山盛るよりも、肉を輕くしてツマを二三種添へる方が、却て價も安く、見場もよく、味もよろしいやうな譯ですから、趣味も其の適度を考へることが肝腎です。花瓶に花を生けるのでも、はいりきらぬ程澤山挿すよりも、手輕に三枝五枝ぐらゐ恰好よく生けた方が餘程奥床しいのでございます。

△婦人の無味乾燥

婦人は家庭を樂しく高潔にするといふ責任をもつて居りますから、趣味といふことは非常に大切でございます。男子が一日外にあつて、營々として其の職務に働き、勞れ切つて歸つて來ますのに、家に居る婦人が、無趣味では、男子は堪へ切れなからうと思ひます。家庭の總べてのものが無味乾燥で少しも面白くないところから、知らず識らず樂みを外に求むるやうなこともありませうし、其の結果家庭の圓滿を缺いて、遂には子女を養育することも覺束なくなります。故に一家の主婦たる人は勿論、又是れから嫁して妻となり母となるべき人も、清潔の美德を養ひ、趣味を豐かにして、我れも人も共に幸福を享くることに心掛けねばなりません。



私の龜鑑として居る賢母良妻

女子商業學校學監　嘉悦孝子

△七八つからの願ひ

國家の富强は人物養成に俟たねばなりますまい。人物の養成は賢母の手に依るは申すまでもないのです、されば私は此良妻賢母の養成を以て己が御國に對する御奉公の萬分一とも致さんとは、子供心の七ツ八ツのまた祖母の懐に育てられし頃からの願ひであつたのです。所がとう〳〵只今のやうにやはり教育者の御末につらなる身となつたのでござります。已にこれを以ておのれの職と致します以上は、先づ自分が出來ないまでもそのお手本となる覺悟がなくてはならぬでござりますから、片時もそを忘れずにと勤めて居るのです。手習にお手本の必要がある通り、賢母良妻にもお手本が必要で、殊に私どものやうな愚かな者には猶更必要でござりますので、と申ても只一と通りの御交際位ではなか〳〵お手本に致すほどには人様を讀む事が出來ませんので、私は常に私の育てられた私の祖母を以てお手本と致して居るのでござります。

△賢良なる三女性

明治御維新の幕末漸く騷擾ならんとするの際に方りまして、西陲の邊、熊本實學連の中に（この實學連と申すは故横井小楠先生の御門下で、勤王黨の一團でござります）實學連の三婆と申まして六尺の九州男子を恐れ慄かしめた三老夫人があつたさうでござります。それは安場一平氏（今の安場男爵の御養父後藤男爵のお奥樣の御親父で故保和先生）の御母堂久子の君、山田五次郎（金澤十全病院長山田謙次氏の御親父故武甫先生）の御母堂由以子の君と、私どもの祖母勢代子であつたさうでござります、何れも氣象の雄々しい所謂男優りの女丈夫であつたさうでござります。

賢良なる女性は其時其處に應じて其對手を辨へて進守の度を誤らないものであると聞きます通り、このお三人の豪氣なる女丈夫がたも親夫に對しては溫順なる美德を遺憾なく發揮して居られたと同時に其大切なる子供の敎育は確にその處置を得て居たと信じます、この三家はその頃は特にお親しいお交であつたさうでござりますけれども、その頃の事は私などはよくは存じませんが、私は十歲迄この祖母の手に育てられましたので、祖母の處世難の談はよく聞かされました。

△浪々の運命に勝つ

この祖母と申しますのは、熊本藩の御殿醫をつとめその頃熊本で唯一と申されたほどの小兒醫の家の、縣下屈指の富家に生れましたのが、緣ありてか、その頃も矢張只今のやうに貧乏士族の、只今よりもまだ〳〵烈しい貧乏の嘉悅家の浪人生活に嫁いで參つたさうで嫁ぐ時には大した仕度で參つた衣類調度も、參つて見れば、冬の夜寒をふせぐものさへ物足らぬ浪々の侘しさに、一つ減り二つ賣り致すも、それは己の持つて生れし運命と喜んで賣り拂ひ、この一家の支持には、これまで重いものも持つた事のない富豪の深窓に育ちし娘には、たしかに大苦痛であつたらうと思はれますに祖母は少しも惜しいともつらいとも思はず、只一意專心嘉悅家の世に出るを待つように、時來りて祖父は召出され、長崎お留守居、京都お留守居などゝなる事になりまして、漸く貧の苦境は脫する事となつたさうでござりますが、天公まだ〳〵修業の砥石をゆるめたまはず、祖父の氣六ケ敷さ我儘は日に〳〵募るも、祖母の平素は極めて從順溫厚、夫に對して寔に貞淑を極めたものであつたさうで、ことに日々の晩酌時に必らず種々なる小言で二三時間も眞綿で首を締める的の小言の數々ならべたてたる苦が〳〵しきも、祖母には只一と言の反抗がましい事もなく、偏に己が奉仕の足らざるが爲と我身の不肖を嘆ちて、只管に淚ながらに詫びるのみであつたさうで、よし己に十分なる理ありともかゝる折には言ひわけなどはせぬもの、惡い事せぬも

のを惡いとせめるは、せめる人に罪ありて、せめられる人に罪はなし、只小言を云はれる様あらしめた丈けがこゝろに隙があつたと云ふあやまり故と申て居るさうでございます、而もその人の腹をゑぐると申すやうな小言の萬言くりかへして、サア今三味線彈け歌へなど申さるゝと、今迄泣いて居た涙もふきあへず、三味線とりて瑯玕玉をまろばすやうな美音をはり上げ歌ひ出づるが如き、父などはとても及ばぬ徽と感じて居ました。

△確固不拔の勇氣

殊に父を小楠先生の御門に通はせます時には、父はその頃一代の先覺小楠横井平四郎先生の高德に私淑し機もあらば一度其御講話を伺ひたしと願ひましたけれども、先生の學說は當時熊本藩では異端の說と稱せられました、しかし世界の大勢を達觀し、尊王愛國の眞意義を說きたまふその偉大なる御立論は父等の大に聞くを欲します所でもしたが、祖父等は藩の忌憚を恐れ、許さなかつたのを、この三婆のかた／＼は、夙にその高說を伺はせたしとて、我子／＼を苦心慘澹その門に通はせまして、とう／＼小楠門下の實學連が出來るやうになりました時のごとき、とりわけ頑固な私の祖父の目を偸み、藩の忌むにも係はらず、一と度小楠先生の御話を聞きてより、眞に稀世の俊傑で永く師父として敎を受けたしと願ふ父の請を入れて、祖父の小酌を汲みて寢に就くを見すまし、そつと我子を招き、御身今にして小楠先生を知りたるは是實に天の祐けとも云ふべし、今天下の大勢を見るに、小楠先生を措きて御身の師と仰ぐべきなし、されど先生は今藩侯の御覺え目出度からず、故に公然其門に入る事能はずと雖も、御身にして確固不拔如何なる困難と、闘ひても天下有爲の士たらんと願はゞ、向後其門に入りしため我家門にかゝはる如き事萬一あらば其責は此母が負ふべし。氣遣ふる勿れと、遂に其門下生といたしたさうでございますそれより。每夜祖父の眠につきてより父を出し歸り來れば必らず其夜の先生の講義を孤燈の下に聞き

て寢につくを例と致し、祖父をして小楠先生の門下に在ると知らせなかつたのが、一年あまりで漸く先生を世の中で見とめ、父も公然其門下生たる事を祖父の許すやうになりましたさうですが、これは此父子の至誠が天に通じ遂にかやうになつたらうと思ひますにつけても、其間の祖母の勇氣祖母の苦心は確に尋常ではなかつたと思ひます、全く國家の御爲、我子の爲め己を捨て義に勇んだ行だと私はかねて敬慕して居ます。ことによく人樣のお世話をするのが大好で、人の幸福のためには全く己を犧牲にしてもと申す主義でござりましたので、これは私もよく覺えて居りますが、その祖母の里方の大家にて何か一家の風波ある毎に、必らず急使を立てて祖母を迎ふるのです。直に駕か何かで參りつけては其裁判官となるのでしたが、理義明白、公公正々、自分を捨てゝさばくので、後には祖母が行いて坐につくだけで、今迄口角泡を飛ばし顏を赤めて爭ひ居た人達が、未だ一言を出さぬに治まつて仕舞ふと申す始末、實にえらひ德望のあつた人、せめて眞似でもしたいものだと思ふのです。猶ほ一度我家に來る召使や出入の者にほどこせし慈愛も、一二にして止まらず、召使のごときは、必らず此所を里として緣付けると申す樣で、屋敷のまはりに桐の木を年々植る付け、拾五年たつて桐は箪笥となるから、これ等を嫁めいりする箪笥は手植の桐で拵へて遣はすなど、誠に面白い理想でした。

　かやうな氣立でござりましたので、嫁いで大分苦勞致しましたが、なくなる前には、王政復古の御世に父も參事とやら權參事とやらあちらこちらと勤めて歩きましたので、先々安樂な餘命を送つたらしうござります。



活動力のある模範的婦人

（某外交官夫人の追懐）

梅香女塾長　木村貞子

△名聲高き公使夫人

先達て外國から歸つて來られた或る外交官の奧樣に逢ひました。此の人は以前私が敎へて居た頃から出來がよくて、其後公使の夫人としても、よく良人を助けて非常に名聲の高い方ですが、其の奧樣の話に、『先生、世の中の婦人が、夫の機嫌がとられないの、夫と和はないのといふのは、皆な婦人が惡いのでございませう、朋友でさへも親しくなれば離れられないのに、夫と妻との間柄はまた格別です、機嫌のとられない筈はございませんよ』と申されました。私には經驗がないから、よくは分りませんが、まあそれが眞相でございませう。

昔の物語に妻が女の許へ通ふ良人を心持よく送り出して『風吹けば沖つ白浪たつた山夜半にや君が獨りこゆらん』といふ歌をよんで月夜に獨りたゝずんで居たところが、良人は木蔭にてそれを聞き、妻の情に感じて其後はふつゝり通はなくなつたといふ事がありますがあの女の心持で居れば、如何なる良人でも機嫌のとられない筈はございますまい。良人が心を他に移すなどいふことのあるのは、責任は七分迄妻にあるやうに思はれます。

△頭に寸分の隙なし

此の奧樣などは、名高い丈に、良人の爲には流石によく盡されます。外交官の夫人は夜會や園遊會などへ行つて面白をかしく話し合つてゐるやうに見えても、其の間がなか〳〵骨が折れるのですが、特に此の奧樣には頭に寸分の隙もございません。夜會などへ行つても體のよい機密探偵だと言つて何時も笑つて居られるのです。例へば、或る宴會で何大臣と何國の公使とが

何時もより長く話をして居るやうなことがあると、知らぬ顔してにらんで置いて、家へ歸つてちやんと良人に傳へて置かれるのです。すると良人の方ではそれが非常に參考になつて、何か重大な問題が突然湧いてきても、少しもどぎまぎしないで任務を果されるのださうで、たゞ衣裳ばかり着飾つてぼんやりして居る奥様とは餘程違つたところがございます。それゆゑ良人の方でも奥様を深く信用されて、公務上の事でも何でもすつかり打明けて相談なさるし、それに對して奥様が、こゝは最少し足りますまい、かうなさつたら如何でせう、と申されると、その中には又善い思付もあるものですから、さういふ時には、成程と言つて喜んでお直しになるさうですが、すべて人の妻たるものはこれ位の働きがあつてほしいものでございます。

△新聞記者の驚嘆せる事柄

外交社會に立つては、なか／＼華々しい奥様で、宴會の食卓をすつかり蘭の花で取りまいて見せて客を喜ばせるやうなこともなさるので、或時など其國の新聞雜誌など迄がびつくりして、隨分書き立てたさうでございます。蘭の花の一鉢に三十本位づゝあるので食卓を圍むとしますと、一寸した宴會でも其の花丈に六七百圓は要るさうで、あちらでは皇族方の宴會でゞもなければ使はないさうですから、びつくりするのも尤もでせう。ところがそれをなか／＼經濟に行つて居られるのです。聞いて見ますと、あちらでは今日何處かに宴會があるとすれば、次は又何處かでやるにはそれより五六日位間を置いてすることになつてゐるさうで、かうすれば前の宴會に用ゐた品を又次の宴會に用ゐるやうなことなく、總て新しい品になるといふ主意なさうですが、一々其のやうにして居た日には入費がたまりませんから、蘭の花などは、宴會が濟んだら直ぐに花屋を呼んで、花を一々綿で包んでかこはすのださうでございます。すると一鉢三十本の花なら、二十本位は次の宴會に用ゐることができて、大變經濟に上るといふことです。行ひは非常に華美に見えますが、

そこにはなか／＼苦心がございます。

△お前は又化けたのかえ？

帽子などでも、一寸したものでも百圓はかゝるから、一度では捨てないで、やはり二三度は被ると言つて居られます。あの夫人にしてと、名を申上げたらびつくりなさるかも知れませんが、このやうに倹約にしてあの様に立派なお働きが出來たら結構でございませう。着物などでも随分上手に工夫をして着て居られるやうでございます。同じものを幾度か見違へるやうに仕立てかへては着られるものですから、或時も實際新らしいのを作つて着られたのに、良人の公使はそれを見られて、お前は又化けたのかへと言はれたさうで、いゝへこれはほんとうに作つたので、と言つて、ひどく笑つたことがあると申されましたが、働く人の奥様はかうありたいものでございます。又お話に、周圍が周圍だから始終目と耳を働かせて居なければならぬといふことでしたが、右のやうな心掛で、此の用意があつたら、良人は嘸助かることでございませう。

△來客の大なる讃辭

何にでもよく氣のつく人で、公使の夫人として初めてあちらへお立ちの時も、急に思ひ立つて遽か仕込に盆石を習はれました。であちらへ行かれてから、それを打つては室に出して置かれたさうですが、向ふの人は珍らしいものですから、來る人も／＼も非常な賞讃で、その爲に交際上も大に好都合に參つたさうでございます。宴會に客を招いた時などは、食事が濟むと奥様が早速それを取り出して、盆石はかうして打つものでと、客の前で親しく打つて見せられますと、客の大喜びの中につい三十分や五十分は經つてしまひ、其の間主人の公使は、客の機嫌を取る心配もなく頭が休まるといふ風だつたさうですが、これは全く奥様の働きでございます。日本流にいたせば、かゝる場合は出來ても出來ない風をするところですが、奥様は、客を喜ばせ又日本の美術を外國に傳へるからよく之を打つた

と言つて居られました。まことによい思ひつきで、こんな處で遠慮しないのは却て結構でございます。

△智惠は絞れば出づるもの

このやうな奥様ですから、良人の公使は、月給を銀行切符で受取つて來ると、それに裏書して直ぐ奥様に渡してしまはれ、それッきり金があるのか無いのか一向知らないで居る人なさうですが、奥様は、それで貯金も爲し、借金も返し、すべての交際費も支出して行かなければならぬので、却々苦しいさうでございます。けれど外交官といへば大抵給料位では支へられなくて自分の家か妻の里から仕送りして貰ふのが例のやうですが、奥様は決して里へも何處へも難題をかけられません。そして『着物や帽子を絶えず新しいものばかり用ゐて居ては、迚もやりきれないけれども、政府からは妻の手當迄ちやんと給してあるから、上手にやつて行けば必ずやつて行かれるわけだ』と言つて居られます。それはさうあるべき筈でございませう。多くの人はお坊ちやんにされてぼんやりしてお金を使ふから、ついお里へねだらねばならなくなるのでございませうが、それぢや仕方がございません。そして奥様は、『自分はさう苦んで育つたのではないが、自國の地位は飽く迄保たねばならぬから、しみつたれなことは出來ず、自然智惠も絞れば、工夫もこらすやうになる』と言つて居られますが、それが感心でございます。どうか公使の夫人とはいはず、總ての婦人が此のやうにありたいものでございます。



愛兒を失ふて得たる教訓

精華女學校長　勝田孫彌

△小說の如き事實

先年私は家内が我が學校の用向で米國へ參つて居る不在中に、子供を一人亡くしましたが、母親の心中を思ふて、妻が彼地に居る中は素より知らせず、後歸朝して横濱へ着いても、新橋へ着いても、家へ着いても尙ほ秘して置いて、獨り心を痛めたことがあります。

それをいよ〳〵打明けた當時の事などを廻想すると實に人生の悲劇で、自分の事ながら小說のやうな事實だと思つて居ますが、又其の爲に大なる教訓を得ました。

家内は初め桑港に一ケ月間程滯在し、それより紐育に參ると、正金銀行の今西兼次さんや、米人のミセスショーヤ、或は博士の高峰讓吉さんなどが非常に御盡力下さつた爲に、學校の用向はすべて好都合に運び傍ら彼地の女學校、慈善學校、幼稚園、小學校等をずつと廻はつて色々研究もし、此等のことに彼是一年半位を費し、非常な好結果をもたらして、いよ〳〵歸朝することになつて桑港迄參つた時に、こちらに三人子供が居た中の九つになる長男が亡くなつたのです。

△醫師の診斷に驚く

私は學校もやらねばならぬし、歷史の方の仕事もありして、非常に多忙でしたから、家内の不在中子供の世話は專ら家内の母がして居たのですが、子供は三人とも平生頗る壯健であつたのに、家内が向ふへ行つて間もなく三人打揃ふて痲疹に罹りました。で高田耕安さんに診て貰ふと、これは非常に手遅れになつてゐる、ことに長男はどうもむづかしからう、といふ話でした

から、これは困つたことになつた、家内は米國へ行つてゐるし、どうしたらいゝだらう、長男はことに學校の成績なども良かつたのに、殘念なことだ、醫師はいかぬといふから覺悟はするけれども……が、先づ出來る丈け療治はして見やう、それで治らなければ天命だ、とかう思つて色々手を盡すと、此時は幸ひに助かりました。尤も醫師はいかぬと言つたけれども、私には大丈夫癒るといふやうな感はしました。そして家内の方へは、心配すると思つたから、癒つた後で手紙で言つてやりました。

△多忙中の困却

越えて翌年の夏、家内が桑港に歸つて來て居る時に、又三人とも百日咳に罹りました。今度は長男と次男は輕いが、四つになる末の女の子が危いといふことで、此時にも心配しました。家内の母は非常に嘆くし

私は學校と歴史の仕事がある上に、當時加藤高明さんが東京日々新聞をやつて居られて、海軍と教育の方面の仕事を客員として手傳つて呉れとのお頼みがあつたので、其の方の仕事もやらねばならず、忙はしくて目の眩ひさうなところへ子供が大病といふので隨分困りました。が此時も幸ひ百五十日位で皆癒りました。そして其後三人共暫く房州の家内の里へやつて海水浴など行らせて置いたら、大層よくなつて歸りました。

△歸朝間際の災厄

で、家内も近々に歸朝すると言つて來てゐるし、先づ安心だと思つてゐると、十月になつて長男が頭痛がして又少し氣分が惡くなりました。併し大した事もなからうと思つて懇意な人と醫者二人に託して置いたのですが、一週間ばかりして私が新聞社に居るところへ電話がかゝつて、子供が痙攣を起して危篤だといふ知

らせがあつたので、非常に驚きました。それから病院へ入れて色々手を盡しましたが、どうしてもいけなくて、二週間程病院に居てとう／＼亡くなつて了ひました。これは十月の二十二日のことで、家内がまだ桑港を立たない前のことです。そこで之を家内の方へ通知するがよいか何うかと非常に迷ふたから、親戚とも相談したところ、安樂發道さんなども大に心配せられて「それは言つてやらない方がよからう、やがて桑港を發しやうとしてゐるところへそんなことを知らせるのは、長い航海を徒に心配させるばかりだから言つてやるのはよくあるまい」とのことでしたから、とう／＼通知をせずにしまひました。

△横濱埠頭の苦心

さうしてゐる中に、十一月十五日に、横濱へ家内の乘つてゐる船が着くことになりましたから、私は次男の八つの子と末の五つの女の子を連れ、それに學校の教員諸氏や親戚の人々と共に横濱迄行つて待つて居ました。そして船が着いて見ると、航海中はなか／＼の暴風であつたさうだけれども、家内は船には極く強い方だから、非常に壯健で元氣でゐました。で時も遲かつたから其日は横濱で宿ることにしましたが、さて子供の亡くなつたことを此處で家内に告げてよいか何うかと又甚く迷ひました。が、考へて見ると明日は新橋へ知人も澤山迎ひに來て居られやうし、それに嗅いて居られても困ると思ひ、そして親戚とも相談すると、矢張り言はない方がよからうとのことでしたから、此處でも默つて居ることに決めました。

△答へる言葉に窮す

ところが子供は二人しか迎ひに來て居ないから、家内はしきりと其れを聞くのです。で少し病氣で來られ

なかつたといふと、何んな病氣です、早く病院へ入れたらよいでせう、どんな氣分かと頻りと尋ねられるので、其の返答に實に困りました。ナニ、病院へ入れるほどでもないから入れはしないがと言つて見るが、外に何とも答へる言葉がない。やう／＼家に臥て居るときつぱり言つたので、家内もさうかと思つたらしいが私は實に苦痛でした。

△人生の悲劇

翌日、米國から家内が託されて來た婦人で北海道へ行く人があつたから、其の荷物の世話などをして一緒に新橋へ着くと、知人や教員達や生徒などが澤山迎ひに來て居たので、家内は子供の亡くなつたことを知らないから矢張り元氣で居ましたが、私は何うして之を告げたらよいかと、そればかりに心を痛めて居ました。で北海道へ行く婦人の世話をして新橋を立たせ、私共は俥で神田の家へ歸つたが、家内を平生の居間へやらずに二階の客間へ通しました。親戚や兄弟なぞは、家内の嘆く事を思ふてはとても側に居られないと言つて新橋から外づして皆青山墓地の子供の墓へ參りましたで家へ歸つてから、遠方から歸つて來たのに子供を傍へ寄せないやうにし、二階へ通して椅子に休ませると家内はもう不思議がつて來ました。「義孝（長男）は何うしました。何處に臥て居ますか」。と言ひながら、自分でどん／＼下へ下りました。「何の部屋に居ますか」と尋ねるけれども、無論何の部屋にも居やう筈はありません。

△歸朝して非常な落膽

そこで私は決心して家内に言ひました。「言つて聞かせることがあるから、此處へお坐りなさい、お前が子供を家に置いて米國へ行つたといふのは、全く教育の

爲だから、よもや取りまどふ樣なことはなからうが・・・・」と言ひも果てぬにすつかり顔色が變つて來ました。で先月初から非常に手を盡したけれどもいけなかつた事、電報で通知しようと思つたけれども、死んで了つたものは仕方がないから歸朝を待つて居た事等を話すと、船には强かつたけれども、之れには非常に落膽して、やゝもすると精神の變るやうな擧動もありました。

△世の中の爲と思へ

「しかし人は戰爭で死んだ者も少くない、其の後に引取手もなく取殘された子供も定めし多いであらう。人生の悲劇は免れぬことだから、それを思ふて諦めなければならぬ。又お前は何故早く告げなかつたかといふけれども、私の身になつても考へなければならぬ。横濱、新橋から子供を亡ふたことを告げないで家迄忍んで來たのは何れ程苦痛であつたか知れない。それに社會の爲めに悲劇のあることも考へなければならぬ。此事が世に盡す爲に起つたものとすれば又諦められるではないか」と色々說いて慰めたけれども、どうも氣が落着かない。

△人間の至情

それから一時房州の里へ遣つて見ましたが、此處へは前に亡くなつた子供も行つて可愛がられて居たから坊つちやんはこんな風だつた、かういふ事もしたといふやうな話がよく出るので、思ひ出して却てよくない。それでこれは手放して置いてはいかぬ、矢張り自分の側に置くがよいと思つて又當地へ呼戻しました。それで自分でも「何も彼もすつかり承知はしてゐる、又知らせなかつたのも解つてゐる、すべて十分解つてゐるが、たゞ成程と思ひ切ることが出來ない」と言つて居ましたが、これが人間の情でせう。そして人が慰めて

呉れると、厭な思ひをしたが、たゞ同じく子供を失つた人とか、其他不幸に遇つた人と話すと大變氣持がよいと言ひました。それから氣を更へる必要上もあり、神田の家では惣領を是迄三人も亡くしたので厭にもなり、特に學校をやつて行く上の便宜といふ事も考へて淀橋へ引越したのですが、それからは段々快くなり、其中に又子供が生れたので、すつかり氣分が回復して快よく働くやうになりました。家内が幼稚園を初めましたのも、自分が愛兒を失つた事が動機になつてゐるのです。當時人は、家内が新橋で、自分の子供を亡くしたことを知らずに平氣で出迎ひの人々に應接して居たといふことは、社會の爲にもよく、又自身の將來の爲にもよいと言つて慰めて呉れましたが、此の事が些かにでも教育の爲めであつたのであり、又將來其の爲に働く力を與ふるとすれば、又自ら慰むることができます。

嚴格にして善き子女を作る家庭

精華學校長　寺田勇吉

我れ〳〵日本人の家庭改良に就ては、獨逸の家庭に學ぶべき點が澤山にあらうと思ふ。素より日本と獨逸とは種々事情を異にしてゐるから、必ずしも獨逸の通りに我國にても行へといふのではないが、たゞ一寸面白いと感じたところを述べて見やう。

△愛することを延期せよ

中流以上の家庭に於ては、子供が十七八歳に至る迄の教育に就ては、母親が全部の責任を負ふので、頗る細密な注意を拂つてゐる。例へば子供が學校の學科を規則正しく履修してゆくに少しも防害を加へさせないそして學校の先生の命ずる通り宿題をやり又は復習してゆくか何うか、又其の成績がいゝか惡いかといふ事までも母親が嚴重に監督してゆき、決して子供を他の

用事に使役するといふやうなことはない。

就中母の最も注意してゐることは、子供を愛し過ぎないといふことである。そして子供を敎育することに就て「愛することを延期せよ」といふ言葉があるが、これは餘程意味のあることゝ思ふ。我國などでは、少し良い家庭の親達になると、愛に溺れて兎角子供を我儘に育て、腸胃を害するやうなものでも何でも無暗に子供に與へて、遂に身體を弱くするといふやうな弊が頗る多いのであるが、之をよく矯めなければ、立派な人間は到底出來ないと思ふ

△全權を有する家庭敎師

そして子供は何事にても母親の許可を得なければ手を出すことが出來ない。遊びに出るのにも、物を貰ふのにも、すべて母親の指揮に從ふてゐる。若し子供の行儀が惡いとか、或は成績がよくないとかいへば、それは主として母親の不名譽母親の耻辱である。そして自分の子供の爲に學校に出て行くのは、父親でなくして必ず母親である。學校の卒業式の如きも、出席者の大多數は母親で、父親が式場に列するやうなことは滅多にない。又子供が母親に謝せらるゝ時は、父親が子供に代つて母に謝罪して將來を戒めるといふことも隨分ある話である。若し母親が家事に多忙で、澤山の子供を躾ける暇がなければ、敎員免許證を有する婦人の家庭敎師を招聘して子供の躾方一切を任することになつてゐるが、此の敎師には母親の全權を委ねてあつて、我國に於て家庭敎師を雇人の如く扱ふやうなことは決してない。從つて敎師が子供を罰しても、母は之に對して少しも苦情を言はない。

△リボンに現はるゝ生活

生活は總て質素で、母は子供を決して芝居や寄席なぞへはやらない。子供の衣服なぞも、如何に金滿家の子供でも親より立派な着物を着ることはない。女生徒のリボンなぞも、通常は黑色のものを用ゐて、日本の女生徒の如くに鮮やかな大きなリボンを用ゐる者は見られない。食事の如きも、朝はコーヒーとパン、晝はスープに煖き肉、それに野菜ぐらゐ、午後三時頃に茶

及び菓子、夕飯にはパンに冷肉位の極めてあつさりとしたものである。其の料理の仕方もなかく、質素なもので砂糖などは餘り用ゐない。國内に產する砂糖は少くないが、これは多く外國に輸出することになつてゐる。そして鹽ばかり多く用ゐるから、巴里邊から伯林へ來ると其の料理の鹽辛いのには驚くのである。

△規律と時間の利用

家庭にはよく規律が立つて居て、子供の仕事なぞにもちやんと秩序がある。即ち朝起きの時間、食事の時間、學科準備の時間、散歩の時間等が一定して居て、母が之を勵行して行く。我れくが獨逸の家庭に入ると、當分の間はそんなわけで非常に窮屈であるが、少し慣れるときまりがよくて、まことに愉快に感ずる。集會などがあつても、一分でも遲れる人はない。そして一般に遊ぶ時には遊ぶが、仕事する時にはよく仕事をする。而かも時間は却々よく利用してある。例へば汽車なぞに乘つて見ても、一人でも本を持たずに旅行してゐる者はない。

△女一人前の教育

道德は宗教の力に依るといふが、それは表面の話で、實際子供の道德上の基礎は家庭で培養されるのである獨逸人は一體に義務の觀念が强く、秩序を貴び、法を守るといふ美風があるが、之れも家庭教育の賜物である。母は前にも言つた通り子供に學科の準備をなさしむる上に、長上に服從せしめ、起居の規律を嚴重に守らしめ、苟くも命令とある以上は如何なることでも之を實行せしめることに注意し、同時に勤勉精勵の德を養ふてゆくのである。

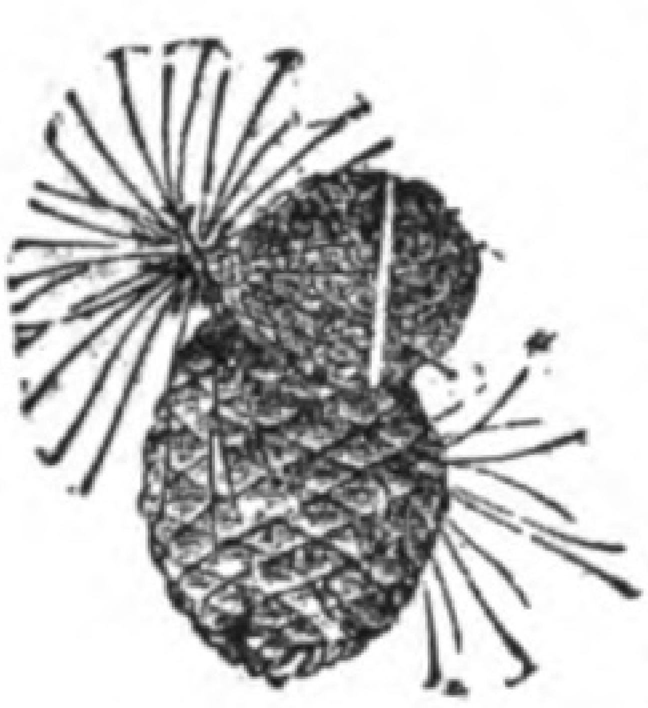
男女とも少しく大きくなると、必ず舞踏をやらせるが、此の風なぞも一寸面白いと思ふ。日本では舞踏には種々の弊害があつたから、近來はあまりやらぬが、あちらでは舞踏は禮儀作法を覺え、姿勢を正しくするといふので、非常に肝要なことになつて居る。女の子は滿十八歲迄は決して一人で夜間外出することを許さぬ。出づる時には必ず母か附添人が同行する。從つて妙齡女子の品行は極めて正しくいつてゐる。女子の學

校教育は通常高等女學校を卒業させる位に止め、將來主婦となるに必要なることは母が家庭に於て家事の手傳をさせながら自分の家で練習させる。體育の事も又主として家庭で力めてゐる。例へば衣服などは、獨逸は寒い處であるけれども、子供には成るべく薄着をさせて皮膚を强健にさせてゐるから、學校に於ける體操時間は比較的少ないに拘らず强壯な者が多いやうである。

△勤儉の美風

元來、獨逸は氣候が寒いのみならず、土地も惡るい。然るに今日の如く富んでゐるのは、右の如く家庭の注意が屆いて人間が强壯であるのと、今一つは一般に勤儉であるからである。節儉と貯蓄を重んじて、少しでも貯蓄をするといふことが、獨逸の家事經濟の原則で、父母が之を實行して子供に模範を示して居る。從つて子供も無暗に金を費さぬのみならず、玩具迄も大切にしてそれが、損ずれば修繕して用ゐるといふ風である。述ぶれば尙ほ澤山あるが、兎に角學校の教育以外に、家庭教育に非常に重きを置いてゐるのである。目下自分が九段に精華學校を起して小學教育に從事してゐるのも、一つにはこゝに目的があるので、入學志願者は必ず其の家庭の狀况を取調べて、其の母にして相當な人であり、從つて家庭が善良であると認める兒童でなければ、入學せしめないことにしてゐるが、世の父兄達も十分こゝに注意してほしいものである。

少しく長く獨逸の家庭に寄寓して居つて見ると、教育の進步の根柢が實に家庭にあるといふことが分る。獨逸の學校教育が今日の如く發達し、國も富み兵も强いといふ其の根本は、全く學校教育に對して家庭教育が力を合せてゐるのに因るので、如何に學校の教師のみが盡力しても、家庭の教育にして不備であれば到底學校教育の發展は期することは出來ないのである。



將來の光明ある生活

（婦人の日常生活に見る種々の弊害）

慶應義塾々長　鎌田榮吉

△女學生と家庭の疎遠

此頃若き婦人特に女學生などが、家庭の情味と遊かりつゝあるといふ事は、甚だ憂ふべき現象でないかと思ふ。地方から出て來て學校の寄宿舍でのみ生活してゐる者などは、多くは家庭のしんみりとした情愛を忘れてしまつて、其の爲に色々弊害を生んでゐるやうである。我が家に居れば、温順な善い令孃であるべき筈のものが、學問する爲に家庭を離れた結果、我儘な仕方のない娘となつて了つたといふ例はいくらもある。又東京に家庭がある者でも、學校の時間が長いから、やはり家庭と離れて來てゐる。即ちいはゞ朝に星を戴いて家を出で、夕に又星を戴いて歸るといふ有樣で、終日學校で暮してゐるから、自分の家庭から通學して居りながら、自分の父母は毎日何をしてゐるかを知らぬ者がある。夜の家庭は知つて居ても、晝の家庭を知らない。晝の家庭を知らないで、家庭の趣味、家庭の眞の意味が分らう筈がない。そして段々と心が荒んでいつて、それが身をあやまる基ともなる。たまに日曜日などに一日家に居ることがあつても、此日は皆が休みだから、一緒に樂しく遊ぶのが普通である。さすれば家に居る時は何時もおち着いて居ないわけである。そして學校へ行つても毎日騷いで居るとすれば、勢ひ氣質がふは〱して來る。或はそれが普通だと思ふ者もあるであらう。これでは女學生自身の將來の爲にならないばかりでなく、やがて嫁入りすれば、貰つた先でも困るわけである。

△家庭を思ふ情

之れに就て私は近頃高等教育會議でも意見を述べたのである。彼の實科高等女學校といふものを設けたの

は、つまり家庭に適する婦人を造るといふ主旨であるが、其の科目を見ると、裁縫が大部分を占めて、一週に十六時間かを割り當てゝある。婦人に裁縫は誠に結構であるが、斯る種類のものは、或る程度迄は學校の時間を減じて、家へ持つて歸つて行らせ、翌日學校で成績を見るといふやうにしたら何うであらうか。此の樣にして生徒が家に居る時間を今少しく長くしたら、右の弊害も幾らか和らぐであらう。學生と家庭とを密接せしめて、父母を慕ひ、家庭を思ふ情を深からしめ、自分の境遇を思はしめるといふことは、やがて心を眞摯に導き、克己心を養ひ、凡ての誘惑に打勝たしめて、身の安全を保ち得ることになる。つまり今の學校主義を改めて家庭の薫陶にも十分重きを置きたいと思ふのである。

△寄宿舍と下宿生活

故に、女子は成るべく寄宿舍などには入れたくはない。寄宿舍生活は温かい家庭的の情愛をなくするのみならず、何うしても自分勝手な事が行はれ易く、自然自分の境遇を忘れ、輕薄で同情心にも乏しい酷な人間にして了ふから、出來得る限り學校へは家庭より通ふやうに致したい。特に女子が獨りで市中に下宿をするなどは以ての外の話である。元來私は女學生の品行問題に就ては、多くの新聞紙雜誌等に見るやうに、決して悲觀はして居らぬ。けれども、婦人が獨り居て家庭の情愛が伴はぬとすれば、多くの墮落の機會を與へることは明かである。此の樣な危險な處に身を置いて迄も學問しなければならぬことはない。書を讀むばかりが學問ではない。學問するのは人となるのが目的である。美はしい人格を破つて了つて學問も何もあつたものではない。

△我家へは暫々手紙を出せ

けれども、人は各々事情が異つてゐるし、又家庭の所在等の關係から、自然寄宿舍へ入らねばならぬことがある。此の場合に於ても心掛け一つで家庭と親しむ

ことが出來ぬことはない。それには休日每に我家を見舞ふて、一日を家庭で過すことにつとむるのもよい。又餘程家が遠方の者は、數々家へ手紙を出すこともよい。機會のある每に、思ひ出したたび〳〵に成るべく多く通信するがよい。手紙を書くことを非常に億劫に思ふ者が多いけれども、何もむづかしい事を書くには及ばぬ。何か大した事を書かうと思へばこそ、つひ出すことが出來なくなり、從つて家庭と疎隔するのであるが、日常ありふれた事でも何でも構はぬ、其の日其の日の出來事、見た事、聞いた事をちよい〳〵書いて送るとすれば、親達の方でも娘の近狀がわかり、それに對して親達から手紙が來るとすれば、娘の方でも家庭の樣子がわかりして、些々たる事でも、雙方に一種溫かい情を起させるのである。例へば、今日はお天氣が好かつたから友達とこれ〳〵の處へ遊びに行つてこんな物を見て來たといふことでもよい。又今日は雨がじめ〳〵降つて何となく淋しかつたといふことでもよい。思ひ立つたら何でもちよい〳〵書いて送るといふことは、たとひそれが何でもないことにせよ、常に心は常に家庭に通ふわけである。

△希代な言葉

次に婦人の修養上の事に就ても少しく考へて見たい人はよく良妻賢母主義といふ事をいふが、之れは甚だをかしな言葉でないかと思ふ。若し之を良き妻、賢き母を造る主義といふ意味とすれば、餘りにそれは分り切つた事で、何も主義などいふものを立つる必要もなく、餘地もない。女學校は皆な良妻賢母を造るを目的としてゐる。又それでなければならない筈である。未だ嘗て非良妻非賢母主義の教育のあることを聞いた事がない。然るに、茲に、良妻賢母主義があるとはをかしなわけである。女子教育のみならず、男子の教育に於ても、やはり良夫賢父――良き夫賢き父を造ることを目的としてゐるが、これには良夫賢父主義がなくして、女子教育にのみこんな言葉があるといふは希代な話である。

△誤解され易き良妻賢母

けれども、良妻賢母主義といふ言葉を、女子は良き妻賢き母とならねばならぬ。それには直接家事を執るに必要なものだけを修むればよい、高尚な學問なぞはしなくともよろしい、算數も日々の小遣が計算出來ればよい、文字も帳簿が記けられて一寸端書位が書かれゝばよいといふ主義の意味とすれば、非常な誤説と言はねばならぬ。女子だから高尚な學問をしなくてもよいといふ事は決してない。家を治むるといふことは、非常な智識を要するもので、それが皆な學問に依らねば得られないのである。物理化學も必要であらう。數學も勿論要る。美術上の心得もあつてよい。又文學もよろしからう。憲法や經濟學も心得て居ると大に爲になる。其他男子のやつてゐる專門の學術でも、女子に出來るものならば學んで惡いといふことはない。否夫の職業に依つては、是非修めねばならぬこともある。それに女子も母となつて學問上の事が分らねば、第一子供をよく育てゝゆくことが出來ない。子供の學問は學校に託するといふこともあるが、學校ばかりで子供は育つものではないから、是非とも女子に修養が要るのである。孔子も「働いて餘力あらば以て文を學べ」と言つてゐる。其の人の境遇等によつて程度は樣々あらうけれども、兎に角學問することは大切である。

△世間の凡ゆる方面を見よ

それから特に注意を要することは、婦人も世間の事情によく通じなければならないといふことである。夫は外に働き妻は內を治むるが職分だといふから、往々誤解を招くけれども、それはたゞ職分が異つてゐて妻は內を治むべきものだといふ迄のことで、外部の事を知らなくてもよいといふのではない。やはり世間の凡ゆる方面の事を見て、其の事情等にも十分通じて居らねばならぬ。內助者としても無論必要であるが、此れも亦子供を養育する上に最も必要である。子供は成長したら世間に出でゝ働らくべき運命をもつてゐるのに

それを育てる母親が世間を知らないでは、子供は甚だ氣の毒なもので、世間へ出ても恐らく十分な働らきは出來まいと思ふ。故に家事を治むる暇々には、外へ出掛けて行つて色々觀察するのも婦人のつとめの一つと言つてよい。——と言つても母親が自分の子供を人に託してまでも外を出歩くのがよいといふのではない。子供は働くまでも自分の手で育てなければならぬ。然らざれば親子間の愛情といふものが起つて來ない。從つて子供の方にも孝心といふものが起らない。其の爲に子供の將來に於て非常な惡しい結果を示す。つまりこれは比較問題で、如何に世情に通じなければならぬと言つても、斯かる重大な事を外所にして迄も外に出掛けて見聞せよといふのではない。凡て家事は一切爲し遂げ子供も自分の手で育てゝ其の上に尙ほ餘暇があれば、世間へも出て世情も觀察せよといふのである。

△時勢に適せぬ習慣

尙ほ一つ平生から考へて居ることであるが、今日の交際法に就ても少しく議すべきことがあらうと思ふ。交際も極く質實な家庭的の交際は極めて有益な事で、又しなければならないのであるが、之れに不規則に食事をする風の行はれるのは先づ改むべき一つであらうと思ふ。今日の有様を見れば、少し親しい客があると、先づお茶を出す。これはよろしいとして置くが、それからお菓子を出す。次に食事などをも出すといふ風になつてゐるが、これは困つた風習で、第一衞生上にも宜しくない。又客の方では、訪問したのを何か食べたくて來たものと思はれはしないかといふ風にも考へられて、交際の圓滑を缺ぐことにもなる。西洋の風を見ると、御馳走する時は、豫め、何日の何時に斯々のわけで晝飯或は晩餐を供するから來て呉れと案内狀を出すことになつて居て、それ以外には決してだらしなく食事をするといふことはないから、こゝは誠によくいつて居るが、日本では此の規律なき風習の爲に、客も主人も雙方で迷惑をしてゐる。主人側で不時の來客に食事拵へをして出すといふことは、一通りの手數ではない。客の居るのが長くなると、一般の風とすれば、

食事時が近づけば、やはり御膳の用意もしなければならぬ。それが必ず食事をすると分つて居ればまだしもだが、さて食事をするのかしらん、しないのか知らん、まだ居るのか知らん歸へるのか知らんと迷ふ其の心遣ひといふものは一方でない。段々世がすゝみ、人は身も心も益々多忙になつて行くから、斯かる風習は斷然止めたいものである。食事をしなくても、客の目を喜ばせる物を置き、話題を注意すれば、樂しく語り合ふことが出來ないといふことはない。そして訪問の時刻なども、成るべく人の都合のよい時を選び、其時間も、特別の事情のない限りはまづ十分か二十分位で切り上げ、短く度々訪ねる方がよい。食事をして半日も一日もゆつくり坐り込んで話して居るのでは、さう度々訪ねるわけにもゆかず、自然間が疎くもなるわけである。

次に贈物の習慣が又甚だ拙にいつてゐる。人から何か品物を貰ふと、それに對して必ず返しをしなければならぬといふのが、今日一般の風だから、其のする所が凡て形式に流れて、精神が籠つて居らぬ。鰹魚節とか反物とかいふ一向意味のない物を遣つたり取つたりしてゐるのでは、贈物の主旨は全く認めることが出來ない。これなども、例へば、これは自分の庭に出來た果物で今年は非常によく實つたからお上げするとか、國からこんな物を送つて來たが當地では珍しいと思ふからお分けするとかいふのならば、貰つた者もどんなに嬉れしいか知れない。さうでなければ何か記念になるやうな品物がよい。例へば誕生日とかいふ時に、友達が申合せて何か永く保存の出來る品物を贈るとすれば、貰つた方ではそれを見る毎に友の友情を思ふて非常に親しみを増すことになる。ことに物を貰つたら必ず返しをしなければならぬやうに人は思つて居るかも知れぬが、決してさういふ心配はいらぬ。貰つたら貰つた儘でよい。其の厚意を難有く戴いて置けばよろしい。そして何か機會のあつた時に十分意味あり精神の籠つた品を贈ればよい。それを必ず返しをしなければならぬといふと、少し交際が廣くなると其の入費が容易でないから、つい人と交際も出來なくなる。これらも今後皆が協力して改むべき習慣であらうと思ふ。

善良なる妻の模範

野末庵子

ふつゝかな我身をも顧ず、とやかくと人様のお噂など申上げんはおこがましけれど、是れでも記さばいくらか皆様の御参考にならうかと、日頃御交際を願う奥様方の御平常の一端を左に御紹介致します。何卒お許し遊ばせ。

△趣味ある婦人

世間にはよく「私共の様に毎日の生活に追れて居るものは、なかなか趣味なんかつて洒落てる間は有りません」と仰る方が有りますが、誠に解せないことだと思ひます。趣味とは何もお金の掛る仕事でも無ければ大した時間を費やすわけでもなし、富める人は趣味を感じ、貧乏人は感ずる事は出来ぬ、と云ふ譯は有りません。

或る奥様は餘り豊でない世帯を經營されながら、日常起る總ての出來事に深き趣味をもつてあたらるゝので、私共がわづらはしい厭だと思ふ仕事までみな樂しさうにいそいそとなされてしまひます。

歐米風のよく働きよく遊ぶと云ふ主義で、常はまつくろになつて車輪の様にどんどん働くかはりに、一週一度の日曜には朝から家内お三人でお手製のお辨當持ちて○○公園などへ遠足なさいます。

鳥打帽に紺絣の旦那様、美しう結び上げた丸髷に召物は黒繻子の衿のかゝつたはでな銘仙、と云ふ小粋氣なお姿の奥様は、蝶々の様に純白のエプロンかけた可愛い可愛い孃様のお手を引かれ、此頃なら紅葉の枝なんか携げて郊外散歩からお歸りの姿などは、ほんとうに畫にして「理想のホーム」なんかつて女學世界にでも

出したい樣ですよ。

文學が大そうお好で夜は新聞雜誌其外、種々の文學書類の閱覽に餘念が有りません。ですから自然社會の出來事も知り新智識を收得すると云ふ工合で、旦那樣のお話相手にもなれるところから、和氣も自づから其の間に湧き出づるので御座います。

新刊の小說などは大抵讀んで居られます。先日も、

「寄生木御覽になりまして、よう御ざいますのね、私なんでもあゝいふ歷史風に書いたものが好よ、ほんとに良平さんはえらい處に氣がついたものですね、墓木朽つべし名滅せしむべからず、全くですわ私達もせめてあの十分一でも我身の歷史を世に書殘して死にたいぢや有りませんか。」

なんて仰いました。筆もなか〳〵よくたつて、時折隨筆などものして雜誌へ投書なさいます。

旦那樣は書生上りの放縱な性質で家の事には一切無頓着ですから、何から何まで奥樣のお手一つ、今年の夏も垣根の破れを御自分でお繕ひになり、色々の朝顏を咲かせて、

「ね、いゝでせう、是が貴女新しい光る樣な垣で御覽なさい、風情も何も有りやしませんけど戀うくづれかかつたこの優しくからんだ所に趣が有るんですは、破れ垣に朝顏つてね、」

と嬉しがつていらしつた。井戸側の猫の額程の空地へ苺を植ゑたり、便所のわきへ菊を作つたり、障子の破れ一つ繕ふにも梅の花などを切り、柱掛なんかお手製のに一寸ばらの押繪でもすると云ふ樣に、其澁るゝ趣味と器用の手をもつて、淋しい家の内外を飾られるので遊びに上る者も氣持よく、何處となく詩的なお住居で御ざいます、旦那樣を初め御自分嬢樣の召物やお手遊りの道具などさう澤山もなく又高價な品でも有りませんが、みんな風流と高尚とを兼ねたものばかり。

「私ね、どんな立派なものでも自分の趣味に合はないものは用う氣になれませんの」つて、あの萩香さんのやうな事いつていらつしやるほんとに貧乏世帯をやり繰りしてる細君には珍らしい方です、第一旦那樣がお仕合で御座いますね、ですからもうお家庭をこよなき樂園とせられて、ついぞこゝの御主人にかぎつて悪い茶屋遊びの噂など耳にした事が有りません。



△模範的整理家

筒袖姿甲斐々々しく下女促してせつせとお働きになる奥樣ですから、何時上りましても綺麗にお掃除が行屆いて、板の間でも戸棚でもぴか〱と光る樣に拭き込んで有りまして見るから氣が晴々いたします、奥樣のお氣質も又青竹を割つた樣にさつぱりして居て、少さい事に胸を痛めたり、物事に齷齪なさらないで、

何でも面白く愉快に解決をつけられる方です。人望が鍾にお上手で、お話に上つても愛想よくいつもひとを樂しませておかへしになる。

芝居などは大嫌ひ、たまに誘ふ人が有れば「私の樣に子供多ではとても落着て見物も出來ませんから、どうぞ貴女よく見ていらしつてお話下さい」とか何とか體よく斷わつて決してこう〳〵と出歩きなさらず、專心に家事を取り給へば不時にどんな大事、たとへば火事などが有りましても、荷物なんかに困つてあはてふためく樣な事もなく、家具の入れ場所はちやんと定めて何時ひとに押入や戸棚をあけられても恥しからぬ樣仕末して置かれます。

先日も私が上りましたら、部屋一つぱいに色々の小布を廣げて女中相手に片づけていらつしやいましたから

「奥樣何をなさるんです」

とお聞きしたら

「ホヽ、小布の部類別を仕やうと思ひましてね、何もかもごつちやにして置いては、一寸衣服の共布を搜すにも却々時間をつぶしますから、こう一ひろひ分けて手製の疊紙に包んで上へ品名をしるして置かうと思ふんです、さらさ、白もめん、かすり、と云ふ樣にね、そしておけば何んな小さな切端でも無くす心配もなく又、私でなくつても下女にいくつもしまつが出來て餘程便利だと思ひます、貴女もこうして御覽なさいよ」

と親切に敎へて下さいました。食器なども此通り、順よく戸棚へ並べて置くので一時に多勢のお客があつても一人の下女で少しもまごつく事はないさうです。

又極儉約家で毎月に御主人の月給のうちいくらかは貯金とし、日々の經費はちやんと豫算を立てゝ規則正しくやられるので、よく官員方に有りがちの米屋肴屋の拂ひに差つかへるなんて事はゆめにも有りません。

「如何しても定まつた月給取りの身分では斯う云ふ工風にした方が宜しいと思ひまして」と申されなるべく生活を質素に／＼と心掛て居られます。と云つて決して吝いんちや有りません、出すべき處へは惜氣なくずん／＼出費なさいますし客饗應などもけち／＼なさいません度々上る私共にも其つどお手製のカステラや餅つばでお茶を出れますし時には野菜を美味く調理して食事を進めらるゝ事も有ります。

奥様の主義は大抵右の通りで一から十まで行屆きま



す。是では餘りに消極一點張で御主人がさぞ氣づまりだらうと思召すか知れませんが、否々どうしてそんな事に抜目のある方ではない常々四人のお子達につぎのあたつた足袋や手造の鼻緒の下駄をはかせる代りに、御主人や子供さんの晴着は人に負けぬ立派なものを着せます、人參や大根の尾まで粗末にしない代りに時々氣の利いた西洋料理などで家内を樂しませて居られますし二ヶ月に一度ぐらゐはみなさんで山遊びなどに出掛る

と云ふようで決して家庭が無趣味殺風景に流れるなど云ふ事は有りませんですから御良人もこの忠實なる奥樣の心掛に感謝して、毎日樂しく活動していらつしやいます。なほ感心な事はあれ程家事に忙はしい中で夜は大抵新聞雜誌に親しんで、ひたすら時勢におくれぬやうと勉めらるゝ事です。まあこの奥樣などは一家の主婦として申分のない方だらうと思ひます。

△常識に乏しき人

常識と申す事は、英語ではコンモンセンスとか云ひまして、是はむづかしひ學理的な、さう高尚な智識ではなく、極めて卑近な日常お隣のおかみさんや、向うの娘さんとのおつきあひの場合に於て、尤も必要な智識ださうで御ざいます。

世には奇人とか申して、何でも風變りな突飛な言行所謂常識にはづれた行爲を敢てして、得意がつて居る人間がありますが、これは醫學上から見ますれば一種の狂人なんで、餘り尊重すべき價値のある人ではないさうで御座います。ですからこんな世に所謂ひねくれ者は別として、普通の人で常識を無視するやうなものは誠に厄介きはまる動物だと思ひます。

手無の前で頻りに手の話をしたり、はげ頭とらまへて髪の說法やつたり、暑中に湯豆腐出したり、餅菓子とおさつと一緒に進めたりするのも決して常識ある人のなさる事では有るまいと存じます。今御紹介しやうとする奥樣は立派な女學校を卒業なされ、御敎育に於ては申分なく、お氣立も優しう氣輕なよい方ですが惜しい事には常識が缺けていらつしやるんです、先日一寸うかゞひましたら、にこやかな御もてなしでお晝飯まで御馳走下すつたはよろしう御ざいますが、頂いてる間奥樣つきゝりで、色々のお話、殆ど延べつ引つ切り暮なしと云ふ形ですから、御飯中誠にお返事に困つ

た様な譯、硬い貝が蟲齒へ引掛つてもぐ〳〵させてるのに

「まあ貴女のブローチの高尚です事、失禮ですが何處でお求めになつて？」

とのぞき込みなさるんですもの、默つて居るわけにもゆかず口の仕末にや困ると云ふ調子でます〳〵もぐもぐ目は白黑、誠にどうも見つともないお恥かしい面相をいたしました。自分勝手な話下すがこんな時には一寸氣を利かせて坐をはずすか、せめて横をでも向いて下さつたらこんなきまり惡い思ひをせずとも濟みますのに。それからいつでしたかも色々なお話の末



「貴女、宅の下女の様なおしやれは有りませんよ、如何でせうまあ、あんな顔へ白粉なんか塗つて、ホヽヽ、姿を見りやまるで豚の様ですにね！」

幸か不幸は私は随分の太肉なのに、今日は少し白い物も施して居ましたので、何だか自分の事を笑はれる様に氣か引けま

して穴へでも這入り度い位赤面しました、早々においとませうと立ちかゝる袖をひかへて、「まあ宜しいぢや有りませんか、もつとお遊びなさいな、オヤまあお襦袢の袖のいゝ柄です事」つて、口もとばかりへ新らしい布をかぶせた哀れはかない袖をグイと引張り出して見て居なさるんですもの、私ほんとに顔から火が出さうで泣き度う御ざいました。

それはもう新らしい教育をうけて萬事心得ていらつしやるんですからお若くこそあれ何をなされても水際立つて立派なものでいらつしやいますけれど、前申しました様に餘り常識に富んでいられないため折角の令夫人の價値が零になつて終ひます、誠に惜しい事に存じます。

で、常識と云ふ事は一々學校で先生から教はれるもので有りませんから、是は私共常に氣をつけて世態人情を觀察し、些細の出來事にもよく其時と場合動機と原因とを考へて、判斷を誤らぬ様にするのが宜しからうと存じます。

△度量と親切のある婦人

學校出の若奥様がとかくお姑様のがはに評判の宜しくないのは、畢竟老人に對する親切と度量が缺けて居るからでは無いかと存じます、天保時代の耄が何を知るものか、すつ込んで我々のする事を見て居るがよいなどゝまさか口へ出して仰つしやりもしまいけれど、一にも學校、二にも新智識と年寄に意味の解らない事をやたらに振りまはして何もかも自分の考へ通りに行らうとなさるから、老人方の感情を害し「うちの嫁はこの親をないがしろにする」とか何とか云ふ譯であの新舊思想の衝突や親子別居論などが持ち上るんぢやありますまいか、だが考へて見ると馬鹿らしい話でせう

いくら嫁さんが威張つたつて、お年寄は長上、理論には勝つても勢力には負けねばなりません、どうせ負けに定つたものを爭うは愚です、いづれにしたつて目的さへ達し得らるればよいのですから、初めのうちは、一歩も二歩もゆづつて、何もかもお年寄の命令通りにやつて居て、長い月日のうちに、時にあたり、折にふれて、御自分の考へを生意氣らし



くなくのべ、又お年寄方のわからないのは舊弊の世に生れて文明の空氣を吸はれないためだから、誠にお氣の毒であると、深く同情をよせて、冷笑の語氣を交へずに丁寧親切に導いて上げたならどんな頑固なお方だつて、遂には其誠意に感じて嫁さんの意見を心よく用ひられる樣になるで

せう、さうすれば何の苦もなく笑顔のうちに紛紜を解決して最後の勝利は得られるぢや有りませんか。

某奥樣はよくこの邊の呼吸をのみ込んでいらしつて些ともハイカラ風をなさらずに、何でも姑樣の仰せ通り言葉や態度まで昔風にしていらしつたものですからもう姑樣の大氣に入り、此上なき御親友です。

いつかも姑樣の御病氣の時、不動樣へお百度まゐりまでされたので、姑樣は泣いて喜ばれ、近處の者もみなお若いのに感心なとほんとに感心してしまひました。

こんな風にすつかり舊幕時代の婦人に扮濟して姑樣の心を迎へて置いて、氣長に新時代の思想や趣味などをお胸に落ちる樣、お話なさるものですから、近頃では大分開けて奥樣が家にばかりいらつしやると

「お前じつと引込んで居ちや、世間がわからないで困るぢやないか、たまにや婦人會ぐらゐ出て御らんよ」

とお進めなさる樣になりました。他人にむかつても

「ほんとに宅の嫁はよく出來た女ですよ、彼女の來てから私はまだ自分で髮を結つたり、布團をかけて寢たりした事が有りません、それにまだ感心な事は、私が昔人でバタや牛乳が嫌ひですけれど、それを上手に料理して美味しくたべさせてくれます、誠に善いものです」

と喜ばれます。

姑樣にこう甘く仕へなさるくらゐですから、旦那樣に對して良妻なるは申すまでも有りません。

ぐでん／＼に醉つていらつしやらうが、夜どんなに遲くお歸りなさらうが些とも厭な顏なさらずに

「よくおかへり下さいました、さぞお疲れ遊ばしたでせう」

と機嫌よくお迎へなさいますから、いくら怒りつぽい旦那樣でも手の出し樣が有りますまい。

奉公人などにもお嚴しくつて、つい邪慳な叱言なん

か仰つた事はなく、何事にも憐れみをかけてお使ひなさいますので、下婢達もみな奥様の德に感じてかげひなたなく一心に働きます。

實にこの奥様は人に對して親切と度量とを兼ね備へられた賢婦人でいらつしやいます。

まだ品定め申上げ度き奥樣はいくらも御ざいますが餘り長くなりますから是れで擱筆いたします。

終りに一寸私の考へを申ませうならば、かくも種々さま〴〵の性質の美點特色のみを我身につけ、やがては世の模範家庭の主宰者として、思ふさま敏腕が振るつて見たいと、大それた野心を抱いて居る女で御ざいまする。呵々

風さゆる霜のむら蘆下折て
　うき寢の鳥のかくれかもなし　千浪

水鳥の水の上とやよそに見て
　我も浮たる世を過しつゝ　紫式部

小椋の池



田舍に嫁ぎし妹へ

わかば

第一信

例の八疊の圓卓圍んで、到來ものゝうで栗を中央に家族うちよりてお茶すゝりながら、お噂致し居候ところへ、お寫眞相届き皆々奪ひ合ひ覗きあひ拜し申候。前髪ふつくりと髷の形上品なる髮の工合、なまめかず野暮ならず着こなし給へる裾さばき、衣紋つき、少しの申分なし、やさしきお目もと肉づきよき頬のあたり、實物に其のまゝ、まことよく撮れ申て候よ。英姿颯爽たる三郎様と好配合。敏雄は二人とも大まじめ立派にとれたと感心熟視姑はいゝ御夫婦だね、この間までお垂髮の女學生さんだつた信子さんが、もうこんな奥様になつて、早いものだねーと、つく〴〵見入り申候。

來年の此の頃には、今行儀よく組み給へるお膝の上に可愛ゆき人のせてまた姑の早いものだねーをくりかへさせ給ふらんなど、姉はとりて見つおきて見つ、嬉しさの微笑とゞめがたく候。

つゝましき新手枕の心をば、妹脊の道の末も忘るなとや、古人もいましめられ候、この寫眞撮り給ひし時の御心もち、御覺悟、いつ〳〵までもかはりなく、相生の松の契り年と共にいや深く、玉椿八千代かけて幾久しく御榮えなされ候やういのりいりまゐらせ候。

末ながら三郎様へよきに御傳言願上候。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

第二信

こま〳〵との御手紙くりかへし拜し申候。御地御安着後、御披露や御親族廻りや其の他の儀式も首尾よく相濟み、この頃は家庭の御經營に御忙しきよし、かねての抱負や豫想を實地の境遇に試み給ふ御たのしみさぞと存じ申候。スキートホーム實現の初階段に昇られ、初陣の御働振り甲斐々々しき御様子、遙かに思ひやられて、私もよろこばしく候。

さはいへ、都育ちのお前樣が、初めての田舍住居、何かと御不自由に思はるゝふしも多く候はん。馴れぬ土地にて在來の風習俄かに動かしがたき家の主婦となられ候事なれば、御親族隣人への御交際、婢僕の監督家のとりしまり日々の用務など、何くれと御心づかひ多き事と察し申候。

十分の教育も受けられ、幼少より俐發のお前樣故機に臨み、變に應じ、それ〳〵都合よく御取りさばきなされ候事とは思ひながら『おろかさの親に似よとは思はねど、思ひおかるゝ撫子の花。』親にはあらぬ身ながら、何となう御あたりおぼつかなう、新來の花嫁御如何にと見張る人々のなかに、惡き評判などとり給はぬやうにと案せられ申候。すべて、ものは初めが大事に候へば、まづ第一に周圍の信用を得られ候やう、御心がけなさるべく、姉などは嫁入りての二三年たゞ姑の指揮に從ひ、其のかげにかくれて過ごし候へば、自分の思ふ事、學校にて習ひたる事など、實際に行ひ試みると云ふ機會は少なう候ひし代りに、大きなる失敗も大きなる骨折りもなう、世間の非難なくて相過ぎ候ひしが、お前樣などはそれと反對に、何事も自由なる代り一擧一動もの見高き田舍人の注目の中心となられ周圍の批判も多き事と存じ候へば、何事も輕卒ならず極端ならず、注意深く徐々に進まんの御心もて事にあたられ候事肝要と存じ候。

此の頃ある若き奧樣が新世帶もたれ候實驗談遊ばし候をり『私は家の道具を買入れる時客用にすべき座ぶとんを新調しやうと思ひましたが、あたつてしらべて見ますと、椅子とテーブルを備へつける方が安價でした、かつ便利でもあると思ひまして客間を椅子にしましたが、其の方が經濟でもあり、客間の體裁もよく見えまして、大層よろしうございます』と語られ候ひしが左樣の事は私などはあまり感心致さず候。椅子と座布團を比較して、安價で便利なる方を選ばれ候進取の氣象は感ずべきにて候へど、其奧樣は今の社會の狀態を見給ふにあまり無頓着ではなきかと存候。

一寸用談などに見えられ候方に、應接するには、椅

子の方便利にて候はんも、それは座ぶとんといふ普通の家具ありての上の事に候。客ざぶとんなしに、椅子を備へ付おきて、老人のお客様やゆつくりくつろいで話さうと思ふ方などに、不愉快な思をさせ給ふ事なきかやはり舊來のものの方がと座ぶとんを買入れられて後椅子の置場に困らるゝ事なくば幸なりと存じ候ひき。

新規な便利な道具を買ひ入れるとか新らしきよききまりをつけるとかいふやうの事は、家庭をもては是非必要なる事にて候へど、一方に周圍の状況、風俗習慣などに注意すべき事、亦肝要に候。大いなる弊害だになくば、まづ在來の習慣に従ひ、それをどだいとして徐々あらため行く方よろしきにはあらざるか。昔京都人が伊勢參宮の時旅館はわざと食膳に古き魚類を供へ候よし。交通不便なりし時代日を經て古びたるそのみ食しなれし京都人は、海よりとりたての潑剌たる魚類を味ふに適せざりしならん。とにかくに習慣といふものは、よき事をもあしく思はしむる恐るべき力あるものにて候。田舎の老爺には八百膳の料理供ふるよりも掘りたての芋をさかなに、濁酒思ふ



まゝふるまふ方満足を與ふる事、御忘れなさるまじく候。また、古き田舎の風俗習慣などのうちには、一見馬鹿らしく見えて、案外風土氣候に適應したる面白きものも候へば、輕々しく侮られずよく注意して、あしきは徐々にあらため、よきはとりて御用ひなさるべく候。

同じ事のみしづの小田巻なが〳〵とくりかへし、御讀苦しうおはしつらんが急く道は廻れとやら、急いでつまづくよりも、徐々に休みなき歩をつゞくる方、最後の勝利に近づく早みちかとの姉の老婆心、御くみとり給はらば嬉しかるべく候。

御身御大切に。

＊＊＊＊＊＊

第　三　信

こゝ御都はまだ梢に殘る紅葉も珍らしからず候を御あたりはや雪に埋もれ候ひぬとや、初めての寒國の冬ごもり御凌ぎにくき事と案しまゐらせ候。さはいへ夫の君の愛情だに厚からば、六尺の雪何にか候はん。珍らしき雪見と、歌でもよみて御暮しなされ度、橇ゆく雪の道、氷滑りする湖の冬景色、今少し近からば是非に見せて頂くべきをと存じ候。お前様御退京の後は打ちとけての來訪者もなく、心淋しく候を、時々面白き御通信願はしう候。

おゝ、來訪者といへば、昨日久しぶりに加藤哲治様見えられ候。此の春奥様迎へられしよしにてお袖口の綻び袴の汚點あともなう、米琉の二枚重ねしつくりと揃ひてお羽織の折目正しき好紳士となられ候。とはいへ御氣質は相變らずの書生流、私の縫物する側に座ぶとんひきよせ、足なげだして、半身縁側の日向ぼつこ御好物の甘納豆ひし〳〵と平げながら、小春のどけき一日を語り暮され候。話頭はお前様や玉子様久枝様の上にも及び候ひし。

「玉子さんが軍人にフーム妙ですな、理窟こね廻してハスバントに鐵拳を見舞はれて居るだらう。

「大丈夫ですわ。女は男次第ですもの、理窟きらひの旦那様につけば、だまつておとなしい奥様におなりで

せうよ。」

「ところがさうでないですよ。今の女學生上りは良人に嫁入りするのでなくて、家庭に嫁ぐんだからたまらない。如何にして理想の家庭を作るべきか。曰く男子にも規律を守らしむべし。曰く臺所を改良すべしなんかと考へて、亭主にどう仕へてゆけばよいか、どんな心持ちで居たら氣に入られるかなどゝいふ事はてんで考へて居ないんだから。」



「ホヽヽそんなでもありませんわ、私の懇意な女教師の方は、此の頃の女學生はから意氣地がない。お嫁にゆくと新聞一つ、雜誌一つ讀ます、お化粧ばかりして、旦那樣の氣に入られやう、可愛がられやうと浮身をやつして苦心して居る。だからかなり見所があると思つた生徒でも、縁付いた先きによつては、折角築き上げた人格もなにも沒

抑してしまつて、何のため學校へまで敎育を受けたかわからなくなつてしまふつて慨歎して居ましたよ。』
『だからだめです、そんな生意氣な事をいふから度しがたい女が出來る。』
『ですけど、男の方も隨分我まゝね。』
『だが、女から半解の理窟なんかこねられると、左樣然らばと頭も下げられないさ。あくまでもやさしくしほらしく出られると自然我まゝもひつこむわけだが。』
『それも少し理窟のやうですのね。』
『ハヽヽ、しかしとにかく生物識の女が男を批評的に見て自分で一家を脊負つて立つてるつていふ風な態度は可愛げがないですよ。』
『…………。』
『…………。』
なほ何くれと話しつゞけ候ひし。哲治樣の奧樣は女學校出の才媛のよし聞及び居り候。座興半分の其れ等のお言葉の中に當今一部の男子の聲あるやうにも思はれ候。

女學校にて理性の發達を促がされ、尊敬すべく、信賴すべき婦女たれと敎へられし私どもは、世間の男子より、愛すべき婦人たれ、理性の眼を閉ぢて、ひたすら夫にたよる情緖やさしき妻たれと求めらるゝにては候はずや。

さはいへ實際とてもかくても女は（將來はしらず今日の）弱く小さく候。弱く小さきがやがて女性の武器なるべきか。負けて勝つとやらも申候へば、あまり勝氣をおだしなされまじく、無爲無能なるが如く見えても、男子はどうしても女より大きく候。強く候。境遇に不安を抱き良人に不信を抱くは女の最大不幸にて候ものを、良人の君を信賴して日々のわざにいそしみ、心靜かに己を省み給へ。やがて滿足と幸福とは來るべく候。色美はしき庭前のつた紅葉綠こき松が枝にやさしうまつはりてこそ一しほの色は添へ候。

雪の山ごもり御徒然の折々試み給はれと造花用具材料御送り申おき候。

寒さ御いとひなされたくかしこ。

第四信

久しく御無沙汰致し候。私もこの頃は子供多勢になり筆とるひまも少なく寒暑の御見舞もつい缺禮がちに過し申譯なく候。三郎様へもあしからず御含み下され候やう、よろしく御取りなしたのみ入り候。

　一郎どの花子どのも追々御成長の様子、三郎様にもさぞ〳〵御滿足、お前様にも御たのしみ多き事と存じ候。子を以て知る親の恩。お互に子のためには歎しらぬ苦勞も致し候へどこれなくば女の眞の愛も希望もたのしみも消え失せ候ひなん、しろがねにもこがねにもまさる玉を得候事何よりの幸福と嬉しう候。

　よし舅姑おはさずとも、不羈自由なる東京の女學生生活より俄かに窮屈面倒なる田舍の舊に嫁入られての結果如何ならんと案じ候ひし事は嬉しくもみな昔の杞憂となり終り候ひぬ。子女の教育などには頭古びたる姉などより遙かに勝れたる御意見も御手腕ももたれ候はん。ふつゝかなる姉が一日の長をほこりかに教訓がましう申上ぐる事も今はなし。さらば、遙かに御家の隆盛と御子孫の繁榮をいのり申すべく候。



青森市米町通り

規律を正した私の實驗

初霜女

世に着道楽、食道楽は普通の話ですが、家道楽と云ふ事はあまり聞ませぬ、最も巨萬の富を積んで着道楽も食道楽も仕盡した揚句の普請道楽は格別、又地主が貸家を建築するのも一向珍らしくムいませんが、我々の如き中流の家庭で然も着道楽も食道楽も十分には成し得ぬ其中で、家道楽などゝ申すと何んな風のかとお聞になるでせうが其れは澤山なお金を使用ないで濟む至極輕便な然も誰にも出來る方法なんですよ。

　元來家は我々の雨露を凌ぐ處ですから贅澤をする必要は有りませんが、身分相應の家に住はないと主人の體面に係ります、私共の如き旅から旅へ漂浪つてる身には自分の家と云ふものは有りませんから、何時も借家の撰擇には一方ならぬ注意を拂ふのでムいます。

一　家屋に對する心得

家屋は新建と古建と何ちらかと申せば、無論新建に越した事はムいませんが、位置の工合、光線の射し工合、水の良否、濕氣の有無、客間、居間、便所の配置並に附近に工場の有無、以上の點は皆人の知つてる事ですけれども、實際はあまり注意を拂はない樣です、就中、水と濕氣と光線とに申分が有るならば、家賃は比較的低廉でも全然家としての價値は無いので、日常の不愉快は金錢の如何に換へられません。第一衞生にも惡うムいます、ですから私共は古家でもぼろ〲で無い限り以上の點に申分が無いならば、家賃は少し位辛抱しても引越ます、さて理想の家が見付つた處で、庭が狹くつてはいけません、私は何う云ふものか植木澤山な苔の庭よりも、植木は寧少なくも芝の庭を好んで居ります、其て可成家の周圍の廣い處を探します。

　主人は光線の好く入る家が好きで、己れが家でも建てる樣になつたら床下は煉瓦の樣にして、日光の方向

に依り何の部屋にも光線が入るやうに、家をぐる〳〵廻して見度いなんて申します。

「あまり無謀でせう」と申ますと「無謀ではない、出來る理窟だ」と威張ります。

「其れぢやあ、便所や井戸は何うしますか、まあ家を建てる樣な時は容易に來ないから大丈夫です」と大笑ひするのでムいます。

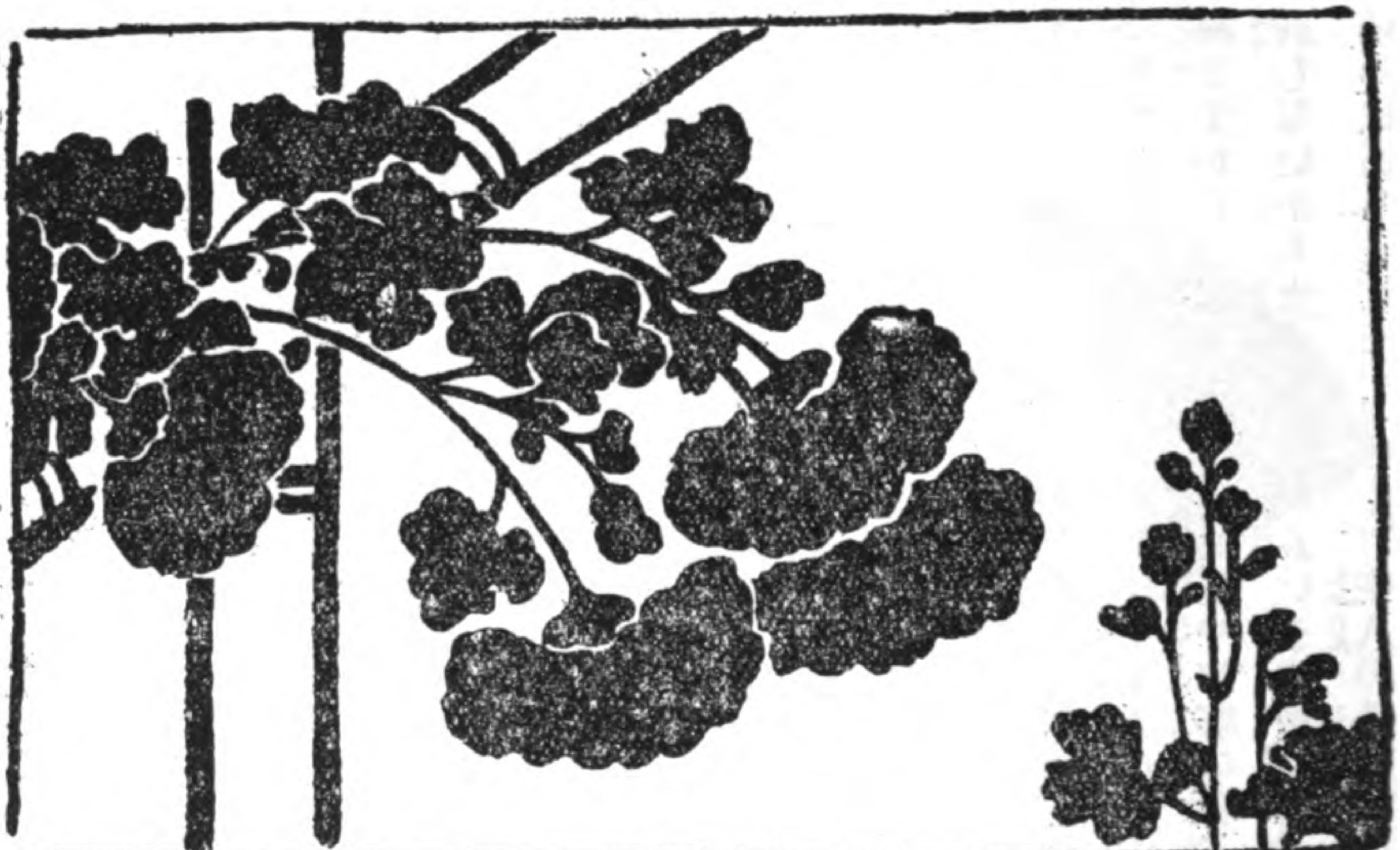
二　住居の場所の撰び方

家屋の撰擇は第一に述べましたが、此度は場所でムいます、主人の勤務先より可成遠ざかつた處が宜しうムいます、私共の主人は學校に奉職して居りますので何時も其學校より隔つた處に住居します、神戸に居りました時なぞは學校より二里も離れた處に住んで居りました、現に只今でも市外に住んで居ります、町中や學校に近い處に住つて居れば便利な事もありますが、永い間には實にうるさいものです、私共主人なぞは家へ歸つて迄意思の自由を束縛されてはやり切れない、己れの樣に家庭を樂天地としてる者には到底辛抱が出來ないと申ます、私とても町中に住へば出入に衣服の批評もされますし、近所の噂や下女の井戸端會議迄が聞えると云ふ次第で、うるさくつていけません、田舍へ往つたつて何んなぼろ〳〵を着ても可いつて事もありませんけれども其でも町中に住むとは何の位氣樂ですか、若し私と同じ考へで以て田舍に居を定めて居らるゝ方は此間の心地をよく御承知でせう。其れから第二の問題として、研究すべきは其家の附近に同僚とか部下とか、小使やら給仕やらの家が有る處は斷じて不可です、此う申すと餘りに神經が過ると仰しやるでせう、事實私共程其附近に注意するものは鳥渡ムいますまいから――其んなら周圍に何んな階級の人が住んでる處を撰ぶかと申すと、職業以外の人ならば可いのです、人の口には戸が閉られぬと諺に申しますが一番うるさいのは同職業者の接近してる場所で、互に懇意のあまりに禮儀を失し、迷惑を懸けたり、つまらぬ下女の多辯から内事の秘密が知れ合つたり、果ては感情の

衝突となり、終には面白くない現象を來します、之は誰しも始終見聞する實例ですが、始めには誰しも左程注意しませんが、私共は一番に之を調べます、お陰で未だ人樣と感情の衝突など致した事はムいません、現に當地でも其んな長屋が有つて困られた人の話を聞きました。

三　多辯を戒む

主婦の日常最も注意を要しますのは言語と動作でムいます、我恥も家の恥も構はず、べちやべちやと喋るのは絶對に主婦たるの資格は無ものと存じます、一家と云ふものは主人と主婦とに依つて形作られてるのですか



ら、主人の恥は主婦の恥、主婦の恥は主人の恥ぢやムいませんか、其處へお氣が付かれないとは笑止の極みでムいますね、三面記事に血で血を洗ふ話しが何時も載つてるのが好い手本でムいます、此んな奥樣をお持になつた旦那樣は、如何程立派にお務めでも、奥樣の陰口の爲、威嚴も何もあつたものぢやムいません、何の事はない、御自分の旦那樣が不人望なれかしと盡力して居られる樣なものです、一例を擧げますと、或る人が來て「〇〇さんのお子は妾の子ですつて、其して其妾は奥樣の姪に當るに至つては驚かざるを得ないぢやありませんか」と仰いま

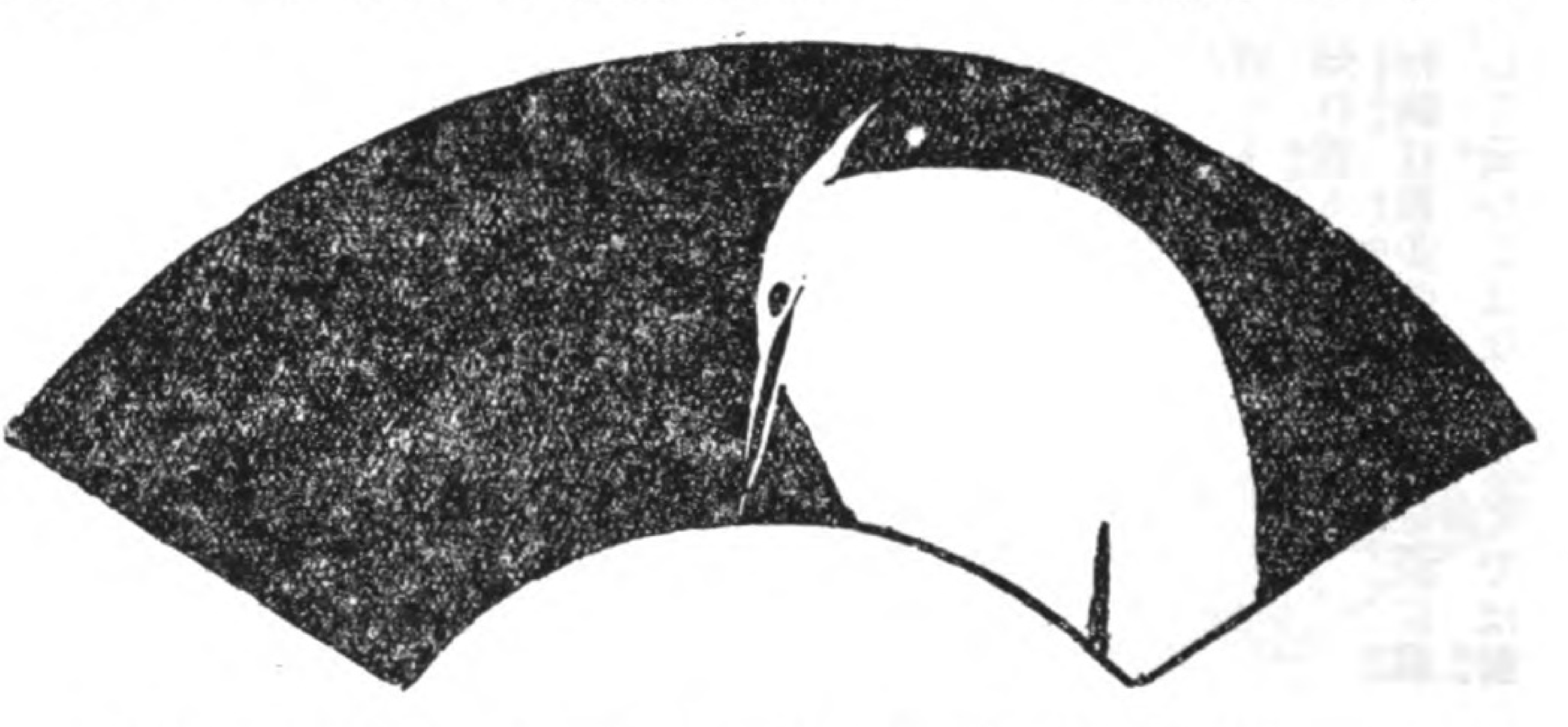
すから、私が何うしてそれを御承知かと聞きましたら「其の妻の愚痴話からすつかり知れたのです、なに外へも行つて喋つてるさうです」と承つて私は其妻とやら姪とやらの馬鹿さ加減に驚きました、主人公の不倫は言語道斷ですけれども、其の奥樣に犧牲になつて罪の子を養育して居られるぢやありませんか、若し其の姪なる人が幾分人情を解するやうならば、不平の出づべき筈がないのです、まして他人に向つて問はず語りに我恥、家の恥を、云ひ歩行き得々として居るとは嫉妬か猜疑に外ならぬのだと思ひました、私は此の話を聞きました時、奥樣には未だ親しく口も聞いた事がありませんが、心から深く同情したのでムいます、主人公は相當の身分の方で田園生活をして老後を養つて居られますが、相當の身分の方です、斯る內事の大秘密が暴露しては威嚴も何も有たものぢやありません。殊にその妾たるや之は肉身の間柄ですから、總て云ふべき事と云ふべからざる事を區別しないから女子と小人は養ひ難しなぞと歎せられるのではありますまいか。

四　交際上の心得

交際上お世辭は無論必要ですが、空世辭は人に不快の感を與へます此夏或方が見えて緣側の涼しい處でお話をしてました處折からの涼風が廂に懸けてある簾をあふりお客の頭や脊に當りました、私が「簾を卷きませう」と申ますと「此の簾が當るのが又宜しうムいます」とお世辭もかう成つては滑稽を通り越して吹出し度くなりました、又日常交際する人には上下の別なく親切にしなければ成りませんが、度が過ると相手に迷惑をかけ、又は增長させるやうになります、却々此の間の呼吸に私も心を痛めて居ります、私は日常主人が交際して居ります方の地位、及失禮ながら御性質なぞもよく主人に聞いて置きます、其う致しませんと主人不在中來客のありました節飛んだ失禮を致します事がムいますからね、又來客と對話する際（男女の別なく）主人の公職に就ては例令聞かれても申てはなりま

せん、まして己れの想像話なぞ以ての外で厶います、主人不在中、受くべからざる者よりの進物は其物品の如何に係らず即座に返さなければなりません、此んな事から世間で主人の人格を兎や角批評する原因になるのですから。

主人出張中到來した書信は、一一出張先へ廻送するのは云ふ迄もない事ですが、若し至急を要する手紙を受取つた場合は、其差出したる人に對し、手紙は確に受取つた事、及主人出張中の事を書しお手紙は直ちに出張先へ廻送せし旨の返書は必ず忘れずに差出し置かなければいけません、其れから普通の時候見舞の如きものは主婦が主人に代つて取りあへず返事を差出し置き、之等の如



き留守中出來せし事故は落ちなく日記に記して置く方が好う厶います。

其から家庭で最も注意しなければならないのは火災で厶います、天災の場合は致し方がないとして自火なぞは皆主婦の不注意から起るものと思ひます、電燈を引いておいでになるお宅は好う厶いますがランプのお家は總べて硝子製は廢しカネの物にしないと危險です、私共ではカサも勝手元のは紙の分にして居り、油さしの中には鹽を入れて置きます、此う致して置きますと、例令落ちた處で直ちに發火するなぞの憂はありません、お子達のおありになるお家には殊に用心が肝要ですランプから火が出て、一家燒死したとか生不動になつたとか、三面記事なぞには終始見聞する處です。

五　下婢に對する心得

下女は多辯の者は決して使用してはなりません、家の内事が知れます、怜悧にして多辯ならんよりも寧ろ愚鈍でも無口なる方が好うムいます。

出入の商人やら小使なぞの口さがなき者からは幾ら行儀見習なぞと頼んでも決して雇入れない方が上策です、出來得るならば土地の者を使用せずに故鄕から召連れて參るのが一番宜しいです、又友達を連れて來る樣な下女はいけません、又知合の家に奉公した者も使用しては面倒です、彼れ等は自身から割出した比較問題を稱へますからね又主婦は他人の前は勿論、殊に語るに足らぬ下女の前なぞでは、事の輕重善惡、自他の如何に係らず、不必要な事は一切物語らない樣にしなければいけません、「此れは秘密だから誰にも云つて吳れるな」と申て話した事が忽ち世人に知れ渡るの實例は珍らしくムいません、(私共は重要の相談は散歩の折に致します）下女には人の惡口なぞ決して云つてはならぬと申ながら直ぐと其口で自分から人の噂をするやうでは命令は少しも用られませぬ之等は主婦たるものの感化一つで何んなにでもなるので決して金品を多く與へた處で主婦の命令をよく用ゐると云う事はありません、一時は其れで可いとして到底永續きはしません故、貰はれないやうになると又我儘を出し増長の基となります、此うは考へて居りますもの〻却々むづかしいものでムいます、私は平常餘り小言を申ませんが時々横着と見た時は呼び付けて云つて聞かせます、然し過失の場合は決して叱りません。

幸にして私宅ではよく下女が居つき仕合に思つてます、何事も責任を持たせられるとづるい事は出來ないものです、私は女中に或る範圍に於て差支なき限りはまかして居ります、結果は却て宜しいやうです。

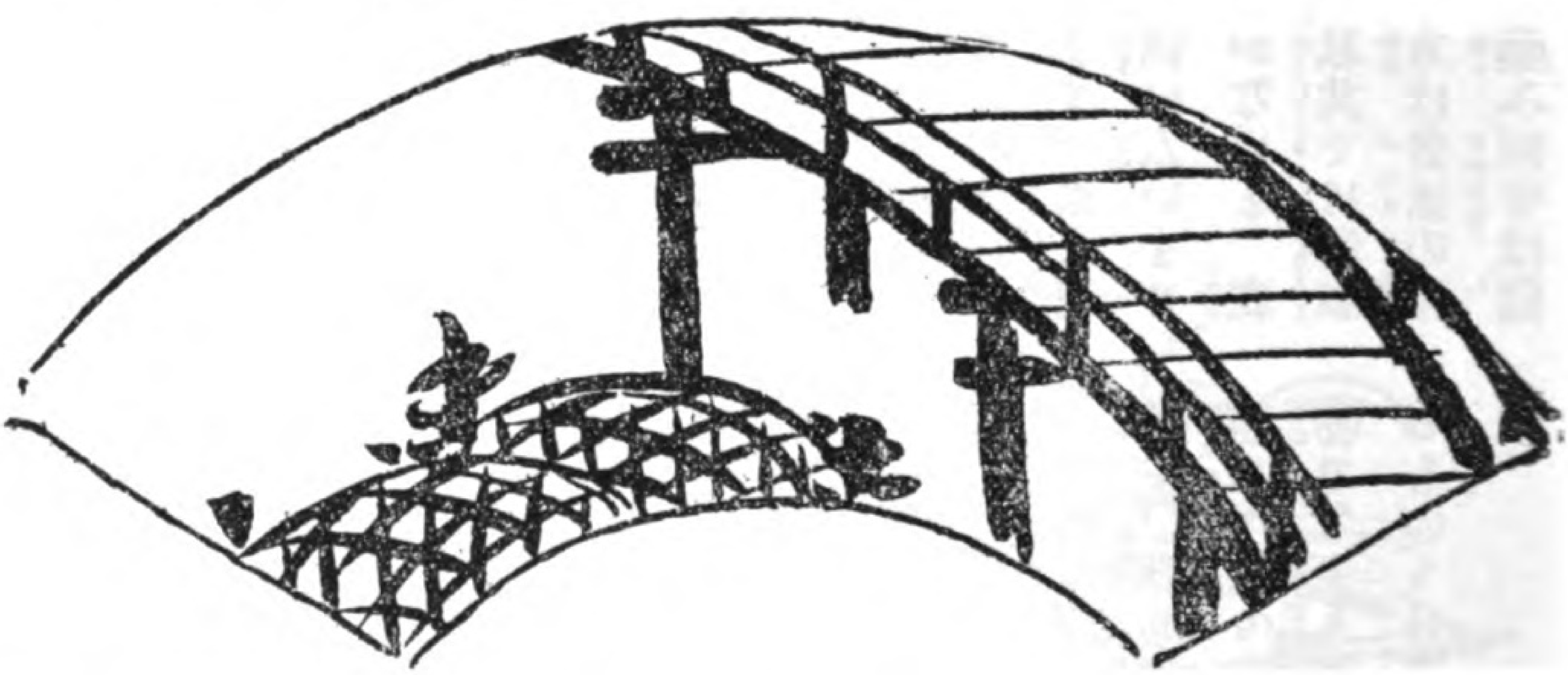
六　經濟上の心得

經濟に就ては家別々で一概には參りませんが、私宅なぞでは對面上何うしても儉約の出來ない事もムいま

すし、又周圍の事情に依つては無い袖も振らなければならず御同樣中流から中流以上の生計が一番困難で厶いませう私は日常無駄の品物を買はないと心懸てる外別段申上ぐる抱負もないのはお恥しい次第で厶います。

七　子供に對する心得

育兒に就ては何の經驗も無い私の事別段申上る程の材料も厶いません、子供の敎育は總て母親の感化に依る事は今更申す必要はありません、然しながら誰しも知つて居ながら子供の前で云ふべからざる事を云つたり、夫婦喧嘩致したり、金錢上の苦勞話しをしたりなぞするのは誠に惡い事です、何うか子供の爲めには家庭は何時も春の如くにあり度いものです。



女子が嫁して主婦と成つた以上は其家に如何なる不幸が厶いませうとも、辛抱しなければならないのは申迄もありませんが、中には良人の不幸や心配を少しも意とせず、却て自分の滿足を滿す事が出來ぬ爲めに、良人に下らぬ論をしたり、又女中や出入の者に向つて實家の有福の事を得意氣に話す方が有るのを時々聞きますが、誠に苦々しい事と存じます、私は出來得る限り良人へは勿論、其兄弟親類の人々へ盡し度いと云ふ考へで居ります、里の事を幾ら云つたつて、思つたつて何うなるものぢやありません、私は主人が氣付て私の實家に何か送つて呉れる外私自身は何も送つた事は厶いません、主婦が誠心誠意で良人に盡せば良人だつて何うして無情に出來ませうか、其處で

始めて家庭の圓滿が得られるので有ります。

八　衣服に對する心得

衣食の内の衣は私共では流行物は決して追ひません又事實追はれもしないのですが、手當は十分なる注意を致します、殊に洋服は主人がやかましう厶いますので一年に三度は必ず干します、冬服が入らなく成りますと、春の好天氣にすつかり乾しポケットの中の煙草の粉其他名刺書付の有無を調べ、よくブラシで拂ひ、樟腦を入れ、木の鞄へ納めます、梅雨中は間毎に一つヅヽ火鉢を置き濕氣を取り、梅雨期が過ると全部の和洋服を干し、前の通り仕末して置き、又秋の晴天に再び全部の和洋服から道具から夜具を干します。最も夜具や道具は始終乾しますから、少しも面倒は厶いません、要するにポケットをよく掃除して置かないと、表面の掃除丈では何の役にも立ちません、私共では洋服が黴て困る事は餘り厶いません、たゝみ方は普通の洋服疊にしないで身體に着てる儘の通りに疊み兩手は自然の儘に身頃の上に重ね仕舞ますと脊に嫌な筋が付かないで、いつも仕立下しのやうです、大抵の方は洋服疊にしなければならない物と心覺えてますが要は皺を付けぬと云ふのが目的ですから、(最も從來の洋服の疊み方は全然惡いとは申ませぬ、上手に疊れば此上は有りません)、其處は臨機應變で改良し得る所はずん／＼改良して可いと思ひます、主人が何時着ると申て出して見ましても、少しもこてなぞと騷がず、直ぐに着せられます、折目正しく洋服を着て、外出する後姿を見送ります時は、何とも云へぬ好い心地です。

九　食物に對する心得

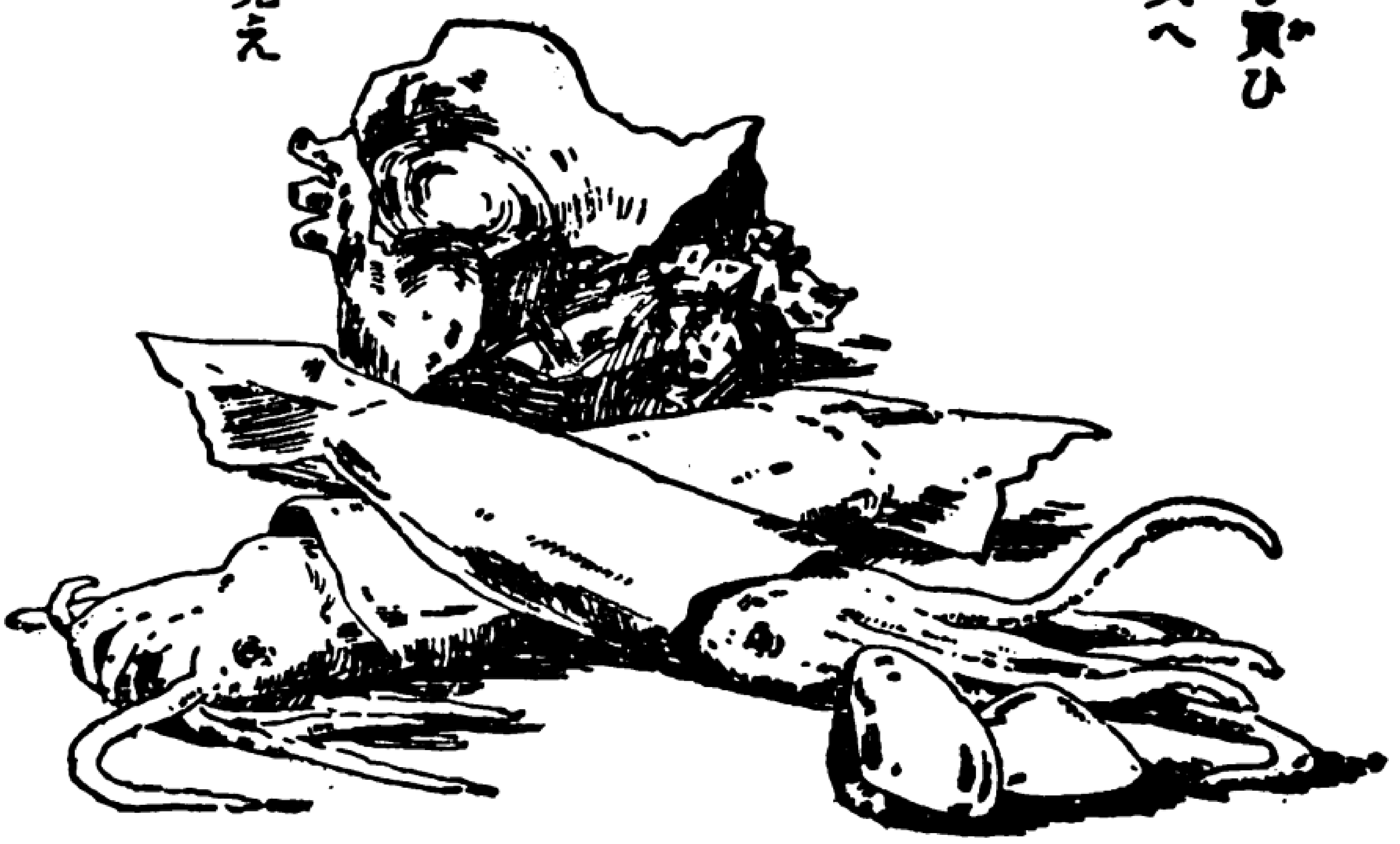
食物は總て主人の趣向に應ずると云ふ事が最も肝要です、私共では此の方針で以て主人に滿足を與へんと務めて居ります、如何に珍しい品でも又人には甘しい物でも主人が嫌では致方が無いのですから此邊は妻たるものゝ日常の注意が最も必要で厶います。

十　器具取扱の心得

器具は私共では餘分の物は少しも買ひません、ホヤの如きも、ダースで買へば廉いと云ふ事は存じて居りますが、有れば有つて矢張粗末に扱ひますから、何時でも二つ位しか餘分に置きません、其他の買物と豫算の立ち難き日々食品なぞは總べて現金にして居ります通と云ふ事は現在に金錢を出ない爲め之れも氣に入つた、あれも買度いで、忽ち入用でも無い物を買ひます之れが目に見えないで其實大な不經濟ですからね。

十一　家庭の趣味

趣味の一致と云ふ事は如何なる階級の夫婦でも一番必要でせう、趣味が一致しますれば話の材料も澤山出來、家庭を一層愉快にします、私共では趣味が餘り違ひません爲、夜なぞは却々面白うムいます、私は非常に讀書が好きで始終何か讀んでます、同じ讀ますのにも主人の讀んだ物を私が讀み、私の讀んだ物は必ず主人が讀ます故、後で其書物に對する批評やら、感じやらを話して夜の更くるも知らない事がムいます、晴天の休日には相携へて山野又は海岸に出掛け主人が狂歌の眞似見た樣な事をやれば私が下手な腰折を詠ずるやらの次第でムいます、私は一家の主婦と云ふものは一面に於ては主人の好伴侶で無ければならぬと存じます。



枕頭の暗示

安曇の病女

輕い病氣にかゝつて四五日の靜思が得たい、などゝ戯ぶれしが事實となり、遂々風邪の神に取りつかれ、病床の人となつて今日で四日半、もはや大抵天井の節穴も障子の穴も數へつくしたれば、是れより少しく病中の感想でもつゞり見んと思ひ立ちぬ。

○室は東むきの八疊にて日當りよく、寢ながらに大峯の連山、高瀬の長流、近くは餌をあさる鷄の風情までも眺めやらる、我が爲め特にこの室を撰みくれたる妹の好意に感謝す。

○朝な〳〵に霜置きまさり、一村雨にもそよ吹く風にも萬物みな凋落の秋を愁うるの今日此頃、ひとり窓下の菊のみ其氣高き姿を誇る勇ましからずや、春の柳なよ〳〵として柔しう美しと云へども氣品なく靡きやすし、御身菊花の高潔を學ぶべし、柳のなよび心に似る勿れと、枕邊の妹に說き聞かす。

○近所の女二三人來り臺所にて大聲に談笑し、はては小歌さへまじりて聞こゆ、八ケ間敷事限りなし、謹みもなうドッと笑う聲頭にひゞきてます〳〵痛き心地す。たしなみ無き人々かな、この病人のあるに、と腹立たし。其昔母が病の折など大聲を制され唱歌を制されて、內心頗る不思議に感せしがかく病める身となりて、初めて病者の心中を解するを得。

○妹と下婢をして身體を按摩せしむ、妹は熱心にもんでくれ下婢は熱心に揉むやうな眞似をして呉れる、一は疲れて度々休めど一は暫しも休む事なく、傍人感じて「まあお前手が疲れるだらうに休んでおやり」と云へばます〳〵くびを振り立てゝもむ眞似す、されど少しも力を入れるにあらねば手の疲れる道理なし。妹は正直なり、下婢は怜悧者なり。

人と交はる上に於ても眞の親切と親切らしき不親切とあり、故に交際せんとならば先づよく其人物を選ぶべきなり。

○潮風子は田舍の子供はヌーボー式に出來て居ると申されたれど、中にはさうでなきもの有り、友イク子某家訪問の歸さ立寄りて語るらく「彼家の坊ちやんが私行くといきなりまあこんなに取り散らして置いてお恥かしい、つて云ふでせう私ほんとに可笑くつてをかしくつて」と、げにをかしともをかし。この坊ちやん先の日我が訪れたる折も「大そうお涼しくなりました」「御一服御吸ひなさい」など大人びたる言いふて舌を捲かせたり、これが當年五歳のまだ乳の香うせきらぬ小兒の言草なり。家人はかゝるコマチヤクレた事云ふを嬉しがりて「坊はお辯巧だ」とほめそやし猶も色々マセタ智慧をつけんとす。是れでは子供をよき玩具にすると云ふものなり。淺猿しからずや。

かくして育て上げたる子供が將來大人物に成ると思ふは大間違、十三四までこそ萬事に敏く智慧まはりて神童などゝもうたはるれ、二十過ぎては凡人はおろか妙にコセ〳〵した小人物の出來上る事受合なり。誠に教育の方針を誤まれるものと云ふべし。坊ちやんのために惜しむ。

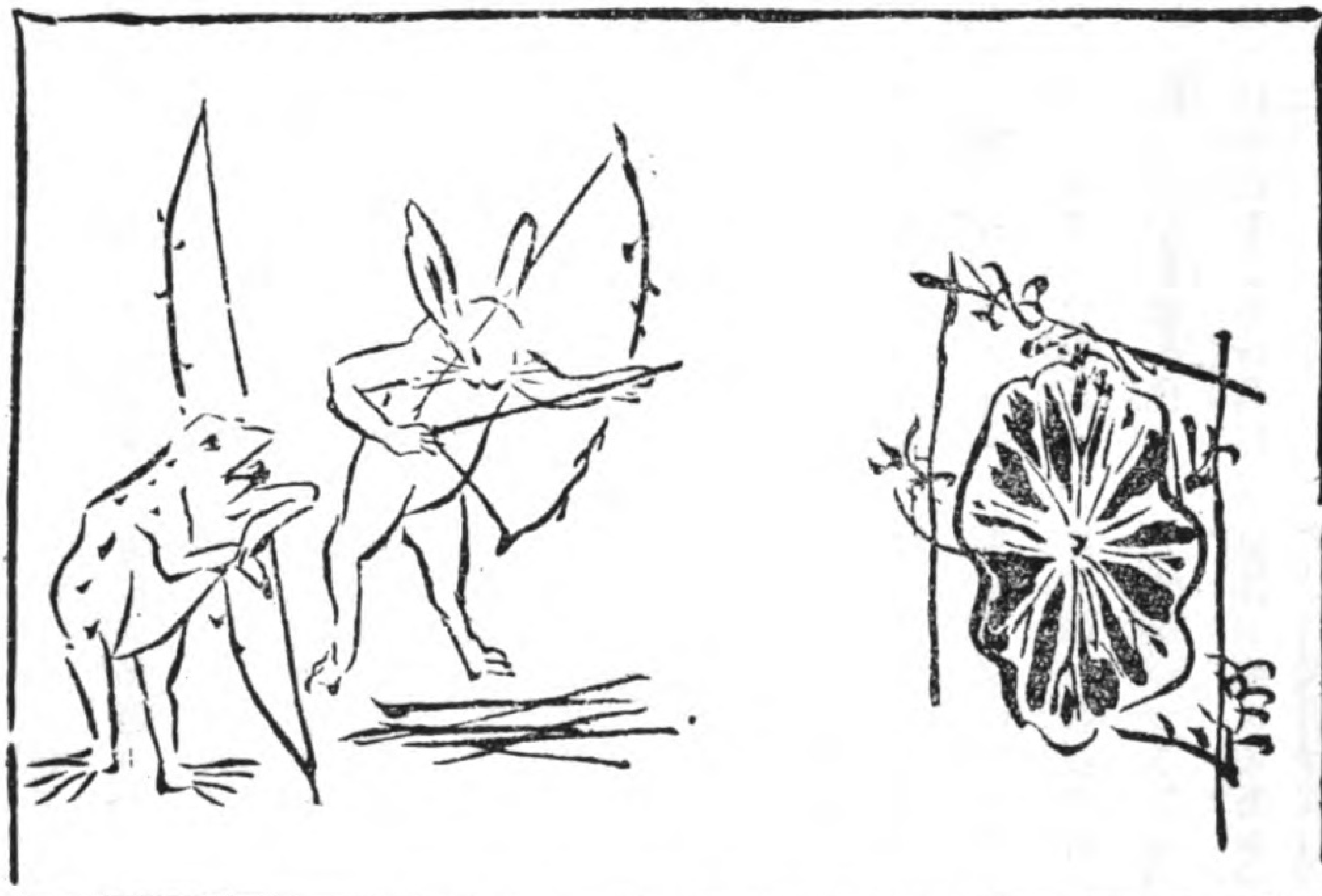
子供は飽くまでヌーボー式たるべし、ボカン式たるべし、傍より入智慧すべからず、ノビル丈ノビさすべしと、是我が平常の持論なり。

○隣家の夫婦喧嘩すと、起出でゝ塀越にのぞき見れば、成程々々犬も食はぬ爭論の眞最中、吾れ御苦勞にも木下暗に佇みて謹聽の小一時間、身にしみ渡る夜風にぞつと寢衣の衿かき合せし頃いよ〳〵「女房離縁」と結論がつきたり、こは昨夜の事、今朝は離別の光景見んと病める身をも忘れて再びいたり見しに、こはいかに女房風呂包抱き出す氣配もなきのみか、まるで昨

夜の騒ぎは忘れた様に、二人ともニコ〳〵もので來年の事など相談しつゝ菜畑耕やして有りき。吾れ聞いた口の閉がらぬ事五分餘。

歸床瞑目熟考、俄然、この離別が流れのうちに大なる人生の意義を含む事を發見す、然なり〳〵是有るがためにかくも世智がらき世が割合にうまくをさまつて行くなり、浮世は左程あんじたものならず。

吾れ此日、夫婦喧嘩謹聴によりて、大に得る所ありき。



○客あり、三十九歳の婦人髮は流行の何とか卷に結び上げコッテリ流の紅白粉おどろおどろしう、娘のでも借たのかと思はるゝはでな着物にケバケバしき紅入りの半襟をかけたり。是は又思ひきつたるいで立ちかな、お年に遠慮も有るべきに。一見色情狂なんどの樣にていやらしく凄まじかゝる女の口よりいかに高尚な事もらしたりとて、聞く耳みなこれを淫靡化して仕舞うものなり。

實に服裝は人物を代表するものなれば、よく〳〵注意す

べきなり。

○小妹學校より友の二少女を伴ひ來り我が枕邊にて遊ぶ。子を見て其母を知るは容易なり。甲女は顔容普通にて衣服も立派ならねどゞことなく小綺麗にて見る目心地よし、折目正しき双子の袷に粗末な白前掛ながらキタナキ汚點なども見えず、カクシにはちやんとたたんだ鼻紙が入れて有る。此の母君さぞや子女敎育に意を注がるゝ賢婦人にて又家政上手の敏腕家ならめ、少女はまれに見る美くしき容色にて衣服も甲女とは比較にならぬよきものを用ゐ居れど、常に鼻など拭うと見えて友禪の袖はピカ〳〵と怪しき光りを放ち、白エプロンの彼方此方にも飯粒やお汁のこぼれたのが其まゝねばり着いて居て見るだに胸がむか〳〵する。母なる人は定めて何事にも自墮落なる質なるべし。甲女にくらべて言葉のいたく下品なる所より察するに或は花柳界などの出には有らざるか、など勝手な判断を下し見つ。

○久々にて新紙を手にす、吾れ新聞を閲するや一枚に少なくとも一時間を費やし、國家の政治より荷賣屋の三行廣告まで讀み終るを常とす、深く味へば市井雜事の端にまで何等かの敎訓を含めばなり。

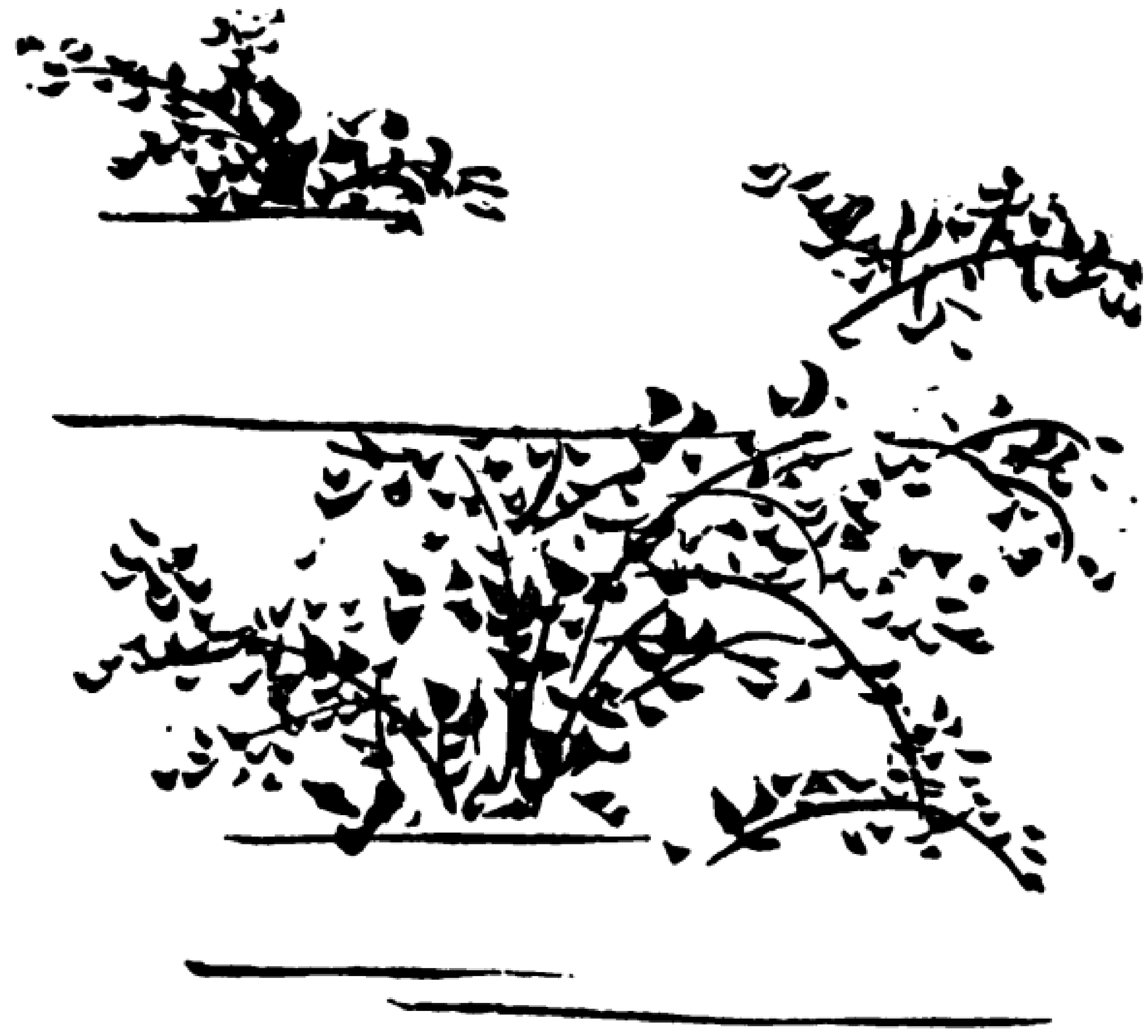
○徒然なるまゝ友の誰彼より寄せし文取出て見る。はなやかなるあり落着たる有り眞面目なるあり、滑稽なる有りハイカラ式あり憧憬る式あり、この些かなる文字のうちに其人々の性情のあり〳〵見ゆる樣にていと興深し、されど心より吾れを感動せしめしもの只一通より外なし、こはさる友より近日おこせし病氣見舞なり、友不幸にして學淺く文書く術も知らねばその拙きは云はずもがな、『何卒々々早く快くなつて下さい、毎日神樣にたのんで居ます、早くよくなつて……』こんな調子にてくどくも並べ立てゝ有り、誠につまらなき手紙なり、さはれ眞の同情親切は此の拙劣なる文の

上に溢れたり、吾れ幾度びか口づけて其真心に泣きぬ
この手紙はいかりながらかの上つ調子な内藤式レター
とは幾段も位が違うなり。

〇何處よりか父の許へ「公德」と云ふ小雜誌を送り來たる。家庭欄に方外道人の「吾等が見たる妻女」と云ふが有りなかく振るつた觀察なり。最も穿ち得たりと思はるゝものゝみあぐれば、

×家に一人の良妻を控ゆれば外百人の强敵をも防ぎ得らる。





×夫のために時に馬鹿になれる女は馬鹿でなきなり

×他人の秘密を嘲づる妻は自家の秘密をも嘲づる

×女房と犬の子は褒めそやせば屋根棟にも上り而して下り來る術は知らぬ動物なり

×如何なる强情頑固の夫にても溫かき柔順なる妻の心には捕縛されて仕舞う

×夫に忠告せられて直に口先を尖らして爭論する妻はもし夫に美人ぞとほめらるればすぐに羽を擴げて舞ひ立つ

×謹み深くして妄りに夫の行爲に干涉せぬ妻が最も

多く夫の內助となる

×不經濟の妻程夫の慈善事業などに故障をのべたてる

×負け惜みの强い妻は却つて夫に欺かれ他人のために事每に玩弄せらる

×己が心の卑賤なる女は夫にも他人にも尊敬を拂ひ惜しむ

×善良なる妻は四季夫の心に春の溫き氣を持たしめ世間に花を咲かす

×夫の旅立每に不滿を懷かしめて家を出す妻は夫の不在中火災も起し盜難にも逢ふ

×骨惜みの妻は夫の肉を落し身代をも細くする

右を拔萃していつも家庭の苦情を訴ふる友に送つてやりぬ。

○人來りしきりに山清路の秋色をとき、明日の紅葉狩りのいかに樂しかるべきかを勇み語らひ、はては辨當には何を持參せん彼品もよし此品も妙ならずやなど云ひてうき立ちたり、吾れ堪へがたう不快に感ぜき。

病める寂しき心を慰むる術として、風景の美を語りきかするはよし、さあれ是にも程度あり、過ぎたるは及ばざるが如しとか、外出叶はぬ病者にむかつて、己が遊樂の辨當まではかるなどはちと考へものなり。

○知人の老母、我が平常好めるを知り、わざ〳〵小豆團子を拵へて持ち來り進む、ひやりとせり。

健康なる時にこそ大の好物なれ、病氣殊にかゝる熱多き折には口中ねばりて、果物の水々しきはのぞましけれど、あくどき小豆團子などは全く見るも厭なり。

されども折角の人の好意に對しては、まさかにそれとも云ひかねて、目を瞑つて其二つを鵜呑にせり。而して誠に結構なる出來にこそと禮申す。

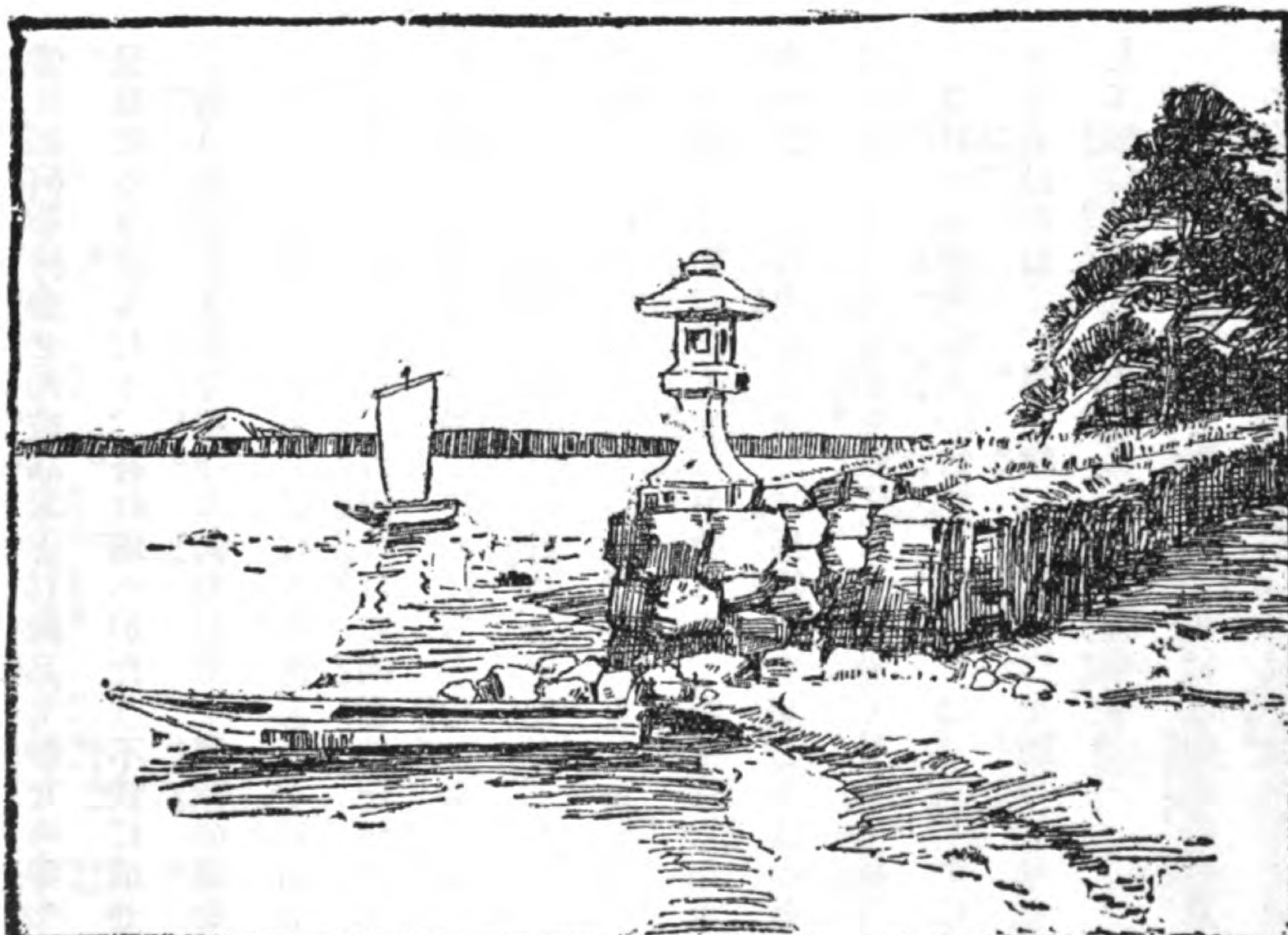
時により人の感情を害さぬためには病中の我意にそむきてまでもつとめねばならぬのが浮世かとをかしか

りき。

○昨夜はひどく發熱せるためか恐ろしき夢のみ見つづけたれば今朝は疲れ果てゝ起て見る勇氣もなし。そかしきは夢なる哉、或る時は悲哀を示して怯やかし、或る時は歡樂を伴ひ來りて喜ばしむ。されど醒めての後は何の損もなく得もなし。深く穿ちて考ふれば、人生快樂と云ひ苦痛と云ふも皆この夢の如きのみ、畢竟は一時の現象に外ならず。

○まちにまちたる女學世界着す。千種萬樣の筆の彩、只面白う讀みもて行くうちにふと『日常生活の教訓』募集を見出せり、よしさらば日毎にものせる我がこの枕頭雜感、題意には叶ふまじけれど、かゝる折にても懷かしき誌上にのらばのせて頂きたしと、早速妹よびて清書せしむ。

高尾山かへし〳〵て見つれども　直好
うらおもてなき錦なりけり



矢橋の歸帆（琵琶湖八景の內）

盆栽の趣味

近來一般に盆栽と云ふ事が盛んになつて大抵な家庭には小やかな物の一鉢や二鉢のない家はない有樣である。此の盆栽に於て最も貴むべきは僅々一尺内外の鉢植を以て天然大木の勢を示し、自然古木の風致を表はし、坐ながらにして森然天に參するの趣きあるを愛づるのである、從つて盆栽に於ける資格とも稱すべきは根の配り方、自然老木の姿を表はし、枝の配置亦參差として綠葉密生し、幹此れに適ふて古木の如く青苔常に滑かであると云ふのが最も大なる要件である、而して此を全からしむるには其の植方が最も肝要な事で其の巧拙によりて大いに其の風致を增減し同時に亦其の價値にも非常な影響を來たすものである、殊に近頃盛んに試みらる寄植に至つては只此の植方が唯一の生命で聊かでも此れに失敗すれば直ちに無意味な物となつて了ふのである、次には若木の種類である。

△松○は最も風趣あるもの丶最上であると共に、其の培養法の最も困難なるもの丶一つである、故に若し其の植方に於て聊かでも無理な所があれば最も鄙俗なるものとなつて了ふ、而して松を盆栽とするには實生のものにても非常に心得のある人が常に怠らず人工を加へて居れば相當におもしろい物が出來るが寧ろ深山幽谷の間に生え烈しい風雨に惱まされて育つたもの丶方が好いのである。

又此を植うる土は壤土が第一で、次は朽土であるが常に空氣の流通よき所に棚等を設けて其上に置き常に稍や乾きたる位にして置かればならぬ、而て此からの秋雨には非常な注意を拂ひ常に其れに打たせぬ樣にしなければならぬ、而かして此れに施す肥料は極めて少量の油粕の腐つた物を水に和し極く稀薄なものを施こすのである、又時々少量の水をも與へればならぬ。

△杉○は彬々として天を突くの概あるものを貴び決して人工を加へたものは喜こはぬのであるから其培養は比較的簡易で肥料等も松に準じて施こせば十分である。

△竹○は凡べての盆栽中其の培養の最も困難なるもので非常に熟練した盆栽家と雖も往々にして枯死せしむるものである、其の移植又は植替は梅雨中にして常に適當な水を施こし、冬は溫室に收めて置かればならぬ、肥料は骨紛が最も適當したものであるが、油粕の腐つたものを水に和して施こしても好い、此の培養は甘くやれば風韻のあることは盆栽中最上位にあるもので、殊に肥料が適度に施こされて筍の出で添ふたものになれば實に何んとも云へぬ風致があり、亦其の價も決して少々でない。

△楓○は最も枝振りの好きを貴ぶもので疎葉の後も尙ほ風趣あるものでなくてはならぬ。而かして楓は非常に種類の多いものであるが盆栽としておもしろいは山楓大楓の類である、此れは移植してより三年の後でなければ紅葉せぬのが普通で有が紅葉すればなか〳〵の趣ある者である、肥料は普通餘り施こす必要はないが若し施すとすれば極く薄い物で無くてはならぬ。

△欅○は大木の姿あるものを貴ぶのである。此れは實生えのものもなか〳〵おもしろいが燒野邳で成長した者に却ておもしろい物がある。最も古木にして細きものを喜こぶのである。

△柘榴○○は、古木のおもしろきに細き枝な接木したものである、此も接木した後一ヶ年すれば實を結ぶが普通である、肥料も他と餘り異つた事はない。

賢き女の言遺せし言葉

高石澄江

祖母より受けし尊き教訓

私は今私が曾て祖母さんから受けた教訓をこゝにお話致しませう申すまでもなく、家の祖母は今日の學問を致したと云ふのではなく、昔の女大學や、婦女かがみから、ひいてきたのと、又多年の經驗とによつて受けた教訓ですから、今時のハイカラな女學生さん達には、ちと、むかないかも知れませんが、現時の女學校の老嬢や、二階住居の先生方の經驗もなく、只口先ばかりの御講義とは、ちがつて、實地に當つて見て成程と、思ひあたる節もずゐ分ございます。何しろ祖母さんが、仕へて居た殿樣と申す方は、大そう仁義の道の明なお方で、「三度の食事は己の力で食ふと思ふな」と仰せられていつもお膳にお向ひ遊ばすと「大君の恩、祖先の恩、農民の恩」と仰せられてからお箸をお取り遊ばすのですつて、萬事がこの通りですから、それに仕へて居る者は皆、其の感化が身に及して、正しい行をする樣に自然と、さうなつて了ふのです。

×

人は何んでも禮儀を重んじなければならぬ、禮なければ、禽獸に等し、禮を失しなへば家の亂るゝ基、其の家庭の亂るゝといふことは家庭内の銘々が我儘を通さうといふことに起因するので、我儘を通さうとするのは、つまり禮を輕んずるといふことである、例へば子として、親の心を安ずるのが第一、そして從順で、父母や兄姉の仰せに背かぬ樣、又父母の手だすけをするにも決して心易だてに不敬な詞づかひや無禮なふるまひをしてはならぬ、親しき中にも禮儀あり、で必ず能く禮儀を盡すべきであるが、左樣かと云つてあまり

小笠原式で、父母に窮屈な感じをさせたり又、不熟な作法のために、ぐづ〳〵と物事に暇どつて時間を費しもどかしき感を起させぬ様、注意せねばならぬ。然し何んと云ふても、生の親に事ふる禮はむづかしく無いが、義から結ばれた、舅姑に事へるには、却々容易のことではありません。

×

父母に對してもだが、舅姑に對しては、ことさら悪い顔色を見せぬ様、けれど、起きるから寝るまで一ッ家の内に住んで居る者が、何時如何なる事があつても、始終顔色を麗しくして快濶に温和に、憤りや、悲しみの色を見せぬと云ふ事は大抵な覺悟では、出來るもので無い、がせめてはどうしても怒るべき理由、悲しむべき道理があつて、多少憤怒悲哀の色を見するはまだ據無いとして、己の我まゝから一寸自分の心に叶はぬことがあつたと云ふて、直に怒つたり、悲しんだり、愚痴を云つたりする様なことがある、それは最も甚しい無禮で、さういふ事があつては、縦令外の事が作法に協て居ても、心の禮は零になつて了ふ、で如何様な大事があつても、顔色に見れぬと云ふ程の修行は却却むづかしい、としても、せめて自分の我まゝから起る、憤怒悲哀は是非とも、自分の耐忍力で抑へつけて了はねばならぬ。

又女は平常から整然と化粧して、身なりをとゝのへておかねばならぬ、これも一ッの禮の内、容儀がみだれて居ては、人に對して失禮、それ故昔武家の家では、居間の衣桁に搔取が、かけられてあつた、夫れで縦令木綿の褻服を着用して居られても、臨時の客があつて面會せらるゝ時は、その縞の衣服の上へ、一寸搔取を引つかけて逢はれたものである。

衣服が既に正しければ、自然と心も正しくなるから

で、嫁しては夫に對して取り亂した樣子を見せぬ樣。

×

古の敎には一番鷄が鳴けば、妻は床を離れて整然と化粧をなし、衣裳を改め、そして夫の眼覺を待つやうにしつけられたものであるさうだ、がこれ程の務めは爲るにも及ぶまいが、何時でも髪容身體衣服、其の他も瀟洒と淸潔にして、そして化粧は手早くしてむだに時を費やさぬ樣に、いつも祖母さんの云はれるには、身仕舞するには人が待つて居る心持でしろ、それは人が待つて居れば、その人を長く待たせては、氣の毒だと云ふ感が起るから自然と早く出來るからである。

禮の内でも、ことに言葉づかひに氣をつけなければならぬ。

×

詞づかひの上品なのは誠に其の人の品格を高める、それ故平素からよく注意しておかぬとたまに高貴の方方の御前で急に上品な言葉をつかはふとしても、平常心がけておかぬと不知不識、平常用ゐて居る言葉が出てくる故、平常から假令親しい兄妹友達の間に於ても自分の品格を保つために、能く注意して成るべく野卑な詞づかひに慣れぬ樣又、人中へ出て、人の耳障りになる樣なことを云はぬ事、小聲で他の噂をせぬ事、女は嫉が多い中にも客の辭した後で、其の批評冷笑などをせぬことながし目、立聞、或は人の讀み居る文をのぞかず、又人なき一間の中へ入るとも、人の在す如く行を正しくす「君子は屋漏に愧ぢず」とあるは、獨り居ても愼む心ある樣に戒めたものである。

昔ある道學者が、その門弟に敎へて、「人は禮を知る

が故に禽獸と、異なることを得るのである、それ故、縦令父子夫婦の親しき中でも禮儀あるを以て、貴しとす」と云はれた、すると其の門弟が答へて申すに「なる程、禮儀を盡すは結構なことでありませうが、お恥しいが私の宅は、九尺二間の裏長屋で、親子たつた一室に起臥を致し、膳もとり膳で、同じ器から菜を挾み合つて食ふ次第でありますから、守りたくても禮儀を守れません」と云ふと、道學者が、「いや／＼如何なる埴生の小屋の中でも、心がけさへすれば其閒に禮儀を盡されぬと云ふ事は無い。縦令は一ツ皿の中の、芋の煮たのを、父と二人で、箸を入るのならば、我が箸のなるべく、己が挾む芋の、外のに障らぬやうにし、且固さうな芋を己れが食し、柔かさうなのを、父に食べさする樣に、注意しなさい、斯うすれば、夫で立派に、禮儀を盡くすことになるのであると云はれた、といふ話があります。



×

道具類はなるべく長く保存する樣に扱はねばならぬ、破損易すき陶器類は手を高く上げて扱ふ時は、もしも手をすべらした時など、取かへしのつかぬ事になる、それ故、大切な品破損易き品などを扱ふ節は、手をなるべく下へさげ、落しても、いためぬ位までに下し、必して扱ふ樣に、又手

順を定めてする事、例へば自分の前の方にあるものを取らうとする時は、必ず自分の手近にあるものから順に取らなければならぬ、手近にあるものを差し措いて猶先方にある物を取らうとすれば、其の間の物を倒すとか、引繰返すとか何んとか、きつと間違ひを生ずる。これ等は皆、茶の湯の稽古から割り出て、日常の實行に供したものである、茶の湯は一から十まで其の手順が定つたもので、一つ其の手順が違へば萬事番狂せになつて、全體が形なしになつて了ふ、それ故、これをするには、用意の周到と云ふことを要します、この用意の周到や、物事の順序といふものは、たゞお茶の時ばかりで無く、日常不斷のことに應用しなくては、何にもなりません、箪笥から衣服を出す時でも、下の方を出すのに、上から順に出して行けばいゝのだが、上の方から出しもせず、下から引ばり出したなら外の衣服は皆しわだらけになつて了ふ、これ等は皆前と同じ事です。

×

女は何事も從順なるべきこと、家にありてはよく父母兄姉に從ひ、嫁しては舅姑夫によく從ふ、と云ふことをわすれぬ樣に、女大學の中に

婦人は別に主君なし、夫を主人と思ひ敬い愼みて事ふべし、輕ろしめ侮るべからず、總じて婦人の道は人に從ふにあり。又女孝經中に天は陽にして強く、地は陰にして柔かなり、陰は陽に從ひ、柔は強に從ふこと、天地自然の道理なるがゆゑに、夫婦の道も、天地陰陽にたとふるものなれば、女は夫に從ふことゝ定まれる道理なり。又女小學に曰く

親の内に居るはこれ假のやどりなり、妻として夫の爲めに命をすつること人の常なり、それは何故なればわが家の君なればわが身より重きを知ればなり。

こんな事、姑御母さんが云つて居られるこれを見ても、女は従順でなければ家は治まらぬ。

×

人は何でも勤倹の心掛がなければならぬ、勤倹と云つても、金銭を貯めるばかりが勤倹ではない、些細の物を忽にせぬと云ふのが真の勤倹、例へば、香物に多くの醤油をかけて殘したり、一度に食しきれぬ位多量の食物を取つて殘すといふ様な事はよく氣をつけなければならぬ、又細い切れ端でもよく皺を延ばして保存つておけば、一寸ほころびた時、わざ／＼大きな切れをきらずとも、それで用がたりる、抜き糸も整然と色を分けて揃へておけば、衣服の裏や、細々したものは、それを用ふる。座敷など掃く時にはよく氣をつけ、紙屑などあつたら、それは塵芥と別にして、紙屑籠へ入れ、まとめて屑屋に拂へば、積り積つて、却々大きなものを為す、又佛様のお花のお下りや活花のお下りなど捨てゝ了へばそれまでだが乾して貯けば、よい焚きつけとなる。これ等が真の勤倹です、吝な量見だと仰しやいますな。婦人たるものにこの心掛がなくてどうして家が治まつて行きませう女徳の根本は冥利を思ふ處ろに兆すのであります。

×

祖母さんが何日も仰有るには、いくら裁縫ばかり達者で、絹物や縮緬物がずん／＼縫へても、破損れた處へつぎを當てたり、細々した切をはいで、物をたんせいすることが出來なければ、上手とは云はれぬ、又生花も十人並に出來ても佛様の花の萎れたのに氣が付かず西洋料理などいくら上手に出來ても、病人のお粥の加減がとれぬ様では、一家の主婦として何等の價値も

ない人と云はねばならぬ、それと同じで、いくら藝事ばかりよく出來ても嫁してから、舅姑や、夫によく仕へ、且家を治めることが出來なければ、良妻とは云はれませぬ。

×

「女は人に仕ふるものなれば、父の家富貴なりとも夫の家へ往きては、其の親の家にありし時よりも身を低くし、舅姑にへりくだり謹み仕へて朝夕のつとめを怠るべからず、舅姑の爲めに衣を縫ひ食を調へ、夫に仕へてたかぶらず、みづから衣をたゝみ席を掃き、食を調へ子を育てゝけがれを洗ひ婢多くとも萬の事に自ら辛苦をこらへて勉むるは婦たるものゝ職分なり」。(貝原益軒)とあるからは嫁してはいくら、婢が多く居ても、舅姑や夫の世話は皆人手を借らぬ様に。

昔ある富豪の家にたつた一人の娘がありました。兩親は蝶よ花よ、とめで愛み、年長するに從ひ琴、活花、茶の湯、さては歌俳句に至るまで女一通りの藝を仕込み、兩親は家の娘ほど多藝な者は又と二人あるまいとほく／＼ものでゐた、或る時、その娘の誕生日に多くのお客を招いだ、その日の料理は皆、娘の手料理そして、座興に琴を調べる、和歌を詠ずる、俳句をする、もうあるとあらゆる藝をしてお客をもてなした、なみゐる多くのお客は只感心して言葉も無い位。するとその中一人の客が進み出て「さて／＼御當家のお娘さんは多藝で居らつしやる、小生只々感服の外は御座いません、この位諸藝に秀でゝ居らつしやるからにはさだめし、もみれうぢや、髮を結ふ事、人の脊を流すことなどもさぞお上手でゐらつしやいませうな、こん度はそのお手なみが拜見致したい」と云つた、するとその兩親は烈火の如くに憤つて「何を仰有る當家の娘は藝こそ習はせるが、そんな按摩や髮結や湯屋の三助に

するのではなし、又どんな事があつても致させませせんから、そんな技は仕込みません」と云ひました、お客は「いゝやさうでない、何も商賣をするから習ふと云ふのではない、嫁してから舅姑の肩をもんだり、腰をさすつたり、姑の髪を結つたり、夫の脊を流したり、することは皆人手を借らず嫁自身でせねばならぬ、それ故家に在る内からよく練習しておかねと、いざといふ時役にたゝぬ、御當家でも大切なお娘さん故、その位のお仕込はあらうと思つて一寸伺つたのだ」と云つた處、兩親もなる程と思つてそれから後は種々の藝の外にもみれうちや、髪結を仕込だといふ事である。



×

よく世間には女中が居付かないで困る困るつていふ人がありますが、それは使用かたが惡のです、少の過が有つてもすぐにがみ〳〵小言を云つたり、辱しめたりしては、どんな者も居付かない。過あらば、物優しく、云ひ聞かせ知らぬ處はよく敎へ導き、もし下女が裁縫が出來なければ暇を作つてよく敎へ、讀み書きが出來なければ、これ又自分の知れるだけは親切に敎へ何事も惠深くさへすれば、初めはよからぬ者でも、その有りがた味を感じ決して居つかぬといふことは無い

みよしのゝ夏えの川のかはよどに
蛙ぞ鳴くなるやまかげにして

このこゝろは、みよし野の川水はやく、蛙は水にすむものなれど、あまり水はやきところにはすみがたく、よどむ處にあそぶものなり、いはんや人のけばしきところにはすみがたきものぞといふこゝろに候（貝原益軒）

室内の裝飾といふことも、必要だが、座敷ばかりいくら綺麗にしても、臺所だの便所の隅に塵芥があつたり、押入の中が亂れて居たりして居ては、丁度上に美服をまとひ下によごれた肌襦袢を着て居ると同じ事。何事によらず人の目に付かぬ處へ氣をつけてするのが女の道。衣服、器物はなるべく一定の場所へ規律正しく納める樣。又體を自墮落にしつけぬ樣寢たい時に寢て、食べたい時に食るといふ風にならぬ樣。

仕事をしたら、後をふり返つて見ると、云ふことをわすれてはならぬ、ことに戸、障子など急ぐ時にはちやんと閉たつもりでも、二三寸開いて居ることがある。さういふことのない樣、に後をふり返つて見る。夜寢に就く前、自分は今日は朝から今までにどんな行をしたか、と思つてふりかへつて見て、もしも過あらば行を愼む樣、何でも自分で自分の行を愼む樣にせねばならぬ。

まだ〳〵教訓になる事はいくらも祖母さんから伺ひましたが何しろ記憶力の惡い私事故、さう〳〵はおぼえきれず……あゝ實に家の寶は老人です。祖母さんの教訓は實に貴重なもので、金錢や、一時の勉强を以て得る事の出來ないもの、それを坐ながらにして吾身のものと、することができるのですから、これにまさる幸福はないと思ひます。

お家に御老人の在す方々よ、よく〳〵お老人を御大切に遊ばせよ、老人は又と得がたき寶で御座います。



孝悌の道を守る女の日常

あをやぎ

汽車旅行と覺悟して暮す
日常生活（師の君の御言葉）

此處は片田舍の一小都會電話電燈の設備こそあれ。一體が保守主義の婦人が外にいでゝ會合する事はあまりない。だからそのお仲間にもれない私なども毎日毎日家庭の一小天地にくすぶつて、昨日を送り今日を迎へて。天から何を授け給ふやらも。分らない始末、なんて、いつてゝも、お天道樣にすまないから。ぼんやり物に感じた事を皆さんの尻馬にのつてをこがましくも記して見ませうか。

○

今年は何んて雨の多い年だらう。梅雨期にも隨分降つたし。八月には關東地方は大洪水。彗星の祟りだといふ老人の言葉あながち無理とも思へない。うちのお祖母さんが「神風のふくこの伊勢の國ほど好い處はないよ」とよく仰しやる度に。東京熱に、浮されてる、私は「何ですこんな處、ちつとも、好かあなくつてよ。」とませ返したが。他所は、やれ地震。やれ洪水と。大さわぎを、よくするけれど。此國には私が覺えて、以來、恐ろしい、天災に一度もあはない、何時も平然と暮してる。流石、大神宮樣の鎭座ましまし給ふこの伊勢の國。おばあさんが仰しやつたのも全くだと。今更ながら、老人の言葉がしみ〴〵と身にこたへる。

おや、また雨、嫌だねーなんて毎日同じ雨天をかこちながら。松やにも縫はし自分は勿論仕たてた冬物。積り、積つて。葛籠二つに收めた時の心地。何とも、いはれないほど嬉しい。これも雨の爲に、野山に遊びに行かれなかつた。から、手まはしよく、例年より早く出來たのである。もういつ木枯が、吹き出しても雪が積つてもびくともしない。この長閑けき心はこれ雨

の暇か

○

久しくふりつゞいた。霖雨も限りがきたかさらりと晴れた。山のやうに、積つてる洗濯物松に許り洗はすのも、氣の毒と。自ら襷がひ〴〵しく裾端よつて。洗ふやらゆすぐやら。やつと干物竿一ぱいにかけ渡して。見上げると、紺青の繪の具をとかしたやうな。秋の大空にはへて、白き浴衣が、ひら〳〵〳〵と、秋風に飄つてる。光景。往年、三越の新柄陳列會を見たのより心地よく感じる。お陰でお晝はどつさりたべて皆に笑はれた。

○

一體胃病や、腸加答兒など重症は、兎に角慢性のごく、輕い方なんか。少しお勝手にお立ち遊ばせとおすゝめする。テニスやダンスなんかの運動は、お姫樣御臺所ともいふべき、上つ方の、お遊びとして。今日、普通の家庭にては。炊事や洗濯等。下女任せにして、おかないで。自身手を下して、した方が、運動にもなり經濟にもなり。又人を使用するにも。自身經驗があれば。その呼吸がよく。分つてゝ柁がとりやすい。之れは私の實驗からみてもあきらかで。私も母が在世中は何もかも親まかせお孃樣然として。裁縫や讀書にばかり日を送つとつた爲か。始終胃腸になやまされ、病院通ひも幾度か。はては都の博士にまで、見て貰つたのでした。ところが悲しくも一昨年の夏のはじめ。ふと母上の無常の風に誘はれて。ゆかれ。一時は暗夜に、燈火を失ひし心地。深き悲歎に沈んでましたが。便を失ひ給ひし父上や。又親に別れた幼き妹弟のいぢらしき樣を見て人にもはげまされ我と我が心の駒にむちうち。

うき事のなほこの上に積れかし
　限ある身の力ためさん

と奮つて。我手にうつりし家政萬端覺束なからとつて以來二年有半。萬事。几帳面になりて、母樣の整理がよ

くしてあつたのを手本に。又御慈愛深き、父上の御指揮とて、まづ〳〵どうやら手落もなく今日までは、凌いできた。母様のみを便りにしてた身が一朝主婦代りとなつたのだから。實に日々心も體も休まる暇はなく。あれよ、これよ、と盡した甲斐には。胃や、腸の、わるいのは。何處へやら全く病は跡たえて仕舞つて實に壯健無比。これ偏に、母様が草葉のかげから守つて下さるのか。或は私の病根も持つてゆかれたのではあるまいかとおもつてる。

○

それから奉公人を使ふにも。母在世中は所謂第三者の位置だつたから。猫の眼。鷹の眼でもつて、女中や下男の缺點ばかり探し。少し氣に入らない時には「母様あんな者暇をおやり遊ばせよ、左もなくばもつとお叱言を仰しやつて下さい」なんて。我儘を言つたものだつた。すると母様が「人を使ふと思へば、間違つてる、使はれてるとおもへば。腹もたゝない。なるべく堪忍するものです。ならぬ、堪忍するが、堪忍。なる堪忍ならば、誰でもする。とは此處の事だよ」と。かんで含めるやうに仰しやつて。戒めて下すつたが。それでも御さらぬだに、ふくれた顔を、一層ふくらしてたが。今自身其の衝に當つて朝に夕に人を召し使つて始めて呼吸が分り。如何にも母様の仰せが御尤だつたとうなづいてる。妹などが、下の者に、あしくいつたりする時があると。返つて今は辯護してやる位。變れば變るものですわね。

又少しの切れの端や。何か母様がとつてお置きになるのを見たり。色紙あてなど、なさるを見て、まあ面倒くさい。ずん〳〵新らしい、物をおどりかへなされば好いに、など、思つたが。此頃は雜巾のつもりから足袋の修繕までもして、呉服屋の拂の少ない月は何となく鼻が高くなる。弟どもが、よく着物を破るので。友禪の入用に僅なりとも切端の粗末に出來ぬか事も會得し。甘かつたり、からかつたりした漬物の加減もどうやら此頃は手に入つたらしい。「千なりやつるひとす

ちの心より」とは全くですこと。

○

あんまり。壯健だ壯健だと誇つた報いか。二三日前から風邪の神に愛されてこまつてる。漸く少し心地が好いので。庭に面した六疊で靜臥しながら古い女學世界の增刊を出して貰つて見る、長い病氣はさておいて。負け惜みぢやないが。一寸の風ひき位は。たまにするのも好いなんて考へる。平生、忙しくつて、手に取らない書物なんか。見られるし、などゝ勝手な事をおもひながら、「壺すみれや」「糸すゝき」をくりひろげて見る。此頃の、女學世界の投書家とは、顔ぶれが大方ちがつてる、そりやその筈だわね一昔も前だから。……文體なども、内藤さんや、上原さんと、すつかり違つてる事。このお二人のなんか。いつもほんとうに花やかで面白い事は面白いけれど、昔の「はる風さんや。いさをさん。すみれさん。水橋さんなんぞのを。よむ方が、實があるとおもふ。岡田さん、實相寺さんの論文や。國文、御達筆だこと。敬服の外はない、……よく國文や、消息文に、御才筆をお振ひ遊ばした。大亦たか子様、もしや今の森たか子様、野菊様、ぢやないかしら、藤田いさを様と、お変りがあつたと。先頃、まぼろし日記。にお書きになりましたわね。だから、このお古い。投書家の方だらうとおもふの。たか子様と仰しやる方は。此の大亦さんの外には一寸見當らないわね——。違つてたら、御免遊ばせよ。藤田様宮澤様のお作。此頃時々、拜見するが。舊友にめぐりあつた様な心地がせられて實に嬉しい。どうか絶えず御麗筆をお振ひ遊ばすやう。誌上にて、拜見するのを、何よりの樂しみとしてをります。……ひよいと見たら、まあ、私の消息文があるわ。しかも選のうちにあつて。雨江先生の評まで入つてる。まあ今思ひだしても、嬉しい事。あの當時の事を思ふと、ほゝゑまずには居られない。家中持あるいて自慢をして。……嗚呼それが今はどう。たま／＼。投書しても沒書許り。屑屋さんの手ばかり煩はしてる。今日、この女學世界を出す氣

になつたのも。或は、神様が昔は、かゝる書も。とつた事もあつたぞよと、御諭し下さるのではあるまいか。……空想に耽つる枕邊の障子をあけて。松のきたのもしらずに居たら。お加減は如何ですといつたので、ピックリした、何か御用はといつてくれる。臺所の仕事のすきま、すきまに、度々きてくれる志。實にあだや、おろかには、おもはない。「情は人の爲ならず」裁縫など敎へてやつて、日頃自分の注意の屆くだけ、目をかけ



て使つてやる効は、現はれて實に嬉しい。暖かき、母のみとりをうける事の出來ない今の身では、この一女中の親切さへ身に泌々とこたへて。

おちふれて袖に涙のかゝる
時
人のこゝろのおくぞしらるゝ

といふ。古歌の場合とは、かはれ。病氣になつた時などよく人の情の厚薄はみえる。女中などの心のよしあしは殊に

○

うらの方で、花いぢりをしてたら、爺やが坊さんが只今學校からお歸りになつて。お姉様お姉様て呼んで入られますからと。いつてきた。側へ、行つて見ると鞄もかけたまゝで尋ねてるのですもの、どんな大事件かと、思つて、きいたら、何の用もないのですつて。私の影さへ見れば安心したのでせう。毎日歸るや否や私の側へ參るのが例で。だもんだから一寸姿が見えないとこの通り。まるで、母親みたやうですのね。併しこんなに、慕つてくれるのですもの不憫はます許り。徒らに、身の老けゆくのも知らずに暮すのも。こんな可愛い弟があるからですわ。「坊ちやんはまるで、お姉様の腰巾着ですのね」なんて下女や下男がいひます度に或は私があまり甘く、しやしないかしら、など又心配になりますの、両親が揃つて、居ないとどうもいけないやうですからね、併し。今ぢや二郎も三郎も、どく、學校の成績はよく。級長まで、致してますのよ、だから私の、一身位、どうなつても、この末頼母しい二少年を行末、立派な人におほしたてたいものだと。朝夕神に祈つてるのですよ。…夜は、二郎と、三郎の。例の、學校の自慢話。運動會の徒歩競走で、一番だつたの。算術が皆あつたの。お清書や、圖畫の、甲だつたのを。見せるやら。大賑い一日の淋しさを、すつかり忘れて。父様までお笑顔をおもらしになる。母様のないこの家庭に、もし、この二人の男子がなかつたらば。…「姉さん日本一の長い川は」てきく「信濃川」「きつとだね」「はあ」「ほら間違てる鴨綠江」はつとする「ぢやも一つ大泊て何處」又分らないけれど無鐵砲に「九州」で答へると「又ちがつてる樺太第一の良港だよ」と頂門の一針…こんな風に『負ふた子に敎へられ』刺載せられて少しは勉强もする氣になつてはげみます。實に弟はよき興奮剤となりますのよ。

○

花をうりにきた。ダリヤを五本かつたら、タッタ一

錢。まあ何んで安いんだらう。よくこんな價で賣つたものだと、つぶやいてるのを、父上がお聞になつて。だから一錢や、五厘位なんてだふつてくる位に。お前たちはおもつてるがなかなか、尊いものだよと仰しやる。如何にもその通りだと感心する

○

人情で妙なもので夏御客でもした時に豫定ほど人がこなかつて御馳走が澤山不用になつた時なんか平生ならば食べられるものを。それを食べなければならないなんて。おもふと胸がいつぱいになる。意地きたなのお話だけど、少し控目に、何かしてあつた時は、もう十分でももつと欲しいやうな心地がする、だから日々のお惣菜なんか。もるにしても、あまり、どつさりつけないでおくと、人が甘く食べるやうにおもふ。尤も用意に別にお丼にでも入れておく。賣り言葉に買い言葉、といふ事も、最も注意する事だとおもひますわ。友達など、外へ行く時。誘つて、



長くまたされたり。なんかした時。心から詫び言せられると。反つて氣の毒になるが。さもないと。何んだか、恩に着せたくなります。奉公人でもさうです何か粗忽をした時深く謝まりますと。可愛さうになつて、そんなに、心配しなくつても。好いよと慰めてやりますが。知らぬ顔してすましてると、憎くなつてきて。言はなくつて、好い位の事まで、小言をいひたくなります。だからかういふ處をよく擇つて．人とまじはつたら好いだらうと思ひます。殊に姑さんに事へなされる若きお嫁さんなどは御注意なすつたらよからうかとおもひますわ

○

ふと學校の運動會を見にゆきましてね。通學競爭ていふのを見ましたの、それは始め襯衣とズボン下だけで五六名出てきた。生徒が此處彼處に散在してる、制服や制帽。書物や靴を各々拾つて、ちやんと一切身につけて。走るのですが。もう決勝點についてる人もあるのにまだまご／＼と靴紐を結んでる者があるのですもの、手早い者と手ぬるい者とはかくまでちがふものかとおもひまして、ね。ですから何事でもよく心を落ちつけて手ばしこく取まはらねばだめですわね。

○

一體宅ぢやお祖父さんがごく嚴格で。時間なんぞでも、就床起床はいふでもなく、飯時より掃除に至るまで、きちんと守つてゆかないとやかましかつたのです。その上に清潔好きで。四角い處を丸くはいたりなんかしたらそれこそ大叱られでした。隨分、むづかしい方だわ。とよくかこちましたが。やつぱりお亡くなりになつて以來もそれがもう、家の風になつてさうしないと、氣がすまないのです。子供等なんぞが、毎夜七時をうつのを合圖に聲を揃へて「第一何々」とよみ始める度にその餘波ぢやないかとをかしくなるのです。

それから衣服の支度なんぞも、なるべく夏冬物を用

重し。冬夏物をしておくといふ風に、心がけてますのだから春の花見、秋の山遊びなんぞ。いつも心のびらかに、遊ぶ事が出來ますお宅は、何時きても、よくお仕まはりが出來てゝ。ほんとうに、お羨ましいと、仰しやつて下さる度に。故人がふきこんで殘しておかれた。家の風を倘更よく守つて感謝してるのです。

○

一寸品物を他家へ進物にした際。その後、その家の人から、禮をいはれるに。結構重寶お珍らしい。など並べたてゝ。いはれると、返つて痛み入つて。もしやあんな物を上げてわるかつたのかしらと返つて氣が惡くなるから。何でもそれ相應にいつた方が宜いだらうとおもはれる。

○

日々の生活三百六十五日の間には。そりや誰しも。悲しい折や。嬉しい時は。あるだらう。だから人生行路は恰も汽車旅行のやうで。喜ばしい時は。海岸などの景色のすぐれた處を過ぐる時。又悲しい時は、トンネルの中を進行してゐると、あきらめて居れば。何時か又光りかゞやく景色のよい處に出るからさう觀念して居れば。浮世は少しも、悲觀するには及ばないと訓戒して下すつた。都の師の君の、御言葉を。朝夕のよき敎として、守つて居ります。全くさうでせう。汽車でも、平坦なる、野原許り走つて居ると。少しも、趣味がありませんが。山あり川あり海ありてこそ始めて、旅行の樂みが味はれますわね。一寸東海道線にしても濱名湖畔の絶佳なる、眺望に醉ふてると。又長い長い金谷の隧道があり。薩唾峠をくゞつて厭な思を抱いてる間に次ぎに。興津から三保の松原、海ごしの富士の高嶺ものぞまれる。好風景に接しますからね。かう、覺悟して居ますれば、徒に歎きに沈まず。樂に耽らず。所謂、樂は苦の種、苦は樂の種、と觀念して。暮すのが、一等よいとおもひます。

厳しく育てられた娘の精神

楽しいホームの嫁の働き

白菊

八月發行の姑に虐待されつゝある氣の毒な嫁の告白者の柳田富美子様御同情申上ます、私も姑に事へる身ですがまだ〳〵貴女はお若くつて入らつしやいますわ失禮の言葉お許し下さいませよね、私は本年廿一歳の嫁の身未だ實際の社會と申す物も存じません、廿歳の春縁あつて當家へ嫁りまだ一回も貴女の姑様ほどの露骨な言葉は聞かされません嫁つてから出入の者の話に私で三人目、やはり御隠居様がやり手で皆三四ヶ月で追ひ出したと聞いた時の私の驚き一時はまあ何うしたらよいだらうと當惑して一日お暇の出たを幸ひ實家に行つて両親に話しました、父が

『ムーそれで三度目だからお前は何うすると云ふのかね？。』

と尋ねられて見ると何と申てよいか‥‥。

『お前丈は見事切抜けて見い、よい學問だ上手やればこそ私の娘ヂヤぞ。』と重々しい言葉、それで今更顔紅めて父様の眞心こめた敎を胸に自分丈は〳〵と心で誓ひ、喜び勇んで歸つた、嬉しい時の様子は顔に現はれるとさへ云ふ、私が絶えずニコ〳〵仕て居ればいくら難かしい姑様だとてさう〳〵不機嫌な事許りでもありませんでした。

富美子様と同じで朝夕の洋服の仕末の時は御機嫌が悪い、これではと思つて手早く片付け、お茶の時は姑様も御一緒に『姑様お茶が入りました』と申上ても知らぬふり遊ばすこともある、悲しい色をかくして『姑様もお出遊ばさなければいや、お早くよう』とあまへる様にして何かなすつて入らしつてもお手を引張つて參りますの『まあ此人はネン〳〵で困る』なんか仰り

ながらもそこはお年召した方だからお嬉しさうな御様子、話しなども姑様御一緒の折、良人とも相談いたす様、私の力のつゞく限り、隨分氣を遣ひました、私も縁あつて嫁つたもの、何うかして皆様の氣に入られて美しく暮したいとこればかり願つて居りました、時には寢る時分になつて「肩をもんでおくれ」なんて仰るそんな時はいやで／＼一寸も氣のりがせず二時間も三時間もお揉ませになる、アー此半分でも實家の母様に盡したなら何んなにお悦びかと、人知れず泣いたともあります、お年召した方はお肩などの痛むもの、これから毎日揉んで差上様と思つて「姑様少しお肩お揉みいたしませう」つて私の方から進んでいたします、二三十分位で「モーいゝよ御苦勞だつたネー」オホヽヽ隨分妙な物だと存じました、一年の後情が「奥様此頃御隱居様の御性質がお變りになりましたよ」つて申た時は私は自分で人知れずホコリました、お暇の出た折實家へ參つても、兩親に立派なお土産が出來たと存じたらほんに嬉しくつて嫁つた當分ほど氣も遣はず、姑様も「優や／＼」と心よく仕て下さる様になりました時には、たまらないほど實家が戀しくつて、父様や母様に逢ひたい事がしみ／＼御座います、手紙出したら、御返事が來たので母様は優に逢ひたくつてきつと呼んで下さるだらうと思つて見ると、「御身はもはや先様に遣はせし身、氣隨氣儘は深くおたしなみ相成るべく、一事々々日々の行ひは、此兩親が多年の教へ今漸く御身によりて現はれ居る時に御座候、されば親の教至らぬと申されぬ様、日夜それのみねんじ居候。

母より

お優どの

まあ母様も隨分、せめて／＼一言來よと仰つて下されば、お許しも頂けるものをと勿體ないけれど生みの母様を恨んだこともある。

或る日「優や」と姑様のお聲丁度髪を結んで居ました

が飛んで行つて「何か御用？」と伺つたら「明日にでも父さんや母さんの處へ行つてお出で」とのこと、夢ではないかと
「まあ姑樣ッ」
と思はず知らず
「何んだネー其聲は」ホ、、笑はれて自分ながらトンキョウな聲を出したと氣がついて耳の根まで紅くした位お暇が出た處で二日位、姑樣も御一緒なら長く遊べると何時の間にか横着な事を思つて「姑樣も御一緒にネー」とせびりにせびつて相談が



纏まり清に留守を頼んで姑樣と良人と三人で新橋に向つた折のうれしさ姑樣と私は實家の御兩親の心からのおもてなしを頂いて半月も遊んで歸つた、此間も良人が、
「優さんは處世術に妙を得て居るよ」ですつてホ、、。
「お陰で僕も此一年と云ふもの社に出て居つても愉快に仕事が出來る」と申された時は、誰れの言葉より〳〵嬉しく存じました。

近頃は手の足りない時は、姑様掃除も時々仕て下さいますし、嫁つて二年にもなりませんけれど、すつかり打解けて、先達も名古屋の伯母様お見えになつて、「優さんがおやさしいので、姉が毎度悦こんで來ます」と仰つた。

「良雄さん此頃は何うね？」と伯母様仰ると「ア御安心下さい、何時も滿月だアハヽ」と愉快さうにお笑ひになつたので「オホヽヽ」と姑様までが御一緒にお笑ひになつた。

「やつぱりね父様や母様の御教育がよかつたんですよネー、姉様」と仰つた時は心で思はず御兩親に手を合せました。

此頃は心ものび〳〵と何時も春の様な心持で暮して居ります、私が當家へ嫁つた前夜、父様の言葉を守つたに過ぎませんでした、糸が「お嬢様お召しで御座いますよ」と知らせに來たので父様のお部屋に伺つたら「優」と父様例の重々しい口調でお呼びになつた「お前の此度姑様になられる人は却々難かしいと云ふ事だ、長い間にはつらい事もあらう、悲しい事もあらう……が家族の機嫌一つ取れぬ者には私は育てぬ積りヂヤつた、日々の行注意に〳〵して此山本の兩親に恥をかゝせぬ樣仕てくれ、なー良人に不滿足な事があつたら優の最愛な夫だと思ひ姑様に心よくない事があつたら最愛な夫の親、夫を長い間育てられた方だと思へ。それから今一つ秘密ヂヤ、家の中の秘密は不和の始まりヂヤ、之丈始終守つとつたら何も心配するとはないぞ」と仰つた、母様がつゝましやかにお手を斯う組んでヂーツと優の顏を御覽になつて居らしつた夜のことが思ひ浮ばれます。

絶えず修養しつゝある少女

磯　栞

十六日　昨夜の風もすつかり落ちてしまつた、お座敷からずつと雨戸をくると、未だうら若い春の朝風が總身骨迄しみ込で來る、向の紅葉して居た城山も、冬枯の蕭條たる有様となつてはなか〳〵に今の春光に滿足しさうにもない、さすがに麓には淡い霞がうす衣をのべた様に棚引いて其間から東天紅と暁つぐる音がかすかにする、まあなんと好景色だらう。

あゝ自然、こんな景色に接しては誰だつて心が爽かになる、――あゝ廣大なる力――ニユートンは是を學術的に觀察して引力を發見した。

私は宗教的に觀察して言い盡す事の出來ない天賦の恩惠を知る、暫時、靈は天外を走つて遠く或物を慕て居た。

急いで食堂のお掃除をしてしまつて、母様のお手傳をする、お膳が出ると感謝の祈を父様が爲て下さつて御飯を戴く。

朝かたづけがすんでしまうと、先づ何よりも日課としてかゝさない聖書をよむ。

馬太傳の廿七章、此處はキリストの十字架の處、私共の罪の爲めに死に給ふた其血によつて私共の罪は洗はれて、潔い者となる事が出來た、あゝ、我生るに非ずキリスト我にありて生るなり、信じない者には無益であらうが、信ずる者の爲めには實に永遠の生命で、安心立命もこれによつて得る事が出來る。

母様は敏さんが來たので、裏で鷄の疱瘡におはぐろを付けて被居ると井上様が「先日は誠に有がたうございました、これを新しいと申しますから持つて參りました」といつてひよどりを下さつた、すぐ父様に御目にかけて「どうぞお上り下さいまし」と言つたが今日は急ぐからとすぐ御歸りになつた。

母様は「まあこんなに心配して、いつでもよく戴くから御招ぎしたのにかへつてお氣の毒だつた」と被仰

たほんとに井上様は好い御祖父様よ、どんな事にでも、悦で被居る、私も習いたい。

本田様と久子様から御手紙で來た、久子様の手紙のいつでもやさしい事實に愛らしい人、本田様のは例の人の事がくど／＼と書いてある、彼の人は私が居る時分から不可なかつた自分より以上の者にはやたらに追従して、以下の者にはもう鼻のさきであしらつて口も好くきかない、口先ばかしで一寸も親切がないのだもの。

自高くする者は低くせられ、笑裏刀を藏むの類、誰だつて心から交る友はありやしない、早くあんな習慣が、なほらなければ社會に出たつていけないだらう。以下の者にこそ好く爲なければならないのに、時々、忠告しても自分より好い者はないと思ふで被居るのだから耳には入りはしない。

あゝ女は女らしくなりたい、女らしい女は、やがて、妻らしい、母らしい者となつて、十分義務を盡す事が出來やう、然し女らしい女となる事はむづかしい、ややもすると女らしくない行をして後悔する事がたびたびだ、髪に金をかけ、衣を飾つてよしとするのではなく、從順を徳として凡の人に善を及ぼさなければならないと思ふ。

十七日、朝の食事をしまふとすぐ母様は、昨日火事に合ふた人の處に少しの金子と少しばかりの物を以て見舞に被行た、ほんとに可哀さうに見る間に家中一面に火となつてしまつた、火事もずゐぶん見たけれども、あんなに近くて凄い有様を見たのは初てだつた、それも或人が鳥を打つた火が飛で火事になつたのださうなとんだ災難でほんとに可哀さうに、知らない人だけれども、うつちやらかして置く事は出來ない。

私一人後の整頓をしてすつかり御座敷のお掃除をするずゐぶん廣いので却々だ。

近頃さはらなかつたオールガンをお復習する、習ふ時は却々の思ひでお稽古しても忘れるのはすぐだ、まして私の様な忘れやすいものは。

餘り暖いので南天を折つて入れた、霜に合ふてい

よいよ色をます此南天、人も困難に合つて、いよ〳〵人格を上げたいものだ、花壇にはビータルス先生が下さつたヴヰオレットが四つ許り咲いて居る、一つを殘して三つ小さいコップにさして机の上に置いた、あゝ此花を見ると常に先生の事を思ひ出す、いつでも親切に少しでも病氣だと自分の事のやうに思ふて心配して下さつた、そして氣高い恰此のやうに、愛の行は此の香の樣に心にしみて忘れる事は出來ない、先生は好お手本を示して下さつた、私は一つも取り處はない、けれども出來るだけ親切にしたい、キリストは敵の爲めにさへお祈りなさつたのに、私は好くして吳れる人に對してさへ怒る事が度々だ。



それ信仰と望と愛と此三つの物は常にあるなり、此中最大なるものは愛なり、實に愛は凡の德の帶である。

三時母樣の御手傳をして夕食の支度をする、むづかしい名のものを、秤で計つて造る學校で習つたお料理よりも、毎日事にふれて母樣が襷がけで教へて下さるお料理の方が餘程利益になる。

十八日、朝の中に少し勉強する、こんなに毎日〳〵何をするともなく暮してしまつては、さお入學試驗となると、大まごつきにまごつかなけりあならない。

御晝ご飯を戴いてから暖い處で母樣とお葉を拵へて、鷄にくづをやつて來ると、郵便の聲がする、日に二三度の郵便の聲が一番私のお尻をかるくする、父樣に二通と私に一通、「東山南枝」確に男の手跡だ、また從兄がこんな事をしたのだらうと思ふたけれども、なんだか字が違つて居る、開いて見ると從兄を依賴してある宮野樣だ。

從弟の有樣から學校の樣子、「近々御上京の由、何卒御立寄下され度、さもなき時は御恨みいたします。

昨日須磨に參りてこれを得ました、君の御出の節はアソコにコヽにと色々想像してはあるききました、いつも忘れられぬ御姿目のあたり見る日を待て居ります。」

終りに和歌が五つ六つ、そして教壇そばのスタンプの押してあるリボンが出た、讀でる中に手がふるへて、胸がドキ〳〵して來た、何も彼も一緒にして夕方火のどん〳〵もえてる中に入れてしまふ。

上京するなんて誰からきいたのだらう、從弟からかしら、だれが下車なんかするものか、私がそんなけがれた風に靡くと見えたのが口惜しい。

花中の君子は泥中に生えても潔白なものを、たとひ床しい姿はなくとも心は氣高く潔白でありたい、あゝ殘念だ父樣や母樣に面向けが出來ない樣な氣がする。

いつ迄思ふたとて消えてしまふ事でもあるまいし、人をせめるのはいけないし、あゝ我不關焉として居ませう、とは思ふたが、ムシヤクシヤするので、庭に出たあゝ可愛い、白菫が只一つ咲いて居る、この純白な壐いのをみても我が身が恨めしい、然し春の花園を飾る美花の美も、芳草の芳も裡に慘澹たる苦心があつて、初めて此處になるのである、艱苦を恐れてどうして美を競ひ芳を爭ふ事が出來やう。

あゝ人も色々な誘惑に打ち勝つて、初めて立派な品性を得る事が出來る、天父が私の信仰を試練して下さるのだ、とこゝまで思ふと今迄腹立つたのが恥しくてたまらない樣になつた。

夕食の後はいつでも一時間餘りも御話したり、笑つたりする、これが一番樂しみだ、父樣はよく昔の事を

きかして下さる、父様の小さい時の百分の一でも今あつたらどんなにいゝだらう、もし父様が長子であつたならばあんなにまでもならなかつたでせうとは、昔の出入り者の好く口にした事ださうな、父様は一人で苦學してやう〳〵今の様におなりなさつたのだ。



たとひ財産はなくとも父様や母様の御傍で眼に見えない寶を貯へて樂しく暮す事の出來るのは三千世界の富にもかへる事は出來ない。

夜は御客様、御座敷では大變に御話がはずんで居る私は母様と裁縫を御話しながらする。

友より得たる教訓

白　桃

前略さて何より申上候てよろしきか餘りお遠々しく相成り、おわびの申上樣もなき次第平に御許し願上候、當地に參りては別段親族とては一軒もなく氣樂には候へども其代りに遠方の親族其他へそれぞれ手紙にて挨拶いたさればならず、例の筆不調法とて日々手紙ばかり書き居り候ども今に盡き申さずつひ〳〵御返事延引と相成まことに申わけ御座なく候、今日は主人行軍の留守とて心も落着候まゝいまこそと其後の狀況を申述候、御存じの通り軍人と申せば一派變りたる者にて交際もなか〳〵むづかしく出入の人々も多き事とて心づかひのことばかり、別て出ぎらひ陰氣者の私、是れ迄が是れ迄とて俄かにかはりし境遇と共に萬事萬端激變を來たし毎日いそがしく暮し居候、しかし只今にては思ひしよりは平穩にて家内も至て無事娘達もよろしき方にて感情の衝突などもなく過し居候へば私に取りては此上なき幸福と喜び居候、かゝる事申せばあまり年甲斐なしとお笑遊ばし候半が今迄學校生活のみ致し參りし私とて萬事細かき注意を缺き家事向きの事など娘の方餘程上手にて日々背に汗する事のみ多く、なさぬ中とて一入心苦しく覺え申候、かく怖氣づき候ては何でもなき事迄が出來申さず腦に氣を取られて呆氣にとられし事など度々に御座候、理論よりも實驗の大切なる事はよく存じ居候へども斯く迄とは覺悟いたし居らず經驗の必要をほと〳〵感ずると共に娘持つ親は此邊よくよく注意致すべき事と存じ候、主人はとり分け性急の質に候へば何でも致し候事が「のろい〳〵」と申して叱られ居り候、凡てに機敏なる御許樣ならば、苦もなくやつてのけられ候半に、特別意氣地なしの私の事毎日あくせくするばかりにて何の仕出來す事もなく理想のホームもどこへやら眞に戰々兢々たる有樣御憫笑下され度候、所變れば品變るとやら言葉や料理法なども違ひ候ため時々大笑いたす事もこれあり候併しながらいくら難かしと申ても學校の勤務よりは矢張家庭の方餘程樂に御座候、我田引水の樣には候へども御許樣にも何卒一日も早く家庭の人とおなり遊され候樣願ひ居り候、下略

小倉にて　菊

靜子樣

菊子さんは三十で初婚した方です、卒業すると直ぐ敎師になつて九年間獨身論の主唱者でしたが十年目の秋元の先生の御媒介で陸軍少佐の處へお嫁になりました何でもお年が二十ばかりも違ふ上に先妻の子か二人あつてそれが年頃の娘でしたから隨分お骨であつたでせうが後生大切に辛い辛抱なされた甲斐あつて此頃では娘は二人共外へやりすつかり家庭を占領してしまつてうみのお子の敎育に熱中して居られます、と云ふのも全く忍耐の德、己を知ると云ふに外ならぬと思ひます．なまなか學問がよく出來たり容貌が美しかつたりしますとつひ氣儘が出て終りを全ふする事

が出來ない樣になりますのです。

靜子樣　私いつの間にか斯う年を取たのでせう、そりやあれ何時迄も若くて居たいけれど、女の生命たる愛嬌がなくなりました、何故て。今日、視學の巡視がありましたの。算術の時間に。是迄だつたら赤い顔をして何を云つたか分らない位に困つた私が今日は如何でせう。聲さへ變らず平氣で居れました。これでも女と云はれるでせうか、こんな事をして居ると中性になるといふのは眞實ですね、緣遠くなるのも最もですわ、けれどねえ男子の間に交つて居ると自然こんな風にしなければならなくなりますよ、馬鹿にされますもの、殊に此學校はねそれは〳〵男女の間隔が甚だしくつて、女など人間視されて居ませんのよ、口惜しいぢやありませんか、其れも其筈でもあります、六人もある女教師の中、先生らしい人格の方はありませんわ、毎日〳〵お粧りばかりして、男子の顔色をうかゞつて居る人や生徒の機嫌とりにかかつて居るのや、さうでなければ天下の學者は己れ一人と云はぬばかりの天狗か、何時も人生觀で持ち切りのヒステリー先生ばかりなんですもの、それでゐて競爭のひどい事々、そんなら其勢力を以て團結一致したら隨分面白からうと思ふのですが、一致するの助け合ふのなど望みもない事彼等は只己あるをしつて他は念頭にないのですから手の付け樣がありません。刈萱道心が見ましたら毎日六匹の蛇が喰ひ合て居るでせうよ。そして校長さんが又非常に感情家で、何でも彼でも感情で支配されるのですよ、だからお覺えの目度たい人はそれで幸福ですけれど、何かの間違で一度逆鱗にふれようものなら、もう浮ぶ瀬はありません。ですから毎日なか〳〵氣骨が折れます、何でも早く氣をきかせてテキパキ廻る樣にして、そして崇め奉つてさへ居れば天下泰平ですけれど。○○さんなんか御氣色斜な方でね、傍に居てもハラハラする樣な事を云はれてゐますわ。生意氣な事を云ふ樣ですが人に長たる人は感情も大切ですが、矢張理性の勝つた冷靜な頭の人でなければ公平に行かない樣に思ひます。

姉樣　　百合子

百合樣はまことに淡白なお氣性所謂男勝りの敏腕家でしたが惜しい事には世事になれぬ悲しさ交際が下手なのとちとお鼻が高過ぎたのとで何處へ行つても敵が多くあちらこちらと轉任して今に御資格丈けの地位を得られないのです中分のない方ですがあの上に忠告を入れる雅量があつたらと何日も殘念に思ふのです。



規則立ちたる我家の日常

勾當たう子

△早起　朝の一時間は日中の三時間にも價するものぞと幼き時より母の敎訓身にしみて短日の折は午前五時に日永の時には四時と定めて軒の雀より先きにねぐらを出づ。

△深呼吸　夫れより昨夜用意し置きしかまどの下にマツチすりて燃やし置きて、裏に出でゝ林と茂る木立の中を逍遙しつゝ深呼吸を行ふ、夜中吸溜し惡瓦斯を殘らず吐き出す如き心地して心氣の爽快いはん方なし。

△戸外掃除　未明の事とて通行の人もなければ誰に憚る事もなく竹箒とりて門前を掃除す、夏日は撒水も、お向へと兩隣の門前も序に撒で置く。

△嗽づかひ　かくする間に釜の湯のたぎりたるを鐵瓶にとりたる殘りにて嗽を遣ふ、宮仕へせしてふ祖母に幼き時より斯く躾けられし事とてしかせされば終日氣持あしくて不快なればなり。

△冷水摩擦　主人は床を離るゝや否先づお定まりの冷水摩擦をなす初めの中は御都合主義にて夏日にのみ行ひしも秋風のそよ吹きはじむれば兎や角と口實を設けて怠り勝ちと成りしが此の頃は習ひ性となりてこれも一日廢すれば何となく物足らぬ感じして北風さむき朝も諸肌押しぬぎてゴシ／＼と擦り居れり其の効驗著くさしもに風男とまで云はれし人のふつと風引く事なくなりしぞ不思議なる。

△歯の掃除　父なる人の三十になるや成らずにて總入れ歯のみじめさに懲りて幼き者にも朝は勿論三度の食事の後にも必ず楊枝にて歯を磨かする事とはなしぬ。

△朝拜　洗面終れば東方を拜して寶祚の無窮を祈り又神佛を禮拜して祖宗の恩惠を感謝す。

△室内掃除　潔癖の主人自ら其の任に當らんといひ給へど塵埃を吸ひたまふが厭はしさにこれは主婦の役目と定め、其の間主人は前栽の植木に水を遣りたまふ、縁廊下を拭うは少女の受持ちなり、但し雪隱は主婦の

擔任にして毎朝雜巾を掛く、嘗て某禪僧より雪隱掃除の功德を聽問して大に感じ、爾來毎朝缺かさず行ひしに、十日ならずして戸といはず床板といはずピカ〱と光輝を發するに至り、氣持ちよき事云はん方なく、爲めに大に勢づきて日課の一となせるなり。

△釜みがき　朝食を了りて主人子供等それ〱出で行きし後臺所の掃除をなし、必ず釜を磨粉にてみがく、銀を欺くばかりに白光りのするが心地よさに。

△裁縫と洗濯　鬼の留守に洗濯との意味にはあらで主人子供など在宅の時には成るべく齷齪と立ち働かぬ樣して共に語り、共に遊び、さて留守の間に洗濯なり、裁縫なりをなすなり、或人は洗濯日とて日を定め置きて、一時に多くを洗ふがよき樣云はるれども、妾が經驗にては洗濯は實にうるさく不愉快なる仕事なり、故に五枚七枚と澤山になればなるほど面白からず感ずれば、何にもあれ汚れし物は片つ端より洗濯して汚れ物を決してためざる樣なすなり、斯くすれば彼れを洗はねば洗はねばと常に氣苦勞になる事もなく、亦折角定めし日に雨など降れば又次へ延ばさゞる可からざるの不都合あり、なほ多く集め置けば終日それにて潰ぶるるの不便あり、サッサと一つ宛洗ひ置けば何の苦もなく而して御飯の殘りを揉みて糊薄らかにつけ置かば、汚れしまゝにて仕舞置くよりも幾層氣持ちよきやらわからず。

裁縫は女子の大切なる仕事の一なりと、子供の時より母に八釜しく云はれしにも拘はらず、其の技に趣味を持たず、あたら勉强時に他事にのみ多く時間を費して、怠りし罰はテキメン、家持ちと成りて後も、針持つ事のうるさくて、子供の單衣さてはおのが襦袢に至るまで、人頼みにせるが、上手なるは賃高く、さりとて安く縫ふ者に限りて粗末千萬なる仕立方をなし、此處も氣に入らず、彼處もさうでは無きにと、腹立たしき迄に氣合惡しけれど、然りとて己が手の動かざるを奈何せん、かゝる程ならば習ふべき時に今少し力を入れ置くべかりしにと、後悔の臍をかめども詮なし、たまたま卑しげなる人にても、上着と下着のゆきたけよ

く揃ひて、一分一厘のちがひもなく、又羽織の衿先などうまく反りて糊にて着けたらんが如き、キッパリと折目正しく縫ひたるを着けしを見れば、其の妻なる人の手際の推し量られてゆかしく、爲めに男のねうちさへも上がりて見ゆるに、ます／＼我が身の不甲斐なさを喞たれ、よしや八十の手習にもせよ今よりなりとも心掛けて上達せんと思ふと同時に、我が子にはたとひ何は措きても物縫ふわざのみは人並すぐれて習はせ置かばやと、切に／＼思ふなり。



△お八ツ　終日頭を絞りて職務に疲るゝ主人、五時間勉學に餘念なかりし子供の慰勞として、我が家にはお八ツを比較的御馳走するなり、世には間食の害を八釜しくいふ者あれども、經驗上大人も永き日には退屈するものなり、一椀の茶、一皿の菓子も大に元氣を恢復するものなり、空腹なれば勢ひクヒシンボウとなるを免れざるものなり、との斷案を得たれば、何がな珍らしきもの好みさうなる物を考へ出し

ては、こしらふるなり。

△復習。。。子供等の授業時間割を寫し取り置きて、歸宅後一時間隨意遊戯の後、約一時間を復習の時と定め置きて、其日々々の學びし業を復習せしむ。此の時には母は傍に在りて仔細に注意し、誤りあれば正し、忘れたるは敎へて復習を有益になさしむ、時によりては作文圖畫など題を課して自ら批評添削の勞をもとりやる斯くすれば多少打ちやらかしの家庭の子よりも成績よき樣なり。

△粗衣美食主義。。。金殿玉樓に住みて錦繡をまとひ山海の珍味に飽かん事は誰しも願ふところにして、しかも得易からざる處なり、然れば其のいづれを取らんか、おのれは京の着だふれよりもむしろ江戸の喰だふれに賛成すべきなり、昨日の流行も今日は陳腐とよばれ、姉のはれ着のお下りは妹の平常着にも値せざる此の頃の奢侈の風に從ひ行かん事、到底吾々微力の者のなし能はざる所なれば、世の流行界よりは超然脱出して、單に見苦しからぬもの體を失せざる範圍内に於てと制限を付し、一方食物にありては其の良否は忽ちに身の健康に關はり、活動力にも影響するものなれば、費を厭はず材料に注意し、料理に工夫して、家族の舌皷に陽氣を增さん目的にて美食主義をとるなり。

△按摩。。。姑の君年老いて足腰のだるきに苦み給へば、毎夜用事の終りて後、撫でさすり參らす、實際をいへばこれほど嬉しからぬ役は又となし、指は痛くなり、眼はねむくなり、隨分つらき仕事なり、され共いとほしの君を生み給ひし大切の母君なり、其の母君の喜ばせたまふことなれば、つらしとて何かあらん。

△帳簿記入。。。かくて最早十分なりよきほどに休めよとの命令の下りし後、おのが部屋にと退きて帳面付けをなす、其の種類は事々しく擧ぐる程にもあらず金錢の出納と日誌となり、出納簿の初めには前二三年の平均を參酌して各品目の一ケ月又は一ケ年間の支出豫算額を記し置く。嘗て聞く某資産家の老夫人自ら金錢出納と帳簿記入とを司り、たとひ五厘一錢のはした錢にもせよ、拂ひ渡す際には必ず先ず假控の帳に記して、

然る後金を渡され、決して先きに拂ふ事なしと、是れ其の帳落ちにならんことを恐れてなりといふ、これはど迄に綿密に金錢の支出に付て注意を拂はるればこそ今日の富を作り得られしなりと、おのれ大に感じて其の後は支出每に必ず假の控に記し置き、さて就寢前に右の如く品目分けて本記入をなす事に定めしなり、斯の如き記入法にすれば、唯一つの帳簿にて收入も支出もを記し得られるなり。



日誌は以前は罫紙の竪綴を用ひたり、蓋し縱らにても存分に長くも短かくも書けて便利なりし故なり、されども一兩年前より博文館發行の懷中日記を用ふる事とせり、そは携帶に便なると一日の欄内に極細字にすれば、大抵詳細に一日中の出來事感想等を記入し得られ、なほ不足なるときは別に補遺の欄の設けあり、又每日天氣溫暖の小欄もあり、至極便利になほ日々簡單なる格言までも知り得るが故なり。

この日誌につきては學校時代によく先生より勸められしかども、毎日〳〵起きて食べて働きて寢る、何の變化も面白味もなき事を時間と手間とを費して記すの要なしとけなして、來る日も〳〵も只無事々々とのみ書きたりし時代もありそれも、馬鹿らしき事よとて打ち止めたる事も多かりしが、不圖何なりしか感ずる處ありて、毎日缺かさず記入する定めとなしたり。

即ち起床の時間、作業の種類、出入の人名、用事の內容等一身一家に關する事は勿論、大は國家の問題より、小は昆蟲の動靜に至るまで、苟も後日參考の資料となるべき事柄は、洩らさず紙面の許す限り書き置くなり、何の益にも成らぬ事といひ給ふな、案外なる事が大に助けて成るものなり。

この二帳簿の外に己は境遇上の必要より、雁のゆきかひ、贈答ひかへ、雜誌往來等の帳を製して發信受信の年月日、姓名用事の梗概等の雁のゆきかひに記し、又贈答ひかへには先方の名物品の名、數等も控へ置きて、後日の參考となすなり、即ちお向へに出産ありたり、お歡びには何を贈らんかと思ふ時此の帳の三年以前の處を開き見て、オヽ左樣よ、花子の誕生の時にはモスの友禪を一丈貰ひたり、されば今度もおよそ其れ位の物にせんと直ぐに案のつく故なり。

△娯樂　姑も夫も陽氣人なり、似たもの夫婦とやら妾も頗る樂天主義なり、よく勉めよく遊べ、人生須らく大にたのしむ可しとて、主人は毎週一回圍碁會を我家にて催し、母上の爲には老人會を月の十五日と定めて先づ我が家を定席とす、さて奥樣連は同氣相寄りて一品御馳走會なるものを組織し、月々輪番にて席場に充て、各自新案の料理品を一づゝを持ち寄りて、互に料理法の研究をなし、傍ら氣散じをなすといふ會なり、老人會には親類知己隣家等の老婦人（時には男子の交ることもあり）たち其の日を待ちかねて集ひ來り、御一新前の懷舊談やら、孫自慢、達者自慢（たまには嫁女の穴さがしの出づる事無きにしもあらず）等に花が咲き、葉が茂りて、其の賑はしさいはん方なく、妾がもてなし振りのまづき料理にも、滿足の舌つゞみ打ち

鳴らして喰ひ、自慢におすもじの井戸替をせらるゝ奥様もあり、時には藝自慢の漿様ありていろ〳〵の藝づくし昔の娘御の今は誰にはづかし遠慮もなく、笑ひ興じ歎を盡して歸らるゝは、夜更て一時二時のころもあり、烏鷺の戰は主人が唯一のたのしみ、これも間取の工合と碁盤のあるとに因て、我家が定席となり居るなり、時には碁會に興じたまひて夜更かし給ふ事もあり、お客様は妾に用捨し玉ひて、奥様どうか御休み下さいと仰せらるれば、ナニ構ひ申せぬ、妻は夫の犧牲ですと平氣にてもてなす、そも〳〵女は人の犧牲として生れたものなり舅姑の犧牲、夫の犧牲、子の犧牲、此の犧牲がつらき様では嫁たり、妻たり、母たる事は先づ見合はすべきなりと覺悟をきめてかゝつて居れば左程迷惑ともつらしとも思はず、天は晝間暇なき妾に斯くして時間を與へらるゝならんと善き方に諦らめをつけて、太郎の洗濯物を縫へば、夜は氣分も落ち着きて、案外に仕事の捗るぞうれしき



さて又日曜其他の休日には、全家擧つて近郊に公園に散歩を試む、揃ひもそろひて遊び好きの家族よと、

人は笑ふめり、笑はゞわらへ、我には一の定見ありと澄ましたるものなり。

なほ月に一度位休暇の前日、藝題をえらびて全家觀劇をなす、我國固有の忠孝、仁義、節操等の諸德性の涵養せらるゝ事、芝居に勝るものなしと信ずれば、太郎も花子も連れて行くなり。

△知りたるを知らずとす　六十過ぎた私をいつまでも子供の樣に、何から何まで指圖をせねば事が運ばぬ樣に思ふてと、世話燒好きの姑をけむたがる人の話に鑑みて、妾は何事にまれ先づ姑に伺ひて其の指揮の下に事を處置す、交際上の贈り物、家族の衣服の模樣縞柄等より、日々の惣菜の鹽梅に至るまで、少し風のかはりたる物拵ゆる時は、砂糖加減、水の分量等、一々相談すれば、決してうるさげなる御顏はしたまはで、丁寧親切に敎へ給ふなり、茲に於て妾は常に思へらく、姑はむづかしき者にあらず、然るを鬼なり邪魔物なりといふは、こちらが間違へるなり、外出するにも夫婦手に手を執つて是れ見よがしにすまして歩き度きが故に、姑を邪魔物と見るなり、自分にばかりよき着物を買ふて貰はんと思ふが故に、姑の額に角も生ゆるなり妾は嫁姑の衝突は如何なる場合にも團扇は姑に擧げんと欲するものなり。

△お初穗貯金　金森先生の御話し承りし以來、收入の十分の二を即日郵便貯金になし、不時の事變の外は一切引き出さゞる事とす。

△徒歩主義　働き好きの御陰にて我が家族は頗る健康なり、隨つて健脚なり、至急を要する場合其他特別の事故の外は、五里以内の道は乘車せざる事とせり、一は心身鍛錬のため、一は經費節減のため。

△掛買無用　月末拂ひの約束にて品物を帳付になして買ふは不知不識冗費を重ぬるものなれば、現金の外一切買物せざる事と定む。

△訪問　遠き親類より近き他人といへる諺の如く、病氣災難等の折先づ聲をかけて力を借るは近所合壁なりされば珍らしきにつけ旨きにつけ分ち度きも近隣なりこは自然の勢然かあるべき理なり、されども婦たる者

己の里方にのみ厚うして、却て夫の親戚に薄き行爲のあるは如何にも惡むべき事なり、これはた故意に然するにはあらざるべけれど、夫れが爲に大切なる家の親族と疎遠になりゆくは大に慨かはしき事なり、されば妾は夫方の親類へは勉めて贈遺訪問等も繁くなさんと心掛く、無沙汰の爲に大病人のあるも永く知らざりしなどは其罪輕からずや、たとひ道は遠らとも手數はかかるとも四季折々の訪問は元より、到來物の分配饗應の案内等先づ親族をさきにするなり。

△玩具に注意　粗服主義なる事は前にも云へり、頑是なき小兒に美衣を纏はしめて母のほこりとなすは笑ふべし。又子供をして虚榮心を增長せしむるは恐るべし故に學校時代の子女には粗衣に馴れしむべく、其の代りとして能ふ限り德性を涵養し、智識を啓發すべき玩具類を供給し度きものと東京などに幸便のある時は常に新案の玩具を注文し遣るなり。

△寧ろ鷹揚に育てん　子供に金錢を扱はしめ、勘定高くならしむるは考へものならずや、内のお掃除をなせしとてお金をねだり、鷄飼の手傳をなせしとて其の卵の賣しろを己の專有に歸せんとするが如き、利己主義に陷りやすく、又他人の所有物に對して用も無きに價を問ひ、或は價ぶみをなす等、野卑に傾くの惡あり、經濟思想なんどは馬鹿ならざる限りは、大人になるまでには相當に發達するものならずや、されば兒童は金錢に對しては頗る淡白に無邪氣に育つるの方針をとり居れり。

△かづけもの　古く召使ひたる下女下男など舊恩を忘れず永く出入りするは美はしき心掛なり、されば訪ね來る每に必ずあいそよくもてなし相當の馳走は勿論家つとの一二品は持ちかへらしむる樣なす。

△物のおき處　夜半に燈火の必要起りても、マッチをはじめ、ランプの所在等一定ならざる時は大に困るものなり、さればマッチは枕の抽斗にランプは枕元の横にといふ如く、其他何品にまれ必ず一定の場所に置きて使用するときは、いかに急ぐ折といへども必ず元の處に仕末し置くの習慣を造れり。（完）

日常感謝の心掛

登志子

只讀んで口でおしやべりする丈ならば誰にだつて譯はありません。併しそれを實地に行ふといふのは却々です。又自分で實行してこそ初めて價値が現はれるので。即ち何によらずいゝと聞いた事は今直ぐ其場からやつて見なければいけませんのです。其中にも私はあの「衷心より滿足して自己の運命に服從する」つていふ詞程　生活上適切な教訓の意味の廣い語はなからうと思ひますね。そりやどんな人にだつて缺點や不足をさがし出せば澤山御座いませうけれど。神樣でない限りさう十分にゆくものでない。之が自分に天から授かつた運命だとあきらめて。それが假令どんな苦しい境遇であつても。心で感謝していつも愉快に暮らしてゆく。かような人程世に幸福な方は御座いますまい。富貴も權勢も財寶もあればいゝにはちがひ御座いませんが、肝腎の自分の心が常に不愉快で不滿足であつたらば如何でせう。身には綾羅をまとひ大厦高樓にすまつて。出づるに馬車あり何爵夫人なんて世間から羨まれて居る身分の人でも。さう滿足して居る人ばかりぢや御座いませんね。上にもやはり限りがありませんからね。それかとて九尺二間の裏店にも近所からスヰートホームと羨まれ狹くとも自分の樂園と滿足してる人もあります。つまりこゝが複雜な世の有樣ですわね。まああの方はあんな病氣で可哀相に。もうあと一年よりもたない。半年より活きられないのだと人の目から氣の毒がられて居る人でも自分ではいつも心に餘裕があつて之が私の運命だ。まだ〳〵不幸な人も澤山ある。病氣になつても養生の出來ない人もあるのに。自分はこうやつて贅澤に攝養してゆかれるのは。天に向つて謝せなければならぬ、生れて廿幾年何のなす事もないが。

假令今死んだとて過去に省みて自分の行爲に一點のやましい所はない。尙此上も出來る丈攝養し人事を盡して天命を待ちませうとこう考へますと、傍の健康者から見る程も不幸な人ぢやないのです。又斯やうな淸い考を持て居ますと自然不治といはれてる位の六ケしい病でも。いつかよくなる事があるのですね。つまりどんな不幸な場合でも。其人自身で幸福だと思つて居るならば。傍からどうする事も出來ないのですからね。世は樣々と申のですよ。

だから五年の間螢雪の勞をつみ。業成りて。はえある卒業證書を頂戴し。私こそは天晴れ明治の才媛よと得々として母校を出づる諸孃も。一朝社會といふ海に船出しますと。見るもの聞くもの一として今迄敎へられた通りのものはなく。あたら理想のスヰートホームも家庭の改良も。片つぱしから思ふやうになりませんので。玆に初めて歡樂の夢はどこへやら。忽ち失望の淵に沈み。空しく煩悶を重ね。甚だしいのはヒステリーになる方さへもあるのですが。どうして世の中といふ者はさう四角四面な單純なものぢや御座いませぬ

一通り女の道も敎へられ。而して自分にはよほど堅い決心を以て嫁いだ私ですけれど。それでもやはり今から思へばだめでした。夫と只二人の家庭でさへ妻となつたからには。それは〳〵今迄思ひ及ばぬ苦勞が澤山御座いますもの。況して舅姑や他の家族の多い家庭でわね。

生家に居る間には。假令どんな事を致しても。自分の責任といふものは誠に輕いものですし。又いけなければすぐ敎へてくれますが。一家の主婦となり社會の一員となつた限りには陰で笑つても、人は却々申てくれませぬ。それッとて女のたしなみ心得べき事を一々夫に尋ねる譯にもまゐらず。種々の問題は時々刻々に。自分の前に横つて來ますし。まあ一たい之をどんなに

處置すればいゝのだらうと思ふ時が幾度あつたかしれませぬ。殊に日に進み月に開けゆく只今ですもの。先月習つた事も今月はもう既に間に合はないといふ有樣假令學校を出る時に秀才であつても才媛であつても。二三日新聞を見なければ。もう舊式な人間とならねばならぬ位に。發明や改良が日毎に現れて來ますので。いつも心に油斷なく修養をつんで時節に後れぬよう。又品性を落さぬようと心掛ねばなりませんのです。

△他人の感情をも害して　決行する場合

あの貞操と申す事は女には尤も大切で。若年の時代には誰でも貞婦の美名をかぶりたい。不貞の女なんてたれがなるものかと思ひますでせう。けれど或場合に望んで其とるべき所置のほんの危機一髪で善にも悪にも別れますので其刹那よほど愼重の態度を以て平素十



通天橋の紅葉

分修養をつんで置きませんとしらず〳〵に思ひもよらぬ境遇に傾いて。後悔せねばならぬ事がないとも限りませぬ。一寸例を申ますと夫が要務を帶びて不在中に。あいにく下女も居らず只一人の時。平素兄弟もたゞならぬ夫の親友が自分の宅をたどつて遠路わざ〳〵尋ねられたとします。そりや親切に勞はつてもてなすのは當然の事ですが。それがもしも夕方でゞもあつて。宿泊を頼まれたならば如何でせう。夫の在宅の折には無論家内同様、宿泊もし。笑談もいひ合つた中ですから。交際上から見れば御ゆるりとお泊り下さいといふのが普通で。それには何の不思議も御座いますまい。尚又夫が出立前に既に其友人が來るといふのを承知して居つたならば。きつと泊めて上げよと申付られたに相違御座いませぬ、併し一方を考へて見ますと肉身の兄弟といふぢやなし自分の心にやましい事はないにしても無教育な近邊の者の口には戸がたてられませんから。萬一誤解を受けた場合にはとり返しがつきません。學校ではこんな問題は習つたことはなし。どうすればいいだらうと一寸まよひますが。此場合にです、義理といふ二字をすて。而もいくらか人の感情を害して迄。自己の貞操をよりよく全くする爲に。きつぱりと宿泊を斷る丈の勇氣ある婦人果して幾人御座いませうか。かやうに申せば甚だ來客に失禮で。もし宿泊すれば貞操を全うせぬかのやうに聞えますが、決してさうではありません。李下の冠瓜田の靴といふのはつまり此事なので。假初にも夫ある身はいつも此邊に周到な注意を要する事と存じます、私はかつて此樣な場合に巳を得ずお斷いたし而して夫が歸つて話しました所大層叱られましたが其叱つて居る詞の中にも一方ならぬ滿足が。ほの見えるのを感じまして。あゝ自分の處置はあれでよかつたのだと悟りましたのです。かふいふ時には先方の男子が既に氣をきかせて。注意してくれな



品川海晏寺の紅葉

ければならない筈ですが。悲い哉。當今二十世紀の日本男子の貞操の程度はまだ〳〵そこまでは進んで居ませぬ。立派な妻君のあるにも關はらず賤業婦に戯れたり。而してそれをあまりに人もあやしまなければ御自分も得々としてるといふ世の中ですから此過渡時代の婦人は萬事によほど。強い決心を以て自分の貴い寶を守らねばなりません。それかとて朝鮮のやうに。男女七歳にして席を同じうせずなんて。そんな呑氣な事をいつて居る時では御座いませんから。此確固たる貞操の心を奥深く包んで。其上では時節につれ境遇につれ男女交際それもいゝでせう夫の名譽を害せぬ限り、自分の良心にはぢぬ限り、又世の人の誤解を受けぬ限りに於て。汽車や電車の乘客中。殊更自分の隣にくるものあれば席をひろめてやるもいゝでせうし。又美貌の方ならば世の浮れ男等迂回してまで自分の後ろについてゝも來るならば。十分羨望の的となつて。彼等をな

やませてやるもよろしいです。あの眉根の下つた。よだれでもたらしさうな顏をして、一生懸命に眺めて居る男子に。すまあして一瞥をくれてやるのも女としては隨分いゝ氣持のものです。

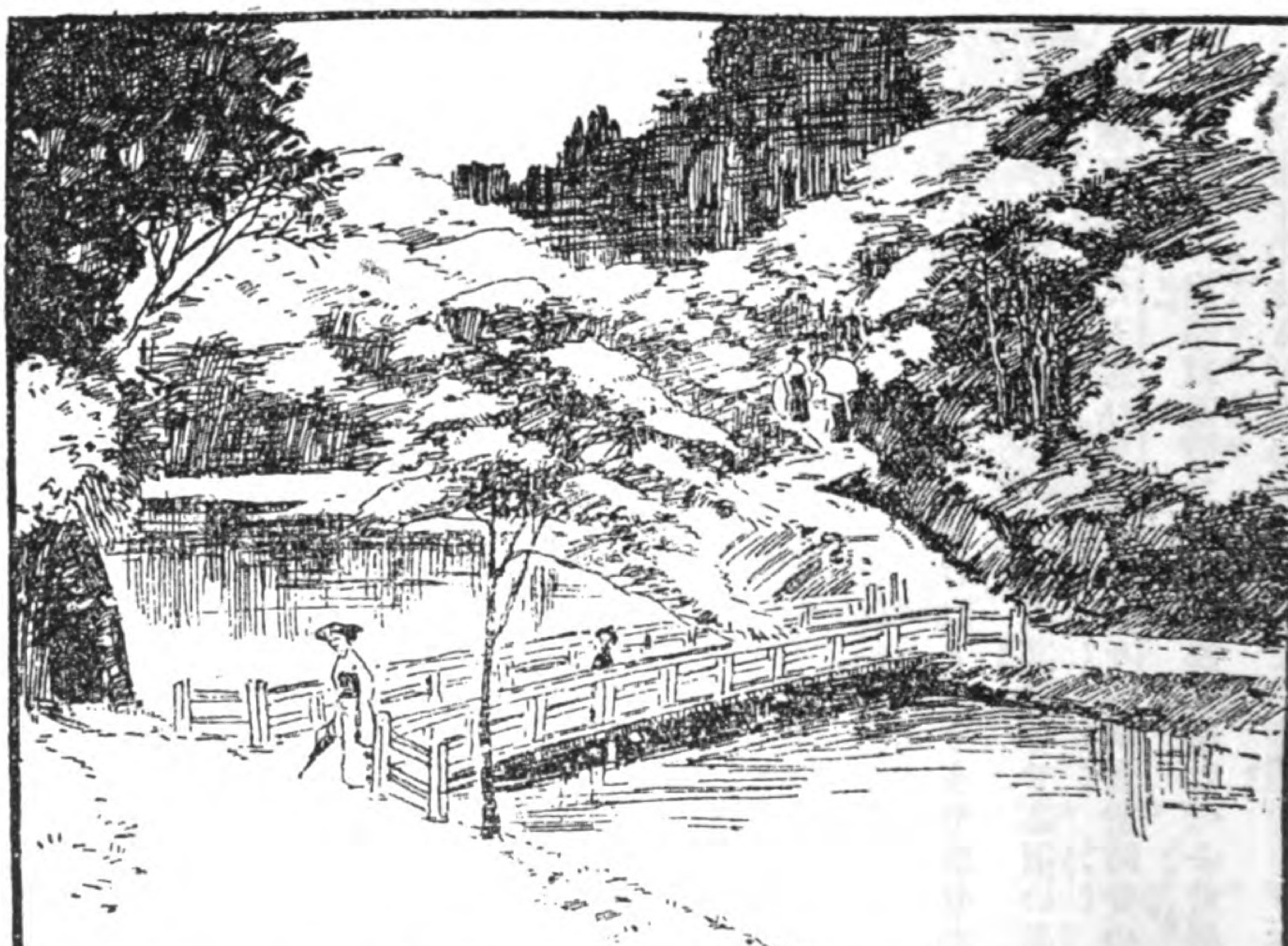
△臨機應變の智慧を働らかす事

私が最初一番困りましたのは。どんな事でもある一人の女子の知つて居る事は凡ての女子も皆知つて居り殊に自分の妻は何でも出來るものと堅く信じて居る夫の心でした。裁縫料理は申す迄もなく生花茶湯琴曲造花編物洗濯張物等。そりや一通りは心得て居ますけれど。今朝買て來た反物を午後に外出するから今すぐこゝで着るやうにしてくれ。之はまあ單物の事でしたから及第しましたが。ミシンの機械のないのに。手で以て早く機械縫をせよ之にも一寸困りました。併し普通の物は今まで見た事も御座いますから可成出來ますけれど。特殊の職業や何かによつて嘗て見た事もない品がいくらも御座います。それらのつくろひ。又其形の物を作れと申されますと一寸面くらふ事が御座いますが必らず出來ると信じてる人に出來ませんなんて申ますと失望しますし。またそんないやな氣持をさせたく御座いませぬから。以前の品をとくと見て。ゆがみなりにでも作ります。するとそれが假令不出來であつても。そこは男子ですから氣がつきませんで。滿足して居ります。だから自分は裁縫は之丈出來る編物はこれこれ出來るといふて決して滿足は出來ません。どんな要求をせられるか別りませぬのですから。其時に何でもすぐ心よく承諾出來る丈の應用の才がなくては。將來夫に滿足を與へる主婦とはなれませんよ。

△經濟上の敎訓は七輪の火より

それからあの經濟の事ですが。之はどうしても生活

とはなれられない問題で。入るを計りて出づるを制する。口で申せば之位の事は何でも御座いませぬが。實行となりますと。却々どうして。殊に虚榮心の強い女の身にとつては。よほど決心を要します。尤も父祖の餘慶で。多くの財産を持て居られる方は別として私共のやうに獨立獨行で一家を作らねばならぬ身には十分注意をしなければなりません。それもあの山の中の一軒家の。さうでなくとも交通不便な村でゞもあつて。文明の樣や都の風を知らぬ境遇ならば兎に角。都會の眞ん中に住んで居つて。隣の奥樣も向のお神さんもダイヤの指輪やお召の着物に流行の粋をきかせて居る。それを明暮に見て居ながら。自分ひとりあきらめると申すのは中々容易な業では御座いませぬ。けれど將來幸福にならうとも又不幸にならうとも此最初のやり方一つで定まるので。殊に人に與へられた萬金よりも自分で作つた十金の方より多くの樂しみがあるといふ詞



瀧の川の紅葉

もある位ですから。假初にも人と對等の權利を以て。將來發展しやうと望みますならば。其忍び難きをしのび、あく迄も人の助力を仰がず。夫と協力一致して忠實に家政をとらなければなりません。私が毎朝七輪のお火をおこす度に丁度一家の經濟も之と同じだらうと思ひますね、最初少しのお火の時に一寸油斷しますと。すぐ消えて幾度も〳〵やり直さなければならず。夫が出勤の時間は容赦なくせまつてくるのに。お火もおこらなければ從てお湯もわかない。まあどうしたらい〻だらうとをしまひには團扇でばた〳〵いはせながら泣きたくなつてくる時も御座いますが。尤も之は自分が不注意なからで最初少しのお火の時に十分注意して油斷せずに。すつかりおこし切つてしまつたならば。假令四つや五つのお火をとつたからとて。又殊更に消さうとしたつて却々きえるものぢや御座いません。こちらで用をして居る間にお湯もわけば物も煮られます。人の財產も之と同じ道理で最初は却々困難の樣ですが其間を無事に切りぬけ或程度迄作り上げましたならばそれからは利に利を生み。さう節約をせずとも安樂に生活が出來てゆく樣になるのですね。其上では身分に應じ境遇に應じて流行の品を作るもい〻でせうし少々贅澤をしたつても少しも差支がなくなるのです。

△家々の風習によつて
異る衣服の經濟

近頃いろ〳〵と經濟法の書物や雜誌が出來まして。かうしなければいけない。私はかういふ事はしないといふ風に書いて御座いますけれど。そりや幾分參考にはなりますが。誰もかれもすぐ其通りせよといふのは無理な注文だと思ひます。皆家々の風習や時々の身分に應じて。計らはねばなりませんからね。一寸吳服を買ひますのでも。いつも木綿着をして居つて。たまた

ま絹物をつけるといふ程度の人は同じ銘仙を買ふのでも成べく品のよい少々價は高くとも。きずのない永久に保存出來るものを買ひませうし。又銘仙を平常着にしてる方は。そんなきずのない高價な品よりも。あの見切物といつて呉服店で柄のすたつたのや。少しの所にきずのあるのを安價で賣出しもすからそれを買てきすは衿に入れるとか。しゆみの所は下がへの衽にまはせるとか工夫して縫へば。安價で體裁もよく。翌年は

箱根權現の紅葉



すぐ洗つてしまふのですから。どれ丈經濟になるかしれませぬ。私共は安價な見切物は損ですから買ひませぬ。價が安いからつて不用の品はいりませんなんて。仰る方も御座いますが。それは男子の申される事だらうと思ひますね八尺入用の所へ一丈三尺の安い品をとつて。殘りの五尺は致し方ないからつて仰るのですが。どうして五尺あれば子供のものでも縫へますし。又下女の心付にでもなれば一寸手土産にお菓子の代用

にもなります。物事は考へて致しますならば。一寸の切、一尺の糸も決してすたるものぢや御座いませぬ。だから私は年に四度の賣出しには必らずいつて安いものは今不用でも買置します。そりやもう見す〳〵いらないものは殊更に買ひませんが。それでも相當にお交際してますと。隨分毎月お產のお祝物なんかかゝりしませぬからね。其時々に呉服屋を呼んで買ひますならば。モスリン一丈だけでも一寸いゝのですと一圓五六十錢はかゝりますから。あの賣出しの時に絹ばかりの反物一反四圓たらずで。比較的柄のいゝ。坊ちやんでも孃ちやんでも間に合ひさうなのを買つて置いて。二軒なり三軒なりに差上ますと。貰つた方も悦びますし。同じ直段で。よほど體裁よくも見えますからね。

△日常の些事に就ての心掛

近頃今一つ困りますのはよき下女の少ない事で。之にはどなたもお困りになつてるらしう見受ますが。凡て物事はさう十分にゆくものぢや御座いませぬから。之も大抵の所で、あきらめるといふのは肝要ですわね。それかとてあまりやりつぱなしにしてもいけませんがくだらない愚痴はあくまでも愼まねばなりません。あの山出しの下女なんか何も別りませぬから。教へられた時には。よく別つた様な顔をして居つて。跡でいつて見ますと思ひもよらぬ失策をして居りますとね。もう取返しがつかず。ほんとうに腹が立ちますけれど其時には宇宙の廣大な原理をよく考へて今致した失策はほんの一分子のまだ〳〵分子であるからと心をひろく持てゆるしてやらねばなりません。そんな小さな事をいつ迄も數へて居つた日には。自分の修養の時間もなくなりますし。ます〳〵心のせまい人間になつてしまひますよ。兎に角事に望んで動せず驚かず。貞操堅固にして誠實と潔白と熱心と而して健康と之丈あれば。

婦人ではまあ十分ですわね。そりやにごつた世の中ですもの。自分には清い心を以てした事でも人の目からはやはり。間違つて見られる事がないとも限りませぬ。併し其場合にもです、自分の心さへ潔白なれば。「人はいはんと欲する所をいひ我は行はんと欲する所を行ふ兩者果して何の關係がある」といふ位の勇氣を以て「心だに誠の道に叶ひなばいのらずとても神や守らん」との誠實なる堅き決心を以て「うきことのなほ此上につもれかし限りある身の力ためさん」といふ忍耐の心を以て而して柔順に夫に仕へ家政をとつて行きますならば、どんな場合。どんな場所でも終生愉快に樂しく暮らせる事だらうと思ひます。

貴婦人の化粧日課

佛國の交際社會にて時めけるさる貴婦人の化粧の日課に曰く安眠時間深夜入時間睡眠は美貌に尤も大關係あり睡眠不足すれば皮膚の色彩光澤を損じ、眼光鈍り、言語爽かならず其他いろ〳〵の故障あり故に安眠は美貌の第一要件なり

朝は床の中にて珈琲を呑み、一寸顔を洗ひ、微温湯の様の湯に三十分間ナタと浸り、湯の中にて牛乳で顔を洗ひ、浴後二十分は徐かに沈着いて居り、これより鏡臺に向つて髪を直し丁寧に化粧し着物を着かへるそろ〳〵正午に近く、良人の歸宅を迎へて共に食堂に入り中食を爲す午後は來客の應接又は訪問に費やし、午後六時晩餐を取り食後二時間ばかり室内遊戯等をなしそれより精神の修養の爲め聖書を讀む就寝前には鮮血滴る牛肉をもつて顔面をこすり其儘安靜に眠ることれ貴婦人一日の化粧の日課なり。偶々訪客ありて、この貴婦人の化粧日課を見、まあ貴女は如何に綺麗なのがお好きなればとてよく斯んな面倒な事が出來ますれと問ひければ、貴婦人曰く、實に面倒です、私も或る場合にはいやで〳〵たまりませんけれども折角親から譲られた美貌を永く保存するのは子たるものの義務ですから、此の位の面倒は仕方がありません、どんな綺麗なものでも手入をしなければ塵もつもり、光澤も失せます、又斯うして自分の美を磨いて終日營々として外の務めに勞れて歸つて來る良人の心を愉ばせる慰さめるのは妻たるものゝ務めの第一だとおもつてなりますそれから世間の多の人も私の美によつて、どの位目を喜ばせて居るか分りませぬ。美を保つは自分獨の爲めでなく、矢張公衆の爲めでありますと流石は見識の高い、抱負の大なるところはこの言葉にあらはれてなります。

婦人の帯の締所

▲此間某新聞に婦人が俯向き勝になつて姿勢の好くないのは婦人の帯や袴があまり上過ぎるからである、成るべく帯や袴は下の方（腰の上）へ締めよと云ふ某氏の説が出て居たが、これは到底行はれ難い説であると思ふ、婦人帯を腰の上あたり現在の普通より下方に締めた恰好は何うであらうか、恐らく見好いものではなからう、婦人の衣服は或程度まで其人に拘束を加へるものでなければ何の様に實利實益があつてもなか〳〵輿論が之を容れない、歐羅巴などでも婦人のコルセットは衛生上有害である、又は婦人が長く裾を地に曳いて道を歩くのは黴菌の附く恐れがあるから、裾は短かくしなければならぬ、と云ふことを喧しく唱道しても、一向行はれない、要するにこれは理想に止る事である。

▲婦人の俯向き勝ちの姿勢と云ふものは、帯の爲めと言ふよりは、寧ろ衣服の前のひろがるのを懸念すると云ふ方に關係が深からうと思ふ、それから又平生家の内に在つて坐ると云ふ習慣が、大變婦人の姿勢を俯向き勝ちにするやうである、其外婦人は幾分か恭謙の態度を示す爲めに、俯向き勝ちになるもので、婦人の姿勢は其心理上からも説明し得る點があらうと思ふ、且つ又帯を現在の處に締めても、胃の工合を惡くするとか、消化を害すると云ふことはなからうと思ふ、そして帯を下の方に締めるといふ事は婦人の姿勢を好くする原因となるとは思はれぬ、其他にも帯の位地と云ふことはさして衛生上に影響ありとは思はれない。（醫學博士田代義德氏）

不智不識の禍

越智村雨女

△悲慘なる教訓

私は世の中の美談を數知れぬ程聞かされました、そして唯善い事をなせ、善い人になれ、斯んな婦人になれと積極的に敎へられました、そして自分でも立派な女にならうと努めました、けれども消極的に身の破滅から免かれる適切な方法――斯んな場合には斯うせよと云ふ風にはまだ敎へられませんでした、いえ、敎へられても印象を殘さなかつたのかも知れません、實際限りなき運命の惡戯に對する適切な方法は無いのでせう而も私はこの『善い事』をしやうと思ふた爲に却つて取り返しのつかぬ悲慘な境に陷りました。

世の中に路傍に蹂躪られた愛ほど悲慘なものは無いと西歐の詩人が言ひましたが實際に經驗した人でなければ其の眞相が解りますまい、誰しも棄てられると知つて戀する人は有りますまい、又、戀する積りで戀する人も少からう、自然なる戀よ戀！ 許多の靑年男女はこの巧妙な運命の手に飜弄されるのです、そして之が爲に苦い敎訓を得るのです、けれども敎訓を得たと氣が付いた時はもう碎けた璧を抱いて彷徨ふ者の如く――私常も自分を碎けた璧に准へて居ります――二度と取り復しのつかぬ事であります。

△美しい感情に倶ふ危險

私が嘗て京都の女學校に居た時分の事です、當時私は熱心な耶蘇敎信者でした、寄宿舍に居りましたが或朝起きて見ますと昨日机の上の一輪挿に挿して居いた朝顔が咲いて居りました、濃紫の天鵞絨の樣な花瓣を私は熟々と觀入つて、明日爐に投げ入れらるゝ草をも斯く裝はせ給ふ神の恩惠がこの一輪の花にも遺憾なく現はれて居ると思ふて敬虔の念に打たれた事がありました、その當時私はロングフエローのテニスンの詩を讀み耽つて居りましたので、寄宿舍の窓に凭つて西の

空に輝く星を覗入つては天上が戀しい樣な淋しい樣な感に幾度も打たれました、御苑の銀杏樹の間へ落ちて行く落日を眺めては、彼方に「輝ける國」があるかの樣に種々な空想に耽りました、私には今も尚其當時の心持が歷然と記憶に殘つて居りますが、實際乞食を見ても貧民を見ても耐へ難きまでに同情を感しました、

誰方でも程度こそ異なれ、一度はこの美い感情の時代がある事と思ひます、こは崇高な理想に憬憧るゝ靈の發露したものだと思ひます、曠野の樣な今の自分の感情から昔のこの美しい情緒を辿つて行く時に云ひ知らぬ憂愁を覺えます、然しこの美しい感情には最も危險な分子が含有されてる事を忘れてはなりません即此の美感の前には、意志の努力も、理性も、聖賢の教訓も、何等の力を持つて居ないが爲に一生を誤る事が少くない事であります、けれどもこの時代は長くは續きません必ず消滅しますが、よい景色が一歩一歩山を下るが如くに消滅して行く人と、忽にして千仭の谷底に墜落する如く消滅する人と二通あります、私は忽にして千仭の谷底に落ちた女でございます

△同情と誘惑

その當時私は毎日曜日には乾度御苑を通りぬけて河原町の保證人の家を訪ねました、或年の夏季休暇後、上京して見ますと保證人の長男で某と云ふ方が東京から歸つて居られました、早稻田の文科に居られたが二十四五歲でした、病氣保養の爲、學校は暫く休んで居たのです、私は度々其人と談話する樣になつて來ました、私の悲慘な運命は此處から始まつたのです、けれども運命の惡戯の手が此處にある事を誰が氣付きませう？

其人は如才のない世話に長けた方でした、話する時には折々チエスチユアを用ひて、その熱心な話振りに知らず〳〵引きつけられて相手の顏を凝視る事がありました、ハツと氣がついた時のきまり惡さ、何うしやうかと思ふことが度々でした、私は近頃になつてツルグネーフのルーディンを讀んで其人によく似て居ると

感じました、眞の教訓は常も餘りに遲く來るものです。

私は寄宿舍に歸つて部屋のお友達と机を向ひ合せにして電氣燈の下で勉强して居ても、其人の言葉の節々が突然腦裏に浮んで來て恍惚と考へ込んで居ると『あなた何うかして？』とお友達に聞かれて狼狽へた事などもありました。

男でも女でも言葉や表情は餘韻を殘して置いて若い人の心を飜弄しますが、飜弄されてると氣付く時は自分の胸の痛みを自覺した時でせう、此の餘韻に注意せねばなりません。



其人と私とが次第に親密に成つて行くにつれて其人の話し振りは以前の快活な調子が何時しか憂愁を帶びて來ました、濕ひのある厭世的な自棄的な言葉が涙と共に私の憐憫の情を呼起して若感じ易い女の心は忽ち動搖し始めしまた、無理もない十八歳の心ですもの。

或晩でした、其人は御自分の過去の悲慘な歴史を語れました、其歴史を今、具體的に叙述したら宜いですが煩雜に成りますから省きます、要するに其人は失戀の人であつて、其れが爲に腦を痛めて學校も殆

んど廢めねばならぬ様に成つて居りました、そして此の世を呪ひ人を呪ひ女を呪ひ宗教も道德も呪ひつくして廣い世の中を一人ぽつちで行のだと言はれました。

私はその悲慘な過去の經驗に、一つは好奇心と一つは柔い同情心とで何うかして慰めて上げたいと切望しました、これは自然の人情でせう、かくて二人は神聖な意味に於ける兄妹として慰め合はうと約しました。「神聖な兄妹」私は少からず此の言葉に幻惑されました、此處が男子の巧妙な手段です、而も一度戀を味ふた者の慣用手段です、憐憫は軈て戀であるとは千古の眞理でせう、殊に初心は人に取つては憐憫と愛とは隣り合ひです、時は私等二人の情を次第に濃厚にして行きました、私自身では戀して居ないと信じて居たが、實は其の根柢に潜める戀を知らなかつたのでした、御苑の銀杏樹の葉が黄に落ちる頃に二人は全く戀に陷つたのでした。

△嫌厭と愛着

自分はもう處女でないと自覺した時に私は非常な罪惡を犯した様に感じました、神様も兩親も私を見放なした様に感じて何を見ても恐怖の念が身を襲ふて來て此の世の淋い暗い陰を歩いて居る様に感じました、同時に其人に對する嫌厭の情が非常に强くなつて來ました、一つは其人は既に一度他の女に占領せられた人であつて今は殆んど空殼と同じであると云ふ念が自覺されたからでした、今迄は唯無我夢中に同情の念に驅られて知らず識らず戀に成つたけれども、今や一生涯を共にする夫、妻、と云ふ觀念が眞面目に考へられて來た時に其人は私の夫たる資格が無いと感じましたからでした、そして少からず後悔しました、もう斯んな時に相手が愛想づかしたら、そのまゝ永劫までも別れたかも知れません、が戀は追ひつ追はれつ其人は私の心情をよく知つてるかの如くに靜に宥めて愁然と眼を閉ぢて首垂れました、この表情に富んだ男の姿を見る度に嫌厭は同情に打ち消されて一種の悲哀を感じました、そして眞面目な處女心には未來の希望を望んで

唯「貞操」と云ふ言葉に捕はれつゝ自分を欺いてまで忍耐して居ました、或日其人はなにがし詩人の「地獄を曲」を讀んで聞かせて與れました、地獄をも恐れぬお七の熱情は感情的な私の心を非常に刺戟しました。

私は全く男は捕はれた女となりました神を捨て親を捨て此の世のあらゆる物を捨てゝ其人に從はうと決心しました、例令百萬の敵ありとも其人が味方であつたら懼はないと思いましたこれは少しも誇張した言葉では有りません、實際その時は斯う思ふて居りました、



此の世は私に取つては淋しい暗い陰であつたのですもの、

△失意と苦悶

五年級第一學期の試驗がすみましたので私は其人に逢いたさ一杯無我夢中に成つて行きました、種々な樂しい空想に耽りつゝ御苑の樹陰を撰つて通つた彼日の姿か思ひ出されます。

若し皆様が長い旅行に勞れて旅費は無くなる旅行も厭に成つた時、早う家へ歸つて伸々と休み度いと思ふて歸つて來た時、家も其處に在り人も住つては居りながら既にそれが他人の家に

なり見も知らぬ人が住つて居たら何んな感じがするでせうと　私が樂んで逢ひに行つたのにひき替へ、其人は半月前の同人ではなかつた、あの優かつた眼は險しくなつて、冷かな決心と否定とが潜で居て、私が物云ふ度に眉を顰めて厭な顏をされました、私はその理由が解りませんので、いろ〳〵と思ひ煩つて居りましたが、其人は平常の樣な寛かな態度は少しも無い代りに整然と坐つた態度に、冷な決心を示して居りました、そして話の端緒を求めては女子の意志の弱い事を罵り密かに貞節を疑ふと云ふ意味を洩らして、そして自分の知人に女があるが意志が非常に堅固なのに義理も人情もよく呑み込んで居るなど〻頻りにその女を稱贊しました。

人は時々相手を貶す時に此の方法を用ゆるものです即ち抽象的に相手の缺點を罵り、具體的に第三者を褒めて相手を貶す方法です、其人の眞意が少し解つた時限り無き侮辱と悲痛を感じて骨までも切れ〳〵に成るのかと思はれました、其人は苦痛を外に表はすことの嫌いな私の包み切れぬ苦惱を見て。

「僕は凡の女を疑ひます、貴女一人ぢやありません、凡ゆる女を疑ふのです、ですから今後兄妹としてなら出來るだけ互に慰め合ひませう、然し今迄の樣な關係ではないのですよ、實際の兄妹！　僕はそれを欲するのです」

其人が見出した遁辭は「凡の女を疑ふ」是であります、都合の宜い遁辭ではありませんか、私は平氣を裝ふて何か言はうとしたが胸が促つて唇が震へて言ふことが出來ませんでした、其人は語を繼いで、

「實際僕も惡かつたです、然し同樣に貴方も惡いのです、鐘が鳴るのか撞木が鳴るか鐘と撞木の間が鳴ると云ふぢやありませんか、お互ですよ」

この厭ふべき而かも冷淡な遁辭に私は我にもあらずワッと泣き伏しました、私を抱き起す其人を私は突き離して寄宿舍に歸りました、そして二度と顏も合はすまい、もの一口も言ふまいと決心しました。

負くる事の嫌な私の性分ですから寄宿舍に歸つても

苦惱を他人に悟られまいとする、今思ひ出して胸の痛みを覺えますが、丁度其時は夏休みで生徒も少く、部屋の障子を閉め切つて八疊の間を伏し轉びつゝ悶えました、それでも他人の前では平氣を裝ふて平常の樣に快活に諧謔を言ふたりしますが興奮した神經には些細な話や出來事が非常に强い刺戟を與へるので、それを隱すのに一方ならぬ苦さを忍びました、若し男子の美談でも聞いた時は直ぐに屋部へ歸つて來て吾が身の上と其人とに比べては無情な仕打を怨みました、それでも今日は男から詫狀が來るだらう、明日は後悔の手紙が來るだらう、そうしたら何と云ふてやらうなどゝまだ自分ながら空想を力にして待て居りましたが、ああ無駄でした、五日程して其人から、八幡――京都から五里許――へ行と云ふ端書が來ました、私は端書をずたずた斷寸斷に破つて棄てゝ無情な心を泣いて怨みました、今や失望の淵の崖に立つてゐる樣に感じました、二度と逢はぬ、物も言はぬと決心したのはつい先日だつたが實は今にも逢ふ樣に成ると信じて居ましたから、決心したのです、最早逢へぬと知つた時私の必死の――戀する者の健氣な決心が現はれました、これは私の誠心が足らないのだ、誠心があつたら何うして元の情に引かへせぬ事があらうか、私が惡いのだ、と云ふ健氣な心でした、そして若しや私の心を試してるのかも知れんと云ふ疑とに勵まされて手紙を書きました、少くとも手紙は言葉より多く男の心を動かすことが出來ると信じましたから、或時は怨と淚に、或時は罪も無い自分を不束者と自卑して詫言し、有らん限りの筆と誠心とで書き續けました、幾通も書きましたが、それに對して端書一枚の返事もありませんでした。

愚な女よとお笑ひになるかも知れませんが、負け嫌いな私も矢張り女です、未練な弱い女の心――初心な心には逃げ行く『心』を追ふことの甲斐なき事を知らなかつたのです、迷ふた者の常でせう、失はれた眞珠が若しや手に歸つては來まいかと徒に半月待ち一月待ちました、愚なる女よ、これが迷ふた人の心でせう、今に及んで一切の事は私の頭に明瞭と分つて來ました。

即ち其人は始めからして私を飜弄して居た事が次第に明になつて來ました、私は怨恨と愛着とが私の胸にこんがらがつて終日私を呵責する、それが爲めに私は殆んと不眠に陷りました體は次第に瘦せ衰へて來ました、頭が鉛の樣に重く成つて來て、耐へ難い苦痛となつて來ました、私は發狂を希ひました、然し發狂して兩親や兄弟に憂き目を見せる事が厭でならなかつたがそれでも正氣を失つた人を羨しく思ひました。

或日書翰の分は殘らず燒いて仕舞つて何時でも自殺が出來る用意をして置きました、夜は次第に更けて寄宿舍の灯は消えて後私は窓を開けて沖天を行く月輪を見上げました、美い淡雲が薄霞の樣に靉いた中を月が徐々と動いて何處ともなく蟲の聲がしめやかに聞えます、机の抽斗から故郷を出る時母が護身用にとて下さつた白鞘の短刀を取り出して鞘を拂ひました、磨ぎました刄が月光にキラツと光つた時、何とも云へぬ愉快な好い氣持がしました、刄が咽喉に擬せられた時――彼の人の冷かな笑が突然腦裏に浮んで來て「お前が死んだら俺が笑つてやる」と言ふ樣に思はれました私は刄を投棄てゝ袖を嚙みしめて悶えました、自殺するのは且は苦しさの餘りだとは云へ一つは彼の男への面當だのに私の死すら其人には何の價もない、私は何うしたら宜いのでせう、さんざ飜弄された揚句に死んで迄嘲弄せられるとは……何うした此の怨を報いる事が出來やうかと悶え苦みました、

私が斯んな勝氣な女でなかつたら其時自殺して居たでせう、然し勝氣なばかりに幸か不幸か自殺する事が出來ませんでした、私は復讐をせねば何うしても活きても居れなければ、又死する事も出來ないと思ひました、けれども具體的に復讐する方法がありませんでした、其人の體を殺したのでは私は滿足が出來ません、私が苦んでるだけ彼の人の精神を苦めねば私は滿足が出來ません、私が死んでも彼の人は冷やかでせう、私は毎日此の苦悶を繰り返して考へました、此の苦悶は經驗せない方には解りません、頭が鉛の樣に重いと云ふ事も此時に經驗しました、實際死は易くして生は難

しと云ふ事を悟りました、私は其夜から「生きる」と決心しました、生きる――復讐する爲に生きて居ると決心しました、怖ろしい女だとお思ひなさるでせうが實際其の當時は復讐する爲に生きて居ると決心したのでした、これが失戀した人の心でせう。

△初めて知った母の愛

其の翌日故郷の母から手紙が來ました、今迄私の心は彼の輕薄男子に占領されて居た爲に、母の事など忽せにして居りましたのに、



蹂躙られた私の心は懐かしの母の手紙によつて、よみがへりました、嬉さの餘り暫時手紙を抱いて泣き伏しました、手紙には、早や半月も便りが無いが障つてゞも居るのではないか、毎夜の樣に私は夢を見るから乾度どこか惡いに相違ない、早う言ふてよこせ、若し病氣でなくても心配でならんから、一寸歸つて來い兄も心配して居る母も今年の三月頃から胃病で體が弱つて居るので氣が衰へた勢か汝の顏が見たい、そして洗濯物は乾度持て歸れと云ふ意味を繰り返し繰り返し書い

てありました、夏休みも終りには一週間しかないですが、私は早速仕度して三四人のお友達に見送られて歸途に就きました、大阪から午後の汽船に乘り込みました。

　汽船が播磨灘の沖へ出た頃には月が既に西に傾いて居ました、海は平靜であつて彼方に落ちかゝつた月が波の上にキラ〳〵と輝いて居ます、莊嚴な夜の海が四邊から私を威壓して知らず識らず此の自然の中に融和したくなりました、若し海上に飛び込んでも決して沈まない樣に感じました、唯冷い平い限りなき固形體の樣に感じました、斯んな時に身投げがしたくなるのだらうと思ふて危險を感じましたから急いで船房へ歸りました。

　翌日故郷へ着きました、私は母の憔悴に驚くより先づ母は私の憔悴した姿を見て潸然として泣きました、種々と原因を尋ねましたが私は唯胃を痛めたせいだと言ひ紛らしました、母は胃癌で衰弱した體をも厭はずに自ら三度の柔い滋養物をそなへて與れました、感じ易く成つた私は御飯を食べつゝ度々涙に咽びました、母も私の苦悶を略推察しましたが何事も口には出さず自分が病人でありながら、私の頭を按つて下さつたり種々と世話を燒いて下さいました、皆樣偕老を契つた戀人は敵となつても親は不孝の子の味方であります。

△怖るべき人獸

其人の事は一日として忘れる時はありません、怨むには餘りに戀しく愛するには餘りに怨めしくて私の心には唯發狂を待つより外はありません、さりとて此の怨を何處で晴らしませう、嘗て世を呪ひ人を呪ひ女を呪ひ宗敎も道德も呪ひつくすと言はれた其人の言葉は今日は私の言葉となりました、然し私は自ら悔ひ、自から改めんと決心しました、其時ふと彼男の心理狀態に氣が付きました、早速手紙をやりましたら長い返事を與れました、その一節に。

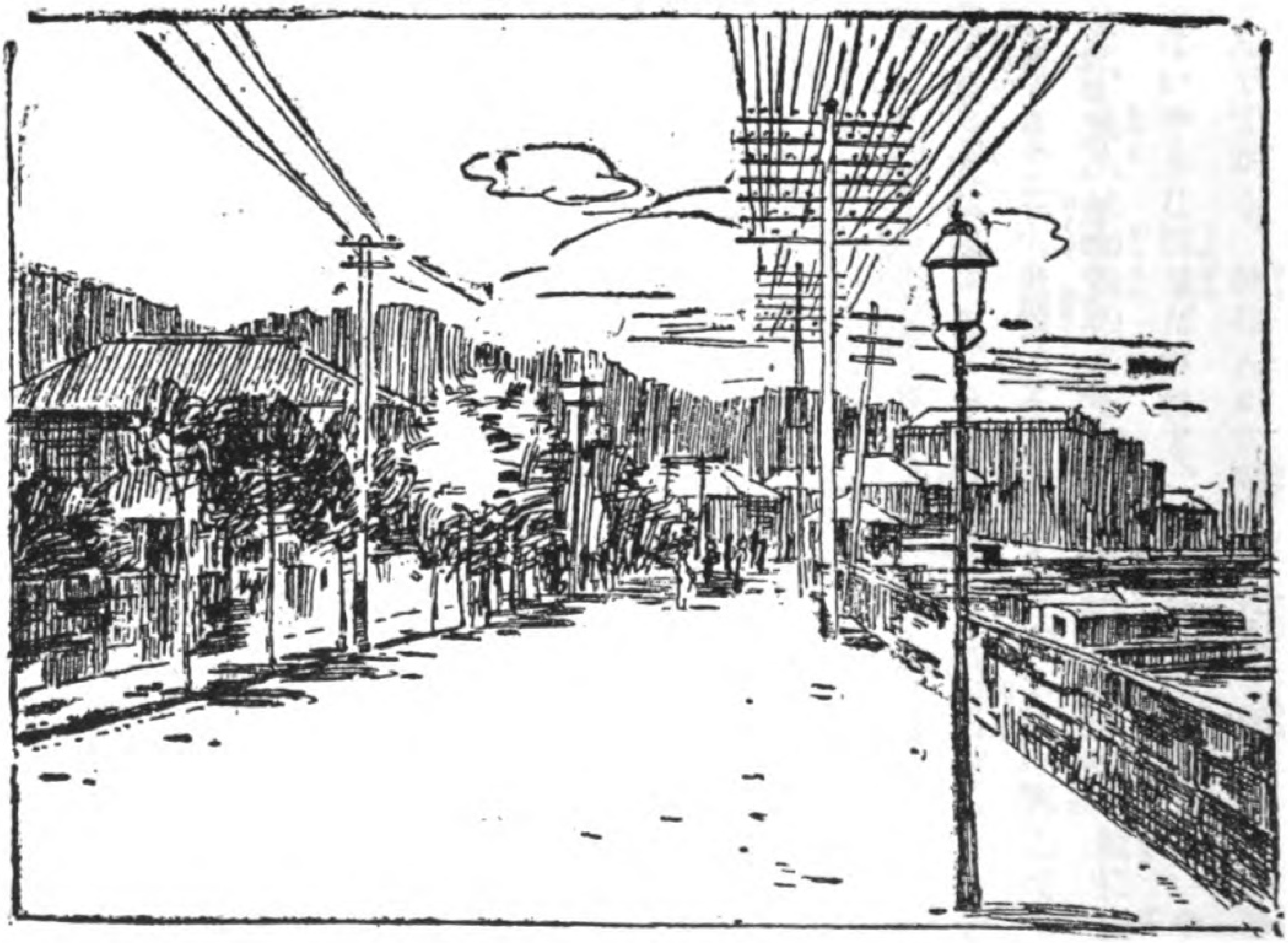
　……實は貴女の言はるゝ通り小生は初より貴女を翫弄する積りに候ひき、然し所謂世の墮落書生と同一視

されてはちと迷惑に候、小生は金錢を欲する者にも非ず、勿論貴女を戀しとも思ひ居らず、唯神を呪ひ人を呪ひ女を呪ふ者に候、其の先頭に呪はれし女が不幸にして貴女なりしが此れも運命なりと御斷念め下され度候、小生の前の戀人の事、何時ぞや貴女にも御話せし如く彼女も失戀の女にて候、彼女が小生になせし惡戲を小生が貴女に報いたりと云ふ順序に候、彼女は現今法學士の妻となり居り候、初め彼女が肋膜を疾みて大學に入院中醫學生の爲に戀の毒矢を射られしとか操を汚されしとか申し居り候ひき、……まゝ小生を餘り怨まぬ樣、何れ貴女も他日小生の仇を他の青年に報いる事と信じ居候、………」

現今、文明の世而かも相當の敎育ある青年の中にもかゝる妖獸男子のある事かと私はこれを讀んで慄ひ戰きました。

心ありて殘る籬の菊ゆゑに
しくるゝ窓もさゝれざりけり　　有功

長崎大浦海岸通



借家住ゐの子供に及ぼす影響

借家と子供との關係を調べて見まするに、他人の家を借りて住んで居ると云ふこと、夫から甲の場所より乙の場所に變ると云ふやうなことが屢々あると、其家庭に育ちたる兒童の性行の上には次のやうなことが確かに現はれるやうです第一は人の物を粗末にすると云ふことを何とも思はないといふ事です、從つて借家人は餘程注意をし無いと兒童に此性質を養ふ虞があると思ひます、借家をして居ると、普通の人は、氣も附かないで其家の建物に對し不忠實なことを始終して居ります、例へば焼けた鐵瓶を疊の上に直接に置いて平氣で居ります、又柱に無暗に釘を打つ、これも借家に限つたことです、親が常に斯う云ふことをして居れば、其子は自然の感化を受けて自分の物と他人の物とを著しく區別し、自分の物は大事にして人の物は粗末にすると云ふ性質或は習慣を養ふのは當然のことで有らうと思ひます、左う云ふやうな關係上濫費と云ふことも一の弊として起つて來ます、或は盛に落書をするのなども借家人の子供に多いやうです、

次に恐るべきは移轉の影響で、之が兒童の性行上に非常の害を來たします、僅かに數ヶ月或は數年にして各區に轉住しますと、兒童は始終學校が變つて居りますから、心の友が出來ない、何時でも、何處に往つても自分は新參者で、親みが心から出て來ない、時には輕蔑さるゝこともあります、從て殊に自分の勢力を示さうとして、兎角人の前で外面を飾り、名譽を衒うと云ふやうな事が、他の永住者の子供に比して強い事等の事情は、無垢の兒童をして其末行を輕薄ならしめ、其の當然の結果として同情の美德を薄くする、なほ其上に愛郷心に乏しい子供を作ります。

又移轉が學業の上に及ぼす影響は何うかと云ふに、先生は成るべく一人の先生に永く教へられなければ子供は損をします、普通の場合には、子供の性質及び學問の程度を好く知つて居る同一の先生に教へらるゝ程幸福なことはないのであります、本校にも移轉其他の關係から毎年百五十人位の入退學があります、中途にして入學するものは多く人擦れがして居りますが、それですらも入學して一週間や十日位は心が沈着かず、教師の力でも手心が分らぬので授業上に少からぬ損失を受けて居ります。（竹早[illegible]町尋常小學校長）

目前の教訓

野菊女

秋だ！　秋だ！！　あゝ秋だ！！！

なんていふと、デモ詩人の泣言みたいだけれど、眞實もう、ことしといふ年も、僅かのものになつてしまつた、考へて見りや、うか〳〵してはゐられない。冬着の準備は、まあ、どうやらかうやら、出來てるからいゝけれども、まだ夜着の始末が、つききらない、大きいから、ひとりで扱ふのは、却々骨が折れるが、やつて見れば、やれないこともないから妙なものね。人手なんて、あればあると思ふ心から、自然、依頼心も起る、なければ無い覺悟で、どうにか間に合つてゆくものだ。

私の知つてるお照さんて方なんかは、田舍ではまあ郡長樣についでの官員さんの細君、お年はもう、かれこれ四十でせうか、十になる男のお子を頭に四人の母さんですから、朝なんかの騷ぎつたら、何ていふか分らないやうな混雜だけれど、遲刻なら一つさせないやうに、良人は勿論のこと、上の二人のお子を學校に出してやる、二人は男の子といふんですもの、汚してくる着物の世話ばかりだつて、容易なものぢやありません、ご主人が綺麗好で、お庭や何かの手入れは、ご自分でなさるさうですが、それは感心に、いつもさつぱりとしたお住居で、四季の草花など、美しく仕立てたり、お菜やお葱位は、小さな畑につくつてなさる、來客だつて却々多いやうだけれど、これで平生は、女中一人置いてなさりやしないで、細君一人大車輪になつて、何から何までよくお氣のつく事、あゝいふ風にどんどん物事ができたら、どんなに氣持がいゝだらうと羨ましいやうです。なんの小さな家位と、口では言つたつて、却々この眞似は、學問の力ばかりで出來るものぢやなからうと思ひます。世には、子供の一人位を荷厄介にして、女中なんか置いて奧樣顏なさりながら、やれ俸給があがらないことの、物價が高くてやれきれ

ないのと、貧乏な愚痴を他人にまで、こぼして聞かせる方もありますがね！、何も女中を置くのが名誉にでもなりやすまいし、泣言をいつてる間に、下女の儉約でもして、御自分から、どし／＼おやりなされはいゝのにねえ……。

おゝ／＼、眞綿が引かゝる、ひつかゝる、おほゝ、引かゝる筈！、こんなに荒れて、まるで山葵下しのやうな手なんだもの……。

學校時代に――、ともすれば、ホームシックでも起りさうな晩秋の夕、窓の柱に身をよせて、物思ふ風情の友を、驚かしてあげやうとて、背の方から忍足の、そつとお目の上を押へると、「あら」と、手を上に重ねて、分つてよ、柔かいお手！、これ、野菊さん……」「おほ……」「ほ……」。柔かいと言はれた手も、此頃のやうに、水仕事土いぢり、何でもやるやうになると、太くはなるし、剛くはなるし、仁王樣が使ひ古しの、十能見たやうに、眞黒にざら／＼して、痒い所でもかくのには、そりや調法ですよ、おほゝゝゝ

初丸髷の耻しい頃、盥かゝへて井戸端にいつたら、お隣りのお嫗さんに、「まあ、貴女、それでもお洗濯を、なすつた事がおありなさいますか」と言はれました、僕はまあそんなに、柔弱な風に見えるのかしらと、思はず、羽織姿に襷かけた、身を見廻して、キャラコの足袋に雪駄はいてるのが、ほんとに氣まりわるかつた。

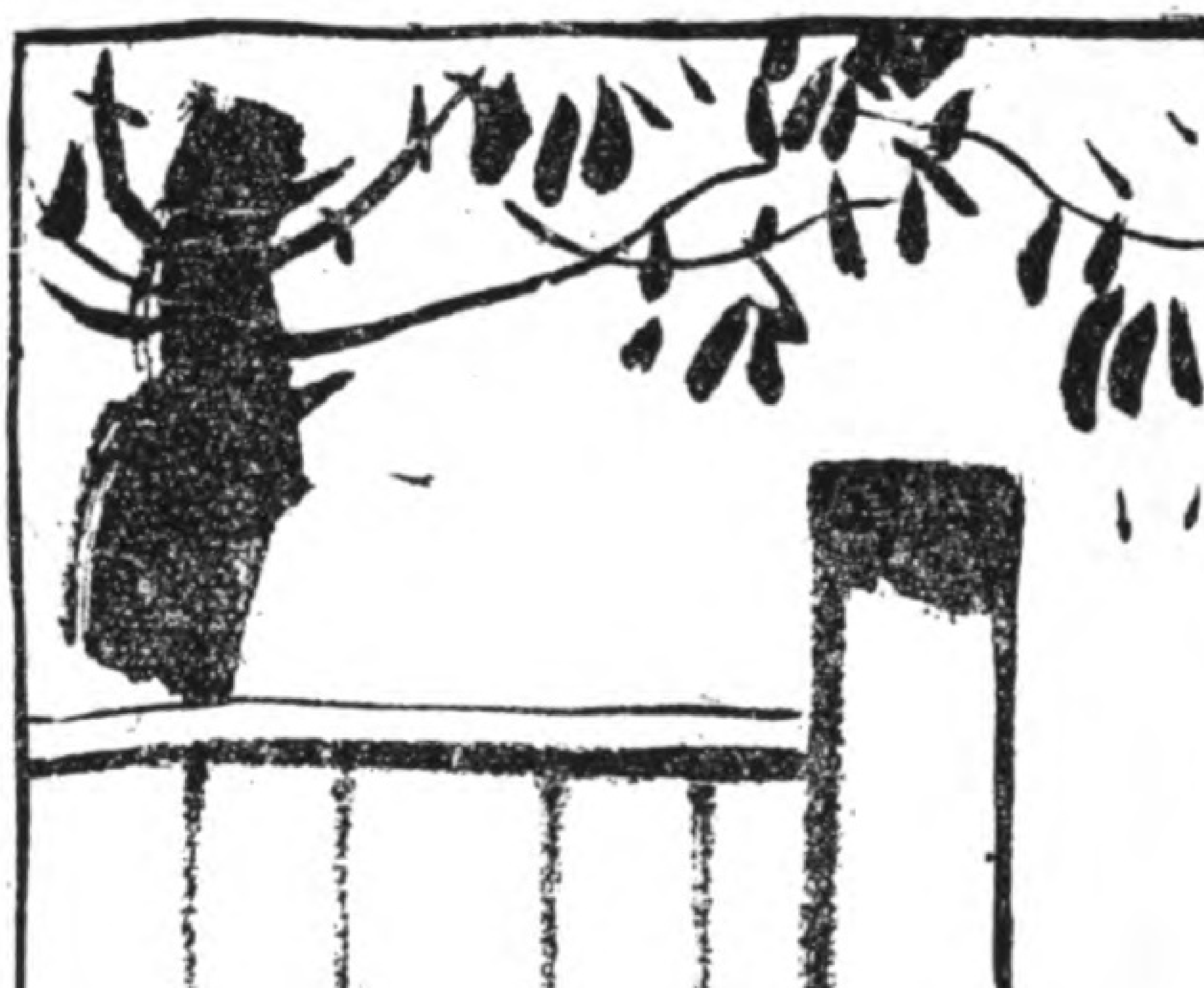
重くて／＼、幾度も休みやすみ持つてきた手桶の水を、今では兩手に輕々と提げてもこられる、したことがないたつて、普通の人に出來る事ぐらゐ、やつて見ればやれるものだと、自覺してからは、僕はひとりで何でもする、出來ないまでも試みますのよ、隨分氣の强い女でせう……。

格子戸のリンが鳴る。綿埃たゝいて、出て見ると、嚴めしい八字髭の人が、汚れた夏洋服を着て突立つてゐる。丁寧に來意を問ふと、「僕は……」と云ひかけて、「ヤ、一寸、失禮します」と玄關へにぢり上つて、

「エ、、突然 推參して、甚だ恐縮な次第ですが……、エ、、實は妻君！、エ、僕は東京市に於て、初等敎育

に從事しつゝあつたですが、エヽエ、種々企畫したる事業もありましてな、エヽ、到底薄給なる小學敎師位に、甘んじては居られんから……、エヽ、辭職後〇〇新聞記者となつてエ、……」を冒頭に、滔々數萬言、口角沫をとばして、政治座れ、文學座れ、若し、それ敎育方面に至つては、乃公出でずんば學界をいかんせんといふやうな、大々的怪氣焔、約四十分許……。

もすこしで、綿いぢりもすむのに、この短い秋の日を、とんでもない者が、舞こんだと思ひながら、「へゝえ」「はゝあ」の連發で防禦してると……驚きましたあ……、とゞのつまりは、國へ歸る旅費が缺乏したから、少しでもよいから貸してくれ、他日　志を得ば、必らず報恩の途を講ずる、仁心深き敎育家の內助と見て、懇願する次第なればまげて一轍の水を吝み給ふ勿れ……といふに、歸着した。



「承りますと、誠にお氣の毒なわけで、御同情いたします、御同情は致しますが、貴君樣も御經驗のおありのやうに、實際薄給な小學敎師などの分際では、物質的に御同情申上ることの出來ませんのは、遺憾な

ことで御座いますしかし、折角のお立寄ですから、甚だ失禮で御座いますが、これは私の心ばかり……、ほんの鼻紙代ですけれど……」

白銅一つ紙に捻つてだすと、案外にをとなしく、「やどうも恐入りました。御厚志忝く頂戴いたします」押いたゞいて、ポケツトに押込で立上る。向屋敷の、高いもちの木の梢に、百舌の鳴く聲がしきりに聞えて、秋雨がしと／＼と降つてゐる。穴だらけの靴の尖へ、危なげにへつた日和下駄を突かけて、黄色くなつた麥藁帽子傾けながら、出てゆく失意の豪傑が、あはれげなスタイルは、さつきの雄辯もどこへやら……。呼びとめて、少し破れては居るが、良人のさし古した毛繻子の洋傘を、これでもよろしくばと……出してやると、「ヤ、實に恐縮です……、恐縮です」と大の髭男が、氣の毒な程恐縮がつて出ていつた。

綴糸が少し足りないから、中途で止めて、糸屋までゆく。

青木醫院の前に、人だちがして〻、玄關先で、大聲に爭ひ合つてる、ちよつと人の背から覗いて見ると、おや先刻の大敎育家先生だ、此所では醫學生だとでも言つたのだらう、チヨンボリ髭の代診と、近眼鏡かけた薬局とで、こんな意志薄弱な墮落生が、我輩等の仲間に居るとは實にけしからん……とか、警察へ突出すぞとか言つてる。

此方の豪傑先生は、私の與つた洋傘を握つて打ちかゝりもし兼ない風に、肩を昂げて何か口早に辯論してる、硝子戸の中には、女中が二三人隙見してる、犬が吠えながら飛んでくる……。と、玄關の背後の襖が、すつと細目にあいて、白い手が出たと思ふと、キラリ……、たゝきの土間に、チリリンと落ちたのは、五十錢銀貨らしい……。

「何だ、失敬な！、我輩は犬ぢやないぞ。……」と豪傑先生大喝はしたが、つとうつむいて、其銀貨を拾つたと思ふと、もう、すた／＼と引返して門を出る。

「ざまを見ろ……」と近眼鏡が浴せると、振返つて「ア」、粗製重曹賣捌所の店番め……」と罵り返して、傍目も

ふらす、向横町へはいつていつた。「圖々しい奴だね……」「あんな奴、巡査に引張らせりやいゝに……」なんて、門外の彌次馬が、口々に喋べる。「フン、同じやるもんなら、早く遣つちまへばいゝによ……」と、隣家の理髪床の親方が、大聲に言ひすてゝ、すつと店へ引込むと、驚いたやうに、皆、口を噤んで、右左へ別れ〳〵に歩きだす……、門側の青桐の葉が、ばさりと落ちた。



×

一昨日いらしつた華江さんは、熱心に私の本箱を漁つてる。

お福さんが來から、島田にでも結たらいゝと、思つて「華さん」と、呼んだが返事がない、そつと肩越に覗いて見ると、十月號の、上原さんの令嬢振に見入つてゐるのだ。

「美しき曲よ、樂聖ベエートーヴェンが月清き夜！」と小聲で繰返してゐなさる。ほんに若い方が憧憬しさうなかきぶり！、美しい文だ。けれども我々風情の家の娘が部屋の隅々へまで、結構な香水なんかふりまかれた日には、あまり高からぬ此鼻がまがつてでもしまつては、困りますわね、おほゝゝゝ、

「華さん……」

「あつ、まあ嫂様？びつくりいたしましたわ」

「おほゝゝゝすつかり月光曲で夢中になつてらつしやるのね、ほゝゝゝ」

「まあ」と顏を眞赤になさる。

「結げさせたらいゝでせう、ね、けふは島田に……」

「え、私…、これでよろしう厶いますわ、また今度……」

「おいや？、さうね、ピヤノにお島田は、ちと不調和ですからねえ、おほゝゝゝ」

「あら…、お口のわるい」ほゝゝゝゝ、おほゝゝゝ。

お福さんは、おさき煙草ふかしながら、にこ〳〵して。

けふは、少し根が下り氣味で、すつと出た髱が、衿につかへさうで、氣になつてしかたがない。

「嫂様、けふのおぐしは、少し意氣に見えますのね」

と、華さんは儂の姿を見上げ見廻して、

「私、不思議でたまらないわ」つていふ。

「なぜ？、何が不思議！」

「だつて…、嫂様が、そんな意氣な髷なんかに遊して、黒繻子の襟のかゝつた袷なんか、召していらつしやるんだもの…」

「ま、そんな事が不思議ですの？、おほゝゝゝ、しかし、變つたでせう前とでは…」

ともすれば、氣位が高いのなんて、いはれてゐた私、それは今だつて、かう、しやんと合せた黒繻子の襟裏に、秘めてある自重心は、頭高の束髪で、ぐつと反身になつてゐた其頃と、變りはしないけれど、郷に入つては郷に従へとやら、周圍の空氣と融和して、圓滿にやつてゆかうといふには、ひとり超然とした態度ばかり、示すのは損だと思ふ、組し易しと見てとられるの

は思ふつぼである、と、これは僕が、この乏しい生活の、世話女房の境遇から、自然に教へられた教訓の一つなんです。

そりや僕だつて、場合によつては、古びたりと雖も、紋附の小袖一着に及んで、大に氣取る術ぐらゐ、まんざら知らないわけぢやないが……。どんなに立派に鍍金しても、鉛は到底鉛である、砂の中に埋れてゐたつて、金は永久に金です。金に金だけの貴さがあれば、鉛には鉛だけの用途がある。

「あゝ女はつまらない……」華江さんはだしぬけに、こんなことを言ひながら、古い銘仙の



ぼろ〱を継ぎ合せてゐる、僕の手もとを熟とみてゐる。

「ホヽ、何を感ずつて、そんなにつまらながるんです、女がつまらないつて、男ならつまるの？」

「エヽ男の方がよつぼどいゝわ、女のすることには、無意味の仕事ばかり多いんだもの！」

「女の仕事は無意味ですつて、おほゝゝほ、苔の花だつて無意味に咲きはしませんよ、女の仕事がつまらないなんていふやうおや、男になつたからつて、活動は出来はしないでせう、矢張其時になると、きつと、男なん

てつまらないもんだと、思つてしまふでせうよそんな人は……」

「だつて……。姐様はそんな、めんどくさい事をしてらしつても、つまらないとは思召さないこと？」

「つまらないと思へばつまりませんさ何だつて……、世の中にはね、さう〳〵つまるやうなことばつかりは、ありませんもの、しかたがないわ……、私ね、いつ死んでもいゝやうに、と思つて、こんな汚ならしいものゝ、整理をしてますのよ」

「まあいやな……、そんな事仰しやつて、縁起でもない……」

「華さん、あなた、あの山本さんつて方御存じでせう、判事をしてらしつた方……、ね、あの方が、いつぞやいらしつた時のおはなしにね、こんなのが、ありましたのよ。ある時、何かの事件で、家宅捜索にいらしつたお家があるんですつて……、其お家は、中々大家族でしてね、捜索に暇がとれて、隨分、綿密にやつたんですとさ、其時驚いたのは、家内の整頓してたことで、もう文書類、衣類は勿論、つまらないお勝手道具まで、一糸亂れずといつたやうになつてましてね、納戸の押入の隅にだつて、汚れもの一枚突込んではありませんでしたつて、永い間には、隨分所々方々へ、そんな役目でいつた事もあるけれど、こんなにちやんとしてある家は始めてだ、急にしやうつたつてできるものぢやないと、臨檢した人達が、ほんとに感心してしまつて、今更のやうに、落ちつきはらつた、そこの妻君の顏を瞻めましたつて……ね、僕も其お話しをきいて、つくづく考へましたわ、人生は朝露の如しとかつて、人はいつ、どんな災難で不意の最期が、くるかもしれないし、又、どんな事で自分の家庭を開放して、多くの人前に曝けだす時がないとも言はれない、あゝ其時、其期に、とんでもない醜い道具裏なんか見られて、亡き後までの嘲笑をうけたくない、虎は死しても皮をとゞむるとやらさうまではゆかなくても、せめて、たつ鳥は跡を濁さぬ位の心がけは肝要だと、私、つく〴〵悟りましたの……、でね、それから始終、私は、いつ死ん

でもいゝやうに……と、思つて仕事をするし、死なないうちにこうもしやう、あゝもしておかうと、こんな風にして、物をしてますのよ、おほゝゝ、そかしいでせう」。

華さんはいやに考へこんでしまつて、返事もしないで、机の上の一輪ざしから、一つこぼれた茶の花をむしつてゐる。

一體に、情の深い、涙もろい、やさしい人の、此春、父様がお亡りなされてから一層沈んで、少しやつれた頬の色もわるい、いたましの



君……、死といふ言葉なんか聞かせるのではなかつたのに……。おゝ、赤小豆が煮てある、おやつには、華さん大好物のおしるこでもしてあげやう。

×

けさ、華さんがお出立といふので薄暗い臺所での立廻り、お汁の實の大根を剥むとき、どうしたはづみだつたか庖丁がすべつて、指の尖を切りかけてしまつた。てうど潮時だつたと見えて、血が出て〳〵却々とまらない！、え、袂くそでもつけた

かつて、ホヽ、憚りながら、これでも糸先生を、衛生顧問に戴いてる私で厶いますよ、おほゝゝゝ。取敢ず、石炭酸濕布で拭いて、清潔な昇汞綿紗を貼てゝきちんと繃帶いたしました、が、どうも痛くて痛くて堪りません。ヅキン〳〵と剌むやうないたみが、頭腦の中心に、響き渡つて、それはほんとに痛いんですよ。

稲はもう熟して、恭倹の體を示して厶るが、すうと吹く風に、ゆら〳〵と揺れる穂の波が、何となく輕げに見えて、蝗の飛ぶのも例年より少ないやうだ。此夏の大洪水……、天明以來とかいふ大水は、肥えた埼玉の地は殆ど全部を浸して、天に連なる濁浪滔々、と多くの家や、人や財產や、すべての農作物やを、無慘に洗ひ去つてしまつた其時、てうど、孤島のやうに取殘されたこの城址の町、其城外の良田で、少しの水害をも、うけない所でかうなんだもの、半月近くも泥流に漂つたあたりの光景、まあ、どんなでせう。

この高地つゞきの道のほとり、蕪、大根、靑菜、芋畑やら甘藷畑やらの間を辿つていつて西南の方、忽然として展開された水田を望むと、あゝ、まるで城外のとは色が異つてゐる、輕げには見えても、あちらのは黄金色であつた、今見るこゝのは、一面灰白色をなして、すい〳〵と出た穂の尖が、かさ〳〵と、わけもなく風に動いてゐるんだもの……。

疲れたやうな風のお百姓が、二三人、なさけなげに、それをながめてゐる……、氣の毒でたまらないから、僕はすた〳〵と引返してきた。

力なげな秋の日は、町を圍んで宏く一郭をしてゐる土圍――これは、昔太田氏が築城の外郭とのことで、老杉古檜枝を交へてゐる、防風林――の、黒い梢を照して、そこにもこゝにも、百舌鳥のおしやべりやかましく聞える。お濠跡の小川には、雨の多い作を祝福するやうに、犬蓼の花が肥つて長く咲いてゐる、赤飯の花だなんたつて、こんたもの何にもなりやしない、擢らしいから、引ちぎつて、水に流してやつた。

岡稲を、どつさり積んだ荷車がくる、後押は、娘らしい若い女で、はげた紺の筒袖、同じ色の手甲かけた

姿が甲斐々々しい……。近づくと、前の男は、頬被りちよつとはづして、「こんちは……、お遊びで厶んすた。
お遊び……、儂は、はつとして、今更のやうに、丸髷つやゝかに羽織長う、手に野菊の花一枝もつた、自分の、氣樂相な有様が、耻かしいやうな、心地がして、顔が熱くなつた。

痛い〳〵と思ふと、無暗にいたくなると見える。一時間ばかりの散策で、大へん指の痛みが薄くなつた。

ほんに、心ほど我儘な者はない、お腹の痛い時は、頭痛の方が餘程しのぎよいと思ひ、頭痛が烈しければ、こんないやな病氣はありやしないと思ふ。咽頭もとすぎれば熱さを忘れるとは此事……、心の苦痛なんて者も其通りで、今我遭遇しつゝある苦痛は、嘗て味はつた事のあるそれよりも、又、誰のよりも、より大いなる苦痛と感じるのだらう、嗚、咽頭もと過ぎれば熱さを忘れる……、何でも辛抱は一秒の間だ、私は日記の一隅へ（苦痛は目前に忍ぶべし、歡樂は未來に待つべし）と書きました。（完）



山形千歳山の夕陽

女生徒に不足なもの

世間多數の人は女學校と云のは女の中學校の如く考へて居るやうだが、之が抑も間違ひである。女學校は學問を授ける處でなく、賢妻賢母を造る處である、學校は常に此の考を以て料理の如きも其の智識なり技術なりの基礎だけ教へてゐるのだから、家庭では假令女中が居ても娘に手傳はせて、學校で教へた基礎を助長させる方針を執て欲しい、今の家庭では、娘の學校で習つたものは習つたもの、家從來のやりかたは遣方と云ふ風に、舊思想教育の主婦が萬事己れの思ふやうに何事をも處理してゐる、之では女學校が折角將來其娘の夫となるべき男子即ち新教育を受けた男子の希望を充さんと思て教授しても何にもならない、教育の根本義務は高尚な品性を造ることである、故に學校では生徒の趣味が可成汎くなり、高尚な方面に向ふやうに注意して、音樂、繪畫、園藝其の他百般の書籍を讀むことに導びいて居るにも拘らず、今の家庭では斯ることに金を投ずるを非常に吝む風習があつて、衣服に許り金を費すのは嘆はしい、一も衣類、二も着物と、着物や指輪や金時計さへ與ふれば親の能事足れりとして、數百金を投して吝まぬ豪家の家庭ですら、娘の望む西洋樂器の一つも買つて與へぬのが多い、甚だしいのになると課外の書籍に金を出すとは無駄である、學校で定の本さへ習へば夫れで教育は出來たのであるといふ風な考で、一册の女學雜誌を買ふをすら吝むものがある、學校は机と建築物とあつて本さへ習へば可いと思つて居る今の日本で、完全な趣味教育を希ふのは無理であるかも知れぬが、家庭では十分この點に注意して其の子の趣味を汎く高尚に導くとに考へて貰ひ度ひ。

大阪人は間食に金を費して、普通の三食に金を吝む傾向があるから、生徒には營養不足のものが往々ある、今日の女生徒は運動は十分足つて居る、殊に私の學校の如きは屋内體操場から修身教室までの往復だけも四町ある、階段の昇降、教室の出入にも一日一、二里の運動をさせるから、間食を廢して常の三食に金を費して貰へば、生徒の健康は十分完全に行はれると思ふが、資產家と呼ばるゝ程の家庭の生徒にも營養不良の者が多いのは情ない次第である。（大阪夕日丘高等女學校長伊賀駒吉郎氏）



淋しい秋のおもひ

輝子

昨日までふり續いた秋雨は名殘なく晴れて、うらゝかな日だ。手は一生懸命に、羽織縫ふ針運ばせながらも、心では、昨日文様のお手紙に、けふ浪様や藤様と茸がりにお出でになるとか書いてあつたのを思ひ出していろ〳〵に想像してみる。

空には雲さへなき小春日の、やわ風を袖にはらませて、へだてなき友三人打つれ立ちてこゝの林かしこの根元と興じあひながら籠に取り入れた松茸は、たとへすくなくとも、どんなにか、愉快に趣きふかいことでせう。

秋の山林に一日の清遊、あゝ文様が羨しい。田舍だから田舍だからと仰しやるけれど、たゞ、それだけでも、たしかに、田園の賜ものでせう。麗しき山、清き流れ、優しき君がつちかひの、惠に生ひゆく野菜もの、偉大なる自然景につゝまれて、自然を友としての御生涯はどんなに淸く、尊く、樂しく趣味多いことでせう。百合香は妬ましい位おうらやましく思ひます。都では思ひも寄ぬ事で。

羽織も、縫ひ上つたので、今まで忙がしくて、見なかつた女學世界みる。富貴に包まれし無邪氣な令孃の文字が目に入る。あ綾様よ。順境にお成長になつたのだから何の苦もなく心ゆたかにのんびりと、すればこそ此様に、平和な文もお作り遊ばすのであらう、と思ふと急に悲しくなる。私だつて世が世ならば、よく行李の底や、簞笥の隅から、きんらんや錦の美しい布の燒けのこりを見出しては、恐ろしくも淋しい感じがして、ありし其昔を偲ぶ。

地震雷火事と俗語にもいふ。あゝ恐ろしき火事よ。兄様が未だ二歳の二十餘年の昔、我家の富み榮えた頃

は、田舍のまちの事、何處も板葺屋根許りだつたに、家は二階づくりいかめしく、周圍の家よりも、上に出て居たのが不幸にして、時は三月のお節句過ぎ晩にちかき頃風上より飛び來た數萬の火の子は、高き板葺屋根に燃え移り、消防さへ行屆かぬ時故、吹く風は勢を得て火の手をあげ、折わるく二階に出してあつた舊藩主家より賜はつた、雛道具類は云ふ迄もなく、先祖代代もち傳へた、家寶財産のこらず、勢烈しき火鬼の赤い舌になめ盡されて、僅かに取出した道具類も見知らぬ人の來て「御手傳致しませう」と親切らしくもち出したまゝ再びかへらない。

さしも榮えし我が家も、一朝の事變にかはりはて、ありし昨日の富貴も昔の夢となり、それからけふまで打續きし不幸なるに引かへて、富みゆく火元の家、發火の原因は、その家は牛乳屋で、主人がお湯を沸かすとかで、火を焚きながら、心地よきまゝにこぐ白河夜舟火はあたりに散らばる、わらに移り、初めて、遂に大事に至り、驚き目さめて、牛を引き出さうとするが、牛はもえる火を見ては、一足も動かぬもの、出し後れた五匹は無慘の燒死をした。

翌年おかみさんが、出産する。めでたかるべきその生兒の顏は牛に似て、額には二本の角がはつきりと生えて居たとて、程なく死んだ其子は、△△展覽會の時にはアルコール漬にして、某所より出し、衆人に見せたので、人は皆「牛のたゝり」と云ひつたへ評判して居たといふ。

その話を母樣から伺つてから此方、えん／＼と勢つよく上る火の子を見ると、たゞ恐ろしさにふるえ、目には怪しい露の玉さへ宿る、小さい／＼胸に深くも刻まれし、火事の慘狀をおもひみて。

こんな事思ふまいとしても、女はぐちつぽいものでお若い時から、過分の御苦勞遊ばして、此頃僅にお年召した母樣のお心の中思ふと、‥‥甲斐なきぐちとは知りつゝも。

其昔△△國造の姫君として、人に敬まはれ、豐かな家庭に荒き波風にもあてられず、しかも嚴格なる教育

のもとにお成長遊ばした御身の如何に運命なればとて今の境遇、榮枯盛衰は世のならひとはいへ。

時折初めての店へ買物にお出でになつても、店の者は知らないから、おかみさんと云ふ事もある。さうすると母樣は大さう嫌な心持がすると仰せになる。

あゝ母樣…：お嫌らひになるのも、御無理は御座いません、貴き血すじ受けられた母樣、ありし昔を想へば、私だつて、お氣の毒



でなりません。けれども母樣運命の神は、いつまで、人を苦しめは致しません。やがて昔の富貴に歸る時も參りませう。もう兄樣は、しつかり遊ばしていらつしやいます望多く入らせられます。どうぞ過度の御心配はおやめ下さいまし。」

「あゝ兄樣なつかしい兄樣。どうぞおん身おいとひ遊ばしませかげながら祈つて居ります。」

夕ぐれ獨り緣側に立つて庭を見る。四十雀が、五六

胡桃の木に來て、何かしきりにつゝいて居る。
そよ風に誘はれて、木の葉が落ちる。ちら／＼と。あゝ私、木の葉の落ちるのを見て、笑つた頃もあつたけれども今頃は、……嗚呼……落葉は再び枝に歸らずゆく今年の今日は再びめぐつて來ない。
世の春は限りなく廻り來るとも、人の春は永久に再びは來ない。我廿年の今年も殘るは僅……かくて夢の内に月日は過ぎて……老いゆく身なのであらうか!!!
世を悲觀すれば、昔笑つた事でもなんでも、悲しく思はれる。樂觀する人は、たしかに幸福であらう。それに反して悲觀する者は不幸と知りつゝも、なほ悲しむ者は……不幸と云はうか、愚と云はうか……。このごろは昔許り戀しくて。
鬼ごつこ、人とりさては繩とびに打興じつゝ面白げに遊びさわぐ、少女子のにぎやかな聲をきいては、何だかこう、淋しい樣な、哀れなやうな、感じがして。
あの無心に遊ぶ少女達もおそくとも、七八年の後には昔を戀しがるであらうと思ふと……。

私もあの樣にさわいだり、學校から歸るとすぐ人形や道具までもち出して仲よしの芳子さんと遊んだのはさう丁度十四頃までだつた。互に罪もなく優しい人形の母となつて、樂しく遊んだのも唯きのふの樣な心地がするけれど、もう幾年かの昔の夢となつた。
再び見得られぬ昔の夢。小さい時など、よく姉樣達が『もう今年も暮れて仕舞つた、一年つてほんとに早くたつもの』と仰せになるのをきいては、『大人つてあんなぐち許りいふものだ、くだらないことを』と一人冷笑して居たに……もう私がその逝く年を惜しむ樣になつたかと思ふと、あゝ私は淋しい。
年々に秋の哀れのまさりゆくのはなぜであらうか。西行の「鴫立澤」ならずども、秋の夕ぐれは淋しいものだ。さやかに澄む月の高く沖天にかゝる夜や、秋雨しとしとゝふりそゝぐ夕、親く手を取つて、へだてなき胸のうち、語りあふ友がほしくて、あゝ其友も今は遠く山河幾十里はなれて、ひとりながむる秋の月、秋の夕、蟲の音。あゝ私は淋しい。淋しい時には、いつそ

奥深き山寺に入つて尼になつたらいゝだらうと思ふ時もある。

かう云ふ時には切に〳〵宗教の必要。たしかなる信仰たよるべきあるものを、と、在學中一同先生に不出來なのを叱られながら、習つた其音樂の有がたさを痛切に感じる唱歌でも歌ふといくらか心強く樂しくなるのだ等思ひにふけるまに夜の幕は徐かにひらかれて。



月なき空には、銀砂の如き無數の星が出て、西の方し見える、宵の明星は群をぬいてさんらんたる光輝をはなちて居る。おく露繁き草かげに鳴く蟲の音は、あはれとぎれ〳〵に……明日をも知らぬ露の命。どこかの隅で、こほろぎがなく、秋のあはれをこめて。

さびしい。あ

あさんびかでも歌はふ。

比叡登山記



こてふ

今日はいよ〳〵叡山へ登る日。秋晴れの澄み渡た好天氣。

宿の窓から今更の樣に、叡山をながめて見る。まあ、あんな山へ私みたいなものが、登れるかしらと不安の念が胸にわく。

玄關へ出たら、もう車が三臺

「行ておいでやす」

「御早う御かいり」

の聲々に送られて宿を出たのが八時。

二條の通りを、つき當て左に折れ、高等女學校前をすぎて賀茂川を渡り、學校町の郡ある岡崎を素通りして白川口へつく

「どうだい露ー登れるかい」

掛茶屋で半輿、ほゝばりながら御父樣

「エヽ登れますとも、この位何でもありませんわ」

と口では云つても心許ない氣がした。身じまいをなほして御父樣の御後について……一行。と云ても父樣と母樣に私ぎり、すこぶる淋しい旅だ。

露を含める木。草。朝の山もなか〳〵趣がある。ギーカメンヤーガカメンと木草の、小やみなく通るもうれしいが、十九や二十の見目美しき大原女がキリツとした形してソダをかるげに、頭へのせて行くのが又なく、雅びてなつたしい。

行けども行けども山又山……そろ〳〵足が云ふ事をきかなくなる。元氣を出して、歌うたいながら行く。一里中も來たと思ふ處にうれしや、小々やかながら休み場があつたのでホッと一呼吸。急ぎとびこんでまづ白湯一ぱい

前はたてきつた樣な崖、のぞいて見て思はずゾッとした。眼をあぐれば、京の山々紫色にそゝりたちて、そよとの風もなきあたりの靜けさ。

怪鳥一羽、羽ばたきして西に去つた

ひとり茶屋の柱にもたれて景色を眺めて居ると、虞美人草の小野さん宗近さんを思ひ出して、もしやそこらに？とあたりを見まはした

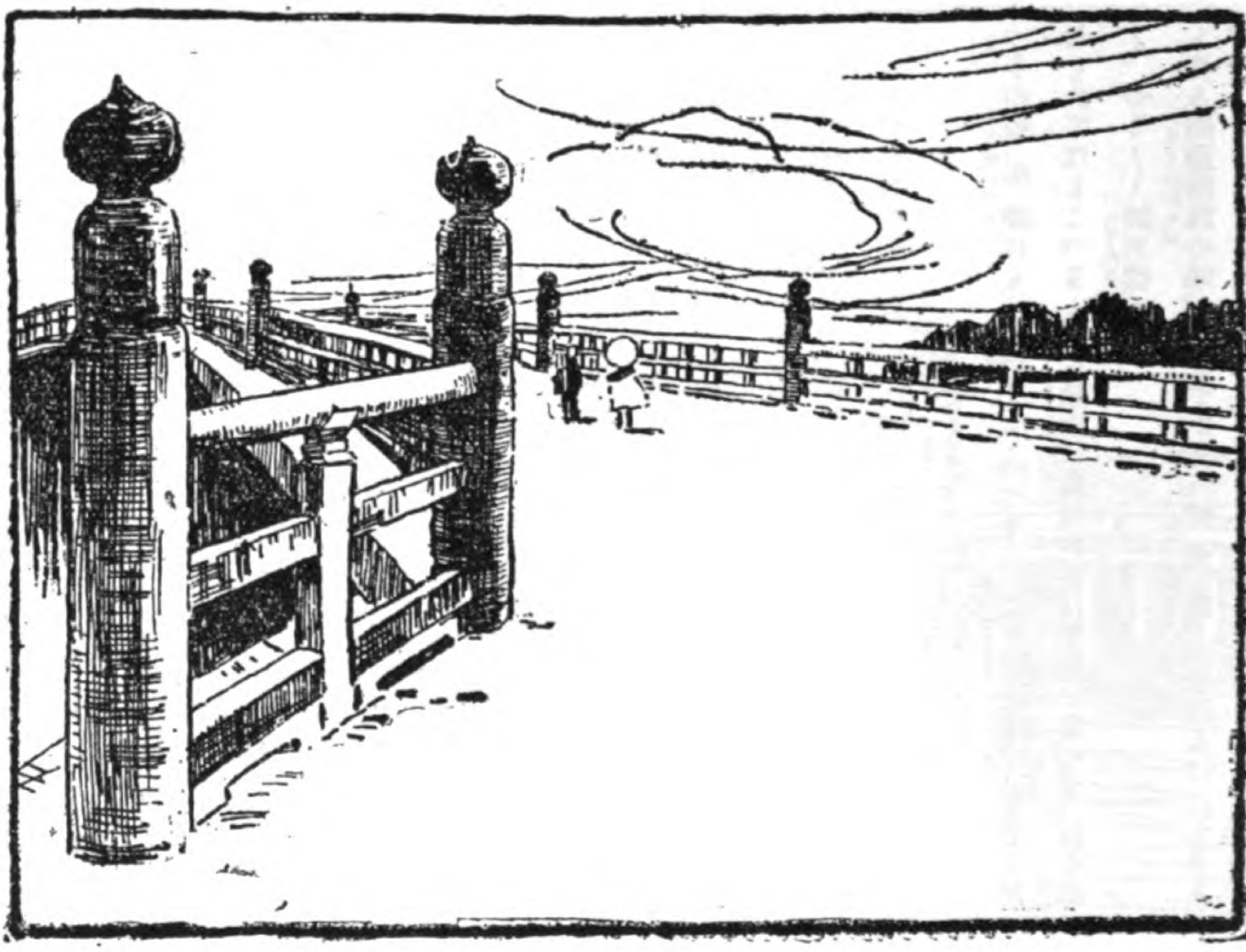
「露……あの山つゞきの一番高いのが、あれが愛宕山ぢや」

「エあの頭がちよいと、飛び出てるのですか……明日は父樣、あの後の方へまゐりますの？」

「アゝさう……舟で下るのだ」

うつとり愛宕の方を見つめて、まだ見ぬ、保津の景色を想つて見た。

瀬田の長橋



茶屋のお婆さんたら無暗に人をほめちらして、

「孃さんはえろうおすな、よう登りやはつたな」ですつてホヽヽヽヽ、かう見えても、もう勞てしまつてるのよ」

「お婆さん、こゝからまだどの位あるの？辨天樣まで……」

「さうどすな三十五六丁は御座りませうかな」

「エッ？まだそんなに……それぢや、坂本まで何里あるかわからないね、私歩けるでせうか」

「ホヽヽヽ露が歩けなかつたら此處へ泊ておいでな」母樣の御人の悪い事、いくらつかれても、こんな一軒屋ぢやあね

「サア出かけ樣」

パラソル杖に母樣とならんで歩く。前の方を七八人の京大の方が面白想に笑ひ興じながら行く。やつぱり旅は大勢が一番樂しみだ。たつた三人ぎりぢや笑ふても話をするにも張合がない。兄さんや妹も一しよだつたらさぞ賑やかでおもしろからうと思ふ。

「ネ母樣、兄さんや何がもいらつしやれば賑やかでいゝでせうにね……學校があつちやあね」

「さうだね、たつた三人ぢやいくらおもしろくつてもこれだけの聲しか聞えないからね」

「ほんとに……」

淋しい、まつたく淋しいわ。ひとり先にたつて、

比叡の山の石だゝみ

くつれて早き人ごころ
加茂の川原の眞清水も
塵の街に汚されて
武士のふむべき道もなし
西長安の小天地

の、歌を口すさむ。こゝからはあんまり、ひどい道でもなく足の運びもはか〴〵しい。

行手はるけき近江路や、琵琶の湖、波靜か、あこがれ來ぬる旅なるよ、

「ア湖水が見えますよ、見えますよ」

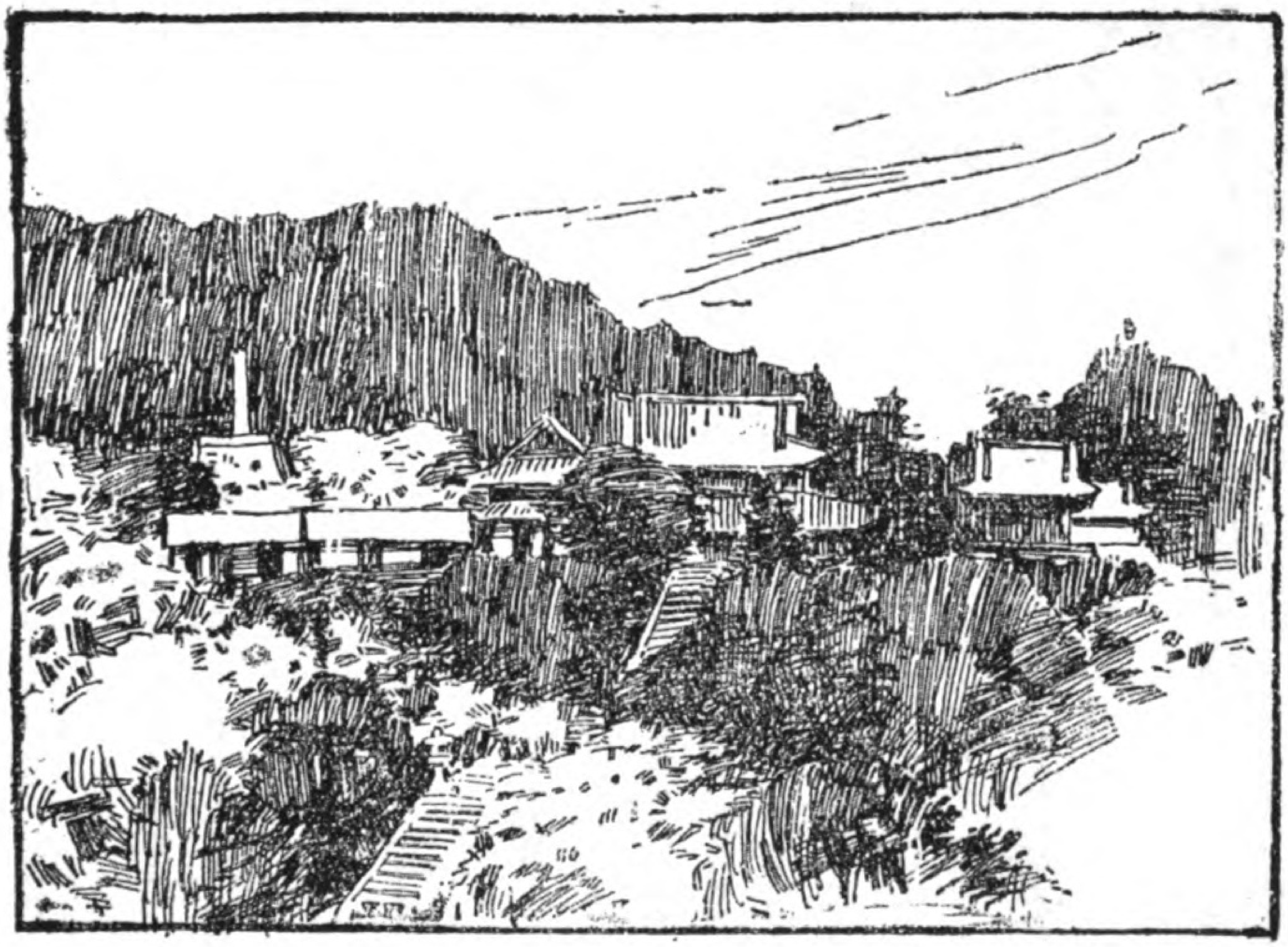
やがて、三井の町、つゞいて大津、膳所と次第にあらはれて、瀬田の唐橋うすがすむ。ぼんやり、眺めてると後から、南無阿彌陀佛なむあみだぶつと、稱名となへながらうら若い尼僧が、とぼ〴〵と來た。比叡に尼僧!!何んて詩的なコントラスだらう。云ひ知れず、哀れに感じた。

うつくしきをとめと生れ戀知らで
ふけ行く尼をあはれと思ひぬ

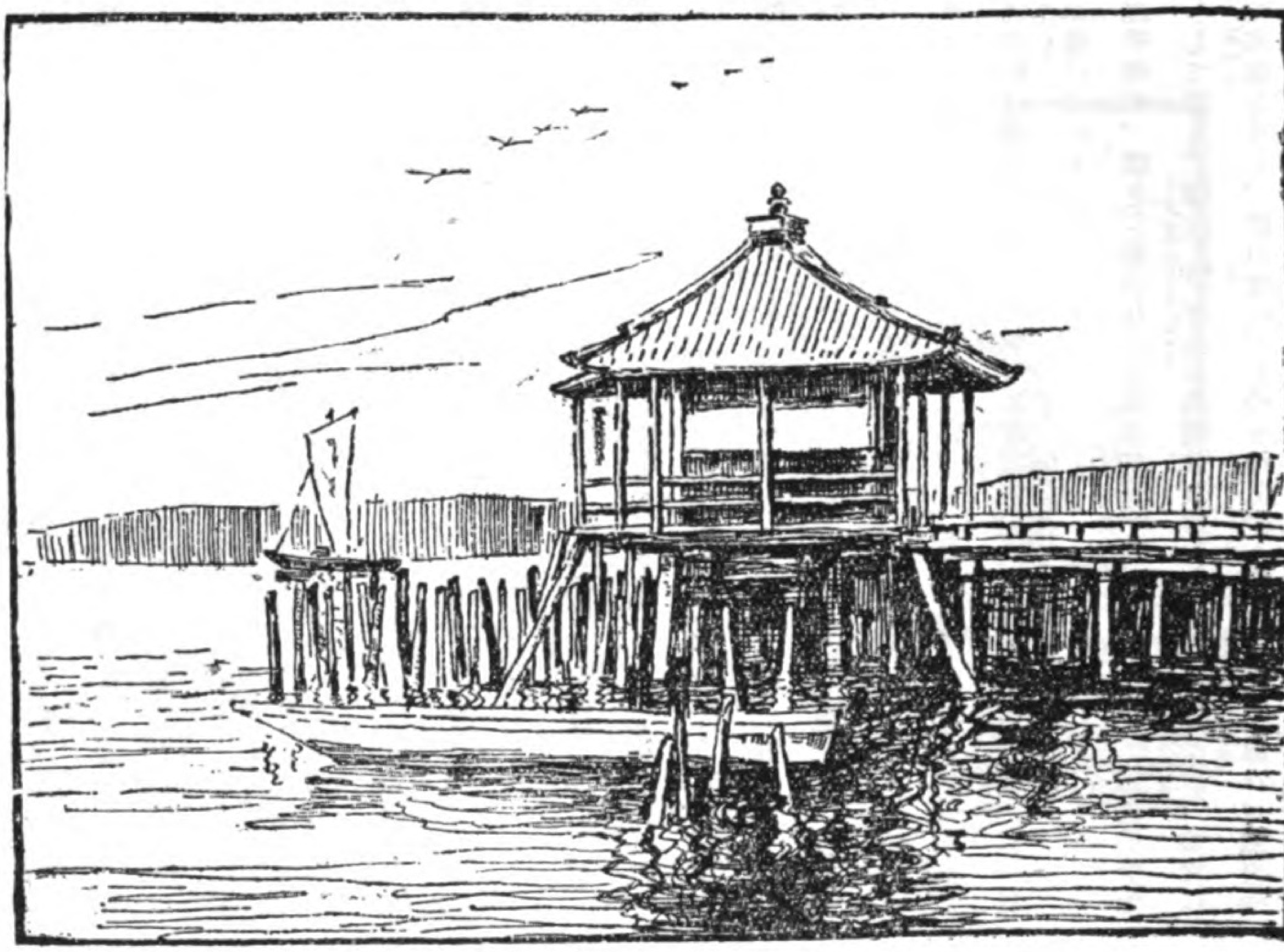
さつきの書生達はもう、山をめぐつて今し鳥居をくゞらうとして居る。おくれてはとこつちも一生懸命。鳥居からは下りとなつて、行く事七八丁。やう〳〵辨天樣へと。

たゞ見る幽邃閑雅の地、小さやかなる辨天堂。かたはらにはおきまりの琵琶うや〳〵しくおろがみまつる。もう十二時間近。御旗が北山に

三井寺



堅田浮御堂



なつてしまつた。

「父樣、御辨當？」

「ハーーーまだゝよ。もう減たのか、早いぢやないか」

「でもづゐ分歩きましたもの、倒れさうですよ」

「ハーーー掛茶屋を見たので急に腹が減たのだらう、もう少しだよ」

とおつしやりながら歩き出す。困つてしまつたわ、一體何處へ御休みなさるのだらうもの此先になかつだらと、未練が殘つて跡見返り、見かへり、結ひつけ草履引きずりつゝ行く。三四丁で無洞寺と云ふにつく。眞宗開山上人そば喰ひの御眞影とやらがあるとか。草履ぬぎ捨てゝ本堂へ上る。

どかり坐してしまふともう立つのもいや。意地も慾もなくこのまゝここに、坐て居たいと思ふ。御賽錢ポンと投げて合掌する。やがて七十ばかりになる＝ホ〳〵の坊さんが出て來た何とはなしに可哀想だと思つた。

「そも〳〵そば喰ひ御眞影の由來は………」

と勿體らしくうなり出した。學生も殊勝らしく、うつむいて聞てた。私は、たまらなくをかしいのを、ぢつと堪へてた苦しさ。他から見たらさぞをかしかつたらうと、後で冷汗が出た。述べ終ると、すつと立て奥へ引こんでしまつた。あんまりアツケないので、そつと父樣の御顏をのぞきこむと眞面目なお顏して拜んでいらつしやる。

みんなが此方ばかり見るので氣まりが惡くなつたので、つと立て障子

な明放てば、マア何といゝ景色でせう琵琶がすぐ目の前で、まるで箱庭の樣。少しでも畫の心得があつたら、と口惜しく思つた。

こんな處に一生すごしたい……　何も世の中を悲觀したわけぢやないが……まつたくいゝんですもの俗氣をはなれた仙境！　どんなに氣樂だが知れない。いつそ髮をおろして尼にでもならうかしら、と途方もない事を考へてたら

「ナア絶景、絶景」

「得も言はれぬ」

ドヤ〱とみんなが廊下へ出て來たので、びつくり

「母樣、もう行きませう」小さな聲して母樣の御袖を引張る。

出てから石段を昇りつめると不動堂。御寺で見たよりも亦、景色がいい。幾百年を經たらん如き緑こき神杉、欝として天を蔽す。尾花桔梗女郎花とり〲に秋の比叡に色そへて、鳴くなる蟲の聲のあはれさ。

やつと御辨當にありついたので勇氣百倍。サツと吹き來る風は束髮の鬢をかすめて通た先頭に立て山又山をふみわける。

ホロ〱となく山鳩の聲が悲しい。はるかに根本中堂の屋根が見えそめた時は嬉しかつた。丹塗りの御堂、何となく神々しい。案内につれて御堂にはいる

二千年來、盡きた事のないと云ふ御燈明がぼんやりと、御堂の中を照らして居る。豊臣秀吉公の再建せられしと聞く。其宏壯。如何にして不便なりし、彼の世に、しつらへしかと疑ふばかり。思ひは幾百年の昔にかへりて横暴なる荒法師の、こゝに居たるよと、そゞろに其折の事どもを思ひ浮べて見た。

佛法僧鳥の鳴きし昔がなつかしい。

十年來、年々に京都へは、二三度來るけれども、いつも叡山へは來た事がなかつたので、幾年この方の父樣の素望。はじめて今日かなつたので、其御よろこび、傍から見ても御うれしさう。

茶所に息ふ。名物に旨いものなしの例へにもれず、辨慶の力餅、味もないものだつた。

繪葉がき求めて、都なる兄上妹の許へ、ペンの走り書。見物はこれで終り、これからは下山、坂本までは遠くはあるまい。

菫を摘折てオペラバツク片手に立ちあがる白地友禪の帶枠が眼にひらめく。一瀉千里の勢で下る。走るわ、はしるわ、道の木々も目に止まらぬ、はやさ。

堅田の町が見え出した。浮見堂何處とも見えず。呼べば應へん竹の島、竹生　紗につゝまれて見えわかず。眺つきせぬ湖上の景色。

麓へ出たのが午後の五時。車で坂本の町へと向ふ。車上より今來し山を、なつかしげに見上た。アレ〱無動寺が、木の間がくれに見える。あそこまで行たのかと思ふと、何とも云はれなく、嬉しさがこみ上げて、ひとりほゝ笑んだ。もう別れるのだ。此山に。比叡の山よ。樂よ。延暦寺。永世に靈姿を保て。また來む春は、氣高き君が雄姿を仰がん。愉快なりし一と日なりしよ。つゝがなかりし山靈に謝す。さらばよ。比叡！いざさらば。

（終り）

小春日記

内藤千代



○

午前六時起床、秋の氣のほとばしつた朝げしき、晴れたりな一碧萬頃の空、澄んで水の如し。垣根のコスモス、冷たい白露にゆあみして、ゆら〳〵ゆらめいて居る、よくもかうのびるものだと今更の様に感心する。

書齋の掃除、お髪上げ、今朝は熱いお湯ですつかり癖を直して念入りに揃へたから、根かげんも程よく、櫛目あざやかに、一絲みだれぬルイザ巻、右に眞紅なリボンを一つさす。さしもあれ程排斥なすつた母様、此頃は「おゝよく出來ました」「ほんとにお品のいゝ髪だねえ」なんて有仰るやうになつたのだもの、これまでの私の骨折は一通りぢやなかつた。髪結も、「よくまあこれだけのお髪を、お一人でおこなしになります、」つて感心してたわ。たゞ困つた祖母様は、御自分のデコデコ結綿や、緋鹿子かけた島田時代を夢みて被居るので仕末にならない、ホヽヽ、前髪低くふくらませた束髪のことは、ほうろく〳〵つて、ルイザのことは帆かけ舟、ローマはへちま、ウヰンナは、あゝ可笑しい、

四五日前の花瓶の野菊が、無情なさまになつて居るけれど、秋はそれもかへつて趣味がありますなんて、逸早くも坐つてしまふ。雪野が天長節着の紋附、ほんとにあの呉服屋もトンカチだよ、紋を間違つて書き直しにやつたりなんぞ、――白モスリンの比翼が流石大へん引立つてみえる。通知簿が九十點以上だつたら、新しい靴とカシミヤの袴、こしらへて上げるつて、あれ程奨勵しといたのに、この頃はずん〳〵成績が下つち

まつて、でまア今度もそれを口實に、袴は今までのを縫ひ直して間に合せとくやうなわけ、思へば雪野も可愛想よ。

郵便、

知らない人からの求交狀、人はかはれど千變一律、よくもかう平凡な事ばかり書けたものだ、月並も女の人のはまだいゝ。男性のくせに私なんかと交際をもとめる人があるが、何するつもりなんでせう、それも思ひ切つて可笑しい程下手なのが多いので、遊ばしませの、下さいませ、なんていやに叮重な、お姫樣の腐つたやうな言葉使つて、下らない事書いてある、何處に男子の威嚴がある。私は男らしい男子が好き、よしや少々ぐらゐ無理な事でも……女の云ふ事なんぞは理でも非とおし通すくらゐのバンカラ樣が好き。

母樣の結日でおまきさんがまはつて來た。もう切髮にしたい、したいつて有仰るのだけれど、祖母樣をお送り申してからでなければ、二人も御隱居樣が鼻を並べて居るのも可笑しいし、第一困ることにはお召物なんか、みんな昔のまゝなんでせう、まさかに切下げて紅絹裏の袖も着られないぢやありませんか。田螺を三ツばかりよせたやうな束髮、鬢にはチラ〳〵と光る白髮、老けて被居るのねえ、誰しも明治つ子とは見てくれませんわねえ。

千代がお轉婆で祖母樣のお氣に入らない事や、祖母樣を馬鹿にして仕樣がない事や、雪野と喧嘩ばかりしてどうしてうちの姉妹はこんなに情が薄いのだらうと云ふ事や、母樣はいろ〳〵おこぼしなさる。だつて、姉妹喧嘩するつて、何も喧嘩するのは情が薄いとかぎりやしない。これでも私、雪野のためには隨分氣をもんでます、喧嘩するのは雪野がわるいからよ、私の云ふ事ちつともきかないで、母樣にばかり甘つたれて、時々憎らしくて堪らなくなる。

夕方は母樣のお手傳して精進揚をする、私のといたうどん粉はかたまりだらけだつて叱られる。お芋を切れば上が薄くて下が二倍も厚いので、一々剝きとらなければならず、祖母樣が、「こんな人がいまに蟹の丸揚

なんぞ旦那様に食べさせるのだね」と警句を吐く。小筆で、秀逸だねお祖母様。

夜、本箱の整理をしたら、引出しから田中さんの文反古が出て來た、ふしぎにも三年前の今月今夜、落手した書狀である、なつかしさにそつと讀み返してみる。「雪ちやんの天眞爛漫なりしは今も得忘れず、今も一日とて學校は休まれざるべし、今も花壇の隅にて土のおまんじゆうを製造さるゝなるべし、朝は時計の進まざるをかこち、夕方はかアさんに一寸御用がこれなく候や箱の中の人形様は寒い風も知らぬなるべく、お清書はいつも良上なるべし……。



いまはお互に安否の程もわかりかねるやうになつて了つた、げに年毎に思ふ事多し。私は十六、雪野は十一引詰のお下げに結つて居た……

〇

今朝お降りから菊を一かゝへ貰つた、黄金白銀の露がほろ〳〵と冷たい、二階の花瓶に投げ挿しにする、痛い程きつい香が身にしみる。

例の通り裁板を前に坐る。

今年こそは着物〳〵と云つてたけれど、學校問題がもち上つてから、それどころぢやない、そんなお金があれば一錢でも貯金しちまふ、で、あの洗ひはりした前世紀のお召縮緬を、また一張羅に仕立やうと云ふさわぎ。下着は羽織だつた華美な紫地の友禪紬、これでもコバルト色の(無論メリンス)細ぶきを、二つ揃へて重ねたなら……と思ふと、うれしくつて、つひ針の手をいそがせる。

母樣つてば、學校と云ふと、着物が〳〵つて有仰るけれど、何も着物で學校へ行きやしまいし、私、そんな薄志弱行の徒とは違ひます。

あの昨日山川さんから。

「きくところによれば○○へ御入學のよし、奉大賀り候……」なんてほんとうに驚いて了つた。まア誰からお知りになつたんでせう、あんまりお氣が早過ぎる：：でも嬉しくつて。こんな事云はれるとなほ、どうしたつて、行かずには居られない。入學したつてたかゞ技藝學校、人は一笑にふし去るであらうが、私にとつては將來のパンのたねにもするのだし、それにこれだつて一度は、一度は、裾高のお袴けつて、花の東都を濶歩してみたいわ、いゝわ、母樣に御めいわくかけるんぢやない、自分の力……自分の腕で行くんですもの……と思ふと自らほこりのほゝ笑みも湧く。

こんな事ばかり考へ〳〵してるとこへ、奈良林の奥樣が見えた。うれしくて駈け出ると、枝折戸を開けて庭の方へおまはりなさる、結立のお丸髷に銀の平打、こぼれる樣な御笑顔、紫紺地の華美なお羽織召して、白いお顔によくうつる、可愛らしいマダム振り、まアこの方が來年の四月頃は母樣におなりだなんて嘘の樣。お上り遊ばせ、おより遊ばせつて引ぱり上げるやうにしてもかぶりふつてあらつしやるので、

「今日は何處へ」

つて伺ふと、

「えゝ」つておつしやる、お藥取り……。

「あゝ直男樣、如何であらつしやいますの……」

「有がたう」急に足元をみつめ乍ら、

「明後日ね、あの天長節ですから行らしつて下さいまし、私の手料理で祝宴、ホ……大變なさわぎ、今日はそれをお願ひに來ましたのよ」

「あら、まア、有がたう、さう伺つちや、來るなと有仰つてもおしかけてまゐりますよホ……嘉鶴さんもゐらつしやるのでせう」

「オフコース」

笑ひながらハイカツた返事

「ほんとにね、きつといらして下さいましね、直男もお待ち申して居ますわ」

「エヽ、是非伺ひますわ」

おかへりにはかたく握手して門まで御一緒に出る、貢に草履に枯芝をふんで、俯き勝ちに二度三度、ふり反つては莞爾なさる。私、小作りの方は羨しい、何てお若くてお可愛いんでせう、私なんぞ半鐘どろぼうだの看板御用心だのつて、ろくな名はつけられやしないそれもいゝが栁原さんが二十二だらうつて有仰つた、賢い人は老けて見えると世人は云ふ、私は足りなくて老けて居る、こんなつまらない事はありやしない。

夜机の前に坐つて當もなく一冊本箱からぬきとると即興詩人の上が出た、はかない氣がしておつと、みつめてゐた。これ下さつた八代さま、あゝなつかしい本郷通り、羨しい、羨しい、大學構内の秋、どんなにいいでせう、あのクラシックな法科の建築あのウエストの銅像のあたり、ハラ〳〵こぼれる櫻、紅葉もう大學の運動會も近づいて來た。

あゝ私、ほんとに來年は東京へ出られるかしらん。最有力な叔父様と母様に、御願ずみとなつたのだからもう九分通りは成功だけれど……祖母様がおきゝになつたら、まア何と仰有るだらう、祖母様なんかこはかないけれど。



京都北山　名所の旅

岩井蘭香女

私は京都名所を百八十ヶ所スケツチを致て参りましたが、まだ〳〵見ぬ所が澤山有ます、東西の名所は人も多く参りますが、北山はあまり人も澤山参りませぬ山城、丹波の國境に大悲山と云ふ所が有ますけれど、何分汽車も無く車も行ず、不便成る山の奥の事ゆゑ、女獨りでは参り兼、つれが無くて困りておりますと、私の弟がはからず來ました、弟もまた名所古跡を見る事は大に好みます、北山の矢脊大原も、しらぬゆゑ誠に悦で二人で参る事になり十一月十七日の東雲の明がた内を出で三條通りを東へ川端を北へ、行と、左に見ゆるは賀茂の鳥居明のかれは東山にひゞき、水は賀茂川に清く流、岸の柳は水にうつりて

誰が爲にまゆつくるらん賀茂川の　岸の柳は水かゞみ見て

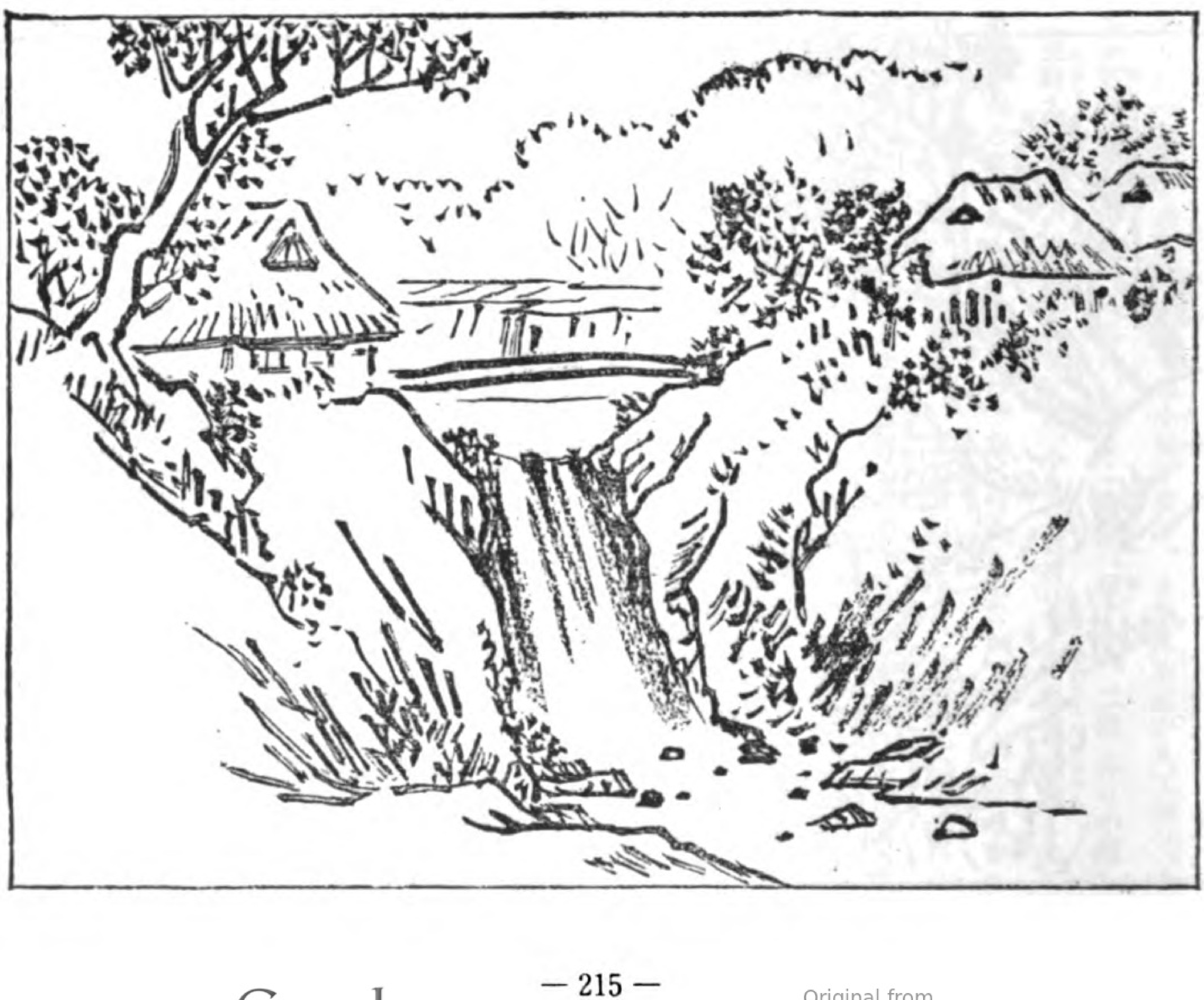
口すさみましたら、弟が出かけからこしたれでもつまらんと笑ひますから、あまり朝早くおきしゆゑ、寝言のあまりと笑ひながら、東の方より花賣女が五六人來ました、何やらはなし致ながら、何を云かと聞ますと花賣女の申事には、六右衛門のおかめは却々よきこしらへして嫁入した、さうな、あの子は却々えらい、十二から毎日〳〵雨がふりても雪がふりても、一日も休む事無く、花や茶を賣に行て、毎日〳〵五六十錢の錢もうけして、親には少しの入用もかけずに嫁入したげなと、あとは聞とれず、あゝ白川女は朝早くから花や茶を賣り、八時ごろに歸り、晝は野仕事、夜は内に居てわらぢをつくり、縫物をする、白川の在所は其ならはしとは云乍ら、かんしんかんしん、われは親の脛かぶるのら猫同様、こうして所々見物するも親のおかげと、云ながら、東を見れば、南禪寺近きころインクライン舟が山に登り、永觀堂若王寺、眞如堂は紅葉の名所、秋は野色山の色、黒谷は淨土の本山、吉田は日本の神を集て祭る、東には如意山、八月十六日は大文字を燃し、山のすそには鹿ヶ谷法然院、法然上人の修行所にして、清淨成る所にて、浮世のちりも洗ひ清めて、心まで清くなる、又同所の安樂寺には松蟲、鈴蟲の塚有り、これは後鳥羽院の愛妃に松蟲鈴蟲とて、二人の愛妃有りしが、人のしつと妬をうるさく、發心して大内を忍出で此庵室に來つて尼と成り浮世をのがれしが、上皇逆鱗あつて住蓮坊、安樂坊を死罪に行なひ其師たる法然上人を土佐に左遷し給ふ、後此寺を安樂寺と云ふ。

月まつ山の銀閣寺、足利八代將軍義政公の別莊にして、松島、象潟を眼の前にたゝみて、名石數をつくし、其景色筆につくしがたく、襖屛風にも名畫多く、人々のみな知る處ろなり、一條寺には詩仙堂、石川丈山の古跡、滿春院は紅葉の楓、名木有り、將軍地藏は白川村に有り、松崎には大黑天山には妙法の大文字を燃やす、山端は小嵐と云ひて、春は躑躅のころ、夏は螢の名所、高野川の清流にうつるさま山櫻に川清く、麥飯、とゝろ、鰻、あなごと云ふ川魚、あぢもよく、景色もよく、修學寺上下の離宮、櫻楓多し、赤山社御影の神社は賀茂の御親、比叡山の西麓にして、花園村を西に見て、高野川を北へ行とほど無く矢背の野あり、矢背と云は守屋の大臣、弘法の御敵にて、聖德太子に追たてられて、矢背に負て走りしゆゑ、矢背と云ふと、矢背川を中にして、東西の岸の屋有りて、其閑せいなる事、わら葺の屋根より朝けぶりのたちのぼるさま、田舍の鏡さん、柴刈て歸る、其景しき、都にてはとても見られない。

柴かりて歸る我家のけぶりかな

其爺さんにもし〳〵、八瀨の竈風呂と申はどこに有りますと尋たら、北のはしの高塀の有る家を敎へてくれました、其家へ行て竈風呂を見せてくれと賴みますと、下男が案內して見せてくれました、一間あまりのぬり竈、戸のよふなる形ちにふたがしてありますゆゑ、どふして入ると尋ぬると、中に鹽むしろが敷いて有り、其中へ這ふて入り、後で湯をわかして、蒸すとせんきに誠に〳〵よくきくと申ております、午後には湯

落谷の瀧



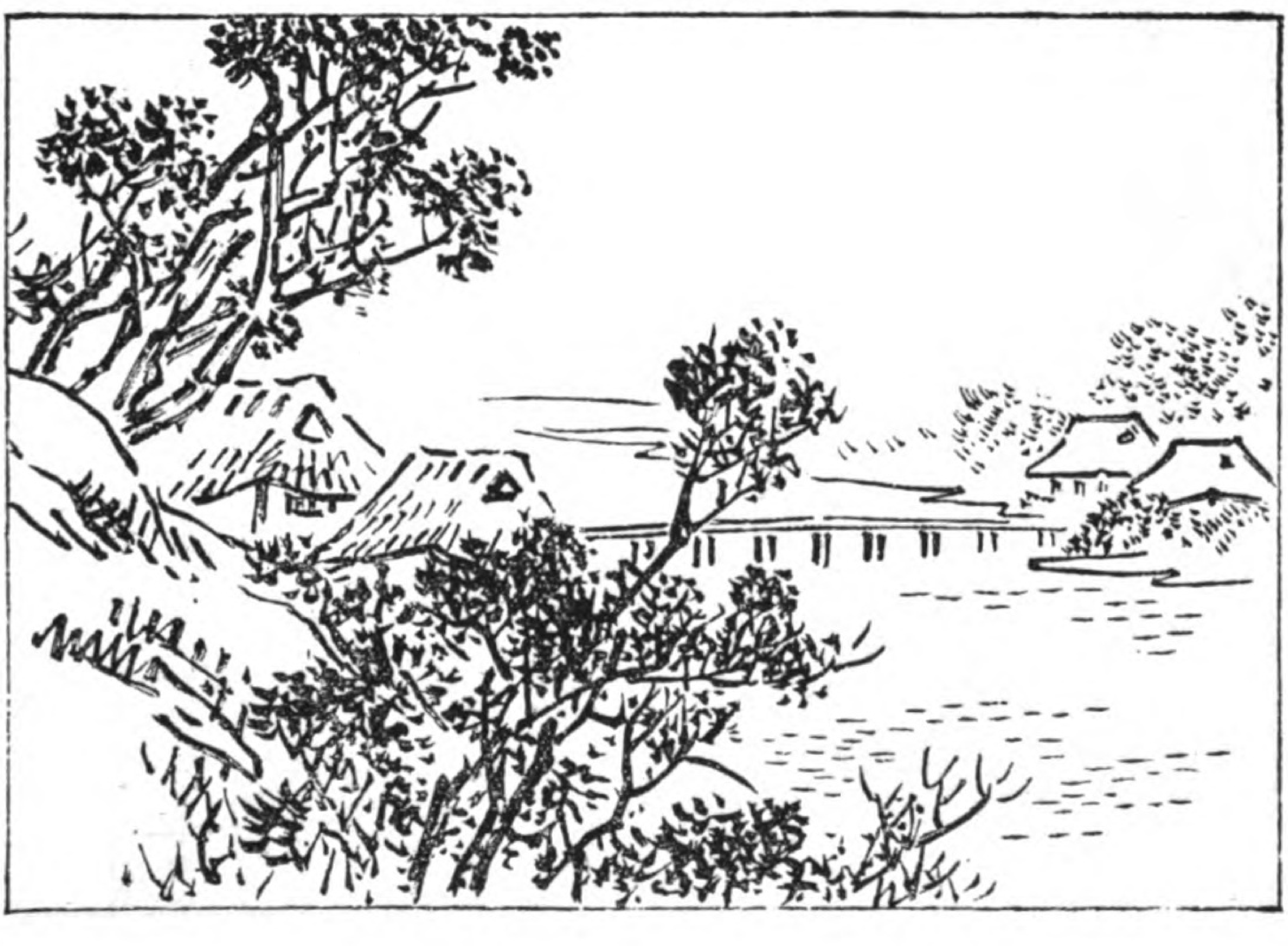
をわかしますゆゑに、御歸りに御立寄下されといふ、又歸りによりますと。そこ〳〵にして歸り、橋をわたりて北へ行くと、東の山のすそに森が有つて社が見ゆる、あれは何と申す神かと人に尋ねたら、矢背の天神、森の中には辨慶の背くらべ石有り、是より叡山の黒谷に近道ありと、あまり〳〵つかれしゆゑ、まづ草原に一休みせんと、草の上に足をのばして休むあまり朝早く出しゆゑ、ものほしくなり晝飯を食する所は無き、やと尋ねたらば今少し行くと提灯の出たる家が有りますとをしへてくれた、其家に行くと形斗りの宿やにて、其向ふに大き成る石に是よりよかはとほりつけて有り、叡山よかはの登り口なり、晝飯を食して北へ〳〵と行くと、鳥居が立つて、道左右にわかれる、是大原の入口なり、立札に所々名所がかいてあり、其うちに雨壷、火壷、風壷として有ります、どんな壷かのぞいて見たや、おそろしや。

火が出るか風が、吹くか、雨がふるか、どちらにしてもけんのん〳〵と、まづ東から廻りたら、よきものを西から行しが、何分勝手しらぬものばかり、まづ井手の里へ行く、井手の玉水を見ましたが、尼寺が有りまして、小き池が有り、其中に小き石が立て有り、お寺で聞きますと、其石にふれるとたゝりますと云ました。

おそろしや井手の玉水くみてしれ

其石の上にあま蛙がおきて居たが、雨蛙はたゝらぬかしらん弟が見えた〳〵、赤き木の鳥居が見えた、石の鳥居に赤いのが有るかと一本やれば、理くつはごめんと、一町ほど行くと、別に社も見えず、つきあ

八瀬の里



江文の神社



たりに一間ほどの屋根ばかりの小屋が有り、まさか石灰が神様でもあるまい、其よこを西へ行くと、二間斗りの崖を二三町も行くと、道二筋になりて、小さき立石有り、左金毘羅道として有り、左の方へもよろしと思ひ、左へ行きましたが、ます〳〵山の中へ行ように思はれて、きみわるく、猫山につゝまれて、尋んにも人はこず、右手はこけかゝりたる小さき鳥居の立て有しが、草木は生茂りて道は無く、山は嶮岨にて峯には削がごとき岩立ちて、別に社も見えず、とても行べくもあらず、また西へ行道あれど山を下るにその道どうもまちがひたらしく、西へ山を下りては大はら名所も見ずに、過行ならんいかゞせんと、しばらく立とまりたれども、しかた無くまたもと來し道へ歸り、また馬場にて休み、ほつと一いき、弟がもう江文の神社は見たくない、つかれて〳〵一足もあるけぬ、一寸一ばいと腰から瓢たんの酒を呑はじめますと、向ふの山のすそに袴、羽織着たる人が來ました、弟が向ふから叔父さんが來たと云ますから、いかにも叔父に似て居ますが叔父が此よふな遠方へ袴つけてくるはづもない、併し行て見んと、起て見れば、叔父にはあらで村の人なり、江文の神社へはどふ參ります、と尋たら、此山道を眞すぐに西へ行くと、金毘羅の立石が有るそこを右へ行くとすぐ橋が有ります、橋から西を見ると社が見える、是江文の神社なりと、何の事やら、今の所左へ行しゆゑ道がちがひしなり、右へ行くとすぐ橋から拜殿が見える、行て見るほどの所にてはなく、山のすそを北へ〳〵と行くと左側に二尺斗りの石が有ります、實盛の鐵砧石時

の帝、刀劔を好み給ふゆゑ、こゝでまいげつ刀を打し給なるよし、行くと道の下に落合の瀧あり、小き瀧なり、橋の下に下りて見るべし。

稀め事を話たりつくさんなりもがな
大原の里に落合のたき

草生村寂光院は尼寺にして高倉院の皇后安德天皇の母、建禮門院平家屋島に滅て後、尼となりて此所々に殘世を暮し給ふ、寶物を拜見して涙をやどして

尋來てむかしかたりに袖ぬれし
八島の浪にかゝるうき身を

此寺を出て東にとりて行に道二筋になり、暫したちどまりしが、雲烈しく成て雨ぽつ〱と落ち來りぬ、北へ行道廣ければ一丁ばかり行と家有りまだ四時なれとも雨はます〱ふり秋の日のみじかく、此家に泊るべしと、内へ入る、何ぞ食する物は有るやと云へば、酒は有りますが魚類は無く、玉子も無く、大根にやき麩、豆腐と味噌は有ります、川じやこも今は無く、是とても宜敷ばお泊り下されといふしかた無く泊る事にする座敷と申ても二つほか無く、其下がすぐ川なり、庭とてもなけれども、天れんの川今は雨もやみ、雲晴て月の光こう〱として清き流に月のくだくるさま作し庭よりもかへつて面白く、湯がわきましたと案内してくれる、大きなる石の三つ四つころ〱と有る上を飛で行く、月のあかりにも足もとあぶなく、是がほんとの飛石かと、湯殿へ行けば戸も無く火もともさず月あかりにて湯に入る



八瀬の釜風呂

月次に入や大原の湯どの傍

明日は東山の名所を見んと楽しみて、朝早くおきて案内を頼めば、十二三の娘をつけてくれる、先づ三千院へ参る、前に櫻の木数本有りて、石崖高き門をくゞり、三千院の御殿を見て、庭前は山を取こみて、一すよき庭なり、是より極楽院羅漢橋なり、来迎院は薬師堂と称す

極楽のほとりにゆかし羅漢ばし

此あたり一面の楓紅葉して、其うつくしき事高き石かけの苔むして天れんの景しき面白く、段々山道せまくなりて、右のほそ道へ入ると、すぐ音無しの瀧、今は道よくなる

しづけさは大原の水の音も無く
　岩にさゝれておつる瀧つ瀬

音無の瀧は、来迎院の東の方に有り、小野山の渓谷より岩を傳ふて落つる故に此名あり、高さ六丈にして巾一丈七尺、下流は二筋となりて呂川律川と云ふ、魚山諸院の前後をめぐりて、入瀬川に入る、私の見たる時は、雨後にて瀧の水多く有り、日てりつゞきて水かれし時は、一面に岩が出、村の子供が瀧登すると云ふ鯉の瀧登りは、書に見るが人の瀧登りは今度はじめなり、岩にさゝれてゐるゆゑ目にちら〳〵して誠にふぜいあり、律川にかけし橋を萱穂の橋と云ふ熊谷の腰かけ石、其邊りに有り。

瀧の流を呂川と云ふ、此邊に法然上人腰かけ石あり、勝林院は本堂柿峯柱の内側に彫物有り、法然上人大原問答の時、証拠の阿彌陀と云はこれなり、又蓮生坊鉈捨藪といふありこれは上人問答の時もし御身に事有ては大事と、蓮生坊鉈を持て藪にかくれて聞居しが、上人問答して諸宗に勝しゆゑ、其鉈を藪へ捨つると云ふ、堂の邊は松杉の間はみな紅葉して美事なりなりから村しぐれして色をます

古知谷や時雨を染てちるもみぢ

本坊へ行くと坊さん獨居て友ほしそふな顔なり、まづこちらへと座敷へ通して茶やら菓子やら出してもてなし、それより案内乞ふて、奥の院を見る。

山風も木枯たちてもみぢばの
　落るを時と秋はいぬめり　治堅

鳴の鳴澤べに落つる山水の
　末こそ秋はかなしかりけり　景樹

身一つに暮行秋を惜まゝし
　よに浮時のともゝなければ　千濱

大原の嶺のさゝ栗落やみて
　はら〳〵降るは時雨なりけり　永好

紅葉はちりも残らで山松の
　染ぬみどりにしぐれ降なり　直好

雲迷ふ鷹の里の片しぐれ
　ふらす顔なる嶺の月かけ　千[illegible]

安全なる美容法

△輕便なる美顔術

近頃流行する美顔術は、之を本式に行ふときは、なかなか仕掛が面倒ですが、さう大した器械も用ゐずに自宅で輕便に爲し得る法は無いでもありません。それには先づ顔を温湯で洗ふて十分垢を除きます。次に洗面器に熱湯を滿たし、其中へ硼砂か硼酸を一摘程交せ其中へタオールを浸し、輕く絞つて顔へ當てます。此の樣にタオールを熱い湯に浸しては顔へ當て／＼して十五分間位も經つと、皮膚は自然に綺麗になつて、毛穴も十分開いて來ます。之に用ゆる湯は成るべく熱きを要するゆゑ、洗面器はストーブか火鉢の上へ懸けて置くと妙ですが、然し又餘り熱いのを推しつけて皮膚に火傷などをさせない注意が肝腎です。以上の如くして毛穴が十分開いたら、手早くクリームを顔一面に塗つて指先でゆる／＼撫で、塗つては撫で塗つては撫でしてゐると、皮膚はクリームを吸込んで、皺は延び顔は一體に滑かに美しくなります。これは毎日に行へば結構ですが、一週間目或は二週間目に一度位づゝでも十分効驗があつて、度を重ねる中には、見違ふばかり綺麗になります。

△色白くなる食物と藥劑

何うすれば色が白くなるかと色々お考への方もありませうが、これはどうしても衛生の根本に注意しなければなりません。食物に就て言へば、牛乳、牛肉、鷄卵、鷄肉、魚肉等は滋養物で消化がよいから、常に之を食すれば血色をよくし、林檎、葡萄、オレンヂなども血液を淸潔にする効があるから、從つて美貌を助けます之に反して酢の物、鹽辛きもの、からし類、餅菓子、貝類、酒類一切、殊に不規則な間食、夜食などは、孰れも皮膚美を害します。又睡眠に就ていへば、人は是非八時間は眠らねばなりません。而かも朝早く起きるといふことも衛生上大切ですから、用事もないのに夜更しするなどは十分愼まねばなりません。つまり總ての衛生上の規則に從ふことが大切です。或は色を白

くする爲に亞砒酸などを用ゐるといふことも西洋邊ではよくやりますが、其の用量を誤るときは生命に關はるやうな危險があるから、斯る方法は先づ採らない方が安全です。

△中凹の顏の化粧法

中凹の顏も化粧の仕方に依つてはすつかり見直すやうに造られます。即ち先づクリームを適度に溶いて顏一面に擦り込み、その上に白の粉おしろいを限なく叮嚀に打ち、後ち新芽色のおしろいを顏の兩側からかけて、顴骨の邊へ來たらそれをやゝ濃い位に打ち、鼻の兩側、兩眼のまはりから、顴骨の上に跨り、額近くへかけては肉色のおしろいを打つのです。斯くすれば中凹の顏も中凸の顏と化し、輪廓が見事に整ふて參ります。此の方法で少しく手加減をするならば、平たい顏骨の出張つた顏も、顏面の中凸の美しい顏と見せることができます。

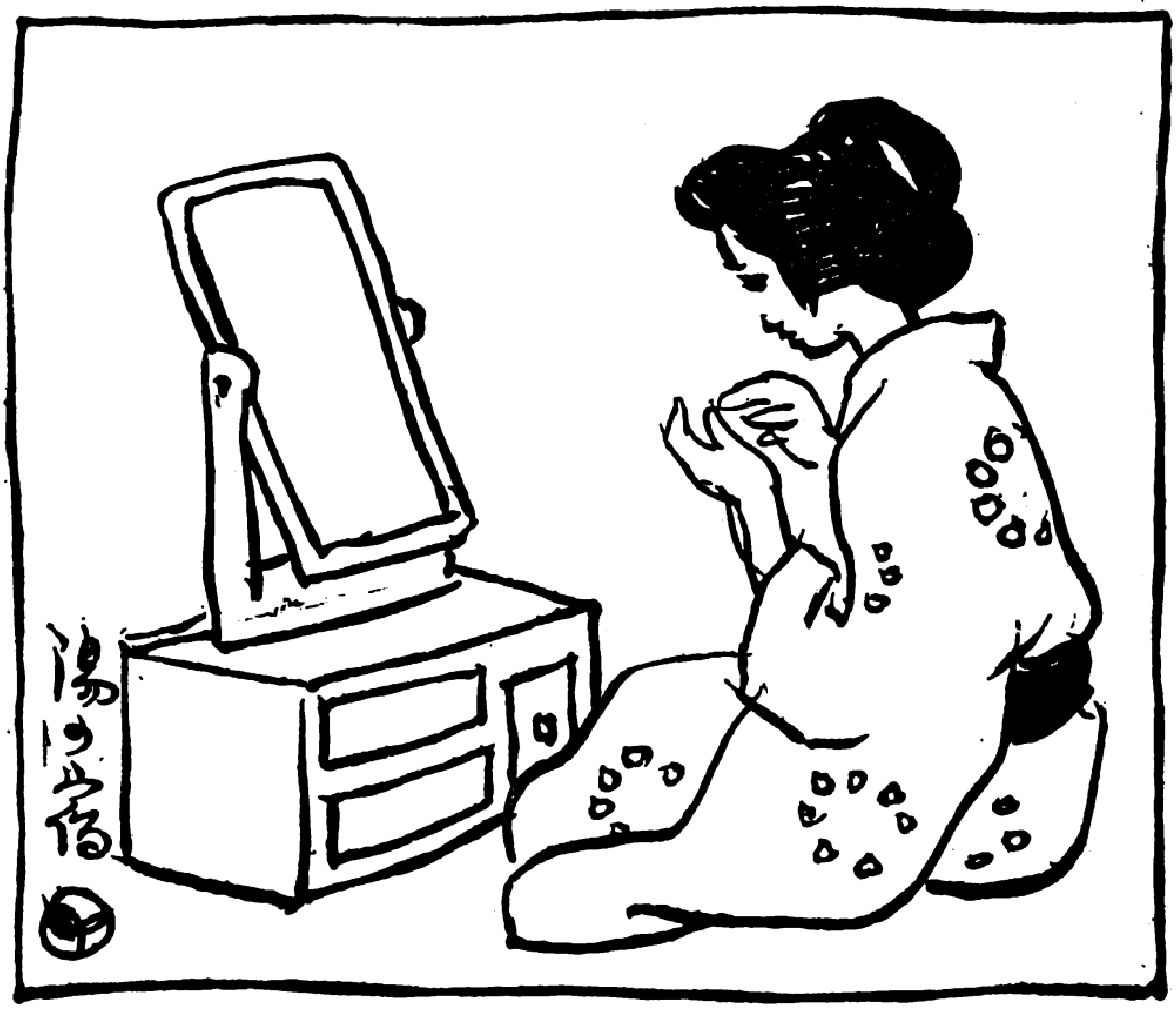
△鼻の低い人の心得

鼻は顏の格好に相應して高くもなく低くもなく、すらりとして小鼻も張らず、鼻筋が通つて素直なのが誰が目にも美しく見えるのですが、先づ低い鼻を高く見せるには何うするかといふに、多くの人は鼻筋に少し白粉を濃い目につけて小鼻の方にぼかして居ります。けれどもこれでは其處ばかりが餘りに際立つて拙く見えるから、此頃少し考へのある人は大抵下のやうに致します。即ち白いおしろいを鼻筋其他の部分よりやゝ多くかけ、其の上に肉色おしろいを鼻筋に觸れぬやうにして兩側に打つのです。或は白おしろいを塗つてから、濡手拭に紅を少しつけて鼻柱の兩側を拭いて置くのもよい。かくすれば低い鼻も自然と高いやうに見えます。若し鼻が低くて巾の廣い人であるならば、右のやうにした上に、尙ほ鼻の方へ新芽色のおしろいを打つてぼかして置くのです。

△脣の化粧と運動

美人の口は、脣が淡紅色で、小さく引締つたものでなければなりません。それが大きくては、他の部分が如何に美しくても、甚だしく容貌を害します。けれど

も口の大きい小さいは多くは脣の厚薄に因るから、紅とおしろいの塗け方如何によつて大きい口も小さい愛らしい口元に飾ることが出來ます。先づクリームを脣の上にかけて、それへおしろいを打ち、次に紅を脣の內側から少し濃く鮮かに點け、其の上をちよと舌で舐めれば、丁度よい工合に自然に小さい口のやうになります。其のおしろいを打つたり紅をさしたりする工合は、素より其の人々によつて違ひます。けれども紅のさし加



減は、一體に上脣を薄く下脣を濃くし、又厚い脣は淡目に、薄い脣は濃い目につけるのがきまりです。尚ほ化粧以外の方法で、脣の自然の色を美しくし、形を愛らしくするには、常に脣の周圍の筋肉の運動に意を用ゐ、口元の締を善くするのです。其の筋肉の運動法としては、時を定めて上下の脣を內へ吸込むやうにして齒で其の裏を摩擦するのが最も簡易です。

△瘦せた人と肥つた人

顎の餘りに長いのも醜いものですが、其の裏から咽喉部へ下るに從ふて、おしろいを淡く打ち、その尖端に新芽色のおしろいを濃目に打てば、幾分か見直します。又顎の短かい人ならば、その反對に裏から咽喉部へかけておしろいを漸々に濃く打ち、尖端の方へ肉色おしろいを輕く打ちます。次に痩せた人は槪して顏は長くて色は蒼白いから、頰から顎、顏の兩側、兩眼の周り、顴骨の邊を殘して他の部分へ肉色おしろいを打ち、顴骨と顎の邊に新芽色のを打つと、ふつくりした形に見えます。又肥つた人は多くは顏は丸いから、右の反對に、肉色おしろいの代りに新芽色のを打ち顴骨部なども同じ色のを打ち、額だけに肉色おしろいを打ちます。化粧法もかうなつては大分複雜になりますから、無論熟練を要します。

△毛足の美的保護

手足を美しくするには、成るべく冷水に浸さなければよいのですが、中流以下の家庭では到底それはできないから、水を使つた後は、乾いた手拭かタオルで十分拭つて置くのです。冬季には特にこれが肝腎です。又使ふ水も、成るべく川水や井戸水等の硬水を用ゐずして、湯の冷めたのか水道の水の如き軟水を用ゐるのです。このやうにして居ても手足が荒れた時には、硼酸ワゼリンを塗るか、ベルツ水をつけるのです。硼酸ワゼリンはワゼリン二〇、〇と硼酸一、〇を加へて煉合せて造り、ベルツ水は苛性加里二、〇、グリスリン一〇〇、〇、アルコール一〇〇、〇、蒸溜水一〇〇、〇ベルガモット油一〇、〇を混加して造ります。其の外食物にも注意すべきで、肉類とか魚肉とか、或は牛乳、天麩羅、胡桃の如き總て脂肪分に富んだものを常食として居れば、荒れ性の人などはことに豫防になります。

△毛髮の洗ひ方

婦人の髮は先づ二週間か三週間毎に一度づゝ洗はねばなりません。そして成るべく塵芥だけを洗ひとつて、地の脂肪を脫落さぬやうに心掛けることが肝腎です。其の洗方には色々ありますが、左の如くするのが輕便です。即ち先づ湯で髮を濕して置き、それより毛洗液

をよく揉み込み、(此の毛洗液は、石鹸の使ひ殘りをためて置き、よく乾かして、何か小布片に包んで、コナゴナに潰し、之をコップに半分程に熱湯二合位を入れて交ぜ、それに硼酸を一摘み程入れ、石鹸が溶けたら尙ほ幾那鹽三ゲレンを加へて造る)、五分間程經たらすつかりそれを洗ひ落すのです。洗ひ落すときには如露へ湯を入れて、かけ湯が綺麗になるまで濯ぎ流し、最後の湯には硼酸を少し加へてかけます。或は鷄卵で洗ふのも結構です。これは卵黄二個と石鹸膏コップに半分程とをよく交ぜ、硼酸を少量加へて髪に擦り込み、泡がブク／＼立つたところを叮嚀に洗ひ落すのです。

△毛髪の塗料

髪を洗つて後は、櫛で梳く等のことをせず直ぐに海綿か乾いた手拭を以てよく水氣を取り、根氣よく自然の空氣で陰干にするのが大切です。そして十分に乾いた所で椿の油を塗けます。塗料として之れが最も良いやうです。近來束髪の流行につれ、油を塗けずに束ねて居る人が大分あるやうですが、これは毛を縮らし、赭毛となし、遂には毛根を枯死させる恐れがあります。けれども油を塗けると、空中の塵埃が多く髪に附着するから、其の使用する人の心掛如何によつては、髪の生氣を妨げ、美を失はしめて、却つて滋養を害することがあるから、常に清潔にする注意が要ります。歐米の塗髪料に鑛物性の油の多いのは之を防ぐ爲で、植物性の油を塗ると髪がべた／＼するのに反して、毛がさらさらして如何にも氣持がよいが、これは毛を赭くする性分があるから、日本人には適しません。

△自然の儘の艶化粧

皮膚の自然の色を其のまゝに美しくするには、先づ湯に入りて肌膚を淸め、其のまだ乾かない中に、脂氣の多き者ならばグリスリン製化粧液又は硼砂製化粧液を、又脂氣の少なき者ならばグリスリン或はクリーム又は透油を手掌に滴らして、指にて萬遍なく塗り、乾いて粘らなくなる迄軟かき紙又は揉皮にて輕く撫でるのです。

進歩せる西洋洗濯

西洋諸國の洗濯の方法は國々によつて多少の相違はあるが、一般に大仕掛けで、日本の西洋洗濯などの如き、小規模なものではない、就中米國は其の中でも殊に文明的である、中には會社組織になつてゐるのもある、又獨逸では洗濯屋が大資本を掛けて、ホテルや、料理店などに用ふる食卓布や、ナプキンや、敷布等一切を貸用して置いて一週間に一回とか三日に一回とか洗濯してやるといふ風で、却々進歩したものである。

併し又歐洲でも田舍へ行くと日本のやり方よりも劣つてゐるものが多い、瑞西の片田舍では一週間に一回づゝ洗濯をするので公園のやうな公衆の集まる所がある、其處の中央に石かセメントで作つた水槽がある、長さは三十尺位で、廣さは十尺か十二尺位ある、この水槽に山の方から水管が水を導いて來るので此中へ洗濯物を入れて三十人から四十人位の婦人が舞踏しながら面白をかしく洗濯するのである、これが濟むと綱を張つて乾すのではなく、樹の枝や、石の上や柵の上にかけて干すといふ工合である、

又西班牙の婦人の洗濯の仕方は瑞西のそれとほゞ似てゐるが洗濯場は屋敷の片隅に石かセメントで水槽を作つてそこで洗濯をする。

佛蘭西の農家は歐洲中でも綺麗好と云れてゐる位であるが、それでも地方によつては二ケ月に一度位しかやらない處もある、甚だしいのは露西亞の農民で、これは一と冬五ケ月間は殆んど着たまゝで、どうかすれば破れるまで洗濯はしないといふ方である。

歐米諸國では乾燥洗濯といふ事が盛んに行はれてゐるこれは日本の水洗ひから見ると餘ほど進歩したもので、此の方法によると、毛織物や絹物の丸洗ひをするのに至極便利で、日本服などは綿の這入つたまゝ洗濯する事が出來る、然らばどういふ方法にしてやるかといふのに、その洗濯法は揮發性の藥品の中で洗濯物を浸して塵埃だの黴だのを除くのである、丁度油浸みた

半襟を揮發油で洗つて穢れを取るのと同じ方法であるその方法で、器械を用ひ薬品を多く使つて、丸洗ひするのである。歐米諸國では此乾燥洗濯を大規模でやつてゐる工場が澤山あるさうで、男子用の服類は勿論、婦人服なども仕立てゝあるまゝ、そつくり丸洗ひをするのである、婦人服などで立派な刺繍のしてある物などでも少しも體裁を損ずる事がないさうである。この方法でやれば日本の裾模様の様な物でも洗濯が出來るといふ事であるが、何分器械を使て大きな容器に澤山な揮發性の薬品を湛へてやらなければならぬ仕方であるから、一寸困難である、且つ揮發性の薬品を扱ふのであるから危險も多く、其の職工なども餘程熟練してゐなければならぬ、兎に角西洋では近來此乾燥洗濯の便利なことを知つて、近來盛んに行はるゝに至つたのである。

西洋洗濯は第一に品物が損じる、第二に賃錢が高いといふが、成程今日市中の西洋洗濯屋では洗滌料として晒し粉や、過酸化曹達や加里等の劇薬を用ひてゐるこれで洗へば如何なる汚れ物でも綺麗に落るが、其の代り品物の損じる事も又非常である。それから賃錢の高いといふのは、いふまでもなく注文の數が少いからで、世間の人は汚れ抜いてから洗濯屋の手に渡すから洗濯屋ではいくら、洗つても容易に垢が落ちないから出來るだけ強い薬を用ひる、隨つて品物の損じるの度が甚だしいのである。洗濯屋にこの習慣があるから、偶々汚れの少いものを持ちこんでも、矢張洗濯屋では數ある汚れ物と一緒に過度の薬品を使つて洗ふのであるから地が損じるのも無理はない。

日本の洗濯法は冬でも冷たい水の中に兩手を突込で揉むのだから皸が切れてたまらない、其故自然洗濯を怠ることになる、西洋では家庭用の洗濯が幾種類もあつて水に手を觸れずとも只手把を廻しさいすれば、綺麗に洗濯が出來る器械がある。矢鱈に洗濯板にこすりつけたり、足で踏んだり甚だしきは石にたゝきつけたりすると反つて蛋白質が凝まつてしまふ、其外火熨斗も家庭用としては瓦斯火熨斗がよい、マッチ一本で事

が足りて至極簡單である。

油を拔くのに揮發油がよいとは誰しも知つてゐるが其外俗說によるものでは酒の汚染は煙草の煙、インキは蜜柑の汁、墨は飯粒、血を洗ふにはおろし大根の絞り汁がよく効くと云ひ傳へられていづれも經驗上から來た話であるが、汚染を取ると地質の染色までも失つて縞の着物なら縞が汚染のところだけ剝げてしまふ、大概の汚染はとれぬが多い、これを取るには是非晒し粉か、過酸化曹達のやうな强い藥を使はねばならぬ、この際は後でよく水で洗つて悉皆藥品を取除かねばならない。

人間の垢は分析して見ると脂肪と蛋白質である、これが凝固してしまふとなか／＼落ちなくなる、垢染みたのは石鹼水で煮て二日間ほど雨水に浸けて置くと自然にこの蛋白質が遊離する、其遊離したものを取つて棄てしまへばよいのである、石鹼を用ふるならば、後で十分その石鹼を洗ひ落さねばならぬ。

洗濯をするには唯ごし／＼と洗へばよいといふ譯ではない、同時に消毒の意味にも叶はねばならぬ、折角洗濯しても病毒のきれいに取除ないのはたとへそれが眼に見えないとも矢張これは不潔といはなければならぬ、消毒釜や、洗濯風呂の備へてない家庭では盥の熱湯で布を蒸す事が肝要である、夏でも冬でも洗濯の時は必らずこれを試みてどらんなさい、白い布などは別して清潔になるものである。

洗濯の据風呂といふのは、まづ熱湯を盥に盛り、それへ洗濯曹達を少し加へ、その溶けたころを見計らつて洗濯の布を其中へつけ、その儘二十分か三十分間盥へ蓋をして置くとたとへ其の布に病毒が附着して居ても、大抵それが死滅するから至極安全な方法である、且つ熱湯につけて置くと垢もよく浮いて綺麗になる、盥の代りに据風呂の樣なものを作つて其中へ洗濯物を浸し、溶いた曹達を加へて漸次に湯を沸かして煮るのもよろしい、兎に角こうすれば病毒も死滅して本來の洗濯の趣意に叶ふてゐるわけである。

藥品應用 衣服の保存法

まづ洋服の方から言はん、日本に來る洋服地の染料は多く酸性染料で、上等物丈けがアリザリン染である、アリザリン染なれば變色の虞はないが、酸性染料であると變色するものであるから、是等の夏服を保存するには、先づ結晶曹達一匁（是れより量の少ないのは好いが多ほいのは好くない）を水三合に溶解せしめ、其の液をブラッシュに附けて汚れた部分を能く洗ひ、洗つた後で水刷毛で洗ひ落す。夫れから裏に乾ひた木綿片を敷き、氷醋酸一匁を水三合位に解かし、之れを刷毛に塗り附けて、洗つた後、又も水刷毛で能く洗ひ落す、而して室内で乾かした後、前の氷醋酸液を木綿片に浸し、前の洗つた部分に當てゝ其の上から燒鏝を以つて伸ばして置けば、翌年になつても變色する抔の事はない、只茲に一寸注意して置くのは、結晶曹達で洗つた時は、著るしく變色するけれど、夫れは決して驚くに足らない、醋酸液に浸たせば元々通りの染色を現はし、且つ光澤をも發するのである、又一二回使用して僅かに汗の附着した處などは、一寸素人目に知る事が出來ないが、其う云ふ時には舌先でチョイ〳〵と甜めて見ると、汗の附着した處は必ず鹹味があるから、知る事が出來る。其處へは前の氷醋酸の霧を吹掛けて置けば、翌年迄變色の虞はない。

今一ッの法は過酸化曹達一匁を湯二升で溶解し前と同じ方法で遣るのである、是は結晶曹達よりは地質を損する事が少ない、兎に角何れの方法でするも汗浸みた儘に捨て置くのよりは遙かに好い、併し過酸化曹達は水に觸るゝと火を發するし、又空氣に當てると水分を含んで火を發するから、十分の注意を要するが結晶曹達は其樣な患はないのである。

次は和服の保存法である。和服の中でも木綿物は洗濯する事が出來るから差支へは無いが絹物はサウは行かない。尤も絹物の內にも大島絣の如く、湯通しの出來ないものとか、水洗ひすれば變色するとか、いふものは出來ないが、サウでない、日本の藍染とか、湯通

して差支へないものは、氷醋酸一匁を水一合位に溶解し、袴や袖口の汗浸みた處へ二三回霧を吹き掛けて、木綿切で押へ拭きにし、室内で乾燥して置けば、翌年になつて汗の爲めに黄色を帶ぶるが如き事は無いのである、又衿の油垢を除去するには、揮發油ボーメ四十五度のものを刷毛に塗附け、衿の下に白布を敷て置き、衿の上から右の薬品を塗り附けると、油垢は悉く下の白布に移るから、最早や油垢が取れたと思へば大氣中で乾かす、夫れから上茶、又は粉茶（挽茶にあらず）を火中に投じて、其の上に微かに翳すのである、併し揮發油のボーメ四十五度より減じ過ぎると、油垢は脱するけれど揮發油が殘つて早く垢や塵が付着するから、地質を早く損したり、又夫が爲め黄色を帶ばしむる事がある、ボーメ三十五度（石油位）のものは忽ち右の結果を現はすから必ず四十五度でなければならない、若し白粉か多量に附着した場合には、揮發油を前述の方法で遣り、乾かして一日置いたらば、氷醋酸一匁を水一合に溶かして霧を吹き掛け、室内で乾燥せしむれば好い、尤も白粉を多量に含んだものは、鉛分を薄くする事が出來る丈けで、全く除去する事は他の洗張法に依らねばならぬ、（注意、氷醋酸と過酸化ソーダは劇薬なれば分量と取扱に注意を要する）



家庭料理

季節椀實三品

椀物を拵ふにはまづ澄汁を仕立つべし、それは一番の煮出汁（汁の事は後に詳しく説く）を鍋に入れ、弱火にかけ鹽と醬油にて味をつける、この鹽加減は一升の煮出汁ならば醬油盃に一杯位、鹽は極少量なるべし。

△針魚に獨活

さよりは頭をさり、腸をぬき、よく洗ひ、三枚におろし、薄身を剝き去り、長さ一寸ばかりに切り鹽をふりて、三十分間ほど置きさて鹽を洗ひ落し沸騰せる湯の中にてざつとゆで揚げて直ぐ椀に盛る、又獨活は五分位の長さに切り、これを縦に薄く刻み水につけ二三回水を加へ、揚げて直ぐ椀に盛り汁をかける。

△貝の柱と生海苔

貝の柱はよく洗ひ、直ぐに椀に盛る、生海苔はよく洗ひ、水氣をしぼり二番の煮出汁に少量の醬油を加へし中につけ置き汁を絞つて使ふ。

△鴨肉と芹

鴨肉は薄き切身となし鹽少量をふり暫く置きて鹽を洗ひ落し、鍋に少量の湯を沸かし其内にてこれをざつとゆでゝ使ふ、芹は根を切りよく洗ひ、沸湯にて煠で一度水に取り絞りて二番煮出汁に少量の醬油を加へし中につけ揚げて汁氣を絞り一寸位に切りて盛合す。

寄鍋の拵へ様

寄鍋といふは種々の魚菜、鷄肉などを一つ鍋にて煮ながら膳に供するものにて、此に使ふ煮汁は、煮出汁二杯、味淋一杯、醬油輕く一杯を合せて置くなり。

寄せ鍋は冬の料理なれば、使ふ材料も大抵定まり居れり、まづ魚肉にては海老、鱚、さより、小鯛、ほうぼう、白魚、貝の柱のやうな肉の輕きものゝ中を二三品づゝ撰び、其他竹輪蒲鉾は必らず入るべし、野菜は三つ葉、芹、松茸、慈姑、銀杏、白瀧蒟蒻を皆一緒に

使ふ、又鶏肉は寄鍋になくて叶はぬ材料なり、さてその拵へ様は

海老は、車海老、又は芝海老の皮をむき頭を去りて生のまゝ使ひ、鶏肉、白魚、貝の柱も又生にて使ふ、鯛其他の魚類は三枚におろし、薄塩をふり、塩を洗ひ落し、ざつと湯煮して置き、竹輪、蒲鉾は善く洗ひ薄く切りて其儘使ふ。

三葉芹及び、銀杏、白瀧等はざつと沸湯にて煠で、薄く揃へて木口切になし、松茸は石突を去り、皮を剥ぎ、もし罐詰物ならば其儘縦に薄く揃へて切り置く。

さて右の品々を色彩うるはしく平鍋に僅ならべ煮汁をかけて火にかけて供するなり、寄鍋に使ふ鍋は青銅製の平鍋をよしとす。

韲物の拵へ方

△蛤剥身の蕃椒味噌あへ

蛤のむき身は空煎をなし、これを油にてざつと煎め味噌は砂糖少々を加へてよく擂り、これに唐辛の皮だけを入れて又よく擂り、剥身をあへるなり。

△鮪、獨活、若布の芥子あへ

まぐろは小さく賽の目に切り、獨活は皮をむき短冊形に切り、水に漬けてあくをぬき、若布は水に漬け、柔かくなし揚て沸湯にてゆで、細かく切り、獨活も若布も塩を加へた酢につけて置き、さて芥子味噌はまづ水芥子をすり、これに味噌を入れ、少量の砂糖を加へて又よくすり、右の三品を一緒に入れてあへるなり。

△春菊の胡麻あへ

春菊は根付の方が堅きものなれば根の方二寸ほどは切捨て仕舞ひ、善く洗ひ沸湯にゆでゝ水にとり絞りて醤油を加へし煮出汁につけ、十五分間ほどたちし頃揚げて絞り、五分位に切りて使ふ、韲物に使ふ野菜はすべて一度は煮出汁に浸けざれば水つぽくなるものゆゑ煠ではなしにて使ふはよろしからず、さて胡麻は水でよく洗ひ、布巾にてしぼり、水気を切り、強き火に焙烙をかけ、さつと煎り、善く乾きたる擂鉢に入れて擂り上げ、砂糖を加へ、醤油を入れて、春菊をあへるな

り。

△鹽鮭の卸大根あへ

鹽鮭を水につけてよく鹽を出し、皮を剝き小さく賽の目に切り、さて大根を卸し輕く汁を絞り去り、これを酢に少量の煮返し砂糖と醬油を加へたものにて延ばし、此中に右の鹽鮭を入てあへるなり。

△蛤蜊、淺葱の酢味噌あへ

むき身は笊に入れ水を灌けてざつと洗ひこれを空鍋に入れて火にかけ、箸にてよくかき廻し、空煎をなし、汁が一度沸りたらば卸して酢につける、さて淺葱は根を去り、よく洗ひ、沸湯にて柔かくなるまでゆでゝ水に取り、水を絞りて、酢につけ、絞つて五分位に切りて使ふ、むき身も、葱も十五分間ほど酢に漬ければよし、さて味噌をよくすり、極少量の砂糖と水芥子又は卸生姜を加へ又擂りこれにて蛤蜊と葱とをあへるなり。



本汁の仕立方

普通本汁には三州味噌を使ふ、今十人前の汁を拵ふるは味噌三十匁はかりをよく擂りて鍋に入れこれに一升位の水を注ぎて沸かすなり、その間は決して鍋の中を杓子にてかき廻すべからず、汁がよく沸へたらば薄削りの鰹節六十匁位を入れ三四分間位煮沸しておろし、味噌漉にて漉す、これを一番汁といふ、其滓は再

び鍋に入れて三合ばかりの水を加へて沸かし、これを漉すなり、これを二番汁といふ、若し一番汁の方濃過ぎる時は二番汁をさして延ばすなり、若し白味噌を使ふには白味噌六分に三州味噌四分をませて鍋に入るゝなり。

さて本汁の實に使ふ材料はその季節によりていろいろあり、多は鮟鱇、微塵豆腐、根芋、短冊大根、芝海老、はんぺん、春は獨活、蕗、蜆、牡蠣等よし

△鮟鱇とみぢん豆腐

本汁に使ふ鮟鱇は肉ばかりと限らず、腸も皮も使ふ時に其黒皮を賞味す、これを使ふには四分位に切りよく洗ひ、鍋に少々湯を沸かし其中にてざつと煠で後二番汁にて暫く煮て椀に盛る。

微塵豆腐といふは極細かく賽の目に切りたるものにて、一度沸て二番汁につけ、直ぐに掬ひあげて一番汁に入れ鮟鱇にあしらうなり。

△剝牡蠣と豆腐

これは牡蠣のまはりの紐を去り、圓きところ丈けにしたるものなり、これはざつと水をかけ、水氣を去り直ぐ一番汁に入れざつと煮て椀に盛るなり、豆腐は適當の大さに切り二番汁を煮立て一寸つけて掬ひあげ入れて直ぐ椀に盛合す。

△寒魚と新若布

ゆられ魚に使ふ魚類は肉のしまりたる味の輕きものがよし、まづ鯛、魴鮄など適當な魚肉を二三分位の賽の目に切り薄く鹽をふり三十分間ほど置き善く鹽を洗ひ落し、二番汁にて下煮をなし椀に盛るなり、新若布は水に浸け柔かになりしを心のかたき處を去り二三分位に切りよく沸きたる湯にてざつと湯であげて二番汁に暫くつけ置き一番汁に入れて魚に合すなり。

△獨活と霰豆腐

まづ獨活の皮をむきよく洗ひ、斜に三分位に側切りとなし水につけ三四回水をかへて灰を出し、笊にあけて水を切り、二番汁にてさつと煮て椀に盛る、あられ豆腐は細き賽の目に切りこれも二番汁にてざつと煮、網杓子にて掬ひ、一番汁に移し獨活に盛り合す。

◎煮出汁の拵へ方

煮出汁の材料にする鰹魚節は伊豆の小節を使ふべし、分量は水一升に削りたる鰹節三四十匁の割と心得べし、まづ、鍋に水を入れ、火に架けて、よく沸騰せし時、薄く削りたる鰹節を其中へ入れ、鍋蓋をせずにそのまゝ一度沸騰させて直ちに鍋を火より下し、手早く金杓子にて浮き上れる泡を掬ひ去り一二分間も置きそれより丼に毛飾をあてゝその中へあけて漉すなり、その漉せしは一番煮出汁なり、又その漉粕を鍋に戻して又水三四合を加へて火にかけ一度沸騰させて鍋を下し、別の器に漉し入るゝなりこれを二番煮出汁といふこれは重に味噌汁を溶かす時に用ふ。



◎砂糖のあく引き方

大抵の煮物は生砂糖を用ゆれども、又材料によりては灰汁引砂糖を用ふ、灰汁の引方は砂糖一貫目に對し鷄卵一個の蛋白を唐銅鍋に入れ箸にてよくほぐし、砂糖を入れ、これに水一升を混じ、火にかけ、砂糖の全く、溶けるまで絶えず箸にてかきまぜ、砂糖の溶け終りたる頃、其まゝになし置く時は、山の如く泡を吹き揚ぐるゆゑ、直ちに並の盃に一杯ほどの水をさせば忽ち泡は鍋の一方に集る、又暫くすれば再び煮立ちて山の如くに泡を吹きあぐれば更に右の盃に一杯の水をそゝぐ、

斯くすること約四五回にして泡は水面上に集まるなりその泡を網杓子にて掬ひ取り、砂糖液を布にて他の器物に漉し、再び以前の鍋中に戻し入れ、鍋を半分弱火に掛け置けば自然と砂糖の滓灰は鍋の一方に集るなりこれを網杓子にて掬ひ捨てその澄みたる液汁は即ちあく引砂糖なり。

○芥子のかき方

芥子をかいて、灰を去る法は、まづ適量の芥子を小丼の如き器に入れ、これに卸大根の汁を少し加へよく手で捏ね、手につかぬ位まで捏ね、それを器の底に置き其上に布巾を被け沸湯を一杯注ぎ直ぐ湯をこぼしてしまひ、又湯を注ぐ、又直ぐこぼし、斯の如く湯を四五度取かへたらば最後の湯は暫らくしてからこぼし布巾の被さつてゐるまゝ伏せて置き使ふ時箸でよく攪きまはし水で延ばして用ふ、掻きたる芥子は水を入れざれば幾日にても保つものなり。

○味淋煮切の拵へ方

味淋は生にて用ふる時は臭味ありて自然味を損するものなれば煮切として使ふなり、まづ小鍋に味淋一合程入れて中火に架けそのまゝ鍋を卸さずに煮詰めるなり、かくして一合のもの六勺位まで煮つまりたらば鍋より下して冷却すべし、又沸騰して溢るゝことあれば鍋底に小皿の如きものを伏せて置けば安全なり。

○菊海苔の製へ方

未だ咲切つて仕舞はない見頃の菊花を、一つ摘にして、好く洗つて蒂を去り、ザット湯煮てから、五寸四方なり、何寸でも、お好の恰好に、湯煮でた菊を薄く列べ、チヨット板を當てゝ壓をする。大概壓されて一枚になつたと思ふころ、板を取除け、天日に曝す爲め、簾の簀の上に、一枚々々にして列べて乾し上げ、全然干上つたなら、これを重ね合せて、ブリキ罐なり、澁紙に包むなりして、濕氣の這入ない樣にして、貯はへて置き、不時の用に備へるのである。此樣しておけば、全く香の失せる事はなく、時ならぬ時分に、飛んだ目先の變つたところで、興を催ほすものである。

風雅な菊のお料理

今日この頃は、何といつても菊の眞盛、わづか一片の庭面にも一本の風情を添るもの、まして家庭に園藝趣味の彌增に盛なることゝて、何處のお家にまゐりても、前栽の彼方、四ッ目籬の下には、黄菊白菊はいふも更なり、管咲細咲丁子咲より、一文字の、狂咲のと、その好み〳〵に、この春の彼岸より、雨に風にの丹誠が、今日の自慢となつたる事とて、菊のなかからでも生れ出たかの樣に、講釋澤山も又一しほの氣の保養、彼の天然を樂しむの一端にもなり、少しは浮世の塵風から、一時なりと遠ざかり得るも、身の一德となるべきはずだと思はれます。

まして朝夕家庭の事にのみ干渉らつてゐる身には、氣散じがてらの園藝は、取分けよろしいもので、序にお料理の妻ともなります料理菊をも、花物と一緒に培養しておきますと、お手近にもある事とて、お客來の節直樣のお間に合ひまして、殊の外重寶なもの、且は料理菊は何れも黄花ばかりで、大小の二種あるばかりですが、大輪の方が、如何しても風味もあり、眺ばかりにしても、見事で香氣も高し、

黄菊白菊そのほかの名はなくもがな

とか申しまして、なか〳〵風情もよろしきものです。それにつけて當節柄の諸國名物のうちで、菊に緣あるものといふと、先長州の菊花鱠が第一でせう。

〇菊花なます

この菊花鱠と申しますのは、長州萩の名物で、彼地では目出度い宴席には、なくてならぬ一品となつてをりますので、單にお鱠としてつけますか、又はお猪口などにして附添へるものといたしております。

一體外國の方は他人樣を御請待あそばす節は、かならずそのお客樣のお國の珍味と申しますお料理を一品附けますもので、それが何よりの御馳走で、また禮だと申す事ですが、內地だとて古から心を用ひました饗

には、いろ〳〵御趣向をなさる中にも、そのお招きになる方の、お嗜な物から、お國名物、また此方の珍味といふものを排らふものと聞及んでおります。それ故露西亞人に、ザクースカ（添物として出す冷肴の事）とウオーツカ（燒酎の類）が附物なのと一般で、鹿兒島のお方ならば薩摩汁とか、長崎のお方なら角煮とか、熊本のお方には紅酒とか、京都ならば鱧とか、長州ならば菊花鱠といつた様に、そのお國〳〵の名物をチヨット添へますも一興で、お内方のお心使も知れるものです。

そこで菊花鱠を拵へますには、まづ黄菊の花を摘みまして、綺麗に洗上げて、目笊に入れて水を切り、花の蔕を除いて、ザット湯煮で、水に放してアクを拔いてから、絞つて置きます。別に麻の實も煎つておくのです。種には一體は栄螺で、若しなければ鮑を使ひますが、それもなければ鯛でもかまひません、何でもお魚の身の緊つた、悪脂のないものを使ひますれば、味に障りはありません。栄螺か、鮑ならば、生の儘小ひさく賽形に刻みまして、煮酒をかけておき、外の魚類ならば、三枚におろし、皮をすき、賽形か、薄身に削ぎ、下酢に漬けておき、その漬加減を見て、黄菊、麻の實と混合せましてから、掛汁をかけます。しかしこの掛汁が一番加減もので、好く味の塩梅を試なければなりません。掛汁は松魚の煮汁を濃く立てゝ、醤油を注して煮立て、それに生酒を加へて、酒塩の香の失るのを度としておろし、冷えてから水嚢で漉し、それに橙實の搾り汁を加へて、混合せてある材料の上からかけて侑めるのです、なか〳〵淡泊とした味で、御酒のお肴には至極よろしいものです。

この橙實も關西地方のものは、一體に味がよろしいから、多くお魚の掛酢に用ゐますけれども、關東方面のは、如何も苦味が強いやうで、好く熟した取立のものを吟味してつかひませんと、却つて味をわるくいたしますから、好いのが見當りません時は、只の酢をつかひました方が優です。

即席料理 骨董飯の炊様

△鷄肉飯

これは年中何時でもよけれどまづ秋、松茸の出づる頃をよしとすまづ米一升に酒七勺、醤油一合の割合に入れて、普通よりは水を少量堅加減にして飯を炊き、吹きかけるところへ。かねて、料理し置きたる鷄肉の細切と松茸の切たのとを入れ、お櫃へ移しとる時によく混せる。

△黄金飯

まづ米一升に酒一合醤油五勺位の割合で少し硬目に炊き、別に玉子五ッをよく解いて飯のまだ熱きところへ入れ飯のくづれぬやうに靜にかき混せて、蒸かし、淺草海苔をあぶりてもみかけるなり。

△筍飯

この飯は陽春四月を期節とすまづ孟宗筍を二つに切りて茹で、茹りたる時水につけてアクを取り、短冊に切りて、濃い鰹節の煮出汁少しを醤油と砂糖にて味をつけおき黄枯茶飯を炊きて、御飯を移すとき前の竹の子を斑のない樣にまぜる。

△薩摩芋飯

薩摩芋の皮を取り五分位の骰子の目方に切りて、水につけて垢をぬきおく、飯は普通の水加減にしこれに前の薩摩芋と鹽少しを適宜に入れて炊くなり。

△五目飯

椎茸を一夜水に浸して置き沸騰湯へ入れて茹で、これを適宜に切り、又糸蒟蒻をよき程の長に切つて茹でておき、別に油揚を小口切りとなしこの三品を鍋に入れ鰹節の煮出汁と醤油と、味醂とを入れて、よく煮る。さて別に黄枯茶飯を炊きて、飯を移すとき前のものと斑らのなきやうに混せるなり。

△牡蠣飯

先づ牡蠣をよく洗ひて、水氣を切り、火にかけ、半熟になりたる時、煮汁を切る此煮汁は別の器に取りおきて飯を炊くときに用ふ、これを煮出汁と醤油とにてザツト煮て薄味をつけおき次に黄枯茶飯を炊き釜から

御飯を移し取る時、前の牡蠣をむらのなきやうに混せて、出す、焼海苔を揉んでふりかけるなり。

△牛肉飯

牛肉を細かく切てざつと煮て醤油、味醂、砂糖にて味をつけ、網杓子にて肉をすくひ取り、其煮汁で細かく笹がきしたる牛蒡と、糸蒟蒻と、細かく切りて人參とを煮て置く、さて飯は普通よりは少し堅めに炊き、火を引く前に前の肉に野菜を一緒に飯の上へあげて蓋をなし、火を引きてよく蒸らし、移すときにむらの無きやうに混せる。

△卯の花飯

一升の米を並の飯と同じ水加減になし、其中へ酒五勺と、鹽少しを入れて炊き、別に鍋に湯を沸かし、其中に豆腐一丁をくだきて入れ一度煮上りたる時布巾にあけ、水氣を取りて鍋にうつし、酒と少しの砂糖とを加へてよく煮て、これに醤油と鹽にて味をつけ、水氣の無くなるまで煮、ぽろ／＼になりたる時飯にませ、其上に焼きたる青海苔ふりかけて出すなり。



△親子飯

まづ酒一合煮出汁三合醤油一合と少しの砂糖とを平鍋に入れて煮立ておき、其中へ七八分位の長さに切りたるみつばを入れ、一寸煮て、其上に細かく切りたる鶏肉を入れ、肉の煮へたるを度とし、一人前一つの割合にて玉子はよくほどきて上より一面にかけ、一分位たちて火よりおろして蒸しおき、別に炊きたる温かき

飯の上に盛り、上から煮汁を程よくかけ、炙りたる海苔を揉みかけるなり。

△鯛の胡麻汁飯

黒胡麻を炒りて擂り鉢でよく／＼擂り、味醂、醤油、砂糖を適宜に入れどろ／＼となし、それに鯛の肉をよく焼きて細かにほぐしたるものを入れ、温かき飯の上にかけて出すなり。

天麩羅の拵へ方

通例天麩羅の材料に使ふ魚類は、車海老、沙魚、穴魚、針魚、白魚、貝の柱、芝海老、烏賊、烏貝、鱚など尤もよし、これを揚げるに姿揚と、かき揚とによつて左の如く下拵をするなり。

△車海老――頭を去り、皮を剝き、背から二つに開きざつと水をかけ、笊に揚げ、擴げて水を切り置く、もし芝海老ならば其儘開かすに洗ひ水を切り置く。

△穴子――これは背より割きて中骨を去り、鹽水にて洗ひ、小さきものは其儘大形のものは二つに切り洗ひて水氣を切り置く。

△白魚――まづ鹽をふり、暫らくして善く洗ひ、笊にならべ水氣を切り置き揚ぐる時三四本一緒に衣をつけるなり。

△沙魚、鱚、さより――等は大形のものは三枚におろし、小さきものは頭を去り腹から開きて中骨と薄身（腹のところの薄肉）を去り、洗ひて水を切り置く。

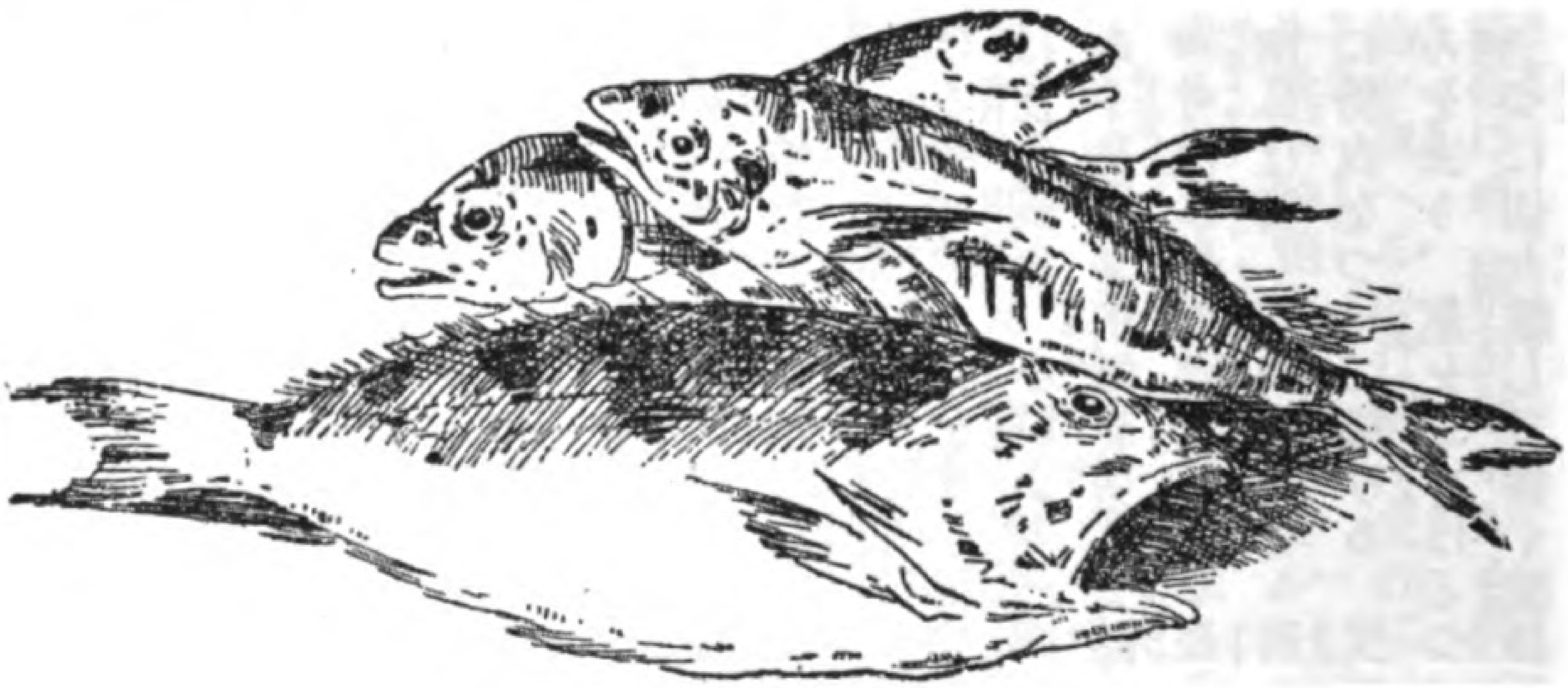
以上はいづれも姿揚に屬するものなるが更にかきあげにするものは烏賊、小海老、貝の柱、細かき白魚などにて烏賊は薄き切身にして揚ぐるなり。

△油の沸し方――さてこれ等の下拵が出來たらばまづ油を鍋に入れて火にかけ（火は七輪に堅炭又はコークスを使ふ）善く沸かし、鍋より白き煙のあがる位を度となして、拵らへ置きたる材料を衣につゝみて、揚ぐるなり。火の加減はなるべく強き方よろし、又油の新らしき間は油臭きものゆゑ、この臭を去る爲め、甘藷か、人參の切端を一二片入るがよし、天麩羅に使ふ

油は胡麻油、椿油、榧油、オレーフ　ラード(豚脂)等好みによれど、胡麻油を普通とす。



△衣のこしらへ方――さて又材料につける衣は廣き丼にメリケン粉を篩ひこみ別の器に鶏卵一個を割り落しざつと箸にてかき廻し、適宜に水を加へ、これを粉に入れるなり、其の割合は粉一合ならば、水は鶏卵と合せて一合二勺位がよし、・又玉子と水と半々位にすれば味尤もよろし、粉に水を入れたらば極くざつとかき廻し粉と水とまだ混らぬところある位でよろし、決して長くはかき廻すべからず。



△姿揚の仕方――さて前述の魚を三枚に卸し又は開きにしたるを形のまゝ、右の衣を兩面につけ、十分熱した油の中へ入れ、暫時の後七輪の下口を半に塞ぎ火氣を少しゆるめるをよしとす、斯くせざれば、衣が急に焦げて褐色になりて色合を損ずるものなり、故にこの火加減は却々むづかし・さて油に投じたる材料は四五度反し、善く揚りたらば上ぎわに一度火をつよめるなり、斯

くして揚りたるものは廣き皿に餅網又は新らしき簾を置き其上に載せて油の滴をしたたむべし。

△搔揚の仕方――又細き魚、貝の柱、烏賊の細切などを揚ぐる時は、粉衣は姿揚より少し薄目につくり、粉一合に水と卵と合せて一合四勺位を加へて揚ぐべし、油の十分沸きたる時。匙又は杓子等にて適宜に掬ひて鍋に入れ平たくする爲め灰ふるひのやうなものにて上より輕く壓すなり、斯くせざれば、どろ〳〵となりて火氣が心まで透らぬものなり、かくして直ぐに裏返し金串にて上より所々突きたてれば油が心まで透りてよく揚るものなり、揚りたらば以前の如く餅網の上に載せて油をしたたむ。

油揚をする際鍋の中に自然粉衣のしたゝり落つるものなれば、これが溜らぬ樣に絶えず、網杓子にて取除かざれば油が焦色を帶びて揚物に褐色のつくものなり又始終鍋を火にかけ通しにしても油が沸過て揚物に色の着くものなれば時々火より卸ろし、此際少しづゝ新らしき油を差し加ふべし。

又天麩羅に使ふ附汁の加減は、煮出汁一杯、味淋一杯、醤油一杯を合せてそれに卸大根を輕く絞りて添ふべし。

△精進揚の仕方――精進揚に使ふ野菜は重に甘藷、蓮根、三葉芹、牛蒡、茄子、胡蘿蔔、南瓜、枝附紫蘇の實、菊葉、松茸、海苔、饅頭等なり火加減及び油の滴し工合等天麩羅と同じけれど粉衣は稍濃く拵ふをよしとす、即ち粉一合に水一合の割とす、又精進揚の粉衣はよく搔き廻さゞれば、野菜の水分多き故、粉衣をかき廻して粘りを出さゞれば實と粉衣と離れたがるものなり。

△精進揚の下拵へ――甘藷と蓮根は皮を剝き、厚さ二三分位に斜に輪切にし水洗ひして簾に揚げ置く、三葉又は芹の類はよく水洗ひし、揃へて長五六分に切り揚げる時は濃き衣を少し混せてかき揚にするなり、茄子は皮を剝き、小口より三四分の厚さに切り水に浸し、あくを拔き水氣を切りて置く、牛蒡、人參は皮を剝き一寸位に切りこれを細く長く刻みて衣にまぜて揚ぐる南瓜は善く洗ひ皮のまゝ薄く切り腸と核とを除き直ぐに粉衣をつけて揚げる、又新生姜は根の汚れたるところを去り、莖を二寸ほどつけ大きなるは縦に二つ乃至三つに切り離して善く洗ひ置く、又紫蘇の實は穗のまま洗ふて使ふ。

家庭衛生

初生兒を有する若き母親の心得

嬰兒に就いて最も注意すべきは食物である。而して其の食物も何が最も乳兒の身體に適して居るかと云ふと、矢張り生んだ母親の乳が一番よろしい子兒が生れて一週間二週間と經つに從ひ母親の乳も又丁度兒の身體に適する樣に次第に濃くなつて來る。生中人工で自然の育兒法を改め樣とすると却つて兒の體に變化を來して發育を妨げる樣な事になるから、是非生母の乳で育てる事が肝要である、若し母親の乳が出ないと云ふ場合には、身體の健全な乳母を雇つて其の乳を飲ませるが宜しい、兎も角赤坊には人間の乳が最も好い滋養物である。

若し又、母親の乳も出ず、乳母を雇ふ事も出來ない場合には據がないから何か人間の乳によく似た滋養物を與へるのだが、夫れには牛乳が最も適してゐる、牛乳へ砂糖を入れるとか、或るひは水を割るとかして成るべく人間の乳に似たものを造るのが宜しい、乳兒の間は、どうしても營養を十分にすると云ふ事が大切である、乳兒の間の營養が不十分で、度々病氣を起す樣な事があると、成長後も兎角病身で、完全な發育を遂げられない、乳兒の間は外界の刺戟に對しては最も抵抗力の弱い時であるから餘程注意しなければならない、又此の時期は比較的發育の盛んな時期で滿六ヶ月位の小兒を牛乳で育てるには一日に五合乃至六合の牛乳を呑ませなければならぬ、大人でも一日に五合の牛乳を飲むのは一寸容易な事ではないが、之れを見ても如何に乳兒の發育が盛であるかと云ふ事が解る。

西洋でも人間の乳で育てる方が宜しいと云ふ事は勿論の事、人間の乳が牛乳に優るといふ事は數十年來學者の唱へて居る事で獨逸の如きも二十年以前から此の

說を主張して居る。夫れに又近頃は西洋から種々の滋養物が輸入されて例へば、ミルクフードとか滋養糖とか云ふ樣な物を人間の乳に勝つた滋養物の如くに云つて、他人に勸める人があるが是は抑も誤りである、元來是等の滋養品は人間の乳に似せて造つたものであるから、人間の乳も牛乳も無い樣な場合か、若しくは小兒の病氣で是非人工の滋養物を與へる必要がある樣な場合にのみ用ふべきもので、決して殊更に飲ませる必要もなければ又飲ませた所で夫れだけの効もない、つまり乳兒は母の乳か、乳母の乳か、兎に角人間の乳で育てるのが肝要である、其他萬止むを得ぬ場合にのみ用ゆるのである。

人間の乳で育つた小兒は病氣に罹つても身體が早く衰弱しないが、牛乳其の他の營養物で育てられた小兒は何んなに肥滿つて丈夫さうに見えても病氣の時には早く衰弱する樣である。

母の乳ならば小兒に腹一杯飲ませても夫程害もないが、牛乳は必ず時間と分量を定めて飲ませなければならぬ、人間の乳は小兒が腹一杯飲んだ時には普通一時間半で消化するけれども牛乳は少なくも二時間經たなければ消化しない、尤も母親の乳でも成る可くは一時間半乃至二時間に一回づゝといふ風に時間を定めて、飲ませた方が宜しい、又夜十一時過から翌朝迄は成る可く小兒に乳を飲ませぬ習慣をつけて、寢て居る間は胃を空虛ならしめて置いた方が小兒の身體の爲めには宜しいのである、是は癖の付け方一つで容易に實行し得られるものである。

寒い時の小兒衞生

寒い季候から暖い氣候になるのは小兒の健康上最もいゝ時期であるが、それと正比例して不注意から來る小兒病の多いのも亦止むを得ない結果である。

小兒の寒冒は極めて危險である、大人ならば大抵一服の發汗劑で全快する樣な場合でも小兒のはなか／＼さう容易には治らない、兎角氣管支カタルや咽喉カタル若しくは中耳炎等の餘病を引起す事が多いのである

日本では昔しから小兒を脊負ふ習慣があつて、寒い時分などには母親や子守が小兒袢天で脊負つて外出するこれが往々感冒の原因となるのである。といふのは小兒は自分の體温と脊負つてゐる人の體温とで身體は暖かであるが、頸から上は寒い風の中に曝されてゐて、冷たい空氣を呼吸する爲めに忽ち鼻風邪を引くのである。



感冒にかゝつた小兒は通例まづ鼻加答兒を起す、これを放棄つて置くと次には咽喉カタルを起し更に咽喉から耳の管を傳はつて耳を侵し、終には中耳炎のやうな危險な病氣を起すに至る、さうしてその中耳炎から腦膜炎を起す例が多い樣である。

又第二の危險は咽喉カタルが咽頭から下つて喉頭を侵すやうになると喉頭感冒を起す、さうして尚下つて行くと氣管支カタルを起し終には肺炎にかゝるやうになる、突然肺炎になるといふ樣な例は極めて少いので大抵は初め鼻風邪を引いたのが原因となるのである。

感冒の豫防法としては前記の如く寒い風の烈しい時に小兒を背負つて外出せぬ樣にするのが第一である。若し一旦感じたらば、小兒を室内に入れて室の中には水蒸氣を立たせて、空氣を濕らせ、小兒に腰湯を使はせて發汗させるのである、さうすれば感冒も僅かに鼻を侵された位ですむ、又母親の懷ろに抱かれて眠る子供はよろしいが、さうでない子供はハンケチかガーゼを二重位に折てそれを子供の鼻と口とに當て直接に冷たい空氣を呼吸させない樣にするのもよろしい又感冒が喉頭を犯して、聲が嗄れたり、咳が出たりする時は咽喉に濕布を施すのも効がある。尤も以上は唯一般の心得であるが、永びかせてはよくないから早く醫師にかゝらねばならぬ。

寒い時に小兒の體溫を保たする法として湯婆や行火を用ふるのがあるが斯くする時は小兒は逆上を起し、往々衄血其の他の腦病を發し、不測の重患を來すことがある、小兒の寢室に適度の溫を保たせ且つ室內空氣の乾燥を防ぐ簡單の法は、他の場所で起した炭火を適宜に火鉢へ盛り、其の火の上に水を盛つた鐵瓶を掛け絶えず蒸氣を發散させるのである、水蒸氣は小兒の呼吸器粘膜を柔げて、其の乾燥を防ぐ効があるから、呼吸や血行を利するので、健康の小兒にも適して居る。

冬の小兒服は毛織物か眞綿を入れた綿服が最も良いのであるが、重ね着の爲身體を束縛して自由の運動を妨げる樣な事は注意せねばならぬ、夜間の寢衣はフランネルか、メリヤスがよい、メリヤスは適宜の伸縮があつて身體の屈伸及び自由運動を妨げないので至極便利である、夜具の敷布は濕氣を吸收し兼ねて溫暖を保つから冬はフランネルの敷布が最も勝つて居る、嬰兒を寢かす枕は低いものを用ゐる方がよい。

小兒の沐浴は三歳迄は毎日するがよい、其の後は少くも一週に二回は行はしむるがよい、而して冬期は午後一時より二時の間、或は夜間寢所に入る前に入浴させるのを最良とする、沐浴溫度は家に浴室の設備あればよし、錢湯では往々長時間に亘るから沐浴の爲に小兒に爽快の感を與へずして却て苦悶せしむる事がある

是は大に注意せねばならぬ、一歳より三歳迄の小兒の浴湯適度は冬期は華氏の九十度より九十五度位を最良とする、而して其の沐浴の時間は十分乃至十五分間を越えてはならぬ。

呼吸に就ての必要な注意

人間は健康であればあるほど多量の空氣を呼吸せねばならぬものであるのに世間一般の人はその身體の要求する適當な方法によつて空氣を呼吸して居ないやうである、彼の蟻が其體量に比して數十倍の大きな物を擔いで行くのはそれだけ澤山の空氣を呼吸して居るからである、人間の呼吸器は本來他の動物に比し決して劣つては居ない筈であるけれども、唯それを適當に用ゐないので他動物に比較して大きい仕事が出來ぬのであるとは或る博士の説である、成ほど大概の人の呼吸の仕方を見るのに餘りに淺いと言はねばならぬ、即ち普通人の呼吸の仕方は僅かに肺の上部に空氣を入れた丈けで、下部は常に壓搾のまゝ抛つて置くやうである、一體人間の肺臟は空氣を以て常に隅から隅まで掃除をしないと、何時かその空氣の通はぬ部分に黴菌が生じて、病氣の根原を作るものである。

彼の深呼吸は即ち肺臟を洗濯するに於て最も適當な方法であるが、平素淺い呼吸にばかり慣れたものが急に十分な空氣を吸ひ込まうとすると、それが爲に眩暈を惹起す事がある、これは不斷箸や茶碗のやうな輕いものばかりを手にして居た婦人が無理に重い火鉢や簞笥を引上げやうとするのと同じもので、呼吸法も平素からだん〳〵と深く強くする樣に慣らして置かねば却て身體に害がある。

それから呼吸に就て、今一つ世人の誤つて居るのは口で呼吸する事である、呼吸の正當な通路は鼻の孔である、鼻を用ゆるのは塵芥や黴菌を吸込む事を防ぎ得る、鼻孔は丁度呼吸について篩の用をしてゐるやうなものであるが、又鼻孔は空氣を暖むる方法をもつて、冷い空氣に相當の溫氣を與へて、軟かい氣管に輸送する靈妙な作用がある、暖い部屋の中に居た人が急に外

部の寒冷な空氣を呼吸すると充血を起す事がある、若しそれが肺の弱い人であつたならば、為めに色々な危險な病氣の原因となるものである。

つまり口は消化器の關門で、鼻は呼吸器の入口である、口が食物を嚼み、物を言ふ事の外、呼吸の働きを助けるのは鼻孔の塞がつた時の豫備であつて、決して呼吸の正當なる官能ではない、口から這る空氣は時には喉に詰る事があるが、鼻孔と氣管は適當に調合して決して左樣な事は無いのである。



健康な子供は脣を閉ぢて寢る、子供が口を開いて居るのは鼻孔が閉塞して居るからで、閉塞して居る鼻孔は決して打遣つて置いては不可ない、鹽水を温めて含んで鼻孔から吹き出すか、或はワセリンを吸ひ込めば大概の塞鼻は通ずるものである。

齒牙の保護法

齒醫者が人の齒を一見すると大抵其人の體質を知ることが出來る、つまり齒の善惡は體質の强弱を示す標準となるものである、併し小兒の齒の發生時の注意の惡い爲め其排列を惡くしたり、或は淸潔法の届かぬ爲めに立派に發育すべき齒を惡くして了ふ事があるからよく注意しなければならぬ、小兒の齒の發生する時分又は生え變はる時分に、傳染病などに罹つた爲めに營養が不良となつて、齒牙の發育を妨げ、齒牙の面に凹みが出來、其處から齒髓が出て來ることがある、かゝる際には根本的の治療をしなければならない。

同じ齒の凹みでも磨耗病と云ふのがある、是は西洋人には餘りないことだが、日本人支那人の金屬を以て塡補して居るのは即ちそれである、此磨耗症とエローションとは違ふ、言ひ換へればエローションは病的磨耗症は人爲的である、其養生法と申しては、煙草を吸ふのに金屬の煙管を用ゐて居つた人は之を護謨に換へることか、硬い楊枝を使つて居つた人は軟なものに更へるとか云ふやうに注意すれば餘程違ひます、お話が横道に外れましたが前に申す樣な譯で小兒の齒牙の發生時は最も營養に注意しなければなりませぬ。

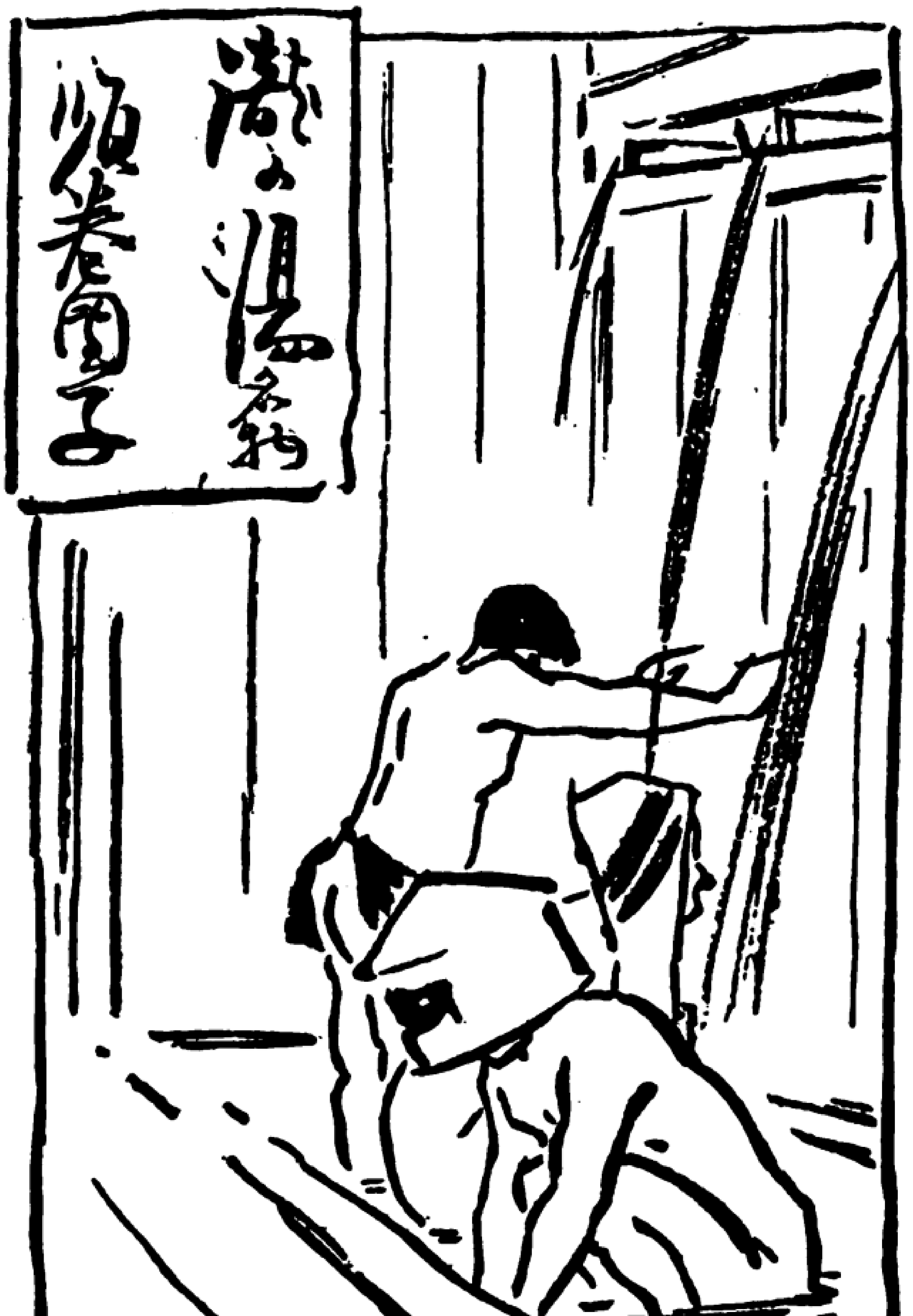
綠齒石の害　口中は少なくも年に一二回齒醫師に懸つて掃除をして貰ふがよい食滓の附着したのは一寸楊枝を使ふても除去ることが出來るが齒石は只楊枝を使つたばかりでは除くことが出來ない、一體齒石と云ふものは唾液中に含める固形分が粘液の在るところに沈滞るのであるから、自然石灰の多い體質の人は、齒石も附き易く、從つて多血質の人には何うしても齒石の附くことが多い譯である。

綺羅を纏うた美人の口中から惡臭の漏れるのは誠に愛想の盡きるものである、口中の惡臭は何に因て來るかといふと胃腸の病などから來ることもあつて、其原因は種々あるが多くは蝕齒の爲め、齒根膜に焮衝を起して化膿するとか、或は營養不良の爲め齒齦が痩せ、齒髓が腐蝕して膿が漏れて來るからである、故に之れを癒すには根本的療法を加へなければならぬ。

齒牙は陶器のやうな者であるから、温度の變換の烈

しいのが最も惡い、例令ば暖い室內に居つて急に寒冷な外氣に浸みるとか、熱い湯を飲んだ後で直ぐに冷水で口嗽をする事のないやうに注意しなければならぬ、其他酸性のものを食べたら直ぐアルカリの口嗽をするとか食後には食鹽若くは硼酸で口嗽するとかを幼少の時からの習はしとするのが必要である、而して水が沁みるとか、齒の根が浮くとか、疼痛があるとか、云ふ場合には早く醫師に示して治療を乞ふのがよい。

遺尿者の看護



遺尿の原因は種々あるが、その中身體の具合から來るものでは全身の衰弱、若しくは、貧血からして、身體や精神の發達の遲くれた者、胃腸の惡るい者、神經質の者等である、又案外にも肛門の僅かの創傷から起ることもある、脊髓炎の人や糖尿病の人にも來ることがあるが、近來になつて發見されたのは鼻の病氣が遺尿と關係する場合もあるといふことである、要するに遺尿は膀胱に通じて居る神經の故障から來るので神經官能の病の一つである、看護法としては日中の注意が肝要であつて、一日五六回排尿する人であつたら、其

の半分、即ち二三回の排尿に止めて置いて、膀胱の十分なる擴張と長時間膀胱内に蓄尿する習慣とを付け、夜には、午後になつたら總ての飲料及び水分の多い食物を成るべく減ずるやうに心掛ねばならぬ、子供ならば夜分就褥後、時を計つて二回位必ず眼を醒まさせて排尿させ、若しも遺尿の原因が冷え性と分かつた場合には、座浴(臍から下丈けの入浴)を毎日二回させるがよい、若又貧血が原因の場合であつたならば鐵劑か規那劑を與へ、運動を盛んにさせて、體質の發達を助ける方法をとつてやらねばならぬ、今日は遺尿に對する治療法も大いに整ふて居るから専門の醫士に就いて治療を求めなば大概は治るものであるからいゝ加減な賣藥や姑息な療法は避くるがよろしい、特に年少の遺尿患者を有する父母長上は、此等の患者に對して十分なる保護と同情とを加へねばならぬ、餘り叱つたり嘲けつたりすると病氣がます／＼嵩ずる計りでなく、のびのびと發達すべき子供の精神は全く傷けられ意志が薄弱になりて虚言を吐いたり盗み食をしたり、種々の惡癖が增長して終には一人前の人となる事が出來なくなるから大に注意しなければならぬ。

毛髮の脱落を防ぐ法

霜枯の季節になつて婦人の困るのは髮の毛の拔ける事であるが、人間の髮は木の葉の樣に冬枯に拔け落ちて、一陽來復の春になつて又新らしく生えるといふ樣な調寳なわけには行かない、拔け落ちた丈は自然薄くなるのであるから、まだうら若い婦人は餘程注意しなくてはならぬ。

一體毛の脱落するのは病的に來るのと自然的に來るのと兩樣あつて、秋の拔毛は多く自然的のものであるといふのは秋を迎へて寒い冬を越さなければならぬから體内では營養物を貯蓄して大いに冬ごもりの用意をしなければならぬ、これを人體の營養上の方からいふと人間が秋になると飢を感ずることが一層甚だしくて食慾が劇しくなる、これは夏の中、食の進まなかつた不足をこの秋で補ひ、且つ其上冬籠りの用意に忙がし

い爲め、從つて髮や爪の樣な部分にまで十分な營養を送ることが出來ないから自然に髮の毛が拔けるのである。これは若い健康な者でも免かれないわけである。

人間は鳥や獸と異つて一旦拔けた毛は再び生えない併し血氣盛んな若い時代の健康人は毛根の下にある毛母といふものに活力があつて拔けても再び毛をつくる力があるけれど、既に壯年となつた人、又は若い女でも營養不良の病的身體では再び毛を造り出す力が非常に乏しいのである。つまり脫けた丈は損になつてしまふのである。

それに就ては毛髮の衞生法を考へなければならぬ。元來日本の婦人は三十過ぎると額のきはが段々はけあがるやうであるが、これは要する皮脂を澤山溜めるのが原因で、鳥獸の如きものは、其毛を保護する爲めに適宜の脂肪が絕えず、其毛根を濕はしてゐるのであるけれど、人間は毛根に脂が餘りそこへへバリついて毛皮の排泄作用を妨げるので、其手入がよくないと毛根が自然に弱くなり、終に禿げてしまふのである、それ故不斷毛髮の手入の行屆かない日本婦人はこの爲に早く頭が禿げるといふ事は爭はれない事實である、それ故この毛脂を防ぐには加里石鹼でよく洗つてその後にレゾルシン二グラムとキナチンキ十グラムに水百グラムを混じた藥液を塗つて置くと大抵結果がよい樣である。

火傷の手當

すべて熱したるものは氣體、液體、固形體に拘はらず、これを身體に觸れると皆火傷の起るものである、而して其熱度の高低、觸るゝ時間の長短によりてその結果に各々差がある、たとへば、四十五度の熱にては一時其部分に充血を起すだけであるが、五十度以上になれば、火傷性の浮腫を起し、五十三度以上になれば、組織の淺き部分に壞疽が出來、六十度以上に至りては深き部分まで壞疽を生ずる、されど實際は一つの火傷について、輕症の部分と重症の部分とが並び存する事が多いから今火傷の症候を次の三種に別けて見る。

△輕度の火傷

これは單純な皮膚の充血で、少しばかりの痛を覺ゆる、二日目には既に赤色が消えて稍や褐色となり五日目から後は表皮が剝がれて、それで癒るものなり、皮膚の弱き人は夏日炎天に曝されても右の如き有樣となる、これを日光紅疹と稱し、其甚だしきものなれば小さな水疱が出來る、此種の火傷は刺戟せぬ柔かな物質にて皮膚を蔽ふて置くだけにてよし。ワゼリンを塗り、冷罨法を施しなどすれば痛みは輕くなる。脫綿をあて繃帶をして置くがよろしい。



△稍重度の火傷

輕度の火傷の外に漿液が盛んに滲出して水疱が出來る、そして其の周圍には常に輕度の火傷がある、疼痛は頗る強い、十分に防腐が出來れば一週間位で癒るが若し、そこへ釀膿菌が這入つて膿を持つて炎症を發し、疼痛が強くなつて急には癒らぬやうになる、斯る火傷は局部に亞鉛華、澱粉、次硝酸蒼鉛、イヒチオールなどを塗り脫

△重き火傷

これは火傷部に潰疽が起るものなり。其の潰疽は淺きこともあれば深い事もある、潰疽部は後に脱落して新らしい肉芽が出來てこれを補ふものである、而して其部に瘢痕が出來る、若し火傷が大きく瘢痕が廣く且つ深ければ其の收縮の爲めに近隣の肉皮膚及びその他の軟部を牽引け或は神經、血管を壓迫して種々の障を起すものである、たとへば喉部が火傷にかゝると、頤が漸次下方に牽引れて遂に頤と胸とが相接して離れなくなる樣になるものである。

重度の火傷の療法は、その痛みを鎭め、虛脱に陷るのを防ぎ制腐劑を施して繃帶をして置くのである、四肢の甚だしき火傷はこれを切斷しなければならぬことがある。

火傷は輕度のものでも身體の表面の二分の一以上これに罹るときは必らず死を免かれぬものである、三分の一以上でも多くは危險である。

此場合に劇症のものは、負傷後時を移さずして患者甚だしく亢奮し、疼痛、煩渴を訴へ、非常に苦悶し、次で譫語を發し、嗜眠狀態に陷り、全身痙攣が起り、體溫が低くなり、虛脱に陷つて死ぬものである、經過の稍緩慢なものは數日又は數週の後に右の樣なる症狀を起して數時間内に死し又は全身、釀膿菌病を起して漸次に衰弱して斃れるものである。

△應急治療法

火傷の療法はその傷の度合によつていろ／＼に違ふ、事は前述の通りであるが、一般に火傷の部分に繃帶をするがよい、此繃帶の必要な理由は、第一痛みを減ずること、第二出來る丈け早く火傷の部分に表皮を生ぜしめる爲め、第三は火傷の損傷部に病毒が傳染せぬ爲めである。

昔時の火傷の療法は痛みを止めるといふことに重きを置いて、いろ／＼の膏藥をつけたり、油藥を塗つたり、又濕性の繃帶をしたり、馬鈴薯の擦つたのをつけたり、其外いろ／＼の事をしてそれから醫師のところへ持ち込むので、醫師は甚だ困るこれが爲めに治療の

妨害となる事がある、火傷をしてもなる丈けいろ〳〵のものをつけぬがよい、火傷の際には其部にリスリン位のものを塗り、脱脂綿を被ひ、あまりいぢつて水疱を破る様の事のないやうにして醫師のところへ行くがよい、火傷は只疼痛が止まつたらよいといふわけのものではない、若し其傷が不潔であつたら甚だ療り難いのである。

火傷はこれを他の新らしき傷と同様のものと看做して手術の時に皮膚を消毒する如く嚴重に消毒しなければならぬ。若し火傷をした傷が不潔になつてゐたならば、三プロセントの硼酸水又は千倍の昇汞水で洗ひ、其洗ふた後はガーゼで乾かし、



其上を殺菌ガーゼをつけて置くがよい。

火傷の繃帶は外の方へ分泌物が浸み出すまでかけかへないで置てもよい、大抵六日乃至八日位ゐその儘置けるものである、これを取かへる場合にも一番下になつてゐるガーゼ又は綿は其まゝにして置くがよい、若し分泌物が溜つた様な場合にはこれを微温湯の中に入て剝がすがよい。

以上の如くにして繃帶をかけて置いたならば疼痛が輕くなり或は全くなくなる、斯くすれば輕傷症は勿論稍重傷といへども大抵一回の繃帶で癒つてしまふ、然し重傷、即ち燒痂のあるものはこれがとれなければ癒らぬ、此重傷の繃帶は浴中で

取換るがよい、旣に肉芽が出來た場合には軟膏類の繃帶又は乾性の繃帶を用ひてもよい。

凍傷の手當

△輕度の凍傷

局部の蒼白、厥冷知覺痲痺が起りこれを温めると其部が紫紅色になり、少しばかり浮腫が來て、やがて癒つてしまふ、然し若し寒の刺戟が屢々反覆すると一種の慢性炎即ち霜燒が出來る、最も屢々霜燒の出來るのは指、手の甲、耳などで、皮膚が靑紅色を呈して浮腫、瘙痒を覺え、殊に寒より温に移るときには其感が强い、それて容易に癒り難い潰瘍になるものである、貧血の人、小兒、並に下婢の樣な、常に温度の劇變を受ける者は霜燒を起し易い、氣候が暖かになれば自然癒り、寒になれば復た出來る、新らしい霜燒は乾いた布で摩擦し、陳いものには沃度チンキ等の塗布藥、湯、浴、壓迫繃帶などを用ふる。

△稍や重度の凍傷

これは火傷の稍重きものと同じ樣に水疱が出來るが、火傷のよりも癒り難いものである。其療法は其部を高く擧げ石灰酸罨法又は濕布を施し、或は輕く摩擦しなどする。

△重き凍傷

これはその部分に壞疽が起り、知覺を失ひ、血行が絕えて暗靑色になる、其治療法は乾性の防腐繃帶を施し健康部との境が明らかになつてから切斷するのである、火傷よりも容易に種々の創傷傳染病を起す危險があると心得ねばならぬ。

△凍死の應急手當

劇しい寒の爲めに死に瀕して居るものを救ふには急に温を加へてはならぬ、まづ冷たい室に入れて其手足を擧げ、氷雪又は冷い濕布で全身を摩擦し、皮膚の血行の復するのを待つて攝氏十六度乃至十八度の全身浴を與へ徐々に温度をすゝめて三時間の後には、三十度の温となし、皮下注射又は吸入等によつて少許の興奮藥を與へ、人工呼吸法を行ひなどする精神が、稍回復

するやうになつたならば、全身を温かに包み、赤酒などを飲まするがよい。

出血の際に於ける應急手當

出血は概ね血管の破れた爲めに起るものであるが、出血の爲めに起る危険の大小は、その出血する部位と出血の量とに關するもので、若し心臓からの出血は尤も危険である、又大動脈、頸動脈、股動脈などのやうな大きな動脈の出血も甚だ危険であつて直ちに死亡するものである、其他の動脈の出血は左程に危険ではない。



又大動脈でなく、小い動脈の出血であると、たとへ急にその血が止まらなくても直ぐに死ぬとは限らぬ、身體の血の量が少くなつて、心臓の働きが弱くなると、出血の力が衰へて、遂には血液が凝固つて自然に止血することがある、殊に負傷者が、失神して卒倒すると心臓の働が幽微になつて速かに血が凝固して血管が塞が

るものである。

中等の大きさの靜脈並に小さい靜脈の出血は暫時で止むが、大きな靜脈の出血は死を招くものである、動脈の出血は鮮紅色を呈し、心臟の搏動に隨つて噴出する、靜脈の出血は暗紅色を呈し、血液が平等に流れ出づるものである。

△體內出血の徵候

それから、體內の出血は直接に見ることは出來ぬけれどもいろ〳〵の徵候によつて其出血する部分と出血の多少とを知ることが出來る、たとへば糞便と共に出る血液が純粹の凝血であつたならばその出血が肛門に近い徵であつて、糞の表面に明かに血の條がついて居るのは直腸から下の出血の徵である、又糞便と血液とがよく混つて居るのは腸の上部即ち小腸の出血で、血液が褐色を呈して居るのは胃の出血である、又尿の出血に就て見ても放尿時にまづ血の出るのは尿道の出血、放尿後に出るのは、膀胱の出血、尿と血液と混つて居るのは腎臟又は輸入管の出血である。

△出血時の狀態

一時に大量の出血があれば急性貧血が起り、少量づつ反覆して出血すれば慢性の貧血が起る、心臟又は大血管が破裂すると瞬く間に顏が蒼白となり、患者は其手を心臟部にあて、苦悶、呻吟して直ちに瞑目してしまふ、これに次ぐ大きな動脈からの出血となると、全身が次第に强い蒼白色に變じて、口唇・鼻尖が靑藍色になり、眼が凹み、鼻や頰や骨が高くなり、患者は起とうとすると卒倒する次で聲が微かになり、耳が鳴り、眼がちら〳〵し、四圍が暗くなり眼球がくる〳〵と回轉し瞳孔が開き、呼吸が淺くなり、脈が小くなり、手足が冷え、遂に氣を失ひ、兩三回輕い痙攣を發し冷汗を流し呻吟して死んで仕舞ふ、よそ目には非常に苦しさうであるが、本人は最早精神がぼんやりして居て少しも苦痛を感ぜぬものである。

△生命に危險な出血の量

人間はどの位まで血液を失ふても生命を保つてゐることが出來るかといふに、それは年齡と體質と榮養の

良否などによつて大に相違するから一概にはいへぬが、まづ一千瓦、乃至二千グラムの血液がなくなると甚だ危險である、全身の血量の半以上を失ふたらば決して死を免かれることは出來ぬ、婦人は男子よりも出血に堪へ易けれど、小兒は甚だ耐へ難いものである、心臟病血管の變性、貧血などに罹つてゐるものも出血に耐へる性が弱いのである。

又出血の爲めに減つた體内の血液は食物から補はれるものである、大出血の後に澤山の水を飲むのはこれによつて水分の缺乏を補ふものである、此外身體のあらゆるところから水分が血液に入るものである、但し血球がもとの通りになるのは餘程時日を經なければならぬものである。



△出血の處置

出血の處置は元より醫師の行ふべきものであるが、こゝには素人の出來る方法丈を擧げて置く、止血法には直接と間接とに行ふ法がある、直接の止血法は、出血する場所を壓して一時止血させるに最も簡便なのと指で壓す法である、併し是は極めて小い創で、なければ無効である、少し大きな創になると指を用ゐることが出來ない、のみならず、出血が少し強いと指が直に疲れてしまふ

から其かはりに新らしい布巾又は綿の塊を出血部にあてゝ繃帶で堅く卷いて壓迫して置いてもよい、其布片又は綿が消毒したものであれば尙更結構である。

鼻孔とか子宮とかいふやうな深い空洞から出血して血管を一々壓すことの出來ぬ場合には消毒した、綿花などを丸めて球にして絲をつけたもの、即ち栓塞子（タンポン）を挿入して壓迫するがよい或は細長く切つてヨードホルムの綿紗（ガーゼ）を數條も挿入して壓迫してもよいのである。

血止の目的で種々の藥品を創につけることがあるが是等の藥品は創面を刺戟したり、腐蝕したりして創の治癒を妨げることがあるから、なる丈用ひぬ方がよいのであるが、止むを得なければ燒酎、ブランデー、アルコールなどを注ぐがよい。

△寒熱利用法

寒冷又は溫熱は止血の効が顯著であつて、醫師でなくとも大に用ふ可きものである。寒冷は血管を收縮させるもので、自然に止血する力があるから、氷罨法、氷水灌注法、などは出血に對する著るしき効がある、歯を拔いた後の出血などは大抵一杯の氷水で十分である、又鼻腔や子宮のやうな、他の方法で出血を止むることの出來ぬ場合にはまづ氷水を注ぎ入れて一時止血させ、そして徐ろに栓塞をするといふやうな方法を取るのが至極便宜である、熱も亦血管の收縮を促がし、止血の効がある、これが爲めには攝氏五十度くらゐの溫湯を出血部に灑ぐのである、子宮出血などには此方法が最もよいのである、又熱蒸氣、熱空氣なども止血の目的に用ひられるが、方法が簡易でないから廣く役には立たぬ。

△血管の結紮法

直接に止血させる方法の中で最も確實で且つ簡易なのは、絲で血管の斷れた兩端を縛るのである、それを血管の結紮法と稱へる、此法は制腐法、麻醉法と共に今日の外科學の進歩に最も多く與つて力あるものであるが、素より、醫師の行ふべきことで素人には到底出來ぬ事であるから詳しくは述べない。

△関節の止血法

出血して居る血管の上流を壓迫して止血させるのを間接壓迫法と稱へ、此法を行ふには解剖學上の動脈の經路を明かに知つてゐなければならぬ、そしてこれを壓迫するには十分の力を加へ且つ久しく耐へるといふ事が必要である、動脈が骨に近くこれに向ふて壓迫し易い時には一つの拇指で壓す丈けでよいが骨と動脈とが遠いと兩方の拇指を當て兩手で握む樣にして壓迫しなければならぬ、

指で動脈を壓すといふ法は到底永い間つゞけて居る事は出來ぬから綿花の塊をあてゝ緊く繃帶するとか護謨管で出血部の上を卷くとかいふ樣な方法をとらねばならぬ。

殊に組織全體から血液がにじみ出るといふ樣なときはフランネルの樣な彈力のある繃帶で出血部の上方を全體に緊しく卷くがよい、或は腕又は脚を悉く卷いてしまふてもよい、此法は皮下出血で、他の方法を用ひ難い時などには殊によい方法である。是と同時に其出血してゐる手又は足を吊して置くか又は高い處に載せて置けば猶一層効力がある。

要するに中等以上の大きさの血管の出血は一時壓迫法などで止血させて置いてなるべく早く醫師に結紮してもらふのが最も安全の方法である、たとへ一時壓迫法などで止血させても更に出血する事があるから、決して油斷してはならぬ。

さて出血の爲めに急に貧血が起つた者にはどういふ所置をするかといふに貧血の爲めに卒倒して氣を喪ふてゐる者はまづ仰向に臥させ、頭部を低くし、衣服などをくつろげて呼吸を自由にして、そして酒精及び温かい飲料を與へフランネルなどを四肢に卷いてなるべく其血液を中心に輸り、湯たんぽを以て全身を温めるがよい、醫師は此際カンフルなどの興奮劑の皮下注射を施すものである、尚一層甚しい貧血に陷つてゐるものには一定の方法で○、九「プロセント」の食鹽水を靜脈内に注入して血液の不足を補はなければならぬ、此注入には特別器械を要するものである。

當選目錄

△事に觸れて味ひたる敎訓　壹等（甲）金參拾圓　百合香
△善良なる妻の模範　壹等（乙）金貳拾圓　野末庵子
△無言の敎訓　貳等　金拾五圓　野路の雨
△目前の敎訓　貳等　金拾五圓　野菊女
△規律を正した私の經驗　參等　金拾圓　初霜女
△孝悌の道を守る女の日常　參等　金拾圓　あをやぎ
△不智不識の薫　參等　金拾圓　越智村雨女
△嚴しく育てられた娘の價値　四等　金七圓　白菊
△枕頭の暗示　四等　金七圓　安曇の病女
△賢き女の言遺せし言葉　四等　金七圓　高石澄江
△田舍へ嫁ぎし妹へ　四等　金七圓　わかば
△日常感謝の心掛　四等　金七圓　登志子
△規則立ちたる我家の日常　四等　金七圓　勾當うた子
▲其日〳〵の敎訓　四等　金七圓　清水玉露
△絶えず修養しつゝある娘（磯菜）▲交友より得たる敎訓（櫻子）▲日常の注意心（富美子）▲繼母となりて得たる敎訓（松山里子）以上四件五等金五圓
▲印は次號に掲載す

懸賞募集 光榮ある人生の春

（〆切十二月二十五日）

希望に耀く青春婦人の價値ある理想を募る

光榮ある人生の春、一生一度の青春期、再び遭ひ難き人生の春、一刻千金の人生の春、彼女の容貌は皎として月のごとく彼女の胸憶は燦として玉をつゝる、而かも人生の春は容易に來らずして一度來るや逸すること奔馬のごとし、光陰は眞に人を待たざるより、我等は今此の得難き人生の春に遭ふて衷心の歡喜禁ずること能はず、自から筆を採つて我が人生の春を遺さんと欲す、謂へらく我れに一人淑女の自覺あり、以て萬人の庸婦を化するに足ると。是れ我が本來の理想なり。

こゝに雄大なる理想と高潔なる情操とを三千年の昔より遺傳されたる大帝國の賢婦人よ、卿等は今卿等の包める玉を拔きて卿等の眞價を世界に示すの好機に遭へりこれ又卿等が聖代の恩徳に酬い奉つる義務の一端にあらずや。

賞金

▲壹等	金參拾圓	一名
▲貳等	金貳拾圓	二名
▲參等	金拾五圓	三名
▲四等	金拾圓	五名
▲五等	金五圓	十名

規程

△原稿は普通原稿紙十二枚以上の事
△原稿の終に住所姓名を記する事
△宛名は博文館女學世界とし封皮に特記する事
△當選の文は一月中旬發表す
△賞金は發表の當日現金にて發送す

オ媛文壇懸賞募集（十二月五日〆切）

▲美文（二十字詰十五行以內）

▲日記（二十字詰十五行以內）

▲書簡文（二十字詰十五行以內）

▲いろ／＼の實驗（十五行以內）

▲和歌（一人一首）

▲俳句（一人一句）

▲誌友倶樂部

△美文、日記、書簡文、色々の實驗の四種は用紙は半紙の事△和歌、俳句、倶樂部は端書に限る、△字體は楷書にて正しく書く事、不分明の字又は亂れたる書體は沒書とす△名宛は博文館內女學世界宛とし△原稿に文の種類及び住所氏名を明記する事

賞品

△美文△日記△書簡文
天賞壹圓、地賞七拾錢、人賞五拾錢

△和歌△俳句
天賞壹圓、地賞五拾錢、人賞參拾錢

△いろ／＼の實驗（賞壹圓以下）

每月一回一日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）…金二十錢
四冊（三ヶ月分）……前金七十五錢
八冊（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
內（定刊數……十二冊 增刊四回…一、五、九、十一月價格同一）

郵稅 一冊 二錢

廣告料

廿四字詰	特等	一等	二等	三等
一行	……	……	……	五十錢
四半頁	……	……	十圓	七圓五十錢
半頁（卅二行）	……	廿三圓	十九圓	十四圓
一頁（六十四行）	五十五圓	四十五圓	三十八圓	二十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

明治四十三年十一月十一日印刷納本　第拾卷第拾五號

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　山田英二
印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地　博文館印刷所

發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

電話　三百三番 千十八番
本局　二千六百二十番 三千二百二十九番

博文館女學世界編輯局編纂

家庭日常寶典

家事整理墨繩

明治四十四年

家庭日記

洋裝總クロース金文字入 美本紙數五百餘頁

正價卅八錢 郵稅拾錢

家庭日記は最も進步したる文明的な日記にして新家庭の要求に應じたるもの也、我家の規模を知り我家の地位と品格とを知り努力とを知らんとする人の苟も机上に缺くべからざる重寶日記なり其の内容は左の如し。

（要目）

▲收入明細表
▲支出日計表
▲出納計算及殘高表
▲家計分類出納表
▲出納分類表
▲貸附契約一覽
▲保險契約一覽
▲諸關係掛金一覽
▲租稅一覽
▲年中行事豫記
▲家庭重要記錄
▲我家の家族
▲家庭紀念事項
▲戶籍表
▲崇廟祭祀日錄
▲通學要錄
▲兒童生育要錄
▲健康要錄
▲衣類目錄
▲財產目錄
▲貸借關係錄
▲音物贈答日誌
▲通俗日誌
▲親族名簿
▲備人名簿
▲知人名簿
▲備忘錄

（附錄）

●家計安全法
月收百三十圓、七十五圓、五十四圓にて見積りたる生活費の內譯

本書內容の一斑

本書は始めに一年三百六十五日の日欄を置き、七曜干支を順記し、天氣、寒暖の各座を設け、以て日々の事項を記入するに適せしめ更に月の始には其月の行事、季節、食品、花暦の各項を抄記して月令の栞となし次に此の日記の特色ともいふべきは他の日記簿に類例なき約二百頁に渉る家庭重要記事を始め、交際、通信音問、祭祀以下日常諸般の事項を分類し兼れて財產、衣類等の品目を掲記して以て複雜なる家事を整理して一目瞭然たらしむ。猶前揭附錄十數次は家事當局者の心得にして朝夕必要なる家政智識にして其他これに必要なる諸規則なも網羅せり。

●家庭修養訓
●婦人の交際心得
●一年間の仕事配置
●衣類器具の整理
●日常心得草
●室內裝飾法
●看護上の注意
●結婚式上の心得
●細君小言十二ヶ條
●音物贈答の注意
●四季折々の料理
●惡習慣矯正法
●盆栽の趣味
●簡易治療法
●一家經濟の枝折
●健康長壽の術
●姙產婦の心得
●火の元の用心
●衞生美容法
善惡當座占ひ

家庭日記は日常の家事を整理する金針にして又家運振興の指南車なり、其內容は從來行はれたる日記簿とは全然面目を異にし統一あり秩序あり敎訓あり趣味ある日記にして一家の重寶たる實質を具備せり眞に

東京日本橋本町三 博文館 振替東京二百四十番

懷中日記

博文館發行

趣向
體裁

懷中日記卷頭には皇室皇族の御繁榮歷代の天皇大祭祝日り曜表を色刷として掲げ新形は背面に他の二種は[illegible]部に鉛筆挿を設く

（當日記）日・欄には過去同・日の重要歷史、七曜、千支及び詩歌俳句等を上欄に錄し天氣、寒暖、發信、受信及び摘要の記入欄を其後に新設す尚各月の初めには其月中に行ふべき事項を豫記すべき欄を新設し、毎日記入欄には細罫を付し秩序ある記錄たらしむ

附錄としては紙數十二頁の補遺、金錢出納表、收支一覽表、友人住所錄、農家年中行事、某醫學博士の衛生心得及び内外の最新重要統計數十頁を載せ卷末には日常必須の諸規則を網羅せり

（懷中日記）毎月の初に當月の行事、食品月令、遊覽案内等を掲げ日日の上下欄に内外名家の格言を掲げ其他七曜、干支、天氣、寒暖を付記し卷末には常用日記の如く日記補遺錄日常用の事項諸税則及最新重要の統計表等百頁を付す

〔取次諸賢〕の方は御申込次第精々御便利に御相談可仕候

《懷中日記定價》

新形 （舶來洋紙頗美本總クロース 金文字入細長形携帯至便）
▲正價金貳拾錢　郵税貳錢

上製 （舶來洋紙[illegible]本總クロース 金文字入紙數三百〇六頁）
▲正價金拾八錢　郵税貳錢

並製 （舶來洋紙横クロース表紙 金文字入美本紙數三百六頁）
▲正價金拾貳錢　郵税貳錢

紙數各三百〇六頁

附錄
◎雜錄◎統計表◎利子早見表◎諸程規則摘要◎郵便諸規則◎徵兵規則大要◎年齡早見表

本町三丁目 博文館

振替貯金口座 東京二百四十番

新案

明治四十四年

ポケット日記

A、B、C……三種

紳士淑女用

●本日記の特長は何れも特製總革を用ゆ其手當りの滑かにして三方金縁を附したる、共に見ざる逸品たり。又製本の堅牢なる、日常携帯に至便なる紳士、淑女用として優美高尚なる日記なり。

●本日記は何れも薄手の舶來用紙を用ゐ、ポケット用として携帯至便なり、尚前記三種を調製し發賣せり各種亦特殊の特色を有せり。

●附錄――金錢收支表、郵便規則、税法、年齡表、補遺記事欄等の如きは日常座右缺くべからざるものなり。



A號……(厚形)

總革製三方金縁舶來紙薄手美本紙數四百四十頁函入り(記入欄一日一頁宛)

正價金五十五錢　郵税金四錢

B號……(薄形)

總革製三方金縁舶來薄手美本紙數二百二十頁函入り(記入欄一日半頁宛)

正價金四十五錢　郵税金四錢

C號……(薄形)

總革製三方金縁舶來紙薄手美本紙數四百四十頁前後季二折差換函入(特長普通手帳兼用)(記入欄一日一頁宛)

正價金六十五錢　郵税金四錢

東京　博文館　本町

醫學博士 三島通良 先生新案

新流行に先鞭を着けんとする

紳士淑女の必備日記！

不二日記

總革製容器入錠前附
カード式、三方金線
紙質舶來品約三百枚
大丈 寸五分幅四寸五分

正價貳圓
小包料 十二錢

家政整理の根柢は！

必ず臺所に在り

文運堂
編輯部
編纂

家計重宝

臺所勘定帳

洋裝美本 三百廿頁

定價一册 貳拾五錢 郵税六錢

■不二日記は古今東西空前の嶄新卓絶なるもの、即ち秀麗世界に冠絶せるわが芙蓉峯に因みて不二日記と名づく、装釘の美、紙質の精、意匠の新共に三絶せり。

■不二日記はカード式なれば記事多き日、記事少なき日、毫も不便を感ぜず、極めて經濟的也

■不二日記は巧妙なる錠前を附して日記の秘密を保つに便せる唯一の特色あり。

■不二日記は實用的紳士淑女の必備品たるのみならず裝飾用として床間机上の珍書たり。

■此勘定帳は婦人に最も附け易く、且家計の收途を一目瞭然ならしむべく工夫せる新案日記也

■に家庭上一切の事に就て懇切周密なる説明を付しあれば一般家庭の手引この上なし。

■家政の整不整は多く臺所より起る、幸福なる家庭を望まば必らず此書を備へざるべからず

發賣元 東京神田 文運堂 東京本町 博文館 東京 三越呉服店

第五卷第十五號

菊判製紙數百廿八頁

正價拾錢　郵稅一錢

少女世界

（口繪）

◎おし花……柴崎美方

◎運動會……岡野榮

○寫眞版四ページ

（記事）

●お伽小說 鶯塚……巖谷小波

●天皇陛下の御製……佐々木信綱

●少女訓話 かげ口……小林第三女學校長

●手帳の中より……沼田笠峰

●お留守番……黑田湖山

●雀の學問……與謝野晶子

●少女小說……松井ゆり子

●朝鮮史談……武居芳成

●少女對話 花たば……あふひ

●水戸少女大會……記者

●四國地方少女講話會

外に面白くて有益な記事が澤山あります

既成發行

東京 本町 博文館

女（後付の八）

女學世界
（毎月一回二十六日印刷納本）
（明治四十三年十一月一日印刷納本）第拾卷（増刊 日常生活の教訓）第拾五號（明治卅三年十二月廿五日第三種郵便物認可）

帝國座新女優　森律子の應接振り

―記者との問答―

記者一日の長あり、帝國劇場附屬技藝學校に新女優森律子孃を訪ふ。『生憎踊の稽古中ですから暫く此處でお待ち下さい』、事務員君は斯く記者に告げて去つた。取殘された記者は無意味にテーブルの上に置かれた寫眞帖やら雜誌を見たが何等の印象も與へぬ、唯律子の扮裝と化粧品の廣告が目に止まる・特に平尾贊平商店のレートの奇拔な廣告法が記者の深い感興を惹いた。隣室では水木歌仙氏が懸命に踊の敎授をして居る、記者は水木師が短日月の間に渠等を一人前に仕込まれる勞苦を思ふて私かに感謝せざるを得なかつた。……軈て靜かに扉を排して記者の前に現れた一人の女性がある、之れ何ん現代貴婦人のレコードを敗つた新女優森律子孃其人なのだ。先づ形の如く挨拶も濟む。律子は椅子に凭れて其クツキリと白い瓜實顏に櫻色を帶びて來る美しさは亦格別、そして黑目勝な露を含んだ眼は何處となく愛情の深いのを語つて居る。

記者『貴孃は如何なる決心を以つて藝術の奴と成つたのです』劈頭に斯くの如き質問を試みた、律子の朱脣は徐ろに動く。

律子『夫れは今更申上げる必要もありますまい』聊か冷淡な答へで流石の記者も失望したが贅く問ふのは渠れの自尊心を疑ふものと思つて話頭を轉じた。

記者『然らば貴孃は悲劇がお好か、喜劇がお好か、亦歌舞伎劇と新派劇、何れに多く趣味を持ちますか』渠れは片頰に笑を浮べて。

律子『新派よりは舊派を好みます、併し私は新派殊に喜劇が柄にあると思ひます、黑人方のお談に喜劇に成功する人は敵役に成功するものだと云ひますネ』頗る得意な色が漲る。

記者『尤も苦心された事は何んですか』

律子『舞踏と化粧術でムいます、踊りは毎日水木先生について勉强して居りますがドーモ思ふ樣に行きません』

記者『お化粧の苦心談を伺度ものですネ』

律子『何しろ顏が自由に出來れば一人前だと云ふ位ですから毎日これでも研究はして居るのです、自宅でも時々母や女中を驚かしてトンダ喜劇を演じたとも間々ムいます、夫れからお化粧は肌の營養が第一かと思はれます、これについて川上先生『貞奴』の御注意で朝夕平尾さんの發賣する乳白化粧水レートを塗けて居ましたお陰で肌の荒れた例しもなく白粉のノビもノリも至つて良く夫れに色も白くなり所謂自然美を發揮する樣に思はれます以上は私の小さな經驗でムいます』

定價金貳拾錢●郵稅貳錢